

---

# レイルズリードの風(旧)

つきよし凧桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レイルズリードの風（旧）

### 【Nコード】

N4281H

### 【作者名】

つきよし風桜

### 【あらすじ】

何故だか毎晩ベッドの上から、魔法やら人族やらが当たり前のよう存在する『異世界』へワープする破目になってしまった俺、風岡刹那。善良且つごくごく平凡な日本国民でしかなかった筈の俺だけど、どうやらそっちじゃ人間じゃない別の生き物、強いて言うなら怪物さんの部類にカウントされているらしく……ああもつ、負けない俺。とりあえず、これから当分は立派な『世界の守護者』になる為に頑張ります……。

タイトルに（旧）と加えた事について。

改訂に伴い、『レイルズリードの風』を新しく投稿していく事を決めました。つきましては、この旧版は現在投稿してある分全ての話の改訂が終わり次第、削除したいと考えております。

詳しくは4月10日分の活動報告『お知らせ』にて。ご迷惑をお掛け致します。

## 一日目…プロローグ

その夢の始まりは、穏やかな光。そして聴こえる、あの人の声。

あの人は笑っている。見えなくてもわかる。  
わかるよ。感じるよ。

いつものように、大きく大きく手を振って。  
早く早く、と。俺の名を呼ぶ。

今行くから。ちゃんと行くから。  
だから微笑んでいて。

もう。

君が泣くのは、見たくないから。

「おめ、いらっしやい。」

私のところに、帰っておいで。

私の世界に、帰っておいで——」

オ下ガリ下サイ。

「……はい？」

と、夢の中。紡ぎだした俺の声は、あろうことが震えていた。

目の前に聳<sup>そび</sup>える、異常気象、奇怪な幻覚及び幻聴。一つ目だけならばともかく、三つ揃<sup>そろ</sup>ってしまえば夢確定だ。そう。ディスプレイズマイドリーム、大決定。

つまり此処は夢の中。従<sup>したが</sup>って、現<sup>うつ</sup>の世界の俺はベッドの上。手放された心だけが、緩<sup>ゆる</sup>い糸で絡め取られて捕<sup>とら</sup>わられて、緩<sup>ゆる</sup>く閉じ込められてしまっている状態にあるというだけ。

意識の形がはっきりしている以上は、その気になればいつでも抜け出せる。

そう、訳もない。

たとえば、明日の朝食何かな父さんのエプロン何柄かなそういや一昨日も新しいの買ってきたんだっけなーとか、目の前に在るものとは全く関係のないことを考えてみればいい。そうすれば意識の上に立つ薄っぺらい世界は基盤を失って揺らぎだし、やがて崩壊、そ

して消滅。

至極簡単な事。

そうだよ。そもそも、此処は俺が創り出した世界なんだ。恐れる必要が何処にある？

……なのに。

夢の中。俺の身体は震え、鮮明に恐怖という感情を刻んでいる。

才下ガリ下サイ。高貴ナル我等ガ主様。我等ガ救世主様。

「……お前、なんだよな？ お前が声、出してるんだよな？」

理由なら。目の前に在る、現在絶賛対峙中の、それ。つまりは対峙を強いられている、それ。

まあ元を辿れば。奴と向き合っているというこの状況は、俺が自分で創り出してしまったものなのだ。

5

才下ガリ下サイ、我等ガ救世主様。

コノ様ニカナイ者達ノ殲滅ニ、貴方様が御手ヲ煩ワセル必要ナド御座イマセン。貴方様ハタダ御観覧下サイ。

我等ハ、タダ貴方様ノ御力トナル為ニ創り出サレタ存在。

我等ガ制裁ノ代行者トナリ、存在理由ヲ全ウ致シマス。貴方様ノ世界ニ不必要ナ、全テノモノヲ壊シマス。

震える自分の身体を。俺は、左右に大きく広げていた自身の両腕で抱き締めた。そうすると分かる。俺の身体は暖かい。

それは、外気の熱に当てられて熱っているのではない。俺が発す

る、俺の熱で。俺は生きていて。だから此処は、少なくとも死後の世界ではない。地獄でもないし……こいつと遭遇してしまっている以上、天国などでは決してない。

ならば。

此処は何処？

夢の中、今俺が立っているのは。これまで俺が出会ってきた、現実の世界にも、映画の世界にも、漫画やアニメの世界にも。全く見覚えの無い街。

強いて言うなら……煉瓦と暖色と青空に彩られたこの街に、表題をつけるのなら「中世ヨーロッパ」。現実の世界から一つ先取りした、真夏の、という設定付き。裸足に突き刺さるこの地熱は、あの太陽の輝きは、まさしく夏のものだから。後は小高い丘の上から、海が見えれば完璧だ。

という訳で、結論。

「……わかんないよ」

すいません訳がわかりません全く以てお手上げです、と。途方に暮れるしかなくて。

俺は、視線を奴に据えたまま、呟く。口の中が乾燥しきっていたのに気付いて、唾を飲み込み。

自分を抱きしめていた腕は。再び、大きく大きく。理想としては、翼のように広げて。

才下ガリ下サイ、救世主様。

「わかんない。悪いけど、何もかもわかんないんだ。お前が言うてることも、全部」

それはきつと。テストの校内偏差は常に四十そこそこという、俺の頭脳の所為ではない筈。

ドウカ、ソノ者カラ離レテ。私目ガ葬リマス。

「嫌だ」

オ下ガリ下サイ。

「嫌だよ!」

そんな、虚無を映したロボット口調で。趣味の悪い玩具みたいな奴に、どんなに言われたって。

……やっぱり、怖い。

ああそうさ怖いよ、いや此処夢の中だし恐れる必要なんかない、そうなんだよわかってるけど、やっぱり怖いものは怖いんだ。

けど。

「あのさっ……よーしお前なんか怯えさせてやる覚悟しろー、とか思ってるかも知れないけど、い、言っとくけどそれ、かなり無駄だよ! お前よく見たら結構面白いよ、ほら、目とか体中にぎっしりついてるし、目とかそれぞれバラバラな方向向いてるし、暇潰しとかに持って来いだよ!」

単純な遊び方の例。目の数を数える。因みに解答なし。全て数え



る前に気絶する人続出。

オ下ガリ下サイ、救世主様。

「嫌だつて！ てか、ずっと思ってたんだけど、救世主様って何？  
俺の事？ 初対面なのに何で……あつ、偉い人にでも見えんのか  
な、俺一介の高校生なだけどさつ、お前目沢山あるくせに相当人  
を見る目がないっていうか、まあお前どつからどう見ても人じゃな  
いから別に平気かなっていうか、でも昔は人だったのかも知らない  
からやつぱり洞察眼は鍛えといた方がいいのかな、あーでもだつた  
ら言う事聞いてくれよ、俺は絶対退かないから、何をどう言われて  
も、絶対絶対退かないから！」

そう、喚き散らしたけど。  
何処までも無感情なソイツは、俺の言葉を無視し。尚も脳内に直  
接訴えかけてくる。

オ下ガリ下サイ。

「あああああ、もう！ だーかーら、無理だつて！ 断固拒否、却  
下申請、控訴なんか認めませんっ」

だつて、さ。怖いからつて。俺が今、退いて。此処から、尻尾ま  
いて逃げだしたら。

たとえ。これが夢の中であつたとしても。

「……どうして」

沈黙を守っていた背後から。か細い声が聞こえた。俺は奴から目を逸らさず。恐らくは俺と同じ年頃であろう彼女に、言葉だけを返す。

「どうしてって、何が？」

……よし。大丈夫、俺の声は震えていない。

「どうして」

再度の問い。泣きそうな声だったから。

「どうしてって」

両手を大きく広げたまま。先程から全く動作を見せない面前の「奴」が、俺に襲いかかる気配がないことを確認し。

振り返ると。

「どうして助けるの!？」

其処に膝を折って座る、擦り傷、切り傷……傷だらけの少女は。茶の、ガラス玉の如く美しい瞳に俺の顔を映して、じっと見つめて「、というか睨みつけて。先程とは打って変わって鋭い声で、高く高く、叫んだ。

正しく中世ヨーロッパの町娘、といった衣服を身に纏い。瞳と同色の、腰の辺りまでの長さの美しい長髪が特徴的な少女。膝下二十センチ丈の、橙色のスカートの下……覗く白い足首に、特に深い傷があつたから。

俺は。この前の保健の時間に見た、応急処置の仕方を取り上げた映像の記憶。曖昧なそれから禿げた小父さんの機敏だった動作をピクアップしつつ、とりあえず自分の着ていた灰色のパーカーを巻いてあげた。

けど、その灰もべつとりと血に滲んで。

例え柔らかく覆われていたとしても。見るに堪えないほど、鮮明で、痛々しくて。その黒に視線を落としていた俺は、再び彼女の顔を見て。

「痛い……って聞くまでもないか。痛いよね、やっぱり」

「黙れ！……私の質問に答える、どうしてこんな真似をするの！」  
「でも、大きい声を出せるってことは、多分大丈夫かな……えーと、ね、きつともうすぐちゃんと助けが来るから、それまでそのまま」「どうして……」

叫んで。彼女は、俺を睨みつけたまま。俺と同じ。震えている。

恐怖から。痛みから。……怒り、から？

「どうして……」

こういう時、どんな顔をしたらいいのかわからない。だからとりあえず、笑っておく。うまく笑えているかはわからない。

「一番、俺がしなくちゃいけないことだから」

針のように鋭い視線が。戸惑いにか、和らいだのが分かった。

「正直、こんな光景……戦場、かな。生で見たの初めてで……こういう時、武器持ってない一般市民がどうしたらいいのかとか、よくわかんなくて」

生まれた時から、ずっと。「平和」に包まれて、一步もその外へ出た事がなかったから。

そう、悪く言えば平和ボケ。もう他界した俺の祖父母が知っていた筈の、戦場に身を置く苦しみを、俺は知らない。生き抜く術を俺は知らない。死に瀕する罪なき民達の絶望と嘆きを、そして痛みを、俺は知らない。

「とりあえず逃げるのが一番いいとも思っただけで、逃げないと迷惑になるかも、とも思っただけ……」

でも。そんな時、彼女を見つけた。奴が動けない彼女に向って、鈍く輝く刃を振り下ろすのを見つけたから。

理性が吹っ飛んで。飛び込んで行かすにはいらなかったというだけの事。

本当なら、冷静さを欠くのは戦場においては最もしちやいけない事なんだろうな。それくらいならわかる。今だって、奴が振り上げた金属を俺達から逸らし、空のみを裂いて煉瓦に落としていなければ……恐らく、どちらも助からなかっただろう。

助からなければ。

俺は夢から覚め、嗚呼怖かった、さてと学校行くかでお終い。でも。

彼女は本当に死ぬ。

何故か、そんな気がしたから。

「目の前にある命を救う事が、さ。その一番近くに居る俺に出来るなら……きつと、そうすることが一番の選択だと思っただ。うん……多分、間違っただけ」

俺は、そう。

例え夢の中であろうと。目の前で人が死ぬのは、見たくなかった。視界の端。遠目に見えるのは、赤に塗れた老婦の骸。

もう誰も。死ぬのは駄目だ。殺されるのは、駄目だよ。

「……………何よ、それ」  
周囲の雑音に、消え入るように、微かな声で。彼女は再び言葉を紡ぎだす。

「何なのよ……………訳わかんないわよ」

「俺の言ってること、そんなに変かな」

傾けた頭の中では、相変わらず。奴の抑揚のない声が、エンドレスリピートで響いている。

「変よ」

と。少女は。泣きそうな顔で。

「だってあなたは化け物で」

「へ、化け物？ ええと……………確かにTシャツ短パン……………しかも中学時代のやつだし、あ、しかも裸足なんて恰好で町歩くなんて変人かもしれないけど、いや、でも化け物とまではいかない気が……………」

「あの化け物達を使って、私達を、殺しに来た筈なのに」

一瞬。

夏の日差しも、からつとした空気も……………周囲からは全てが消え去り。ひんやりと冷たい虚無の中に、堕ちていく感覚があった。

「……………え？」

今。彼女はなんて言った？

「それなのに」

俺が？ 彼女達を、殺しに来た？

「それなのに……そんな事言うのは変だもの。私達を助けるなんて、絶対、妖天族は言わない筈なんだもの」

妖天族？

「変な人」

妖天族。化け物。殺す。妖天族、化け物、俺が化け物……俺は、殺す……

理解不能な単語の羅列。頭の中に絶えず流れて。それが反響なのか、新たに加わったものなのか、解らなくなる。

そんな。そんな筈がない。

この人は、どうしてそんな事を言う。

それは真実なのか？ 夢の中の俺が、それ？ 夢の中で、俺は、そんな惨い事を？

俺は、どうして。

「私」

戸惑いの色を映す俺の黒を、じっと見つめ。

頬を伝うのは、溢れ出した感情。それを拭う事もせず。ふっと眉を顰め、首を傾げて。

微笑んで、彼女は。

「……あなたを信じて、いいの？」

その言葉が。俺を「俺」へと引き戻す。  
俺は微笑み。しつかりと。頷いてみせる。

もう震えはない。

「どーんと、来い」

と。その時だった。

空間を裂いたのは、白い閃光。

背後から、一瞬にして伸びて。俺が振り返って、何が起きたのかを確認する暇も。守らなければならない人を庇う暇もなく。

俺達を、包み込む。

それは。何故か暖かく。柔らかな、光。

全ては白い闇の中。何も見えない。

町も太陽も青空も、幾つもの哀れな死体も。あの化け物も、傷ついていた少女も、……俺も。

世界は安堵の中。全て、消えて。

## 続1日目…君よ 目覚めて

目標の消滅、確認。

晴れ渡った光の霧。齎された沈黙の中。その銀髪の少年はふつと息を吐き、手にした鉄の棒の先を再び地へと落とす。

現在この周囲二十モア内に確認できる意識は、人間の少女のもの、唯一つ。幸いな事に、どうやら今の一発で「奴」の意識を吹き飛ばす事にも成功したらしい。

間抜けな魔天使もいたものだな。と。

緊張を解いた彼は軽く頭を回し。そしてその湖畔の翠を宿した瞳で、生存者の姿を確認し……た、ところで、眉を顰めた。

つかつかと。長い足で彼女と、その傍らに倒れる「奴」の元へ歩み寄り。

「何をしている」

沈黙によく響く冷涼な声。投げ掛けられ、少女ははっと顔を上げる。硝子玉のような美しい茶の瞳。似ている訳ではないが、共に此の地へと赴いてきた仲間の少女の顔を思い出される。

一瞬その身を案じかけ。いや、と。彼は軽く頭を振り、その影を払拭した。

医療要員とはいえ彼女は立派な魔導士だ。万が一襲撃されたとしても、たかが骨族風情に倒される事はないだろう。

それに、彼女の居るこの町の北部は現在「彼奴」が護っている。

「彼奴」の耳が、彼女に迫る奇怪な軋みを聞き逃す筈がない。

それより、今は。



「何をしている……其奴は魔天使だぞ」

「はい……わかっていきます、でも……っ」

あるうことか「奴」の穢れたその身に両手で触れ、「奴」から離れようとしない少女は。彼の方へ向き直ろうと身を振りかけて、いつ、と短く声を上げ、顔を顰めた。其処で彼は、少女のその左足に灰色の布が巻いてあることに気づき。

「……待て」

短く言い放つて。棒の先を地に付き、彼女の傍らにしゃがみこむ。

「足の怪我を見せてみる」

「あ……はい」

了解を得た後。彼は白く長い指で、丁寧に覆いを取り去る。そうすると現れた傷。ぱっくり開き、覗くのは淡い桃色。今尚鮮血が流れ出る。かなり深い。彼はふっと溜息を吐く。

「止血が上手くなされていないな……一体誰に」

「……あの、アスカ様」

手負いの少女は、おずおずと。その間にも、彼はその痛々しい傷の上に手を翳し、処置を施す為意識を研ぎ澄ませる。

「どうした」

「あの、私を助けて下さったのは」

「ああ」

と。生じるのは生暖かい風。周囲を舞い、彼の美しい銀髪を揺らす。

「この魔天使なんです」

「ああ」

そして。彼は眼を閉じ。

遙か高き蒼穹より降りし光の意志よ 生を司りし精霊の唄よ  
集いしは大地 我が身の元 舞いて この者に聖なる祝福を  
この者に生を この者に癒しを

そう、低く。しかし美しい声で紡ぐ。  
すると少女の傷には、光が集い。失われた彼女の一部分の代替と  
して、形を、色を得……

「…凄い」

確実に薄れていく痛み。少女はその光景に見惚れ、溜息混じりに  
感嘆する。

「凄くなどない、初歩的な聖光魔法だ」  
アレンテイア

「これで初歩なのですか？」

驚き。顔を上げ、彼へと視線を移す。美しき少年は、ただじつと、  
彼の齎した光を見つめていた。

その瞳は、彼が先程紡いだ言葉……「蒼穹」の色を映し出す。そ  
う。見上げるとすぐそこにも在る、鮮やかな青だ。

「でも、凄いわ。初歩なら、私にも覚えられるかしら」

「素質にもよるな。……だが、術の効きがなかなかいいところを見  
るよ」

「素質、ありますか」

「……かも、な」

やがて光が完全に消え。彼が手の覆いを取り去った時。傷を負う以前の、少女の若々しく綺麗な皮膚が其処にはあった。

夢のようだと彼女は思う。

これがアス力様。私達を救済して下さい、アス力様の御力。

「応急処置だ」

「これで、ですか？」

「まだあまり動かすな。お前の身体に馴染むものには、まだ幾分か時間が掛かる」  
と。

少女が微笑んで感謝の言葉を口にし、頭を下げたのを見届けてから。彼は立ち上がり。

そして。顰め面に、早変わり。

「で」

「え」

「……………何だと？」

少女は思う。

遅い。遅いよ、この人。

光から始まり、光で終わる。そして黒い闇のトンネルを抜け。

夢から覚めたら、其処は勿論現実の世界。

俺の部屋は暗く。その陰を吹き飛ばさんとするかのように、目覚まし時計が威勢良く騒ぎ立てる。そんな騒音の中でも平静を保つ青色カーテンを通して、窓からやんわりと差し込むのは。嗚呼、お日様の光だ。

帰って来たのだと。そうして俺は思い知らされる。

あーあもう少しゆっくりしてたかったな。せめてあと五分、四分、三分、二分、一分四十秒。

……でも。このままだと父さんが、部屋まで起こしに来てしまう。

朝っぱらから、何の覚悟もなしに迎える、エプロン姿でのご登場は……駄目だ、強烈過ぎて目に毒だ。運が悪ければ失神しかねないけど、それもいいかと。ぼんやり、俺は思う。このまま、温もりの中にふわふわ。楽に漂っていられるなら、それでも。

「おい」

「……えー」

「……二十三」

そう、ぼんやりと。霞んだ意識の中で呟く。嗚呼、此処は何処、俺は誰。

「おい」

「……あー」

「二十四。……おい……と」

と。

右頬に。

「ふえっ!?!」

ぎゅっぎゅっぎゅっ。

……突然の、激痛が。

「言うのはもう二十五回目だぞ大概にしろさっさと目を覚ませこのど阿呆が!」

「いだだだだだだだだだ……いあいあい、いあいって、いあいですー」

居合。

ノー。

痛い。

という訳で、目を覚ますと。

大変残念ながら其処は、俺の部屋などではなく。屋内でもなく。

「ああ成程、俺二重で夢見ちゃったんだなー」

「おい」

「あーしかも有り難いことにさっきの続きからゲームスタートだよ、景色とか何にも変わらないしー服装だって同じ、Tシャツ短パン就寝時の標準装備防御力ゼロのままだしー、いいね設定が飲み込みやすくて、ってか俺ゲーム殆どしないんだけど、こんな初心者がプレイしても大丈夫ですか、即ゲームオーバーとかまじやめてー」

「おい……二十六、二十七」

と。不吉なカウンツの後。何の対処もせずにいると。

「いだだだだ、だあら、いあいって、いあいっていつえるあないえすか……」

今度は左。

「なんなんえすかもー」

「お前が私の呼びかけに早く応えない所為だ」

柔らかか、とは。とても言えない逆光、顔も見えないこのお方。嗚呼、何を仰っている。

頬の痛みから漸く解放された俺は、暫しの間放心状態。………という訳にもいかず。

どうやら俺は、所謂修羅場を迎えているらしかったのだ。

「………とりあえず、どうか降りてくださいますか、お願いしますこの通り………」

「何の通りだ。私はまだ何も示されてはいないぞ」

腹の上。馬乗り状態で俺の胸倉を掴む、父親ではない何方さんかに懇願する。

とりあえず。夢の中の登場人物ファイルその三。一人称、此方も私。

再度咳かせて戴こう。

嗚呼、貴方は誰。

## 続々巻目：その少年

一つだけ違った事は、キャストの数。

少年が登場した代わりに。少女、そして「奴」はいなくなり。「奴」に殺されてしまったのだろう、哀れな遺体もなくなっていた。

という訳で、現在地。

目覚めの地点より数歩移動し。

煉瓦造りの建物が作りだす、夏の日のおアシス……日陰の中。

「さて」

と、その少年。

外気とは対照的に熱を持たない煉瓦の上、正座する俺。その前に仁王立ち。逆らった瞬間に、手にした鉄の棒で叩かれそうで怖い。

その少年、改め。

人に無断で馬乗りボーイ。

……改め。

「これより幾つか質問をする……と言っても、尋ねるのは貴公自身に関する、応答に何ら困らない情報のみだ。即ち恥を抱く必要、及び己の無知を嘆く必要は何処にもないぞ、少年」

俺様ボーイ……

いや、改め。

「では正直に答えて戴こうか」

「……わかりました」

「阿呆、返事はい、だ。それ以外は認めない」

軍曹ボーイ？

いやいや、これもやっぱり、改め。

「それから。申し遅れたが私の名はシルフィスⅡゼノⅡアルヴェルドだ。好きな様に呼んでくれて構わない」

「しるふいす、ぜの……」

「シルフィスⅡゼノⅡアルヴェルド、だ」

「何処までがお名前ですらっしやいますでしょうか」

俺が発した素朴な質問に対し、彼は……思いつきり眉を顰めなさる。

「……本気で尋ねているのか」

イコール、悟れ。

その少年、改め。

単純な線でいくとシルフィス様。彼の発音と区切り方を考慮してもシルフィス様。

さて、何故「様」なのか。という問いへの答えは単純明解。

……彼が。

超絶美少年だったから、です。

逆光というベールを脱ぎ去り、俺の前に姿を現した彼の「美」。

嗚呼、それはまさに感嘆ものであった。

只管に整い、何処か近寄り難さを感じさせる、高貴なるその容貌。悔しいが欠点など何処にも何処にもありはしない。



燃え盛る夏の日差しとは不似合いの、透き通るように白い肌。それとは対照的に、光を浴びて美しく輝いていた銀色の髪。

長い睫毛に縁取られた切れ長の目。冷然ともとれる視線を放ち、俺を映す瞳は湖畔を映した深緑。全体的に白を纏う彼の中、その色はより鮮明となっていた。

嗚呼、例えて言うなら王子様だ、そう、白馬の王子様。だからと言つて俺に跨るのはもうお止め下さい。残念ながら俺は馬ではなく、れっきとした人間

……と。

不意にちらつくのは、戦場で出会った少女の。鋭かったあの視線、そして言葉。

だつてあなたは化け物で

妖天族はそんなこといわないはずなんだもの

記憶の蓋が開いて、一定のリズム。巡る度、心臓を打つ。

俺の心臓は鐘なんかじゃないのに。叩いても音なんか鳴らない。

ただ。痛みだけが余韻を残すばかりで。

化け物。妖天族。

バケモノ、ヨウテンゾク、バケモノ、ヨウテンゾク、バケモノ、ヨウテンゾク、バケモノ、ヨウテンゾク……

数回旋回した後。じゅうつと音をたて焼き付く。俺の主張の基盤は。ゆつくりと、静かに……確かに、崩壊を開始する。

人間……の、筈。多分、人間なんだ、から。

そこで、シルフィス様の咳払い。俺ははつと我に帰る。  
「質問に移るぞ」

「え、あ」

「返事は」

「あ、そうだ、はい」

やれやれ、とでも言いたげに目を細め、彼は溜息。大変申し訳ないですが、吐きたいのはこっちです。

「ではその一」

「はい」

「貴公の名は、何と言う」

それは彼の言った通り、至極簡単な問いかけ。当然俺は即答する。  
「風岡、刹那、です。風に、丘じゃない方のこっちの岡に、刹那」  
「……その二」

指で空中に漢字を書いたが、ノーコメント。

「年齢は」

はいはーい逆に質問、俺何歳に見える？

「……十六です」

止めておいた。

「その、三」

「……はい」

「出身は」

「日本です……あ、詳しい住所も要りますか」

「……不要だ。では次、その四」

「はい」

「種族は」

「はい？」

思わず、訊き返していた。

「種族……って、どういう、ことですか」

「どういう事、とは」

「あ、それはつまりですね……何を訊きたいのかよくわからないと言いますか、どういう答え方をしたらいいのかわからないと言いますか、ええと、ですから……解答例みたいなのを示してくださいから助かるのですが」

すると。

彼は目を瞑り。再び、ふっと小さく息を吐く。

「成程、な」

「成程、と言いますと」

「大変良く解しました、という意味だ」

「あの、一体何を」

首を傾げた俺の問い。彼は目を開き。

そこで違和感。

……瞳の色。

先程は緑だった。翡翠の如く美しく。そして、この闇の中でも輝く、鮮やかな色。視力万年1・0の俺が見間違っ筈などない。

しかし今は。

海の如き、濃青色。

「……私の能力が狂ってしまった訳ではない、という事を、だ」

嗚呼、またまた、理解し難い事を仰る。混乱に加えて、また混乱。

「力、って……あの、それって、どういう  
後で話す」

「後って、いつ」

「後、だ」

「あー……失礼かと存じますが、解答になっていないような気が…  
…」

「とりあえず今はもう十分、質問は以上だ」

まあ、つまりは。強制終了、というやつでした。

暫しの沈黙の後。

「あの」

と。

俺は右手を上げてみる。

正座には慣れてる。家の食卓は座卓だし、俺の所属する剣道部は正座でミーティングが伝統だし。別にこの状態で居続ける事に不満がある訳ではなかった。

「……これから、俺、どうすればいいのでしょうか」

だから俺がそう言ったのは、一人だけ正坐やだとか足が痺れたとか伸ばしていた背中が痛いからとか遥かに高い位置から見下ろす貴方の視線が痛すぎるとか、そういう理由では決してない。

「俺はこれから、何処へ行けばよいのでしょうか」

理由は、なかなかこの夢から覚められないから。

何処まで行けば。

この夢は終わるのでしょうか。ゴールは一体何処にあるのでしょうか。

うか。

それは夢の中の住人である目の前の彼にとっても。難解な疑問である筈だった。

しかし。

これまで此方が繰り出す何の質問にも答えてはくれなかったというのに、あるうことが。事も無げな顔をして、目の前に凜と聳え立つ王子様はこう仰る。

「私と共に来ればいい」

「……イエス？」

「何だと？」

またまた申し訳ないのですが。それはこつちの台詞です。

「私と共にって……何ですかそれは！？ そんな、いきなりそんな事言われても、俺まだ料理も掃除も薪割りも御婆さんは川で洗濯も」  
無意識のうちにかの有名な昔話の一節を織り交せていた俺。シルフィス様はまたまた、思いきり眉を顰めなさる。

「訳の解らない事をごちゃごちゃと喚くな鬱陶しい。貴公には行く宛など無いのだろう？ そう慌てふためく必要が何処にある」

「ない、けど、いや、ないんですけど」

「文句があるならば別に構わない。無理にでも連行するまでだ」

「え、今とんでもない事を言われた気が」

「だが、ひとつだけ言っておこう」

俺を見つめる瞳の奥に。氷のように冷たい何かが一瞬過ぎる。

「無理にでもこのまま此の地に居る事を望み、それを実行した場合……貴公は間違いなく、民衆から迫害され、野垂れ死ぬ運命を辿る

事になるだろう」

迫害。

死、ぬ。

「それは」

きっと俺は青ざめている。身体中の血液が、一気に堕ちて。この冷たく心地良い地に流れ出し、同化する感覚があったから。

シルフィス様が、酷な事を言っすまないが、と。低く低く、言うのが聞こえて。

堪らなくなる。息が出来ない程、苦しくなる。

「それ、は」

その次に来るのは。絶対に、声に出したくなかったこと。それは、針のように鋭く

「……俺が……化け物だから、ですか」

「魔天使、だからだ」

……悲しい、真実。

「俺」

頂垂れて、俺は。

「人間なんです」

シルフィスは何も言わない。

「その、マテンシってのが何なのかとか、どういう基準でそう言ってるのかとかは、わからないです。でも俺は……人間の、等、なん

です」

そうだよ、と。

お前は人間だ、ちゃんとした人間なんだよ、と。

誰でもいい、ただ、肯定してくれたら。

そうしてくれたら。どんなにいいか。

たったひとり、傍に居る彼に先程否定されたから。決して現実のものとならない期待。

振り切るようにして俺は続ける。言葉を紡ぐ。

「少なくとも、この十六年間、俺は人間でした。人間として生まれて、人間の中で育って、人間として、これまで、ずっとずっと、生きて……俺は人間以外の何者でもない、それが当たり前で、人間じゃなかったらなんて、考えた事すら無くて」

こんな当然な事が。

否定される日が来るとは、思ってもみなかった。

「だから、人間じゃないなんて、化け物なんて……マテンシなんて言われても、どう答えたらいいのかわかんないし……気持ちの収拾が、つかないです……」

自然と。沈黙の中、消え入る言葉。

不意に彼がしゃがんだのを感じ、顔を上げると。俺の視線と同じ高さ、彼の瞳。

彼の中に吸い込まれて。彼の中に、俺はいて。

その中の俺は真っ青。表情には、ありありと不安を映し。……弱そうな自分。可哀想な、自分。

そんな俺を、彼は真っ直ぐ。只管真っ直ぐに見つめて。

「大丈夫だ」

……そんな、優しい事を言う。

「貴公が現状を理解できず、不安を抱かずにはいられない状況にある事は解している。何とかしてやりたいと思うのは山々だが、とりあえず今の私に出来る事は、貴公の居場所を造る事のみ」  
「居場所？」

「そうだ。貴公がその居場所を確立し、ありのままの真実と向き合う事を決意した、その時」

その時。

戦慄が走る。

シルフィスの背後に。

再び、突然。音もなく現れた、それ。

死者のなれの果てと呼ぶには……あまりにも酷く、哀しいその姿。

そう、奴は骸骨、である。しかし、本来それが持っている筈の白は殆ど見えず。代わりに奴の身体を埋め尽くすのは、おひた夥しい数の目、目、目。

映すのは虚無。目の前に在る俺達二人、その両者に無感情な視線を送る。

そして手には。濁った色の、俺の身の丈ほどもありそうな大剣を携えて。

「その時は全てを教え……真にお前の力となる事を約束する。」



だから……大丈夫だ」

「奴」が。無防備に背中を向ける、シルフィスに向かって。

一瞬のうちに、どっと。嫌な汗が噴き出した。

俺は飛び上り、そして叫ぶ。

「シルフィス……さんっ！危ないっ」

そう、刃を。

振り下ろす。

駄目だ。

俺は。目を覆う。

ガキン

……肉を断った、にしては。あまりにも硬く、鋭利な音が響いたから。

恐る恐る。手の仕切りを、取り払うと。

「奴」の刃の切っ先は。ただ地に堕ち。シルフィスの姿は、何処にもなく。

「シルフィス……さ、ん？」  
不意に。

白がひとつ。

ふわりと……目の前を。  
清らかな、白い羽が舞う。

「言った筈だぞ」  
頭上から。降ってくるのは彼の声。  
見上げる、と。

「大丈夫だ……と」

その背中には翼。  
一定の周期で羽ばたきを繰り返し、その度に俺まで風が届く。巨大な、彼の翼。

地上よりおよそ3m。  
其処には、優雅に、美しく。天に立つ……シルフィスの姿。  
彼は呆気にとられている、地上の俺を見。

「セツナ」  
「はっ、はいッ」  
「其処から下れ。奴と距離を持って」  
俺は大きく頷き。上空からの指令に従って、日の下に出でる。

と。  
俺と、「奴」の狭間。軽やかに降り立った天使は。  
その姿に見惚れる俺に向かって。

微笑んで、みせた。

その笑みが、あまりにも綺麗だったから。微笑みを返した俺は、敬礼を彼に贈る。

「王子、サービス、有難う御座います！」

「何だそれは」

そして。視線を殲滅<sup>せんめつ</sup>すべき敵へと戻し。

鉄の棒の先を「奴」に向け。彼は声高らかに宣言する。

「我、アスカの名において……罪に溺れし汝を救済する」

シルフィスに向かってってくる巨大な影。それに伴い、奇妙な状況。この季節には到底有り得ない現象。

何処からか生じた冷気が風と化し。俺の髪を揺らし、横を吹き抜けていくのだ。

それはまるで意志のある獣の如く。目標に向かい突進していくように。

やがて。

俺が寒気を感じ。温度とは違う面で……空気が変わった、と。完全に認識した瞬間。

「『凍てつけ』」

一瞬の発光。

俺が目を瞬かせた、そのごく僅かな間に。

「……すげ」

思わず。感嘆の声を漏らす。

周囲の気温を一気に変化させてしまっ、膨大な量の冷気を流しつ。聳え立つそれはまるで氷の華。

「奴」を核に携えて……冷たい大輪の花が咲く。

凍りついた「奴」は。指一本動けない。瞬きを繰り返していた無数の目も、瞳の動きも。完全に、止まり。

彼は。俺の足もとにまで滑り来る白き冷気を踏み、凍りついた哀れな怪物に歩み寄る。その手の中で、鉄の棒は。青白い光を放っていた。

立ち止った彼は。

その光で。

彼の咲かせた美しき花を。

横一文字。一閃する。

砕け散る、花弁は。熱を放つ大地に落ち、光となって空に消えゆく。

それは恐らく。荒れ狂っていた死者の魂を鎮め。

共に。

## 続々続いち日目…その少年 2

其処は。セイラーム大陸東部に位置する、小さな町。

港町でも商業街でもなければ、重大な史跡がある訳でもなく。特別栄えている町ではない。

しかし長閑。平穏な時間がゆっくりと流れ、心優しい民が住まう、温かな町。以前任務時外で此の地を訪れた時、そんな印象を受けた事を、彼女は確かに覚えている。

その町は名を、シルドジークといった。

そして其処は町の教会。町民の緊急避難場所となった施設の一つである。

木製の巨大な両開きの扉。それに封鎖するように寄り掛かって立ち……しかし、内側から力を加えられれば、忽ち吹き飛ばされてしまいそうな程に小柄な少女が一人。

肩の位置まで伸びた艶やかな茶の髪に、それと同色の大きく円らかな瞳。

手には杖。途中までは臙脂色えんじの棒だが、先端は円を描くように曲がった木。その茶の中央に詰められた翠色の宝玉を守るように、生きた植物の蔓が覆う。

うつすらと聞こえるのは、中に居る子供達の泣き声。何処からか響く鳥の声。

嗚呼、まるであの時とは別物のようだと、彼女は思う。

町は静か。がらんとしていて、寂しく。例え、鮮やかな暖色で彩られていたとしても。

「おっそーいなあー」

もうすぐ夜が来ちゃいますよー、と。

少女は、紅に染まる空……遠くに迫る闇を見。その仲間達の事を思う。

と、その時。

久方ぶりに、魔導式通信機が振動する。

はっとした少女は杖を左手に持ち替え、空いた右手で。上着のポケットから、掌に収まる、円形の蒼い機体を取り出し。並んで二つある白いボタン。そのうち、右側を軽く押す。

「はいはい、こちらシエラです、シエラレイルズリードです」  
場にそぐわない明朗な口調。届く声の主は溜息を吐く。

「えー何ー？ 駄目だよ溜息吐いちゃ！ 幸せが逃げてしまいますよー」

「……お前の声を聞くと気が抜ける」

何それ失礼だよ、と。その少女シエラは、笑って言葉を返す。

「それで？ 退治は順調？ ってかさそろそろ時間掛かり過ぎだよ、町のみんな不安がつてるよ」

「すまない、思わぬ事態が生じてな」

「へ？」

と。彼女のただでさえ大きな目が、更に大きく、丸くなる。

「え、何それ」

「骨族の数だが……十六、と言っていたな」

「あー、うん、そつだよ。ちゃんこの町の地図使って、あたしの聖光魔法アレスティアで数数えて、位置確認して」

「ああ……しかし、居る筈のない十七体が出現した」

「へ」

一瞬。思考、停止。

「うつそおおおつ!?!」

「残念ながら嘘ではない。途中経過の段階でコアと連絡を取り合ったところ、北部で八体を退治したとの事だった。……しかし私が退治した数は、たった今昇天させたのを合わせて九だ」

「えー、じゃああたし数え間違えたのかなーっ? そういえば結構数多かつたしつ、あーもうあたし最悪だー、ごめん、ごめんねシーちゃんー」

「謝るのは後でいい。それより、生き残りが居てはそれこそ困る…」

…再度、確認を行ってほしい」

「うん、了解つ。じゃあ、ちよつと待つてね」

通信機の左側のボタンを押し。何の音も発さなくなったそれを再びポケットに収めたシエラは。

これまたポケットの中、小さく折りたたまれ収納されていた、この町の地図を足元に広げ。杖の先をそれに宛がい、意識を集中させる。

光を司りし聖なる意志よ

我 汝と契約し その力を行使する者なり

今此処に 輝きを以て闇を示せ

汝我が元に集いて輝き 我等の希望と 道標と為れ

途端に。

ただの紙切れであった地図は。発光体と化し、黄金に輝く。かと思えばその光は徐々に縮小していき……やがて。ただ一点を指し示す星と為る。

その位置。南部に在り。

慌てて彼女は通信機を取り出し、右のボタンをスイッチオン。

「私だ……どうだった」

「シーちゃんーん！」

「……どうした」

「ごめん、あと一体いるっ！ シーちゃんのいる南部、あっしかも凄く大きい反応なんだよ！」

「大きい……」

「そう、すっごく、すーっごく！ ひよっとしたら魔天使とか墮天使とかかも！ ねえシス、なんか感じない？ 骨族じゃなかったらシスの能力チカラでわかるでしょ？」

返答はない。不安に、杖を握る力も強まる。

「シス？」

「……問題無い。そのことならば解決済み、だ」

「え、でも……」

「事情ならば後で話す」

「……わか、った」

彼女は視線を足元に落とす。其処ではまだ、爛々と輝く一粒の光。

こんなにも強い反応。



もしこれが魔天使であれば。……いくら彼であろうと、楽勝とは  
いかないだろう。傷を負う事になるのは間違いない。  
それに。ほんの少しでも、油断すれば。

それなのに。

問題無いつて、何？

「シーちゃん……」

「案ずるな」

「……うん、でも、ね……でも……」

「……兎も角、討伐は完了した。コアには私が連絡を取っておく、  
お前の居る教会前で落ち合う事としよう。それまでお前は、町民に  
緊急事態の終結を知らせ」

そこで一度、言葉を切り。

「アルテスタ帰魂の準備を、手伝っておいてほしい」

いつの間にか時刻は夕暮れ。昼間から引き続き、雲ひとつない空  
は淡い茜色に染まり。気温も地熱も、和らいで。

「なあ、シルフィスさん」

仲間と連絡を取り合うシルフィスさんを、傍らで見ていた俺は。  
それまでずっと考えていたことを言ってみる。

「夢ってさ」

「何を語りだすつもりだ？」

瞳の色は湖畔の緑。目を細め、眉を顰め、冷やかな視線を此方へ  
向ける美少年。構わずに俺は続ける。

「夢って、なかなか覚めないもんだよね」

「夢と言っても、二通りの意味があるだろう？ 睡眠の際見る幻か、将来的な理想か……お前の言いたい事はどちらに關してだ」

「えーと……多分、どっちも」

「……どっちも、な」

やれやれといった様子で目を瞑り、彼はふつと息を吐く。溜息と言いたくないのは、自分がそれを吐くのが嫌だから。

決意した俺は、大きく息を吸い込んで。息を吐き出す代わりに、言葉を紡ぎだす。

「シルフィスさん、あの、俺、思った事が」

が。

「セツナ」

俺の言葉を遮り。

「お前は、相当な変人だな」

彼は突然に、言う。

「……変人、ですか」

「そうだ、変人だ」

「……あんまり、言われなですけど」

「いや。変人だよ、お前は」

繰り返す彼。俺はただ苦笑する。

機嫌を悪くしたから、ではないけど。

やっぱり、何も言わない事にした。

言わなかったのは。

言いたかったのは。

俺が今。現実の中にあるのかもしれないと。そうであって、ほしいと。

ほんの少しだけ、思ってしまったという事。

やがて彼は目を開けて。手にしていた棒を、均等な長さの三本の棒へと分解し。太腿に付けられたホルダーに収納する。

そして、徐に上着を脱ぐ。その下にはもう一枚、紺色のタートルネック。よく暑くなかったなーと、ぼんやりと思いつながら見ていると。

「へ」

それを、俺の頭にはさつと。

「何ですか……この格好は」

所謂パトカーで連行される犯人スタイル。

「すまないが、暫くはこのままでいてもらう。……お前の髪と瞳の色を民に見せる訳にはいかない。混乱を招く」

「……あー」

成程、とは思っけど。この俺の、この悲しい気持ちはどうしてくれよう。

……と。

ひょっとしたら、それが顔に出てしまっていたのかもしれない。

「…………あの？」

彼は不意に、俺に向かって手を伸ばし。  
柔らかな布の上から。

俺の頭を。撫でる。

ぎっ…………

ぎゃあああああああああああああ！

そっそんなよしよしだなんていや言っていない彼はそんな事言っていないけどいい歳した高校生に頭撫でていい子いい子ってなさってる方は顔色一つ変えないけど受動してる俺としてはちょっと恥ずかしい、いやかなり恥ずかしい、恥ずかし過ぎるんですけどおおお！

と。頭の中では乱心寸前、夏の日の太陽よりも熱を放っていると予測される俺の身体。しかし動けず、何も言えず。

そんな状況で。

「悪いが…………辛抱してくれ」

…………そんな優しい声で、そんな事して、そんな事言われたら。

頷かない訳にはいかないじゃんか。

「どうしたセツナ、顔が赤いぞ」

「えっ、いや、特に何でも御座いませんぞ王子あははははははは」

「…………その王子という呼び方、やめろ」

「え、だってシルフィスさんって王子っばいっていうか」

「…………シルフィスさん、も、やめろ」

「でも、好きな風呼んでいいって、言ってたじゃないですか」

「…………前言撤回だ」

「じゃあ、何て呼べばいいでしょうか」

すると彼は困った様で。珍しく俺から視線を逸らして、口籠って

しまったから。質問変更。

「じゃあ、他の人からはなんて呼ばれているんですか」

再び。

暫しの間、黙り込み。

彼は答える。

シス、と。

「では行くぞ、セツナ。裸足のようだが、そのまま平気か。なんなら私が背負っ」

「いーえ全然大丈夫ですつ、もう超余裕ですよはい、けど……行くつて、何処へですか」

「町の教会へ、だ。準備が整い次第、アルテスタ帰魂を行う」

「あるてすた？」

問いかける俺に。シスは頷き、ふっと。只管に美しく、微笑む。

その笑顔は何処か寂しくて。

「肉体に留まっている死者の魂を、世界へと帰す儀式の事だ」

その瞳の色が。緑から、海の青へ。変わるのを俺は見た。



るから……少なくとも四m地点に留まっではいるが。とりあえず深呼吸、吸ってー吐いてー、吸って 吐いてー。

効果は靦面だ。落着きを取り戻した彼女は目を閉じ、肩を落とす。「ごめん……そうだよ、こんなところで奴等の名前大声で言っちゃったら、大変な騒ぎになっちゃうよね」「全くだ。それに、彼に対し失礼だぞ」

ちら、と。背後に立つ俺に視線を流し、再び彼女の方へ向き直る美少年。見えたのは一瞬だが、わかる。その端正な横顔には、確かに笑みが浮かんでいた。

「確かに此奴は妖天族……魔天使だ。しかし、相当な変人だな」

いや、どちらかと言えば失礼なのはあなたです。

「私達を襲う気は毛頭ないらしい」

「……ほんと？」

片目だけ開けシスの姿を窺う。彼女に向って、シスは頷いて見せた。

「嘘をついていない事なら確認済みだ。安全である事はこの私が保障する」

「でっ、でもシーちゃん」

「大丈夫だ」

確固とした自信を含んだ声で、彼はそう言い。

「有事の際は、私が責任を持って葬る。……そんな事は起こり得ないだろうが、な」

有事の際には、葬る。

責任。

……何だか複雑な心境だ。

が。

シエラさんには、どうやら今の効いたらしい。

彼女はその大きく円らかな茶色の瞳に俺を映して。

「……わかった。シスが其処まで言うなら、多分大丈夫なんだよね」

そして。

ゆっくりと。慎重に。だが確実に、距離を縮め……傍まで来て、立ち止まり。

後ろで腕を組み、ちよつと身を屈めて。陰に埋もれた俺の顔を下から覗き込む。

「ええと、変人さん。あなたのお名前は？」

「変人……って」

「だって、変人なんでしょ？」

そう言っつて。彼女は微笑んだ。

それは、太陽のように眩しい笑顔。

照らされた俺は直視できない、できないのに、無理に標準を合わせせしてしまうと、

「え、ええええええええええと、なっ、なななななな名前は」

こうなる。

「セツナ、落ち着け」

「セツナ？ セツナっていうんだ？」

「はははははははいっ」



やっぱり変だね、と。彼女は声を上げて笑い。

「ねっ、セツナ。あたしはシエラ」レイルズリード。シエラでいいよ」

そして。

俺に向かって、左手を差し出す。

ぼーっと、熱い頬。その手を眺める俺を見かねて。とつとつシス様が溜息混じりに仰った。

「握手を求められているのも解らないのか？」

いいえ解ります、勿論解っておりますとも。ただ、ええ、本当にただ、心の準備というものが、まだ完了していない訳です。

と。

彼女は俺の右手を、両の手でさっと取り。二回、上下に大きく振って。

「よろしくね」

「で、コアは何をしている」

「あー、帰魂アルテスタの準備に行っちゃったよ。多分町長さんと神父様とお話中。今日の導き手はコアに任せただ」

「そうか」

「実際、踊りならコアの方が上手いしねー」

「……という訳だ。もう一人の方は後に……どうした、セツナ」

どうしたもこうしたもない。

ノックアウト、寸前でした。

夜が更けていく。

帰途を辿る人々。アルテスタという儀式の為に、忙しそうに動き回る人々。

手伝う事が出来ない俺は。道の端、しゃがんで。ただ黙って彼等を見ていた。

先程。シスが、腹が減ったろう、と。丸くて茶色い……パンのよ  
うなものを一つ、持って来てくれたから。それを口にする。

柔らかなそれは、噛むとふわりと甘味が広がる。

目覚めてから何も口にしていなかったから、だろうか。これも魔法で出来ているのだろうか。そう思う程に美味しかった。

……魔法、か。

と。被せられたシスの上着。決して取り去ってはいけない覆いの下で。俺は、俯く。

やがて、俺は。

少し歩いてくる、と。

再び教会から出てきたシスに、そう言い残して。

シスが魔法の食糧と共に持って来てくれた、底はゴムのような素材、その部分以外は布で出来た柔らかな靴。有り難くそれを履いて……俺は現在、全く人気のない通りに居る。

緊張状態が解かれ。民達はそれぞれ自宅に帰宅した為、立ち並ぶ住居に点々と明かりはついているが……それでも、押し黙った町並み。

白昼の悪夢。

民は恐ろしい化け物に追われ。……犠牲者も、出た。

その延長上にある夜。寂しい空間と化してしまうのは当然で。

そんな中。

其処で出会ったのは、満天の星だった。

澄み切った空気の中。濃紺のビロードに、鏤められた光の粒。――

一つが鬨ぎ合<sup>せめ</sup>って瞬き。

結果として。

「綺麗だ」

俺はひとり。広い広い、空夜に向かって呟いた。

こんなにも。人の心を動かす。奇跡と為る。

「綺麗ですね」

……と。

俺は。背後に向かって語り掛ける。

「綺麗」

俺の言葉を反復したのは、やっぱり。

「はい」

振り返らなくても。確認しなくても解る。

「シスは、そう思わないですか？」

「思わない訳ではないが、言葉にするのは久方ぶりだな」

「言えばいいのに、綺麗だって。こんなに綺麗なんだから……これ  
って凄い事だと思う」

「凄い事」

近づいて来ていた足音。彼は、俺の傍らで立ち止まり。再び、俺  
の言葉を繰り返す。沈黙にも消え入りそうな、微かな声。

「こんなに空気が澄んで、星があんなに沢山、あんなにキラキラ  
光ってる。こんなに綺麗なんだよ。これ見れるんだったら俺、毎晩  
外で寝たつていい」

「……危険だぞ？」

「そうなの？」

彼が頷く気配。

「でも、とにかく滅茶苦茶綺麗だ。これって凄いよ。……違う、で  
しょうか」

すると。彼は少し、間を置いて。

「違う訳では、ないかも知れない。しかし、普通だ」

え、と。短く疑問を現した声を上げ、彼の方を向く。背後に立っていた……この闇の中、銀髪と肌の所為で、酷く白く見える彼は。俺を見ていて。

困惑の色を映した表情で。俺を、見ていて。

「この空気も、この星の輝きも……普通だ。当然の事だ」

「そっか」

「すまない」

えー、何でシスが謝るんですか、と。そう、俺が笑っても。彼の瞳の色は、先程からずっと、青のまま。

あの緑には、戻らない。

ほんの少し、間をおいて。

彼が。俺の名を呼んだから。

「はい」

最早条件反射。正しい反応を返した……筈が。シスは、何故か眉を顰める。あれ。

「あの……どうかいたしましたか」

「……敬語は不要だ」

あれね。

「でも、返事はい、だって」

「それはもういい」

本当ですかと尋ねた俺に。彼は相変わらず、不機嫌そうに眉を顰めたまま。頷いてみせたから。

「じゃあこれからは、うん、で」

そして、仕切り直し。

「セツナ」

「うん、何？」

そして、彼は言う。

「準備が、整った」

今後の為にお前も見ておくといい、と俺を招き。返事を待たずに、彼は俺に背を向ける。

当然。手に持っていた彼の上着を被り。俺は後をついていく。

空に別れを言う必要はない。俺が此処にある限り。

導かれた其処は、綺麗な円形をした町の広間。

その中央には人が一人。

何せこの距離とこの闇だ、顔はよく見えないが……背丈は恐らく、幾分か俺よりも小さく。髪の色はこの町の住人の持つ栗色とは違い、背景の黒と同化する深く暗いもの。

そして。その周りに、円を描くようにして。

配置されているのは幾つもの、純白の、長方形……箱。蓋には鮮やかに輝く空の蒼で、何か文字が書かれている。

それはまるで。

「……あの、箱」

「ああ」

俺とシスは。その特異な空間の周囲を埋め尽くす人々の中に混ざ

り。すすり泣く声と、重々しく、神聖な雰囲気を抱かれながら……  
彼らと同様、中央を見つめる。  
「死者が入っている」

棺桶。

背中を冷気が走り抜け。俺は、唾を飲みこんだ。

静寂が深まる中。

その儀式は。

唐突に、始まりを迎える。

中央に立っていたその人物が。

夜天の下。

止まっていた時間を破って舞い始め。

その空間を取り囲む人々は。

一斉に、歌い出す。

その歌を紡ぐのは、俺が話しているものとは明らかに違う言語。  
なのに。

俺には何故かそれが解る。

意味も。……想いも。

「さあ お帰り 君よ

君は私

私と共に 世界を創る

お帰り 君よ  
君は風  
大地と共に 世界を繋ぐ

お帰り 君よ  
君は星  
空と共に 世界を抱く

お帰り 君よ  
君は世界  
光と共に 久遠くおんを歌う

聖なる祈りよ 応えておくれ  
私の声なごいを聞き届けて  
どうか君 愛しき君が

永遠に  
どうか 私の傍らに「

そして。  
光。

彼等が眠る白から。彼等から。

彼等がいなくなつてゆく。

ぼつぽつ、と。  
色鮮やかな光が、白より出でて、散り。

導き手と共に舞い。愛していた人々の歌に乗り。



ある者は地を滑り。またある者は風に溶け。天を目指し。花火の如く、弾け。

消え逝く。

それは信じられないほどに美しい光景。しかし、この場に居る誰の唇からも、感嘆の音が漏れる事はない。美しいという感情、それ以上の想いが。この空間全体に。厚く、重く……覆い被さっているから。

俺の隣にいた女性が。それに耐えかねて、泣き崩れ。周囲の人の手に支えられるのを俺は見た。

その時。

足元を。白い光。

走り抜けたから。あとを追って振り返ると。宵の闇の中に消えた、白。

帰る。

魂。

その後から続くのは透き通った涼風。柔らかな布の下……潜り抜けて俺の頬を撫で。

それが止まってから再び。光に溢れる空間に、視線を戻した、その途端。

熱い何かが。

つづ、と。頬を伝うのを、感じた。

「セツナ？」

それは溢れ出す。

俺の意志とは関係なしに。

溢れ出して。溢れ出して。

止められない。止められない。止められない……。

「セツナ」

絶え間なく繰り返される……優美で、酷く哀しい旋律。その中から届くのは彼の声。

そう。俺の傍らには彼の青がいる。

海のように深く。そして優しい、青がいるんだ。

「……ごめん、俺」

さあ、お帰り、君よ。

君は私。

「謝らなくてもいい」

私と共に、世界を創る。

「ごめんなさい……すいません」

お帰り、君よ。

君は風。

「謝るな」  
「だって」

大地と共に、世界を繋ぐ。

「……此处で、さ」

お帰り、君よ。  
君は星。

空と共に、世界を抱く。

「俺が泣く、意味がない……」

お帰り、君よ。  
君は世界。

光と共に、久遠を歌う。

「お前は、変だ」

聖なる祈りよ、応えておくれ。  
私の声を聞き届けて。

「……言われんの、今日何回目かな」

どうか君、愛しき君が。

「……お前は」

永遠に。

どうか……私の傍らに。

「え？」

優しい。

一瞬だけ、歌が途切れて。

その声だけが。低く、確かに。

俺の中で、響き続ける。

## 続々続々続1日目：夢の終わり

アルテスタ  
帰魂が終わり。

地上に生じた光は消え。多分。この空に輝く、星の一員と為るのだ。

「人は死んだら星になるのよーってさ」

突然に訪れた、愛する者の非業の死。儀式の後で溢れ出す、別れを悲しむ人々の声……それはあまりにも、聞くに堪えなかった。

だから現在。

赤い目の俺が居るのは、教会。

神父さんは不在であるよう。救いを求める迷える子羊の姿もなく。だから今此処に居るのは、俺と。俺を此処まで連れて来てくれた、シス。二人だけである。

煉瓦と暖色だらけのこの町には珍しく、白を基調とした美しい建物で。

扉は木製だったが、壁は外側も内側も白。木製の長椅子が整然と配置され。

パイプオルガンもステンドグラスも無いが、代わりに天井一杯に色彩豊かな絵が描かれている。

しかし、其処には神も天使もおらず。

在るのは生い茂る草木に、乱れ咲く花。温かな光を放つ太陽に、澄み切った空の青。

そう。豊かな自然。

身近にある筈のもの。しかしそれは酷く美しい。見ているだけで

心が洗われるようだ。

そして。

さあさあ、神父様が待っていていらっしやる。新郎と来客達が見守る中、お父様に連れられて新婦が歩くのは、勿論

……桃色のウェディングロード。というか、カーペットがひかれていた訳ではなく、床自体がその色なのでした。

その床の上、俺は座り。

傍らに立つ、俺のこの瞳には天使様の如く映る美少年殿に。またもや見下ろされている。

俺だって立ち上がれば、ね。身長では負けていない、等。……そんなに。そう、そんなには。

「……星になるのよ、と？」

「うん。昔っからよく言うけど」

昔……今よりずっとずっと幼い頃。

母さんが病気で死んだ。

残していったのは、テープに録音した優しい声。

刹那、ひとは死んだら星になるの。

「言うけど？」

「……嘘だって思ってたけど」

だから、寂しくなんかないのよ。

母さんはちゃんと、傍に居るから。

刹那の事……大好きだよ。

あれ、酷いよな、と。

たまに思い出して、笑ってしまっ。

大丈夫なんて言っ。俺の事、安心させようとしたみたいだけど、さ。

自分が泣いてちゃ、意味無いよ。

と。

危ない危ない、一瞬じわつときたぞ。このままだとまた涙声に逆戻りだ。やっと解消したっっていうのに。

また泣きだしたら……俺の様子が落ち着くまで、黙って傍らに居てくれたシスに申し訳ない。

「……思っていたけど？」

「あーそうそう……今日のアレ、さ」

「帰魂の事か」

「そう。それ見て、本当なのかもしれないっ、思った」

彼の顔を仰ぐと。

彼は可笑しな事を言う奴だなと笑っても、侮蔑した視線を送ってもおらず。……その瞳は翡翠色。

「かも知れない、ではない。生を失った魂が世界に帰り、その一部となるのは、紛う事なく真実だろうが」

「……それっで常識？」

勿論、と。即答されて、俺は思わず視線を逸らす。

わーお、ロマンが世間の一般常識。こんな言い方をすると、母さん達には申し訳ないけど。

と。俺の様子から察したのか、シスがこう俺に問う。

「お前の世界では違うのか？」  
「え？ うーん……違う訳ではないけど、でも、星の正体が宇宙に浮いてる岩とかだつて解ってるから……あ、でもそれを踏まえた上で星になる、なのかな。死んだ人が宇宙で違う物質になるってことなのかな……」

……つて。

「……すまない。言っている事が理解できない」

「いや、いやいやいやつ、それはいい、別にいいんだけど」

俺ははじかれたように立ち上がる。いや、ようにはなく、そう、なのか。

今、俺は一瞬、衝撃的な一言をスルーしかけた気がするのだが。だから曲がれ右して戻ってきた訳なのだが。

「いつ……今、何て言った!？」

きよとん、として、真っ直ぐに俺を映す彼の緑。わーいほら見ろやっぱり目線の高さは殆ど同じ……  
じゃ、なくて。

「わっワンモア、ワンモアプリーズ!」

「わんも……何だと?」

「さっき言った事、もう一回お願いします!」

するとシスは、しばし考えた後。

ああそうか、と閃き顔で。

「すまない、言っている事が」

「ああ説明足りなくてすみませんっ、多分その前ですっ」

「……何だ突然、何だというんだ」

「だから、さつきとんでもない事を言われた気がするんですー」

「そんな事を言った覚えはない」

「其方に無くても此方にはあります、大いにありますー! ほら、お前の世界がどうとかっ」



煩めんどく騒さわぎ立てた所為で気分を害してしまっただらしいシスは。腕を  
組み、眉を顰しんめ。

「確かに言った覚えはあるが、覚えているなら私に再度言わせる必要などないだろうが。そして敬語はいらなといった筈だぞ阿呆」

「あ、そうだね……」

「それに、それがどうした」

それが、どうした。

冷然とした彼の声が。頭の中で、乱反射している。

俺の世界。

此処は夢の中。俺が作った俺の世界だ。

しかし恐らく、彼の言葉と繋がる「世界」は、此処ではない。夢  
の中、ではない。

俺の世界？

現実の世界？ 地球？ 日本？

そんな……。「この世は全て、俺のもの」みたいな、さながら有名な某ガキ大將的な事を踏ん返り返って言う勇氣は、残念ながら俺にはないぞ。

「俺の世界……って、何？」

すると彼は。

は？

……と、声を出して言わないまでも。その一音を明確に示す表情を浮かべ。

「お前が生まれた世界に決まっているだろう？」

「それは……此処の、こと、でしょうか」

もう一度。

はぁ？

「何を言っている？ 此処は我々の世界だろう？」

「……我々の」

「お前にとっては」

俺にとって。

此処は。俺の世界、イコール、夢の中。  
ではなく。

「異世界に当たる世界、だろうが」

異世界。

初期微動開始。

「イセカイ……伊勢かい？」

「変な発音の仕方をするな。異世界だ、異なる世界だ」

震度3。あれ、地震？

「伊勢……あはは、伊勢神宮……」

「いせじんぐ？ また訳のわからない事を……」

ダウジング的な発音で、俺の言葉を反復し。彼はやれやれ、と。額を右手で押えて、頭を軽く振った後。

その長く綺麗な人差し指で。高鳴る俺の心臓を指し。

「いいか？ 此処は私達の世界。お前にとっての『異世界』だ」

震度4。机の下に隠れてー。

「その事に関しては確証済み。お前の中に在る記憶は、この世界で生きてきた者とは到底考えられないものだったからな……。ああ、すまないがお前の記憶を少し覗かせてもらった、仕方ない事だと割り切ってくれると有り難い」

震度5。そのまま待機してー。

「要するにお前は、何らかの力によって違う世界から……。時空障壁を越えてやって来た異世界人」

震度6。やばい、やばいって、これやば……

「お前は相当な阿呆な上にかなりの変人だ、この反応を見ると、自分は現在夢の中に居るのだと錯覚していたのかも知れないが……」

彼は言葉を切り。

すつと。俺の頬へ、手を伸ばし。

「いつ……いたたたたたたたたたたた」

「どうだ」

「いあい……いあい、いあい、いあいあいであー」

そして解放。

フン、と鼻を鳴らしてこう仰る。

「痛かったか」  
「当たり前じゃんか!」

……あ。

そう言えば。

シスとの出会いも、この痛みから。

俺は確かに……あの時、痛みを感じていた。

震度7。

もう、逃げられない。

逃げられない時はどうすればいい？ 頭を抱えて蹲すまる？ 誰か助けてとでも喚わめいてみる？

多分。どちらも意味がない。  
なら。

なら、俺は。

彼等に与えられた任務は。

シルドジークへと赴き、発生した骨族の殲滅を行う事。それに伴う民衆の保護。其処には負傷者の手当て、及び命を落とした者達の為に、帰魂の儀において導き手を担う事も……当然、含まれている。

よって戦場に赴く小隊は、必ずその「導き手」となり得る者……つまり、舞踊を修得した者を同行させなければならぬという決まりがある。が。戦えない者を連れていくのは危険極まりない事。従って、各隊には最低でも一名、その資格を持つ者が配属されているのだ。

彼等の隊には、三名。

しかし。

それは酷く、辛い仕事だった。

恐らくは。「執行許可」の下りた罪人を。その手で裁く事より、ずっと。

「御苦労、コア」

教会からひとり、出てきたシスは。

聖域から漏れ出した光に照らされた……今宵の導き手を担った、仲間の姿を見つけ。戸を閉めた後、<sup>ねま</sup> 勞いの言葉をかける。

その少年は、シスが出てくるのを待っていたのだろうか。ひとり闇の中に立ち、空を眺めていた彼は。180度、くるりと方向転換……シスの方を向き微笑む。

「どうも、つす。シルフィス隊長さん」

「……何だ唐突に」

眉を顰めるシス。にやははは、と。彼は笑う。

「何となくそう呼びたくなっただけっすよ。俺のほんの気まぐれっす、あんまり気にしないで下さーい」

嗚呼、と。何となく察する。此奴、我々の会話を聞いていた訳か。

夜風に揺れる、黒に似た藍色の髪。

そして、特異な尖った耳……左耳につけた長い長い、白い紐の耳

飾りが、胸の辺りまで垂れている。

右の瞳には、彼の誇る種族のもの……生い茂る森の深緑を映し。左目は……彼の中に、忌むべき血が流れている証。

其処には純黒が宿っていた。

「あー、シエラさんなら」

コアは、左の人差し指を立てて宙を指し。

「まだ広場で町の皆さんと一緒に、正しきお帰りを願ってお祈り中、つす」

シエラ「レイルズリード。」

彼女もまた、資格を持つ隊員の一人であった。

彼女は優秀な聖光魔導士。両親が重人である為に、物心ついた時にはアスカに居た。幼き頃から戦場に立ち、負傷した仲間や民を癒してきた。

そして。多くの哀しき死を見てきた。

しかし。

「辛いでしょ、やっぱり。何だかんだ言っただって」

少年はその場でくるり。

「まだ16年しか生きてないんですもんねー」

「私も19だが」

「にはははは……でもシスさん、半端なく強いでしょ？」

シエラが弱いとでも言うつもりか、と。反論しようとして口を開きかけたシスに。彼は自身の胸に、掌を当ててみせる。

「ここが」

とんでもないと、シスは思う。

自分は未熟だ。途方もないくらいに弱い。死に物狂いで自分を支えているのだ、と。

ゆえに彼は力を求める。

それは仲間を守る力。他の何者からも……大切な者達を、傷付け

させない力が欲しい。

「あーそうそう」

と。新たに切り出してシスの思案を裂き。コアはにっこり、微笑んだ。

別名。

天使、の皮を被った悪魔の微笑み。

「シエラさんから聞いたっすよー」

何を、と彼が尋ねる間もなく。

「魔法天使さんの話、っす。相当な変人さんなそうっすね」

「……ああ、そうだな」

全く以て、変人である。

自分が異世界人と聞かされて、この世の終わりのような顔をしていた、と思えば。

俺、寝る！

と、唐突に。

靴を脱ぎ捨て、長椅子に勢いよく寝転がり、頭をぶつけて悶絶していた。

あまりにも突飛な行動であった為に何を言ったら良いのかわからず。何を言っただけ残して、出て来てしまった。

回想を中断させるのは、彼の笑い声、にやはははは。

「俺は別に構わないっすよ？」

シスは彼の顔を見る。その瞳の色は、緑から……蒼を経、紫色へと変化する。

「……何、だと？」

「シスさんは、そのコをアスカに入れるおつもりなんですよ？ 魔天使さんじゃあ、この大陸セイラムじゃまともに生きていけないの……目に見えてますもんねー」

頷きつつも……心の内では。  
意外だった。

悟られた事に、ではない。彼は鋭いから……寧ろ、当然と言えば当然の事だ。

シスは。彼が反対すると思っていたのだ。自身の中に流れる血の存在を……酷く嫌悪する彼ならば仕方がないだろう、と。

「でも、他の人はどうっすかね？」

彼の本意は。

その黒には、映らない。

「シエラさんはもう会ってて、大丈夫。ミーウィさんもエルちゃんさんも、多分平気っすね。一番隊うちの女性陣は賢明っすから」

「ならばグレイダ……は、問題無いか……フウガはどうだ」

「フウガさんは、そのコが可愛いなら大丈夫っすね」

「かわ……」

それはどうなのだろう。

シスは腕を組んで目を瞑り。先程までその瞳に映っていた、彼の顔をまぶた瞼の裏に描き出す。

可愛い……のか？

と。そこでコアがその条件を補足する。

「リモたんさんくらい可愛ければ、万々歳っす」



リモ。

プリジモ「ノードレー」。

……通称、「眠り姫」。

「……それは、ないかも知れないな」

「にははは、ですよねー」

と。

彼が目を開き。その緑の中に、コアの笑顔を映しだした、その時。

生じた違和感に、シスは……はっとする。

「馬鹿な」

そんな。こんな事があるのか。

にゃ？ と。短く疑問符をつけた言葉。

コアが紡ぎ出した時には、彼は背を向け。急ぎ教会の扉に向い……。

そして、開け放つ。

その場に満ちる、光。

「どうしたんすか？」

コアが後を追い。光の中心……立ち尽くすシスの隣に立つ。  
その視界に在るのは、美しき教会。

壁の白。床の桃。並ぶ椅子の茶。見上げると広がるのは、色彩豊かな「旧・世界」の絵。

ただ、それだけ。

呆然と。シスは呟く。

「……消えた」

「はい？」

そう。

その中。黒は何処にもない。

黙して並ぶ、長椅子の。左列、前から数えて四番目。其処に横たわっている筈の、彼の姿が見当たらない。

あの時。戦場と化したシルドジーク……彼の「収集範囲」に突然現れた意識。

それが今度は。

何の前触れもなく。

「セツナが……消えた」

## おはよりの狭間に

暗い。

此処は、なんて暗いのだろう。

光の中に居た筈なのに……俺はいつの間にか闇に堕ちて。それっきり。

聞こえてくるのは雀の鳴き声。

そして。

「せ つ な」

……聞き慣れた、あの人の声。

野太くて、野太くて、只管ひたすらに野太くて……そのたくましき相貌が  
声帯にまで圧力を加え、滲みだしているというか……

「刹那いい加減に起きろ朝だぞこの野郎！」  
と。

「ふぎゃっ」

彼は微塵の容赦もなく、空色タオルケットをばっふと奪い去り。

それにしがみついていた俺はひっくり返ってうつ伏せに。

息が出来ない苦しさ能耐えかねた俺は。わなわたと震える腕を駆使してむっくりと起き上がり。無意識下で土下座ポーズを展開していた。

其処で漸く、開眼。

薄ら暗い俺の部屋。視界に入るのはシーツの白。俺は今、ベッドの上。

「おーお、おはよう刹那ちゃん」

「……朝から、この野郎ですか……」

「当たり前だこの野郎が、今何時だと思ってるんですかあ？」

「ああ、のところでもわざとらしく声を高める。語尾が「でちゅか」じゃないだけいいものの、来年四十になるおっさんが……気持ち悪い事この上ないぞ。」

「……今何時？」

「あ、今7時半回った」

……何！？

その体勢のまま顔だけ上げる、と。視線の先に在る、机の上のデジタル時計……示す時刻は仰る通り、午前7時30分。

「うわ本当だ！ いつの間にこんな時間に」

「おめえが寝てる間にだよ」

「ああそうですね、そうなんだろうけど、何で！？ 今日目覚まし時計鳴りました！？」

俺の目覚まし時計は携帯電話ではなく、只今視界の中央に収まっているデジタル時計。

ベッドから離れた位置に在る勉強机の上に、公害的な轟音をたてる目覚まし時計を置く事で、自分自身を有無を言わさず目覚めなくてはならない状況に追い込むというのが意図である。実際その作戦は成功を収め、実施開始の中二から、俺は無遅刻を誇ってきた。なのに。

今日はどうしたというんだ。

「おう鳴ってたよ、ばつちりしつかり鳴ってたよ。けどいつまでたっても起きて来る気配ねえから、お父さんが呼びに来て差し上げ」

「ああ有難う、けどはつきり言ってもう少し早く来て頂きたかったですー！」

ただぞ喜べ、を遮って俺は叫び、立ち膝でベッドの上を移動。紺色のカーテンを開ける。

見上げた先……広がるのは厚い雲に覆われた白い空。日の光が射さなかった事も原因の一つかも知れない。

「天気悪……ってそんな事どうでもいいっ」

「そうだ、早く仕度しろ」

「わかったオツケー、起こしに来てくれて有難うござ……」  
と。

そこで初めて、我が父、かたあかなあき風岡直樹の姿を目の当たりにする。

短く揃えた白髪交じりの黒髪。建設業に従事している為に鍛えられた強靱な身体、浅黒い肌。オールシーズン、Tシャツ短パン以外は部屋着として認めない。

そんな彼が、家庭内作業着として纏っている、今日のエプロンは白地に花柄、しかも裾のところにフリル付き。

「……父さん……それ……」

「あん？」

「……何でもない」

突っ込んでも疲れるだけだと悟った俺は。

5分でシャワーを浴びた後。2分で学ランに着替え、1分で歯を磨いて、30秒で教科書鞆に突っ込んで。

なんとか、定例出発時刻の7時45分。

朝食を食ってる暇はなかったので。そのまま出掛けようとドタドタと玄関に向かった時、ぬっと父さんが居間から顔を出す。

「刹那」

「あーい」

「弁当忘れんな」

「あ」

「あと、朝飯に御握り作ったから、持ってけ」

……握り飯、といって戴けはしませんか。

俺は鞆を背負ったまま回れ右。居間に飛び込んで……食卓の上に置かれた弁当と御握りを鞆へイン。

暗いから、朝から灯りをともした居間。

聞こえてくるのはテレビから流れるニュース番組。朝の顔、男性アナウンサーが読み上げるのニュースの内容は、最近話題になっていた某殺人事件の犯人が捕まったとか何とか。

その時思い出したのは。今日見た、あの夢の事。

それは。長い長い異世界の夢。

覚める事に成功した夢。

「……行つてきます」

覚めてしまった夢。

おう、と。朝食を取りつつ、新聞を読み始めた父さんの声。

「気をつけてな」

背中に受けて。

この空と同じ。俺はもやもやを抱えつつ出発する。

自転車に乗り、駆けるのは何の変哲もない日常。

俺が走るのは車道の端。その横を、当然のように走り抜けていく。ひとの手に操られた金属の塊。今日は殆ど陽が差し込んでこないから、光沢はないけど。

只今、通勤及び通学時刻真っ盛り。スーツを纏った人々を次から次へと追い越す中で、ほんの一瞬耳に流れ込むのは、俺と同じ高校のセーラー服を身に着けた女子生徒の話声。過ぎていく町並みは、賑わいを得る前の黙した商店。シャッターを押し上げる店主の姿が目に入った。

濁った空気を裂いて進む俺の髪を撫で、滑り抜けていく風。この雲の上に、確かに存在する春の青空。

何もかも。いつも通り。

いつも通りの筈。

けれども思う。

この世界は、こんなにも色褪せて見えただろうか。

いや、おかしいのは視界だけじゃない。

俺の五感が内側へ伝える世界の間。その全てが昨日までとは…

…明らかに、何処か違うんだ。

そう感じるのは。俺の眼が、耳が、鼻が、皮膚が。ただ単に、支障をきたした為だろうか。

「……大沢見てるところつちまで逆上のほせてきそつだよ」と。

一番窓際の列、前から数えて三番目。遙々俺の机の傍までやってきて、窓に凭もたれかかった大沢勇代おおさわゆうだいは。

狐の如き細長い目。視線を流してにやり。

「何？ 俺ってそんなに罪な奴？」

「はい？」

「見るだけで逆上せちゃうほど素敵って意味だろ？」

「いや、別にそう言う訳じゃ……」

違う違うと軽く手を振る俺を無視し。わざとらしく天井を仰ぎ、俺の額を指差して。

「つまりお前はクレイジーフォーミー」

英語の発音が素晴らしすぎる、A.L.Tの米国人ジョン並みだ。

「何だよ、そんなところで高偏差値ぶりを発揮しなくてもいいだろー？」

「え？ いや、こんな誰でもわかる初歩的英文……」

まさしく全身全霊、心の底から驚いてますという顔をするのはやめる。

「うっ……どうせ馬鹿だよ、常に一番のお前とは違って、俺の下には四捨五入して二十人くらいしかないよー！」

一年の頃の定期テストで散々実証済みだ。ちなみに、捨てたのか入れたのかは内緒。

嘆きモードに突入した俺の肩を、天才様が笑ってぽんぽんと軽く叩く。この衝撃で彼の持つ知識が1gでも俺の中に入ってきやしないだろうか。

「大丈夫だよ刹那君。顔を上げたまえ、君の目の前には輝かしき剣士道が、果てしなく伸びているじゃあないか」

「剣道じゃ食ってけないじゃんかよー」

「じゃあ俺が食わしてってやる」

「……は？」



「だからお前はずっと剣道をやってなさい」  
嬉しいような悲しいようないや寧ろ心苦しいような、複雑な心境になる。

「……なんか、プロポーズ、みたいだね」

大沢勇代と出会ったのは高校入学式の日。いや、正確に言えば違ったのだが。

式中で、新入生代表として挨拶。あー頭いいんだな違う世界の人間なんだなーなんて、その御姿を見ながらぼーっと考えていたその時は。放課後彼から直々に呼び出しをくらうとは……思ってもみなかった訳でして。

「風岡刹那だよな？」

同じ中学校出身ではない、等。同じクラスではない、等。

なのに彼は俺の名前を知っていて。俺はというと当然、堂々たる挨拶を繰り広げた彼の名前を、

「ええと……大沢幸宏、だよな？」

「違う大沢勇代」

……覚えていなかった。

「……ごめん」

「いいよ別に、てか名字覚えてくれただけで十分だし」

肩を落とす俺の背を、軽くぽんぽん。笑うと細い眼がさらに細くなり、線と化す。その姿に深い御慈悲を感じたワタクシメは、思わず。

「そんな神様仏様のような事を……」

すると。

「神はあんただろ？」

……ゴツトイズミー？

「え……ええええええええ……」

「そんな震える事ねえじゃん。はつきり言ってあんたマジ凄いよ、天才。俺、二年前から風岡のファンなんだよね」

ア行四番目の音が絶え間なく溢れ出して留まるところを知らない。

ファン？ 俺の？ 何故？ 二年前？ 俺、二年前に何かしたっけ？

思い当たる節と言えば文化祭……いや、当時の事を思い出すのはなるべく避けたい。あの時の羞恥心は、永遠に闇の中に封じ込めておきたい。

と。

一人記憶の中を模索する俺に。大沢は、やっぱり覚えてないか、と。綺麗な顔で笑って助け船を出す。

「剣道部だったろ？」

「あ、うん」

「二年の時、全国行ったろ？」

「うんうん」

「全国大会、優勝したよな？」

「……うん」

「俺は地方予選準決勝で、お前に当たって負けた大沢勇代」

あ。

あんたとやれて良かったよ。

地方大会終了後。握手を求められた俺は。

あー、大沢さん？

あはは有難う御座いました、此方こそ楽しかったです、また試合やりましょう。

「ちなみに……三年でまた戦えるとか楽しみにしてたのに、事故って足骨折してはい残念でしたー、の可哀想な子。そんな時のダメージからはもう回復したから大丈夫ですけどねー」

「あー！？」

「思い出した？」

「おおおおお思い出した、あの時の大沢さん！？よく見ると面影が、つてか髪伸びたんだね！」

「そりゃ伸びるし」

「あーそっか、そっかそっか、そうだよね」

途中から意味のない頷きを繰り返す俺を、まじまじと見つめ。彼は不意に、こう言った。

「風岡って試合の時と全然違うよな」

「え」

「目つきが違う。なんつーか、試合になるともっところ……冷たい眼になる。獅子の眼、っつーか」

風岡先輩怖いです。試合中の風岡先輩、先輩じゃないみたいです。

中学時代。後輩の女子に、そう言われた記憶があるのを思い出す。

「でも、こっちも嫌いじゃない」

「へ？」

嫌いじゃない、イコール好き。

俺は戸惑ってしまう。そんな事言われても、何を返したらいいのかわからなくて。

「あ……有難う……」

苦笑してそう返すと、照れんなよと彼は肩をぼんぼん。後に分かったが、これは彼の癖だ。何時もは加減が効いているが、大笑いした時は枷が外れて思いつき叩いてくる。そういう時俺は共に笑いつつ、その痛さにこっそりと驚く。

「剣道部入るんだろ？」

「まあ、そう思ってるけど」

「思ってる？ それ駄目、絶対入れ。そうだな、明日健診だから……明後日から見学行けたよな？」

「あー、そうだね」

「じゃあ行くぞ、即行」

勢いにのまれてしまって、頷いた俺。

すると大沢勇代は、よし、と。満足げに微笑んで。

「じゃあ、今日から俺達、友達以上恋人未満な関係で」

周囲の人が、数人無言で振り返る。

「……いや、と、友達以上友達以下で」

つまり友達。

……友達以上恋人未満って、何だ。

そして。

時は流れて、俺達は高校二年生。同じ剣道部に在籍する俺と大沢さんは、偶然同じクラスになりましたとき。

現在は五月某日、連休明けて二日目。ホームルーム終了後の憩いの一時である。

「それにしてもさ、大沢さんが遅刻ギリギリなんて珍しいよね」

激チャ、つまり激チャリ、即ち自転車大爆走で来たという大沢勇代は、額の汗を掌で拭う。

「あー、昨日の夜うつかり携帯マナーモードにしてて……目覚まし鳴んなくて寝坊しちまってさ、起きたら8時」

「寝坊ねー……」

そういえば、今朝は俺も寝坊した。ただ、事情は違う。目覚ましは鳴ったけど、それに気付かなかった。

気付けないほどに……耳があれだけの轟音をシャットアウトするほどに。俺は昨日、そんなに疲れていただろうか。

部活の所為？ いや、恐らくそれはない。しかし帰ってから勉強をして、頭を酷使した訳でもない。

なら、何故。

と、思索の最中。視界の中、ぼやけた大沢が頭を搔いて。

「最悪つつーか……変な夢は見るし」

夢。

いつの間にか。俺は机を叩き、立ち上がって。

「どんなー!？」

途端に、静まりかえる教室。じんじんと痺れる俺の掌。

これはまずい、と。とりあえずフォローしようとした結果。

「……う、川……」  
すると。

「ドナウ川？ 残念、流域面積ナンバーワンはアマゾン川、ノット  
ヨーロッパ、バット南アメリカ」

後ほど俺は。大沢に感謝の証、購買のプリンを贈呈した。

## おはよりの狭間に 2

一閃。

相手の面を打つ衝撃。竹刀を伝って、この腕へ流れて。心臓まで、じんと伝わる。

相手はよろめき、二、三步後退。尻餅を付き。広がるざわめき、感嘆の声。

嗚呼。俺はこの一瞬の為に生きている。

そう言っても過言ではないと思う。剣道をしている時の自分は、俺の何の変哲もない日常生活の中で、一番誇らしい存在。

しかし。

俺は勝利に酔い痴れているのかも知れない。俺は敵対する者を下し、地に伏せる事に喜びを。自分の刃によって倒れた者に対して…優越感を、抱いて。

そうだろ？ ……と。

時折そんな声が頭を駆け巡る。そういう時、俺は日常生活の中で一番…自分の事を嫌いになる。

礼の後。

立て続けに試合をしていたから、流石に疲れたし暑いし、で。剣道場の面を取り、頭に巻いていた手拭いも取って、頭を振り。汗に濡れる髪の毛の間に風を流し込む。

剣道場の隅…かためて置いてあるボトルの集合体から、自分の水筒を手に取り。水分補給をしていると。

「風岡格好良いー」

黄色い声もどきの裏声に振り返ると。剣道着姿も決まっている大沢が、口の横に垂直に手を当てて。

「けどちつとは手加減しろー本気出すなー」

可哀想だろ、なんて。言われた俺はただ苦笑する。

「そっちのが失礼じゃんか」

そう言えば。最近俺は、負けていない。

……最後に負けたのはいつだったっけ。

そう思っつて。俺はまた、自分の事を嫌いになる。

「あの、風岡先輩」

駆け寄ってきたのは後輩の少年。既に面を装着し。立ち止って、深々と頭を下げる。

「良ければ次、俺と……お願いします！」

「あー、いいよー」

頭に手拭いを巻きなおし。面を装着、その途端に。

世界が変わる。

俺を取り巻く、全ての存在が。

放課後の駐輪場。宵の闇に包まれる中。

其処では俺達の他にも、数人が自分の自転車を探し、見つけ出しては帰路に着く。帰らずに溜まって話に花を咲かせている女子軍団も居た。

彼女達の一員が放った、何を指すとも知れないヤバくない、が聞

こえてきたところで。……それに乗じたのかは不明だが。

「刹那ちゃん今日怖くない？」

天才大沢様にそう仰られ、俺はぼっかーんとしてしまった。相当間抜けな顔になっていたに違いない。

「……嘘」

「嘘じゃない。いつもと目つきが違う」

目つき？

「そ、そうかな」

と。目のマツサージを始める俺に、大沢はビシッと人差し指を向けた。

「そう、やけに強張ってるというか。何かあった訳？ 朝だって変だったしよ……あ、勿論プリンは美味かったよ、御馳走さん」

「お気に召してくれて何よりです將軍……」

「閣下と呼びたまえ、閣下と」

「オツケーオツケー、では閣下、御機嫌ようー」

「おい」

群れの中から抜き出した自転車。跨った俺の肩を閣下ががっしと掴む。

「……何で御座いましょう」

「刹那くんだけに俺が昨日見た夢の内容を教えてやろう、喜びたまえ、跳ねまわりたまえ」  
と。

俺が喜び跳ねまわる事は愚か、振り返る事すらしないうちに。彼が話し出したその夢の内容は。

深い闇の中。スポットライトに照らされた彼が、延々と螺旋階段を上り続けるというもの。下からは、謎の言葉を延々と繰り返している、スーツ姿の小父さんが追いかけて来る。

……怖い夢だ。しかし謎の言葉で良かった、般若心経とかだったらどうリアクションしようかと思った。



「そうなんだ……」

「で？ 風岡は？」

「……え？ 何が？」

いつもの調子を崩さないように気をつけつつ。心の中では頭を下げる。

ごめん大沢。俺のはそんな短時間じゃ話せないんだ。というか、話した瞬間に距離を置きたくなるような内容なんだ。

というのは、嘘。

彼が夢の中身を聞きたがっているのではないというのは、解ってる。

昨日の帰りに別れてから、今日学校に来るまで。その間に、俺に何があったのか。……俺の様子がおかしい理由。訊きたいのはそれでも。それが何なのか自分でもよく解らないから。自分自身が理解出来ない事について説明する？ そんなの出来る訳がないじゃんか。

だから、黙っていた。

「……ははーんふーん成程そういう事か、人には言えないような事があった訳」

やけに冷たい声だったから。其処で漸く振り返る。驚くほどに冷たく感じる、彼の真顔があった。

「いや大沢、俺、別に」

「別に親友だろとか言つつもりはねえけど」と。

不意に彼は自分の携帯番号を、節をつけて歌い出す。そして、閣下がとうとう御乱心をと、おろおろしていた俺に向かって。

「困った時は此処に電話」

何だこの似非青春ドラマは。そう思いつつ。

……嗚呼、最近涙腺が緩んでいる気がする。

「……おおさわ」

「風岡」

その後。

男同士むさ苦しくも感動の熱い抱擁、は、勿論無しだ。

「有難う大沢……その気になったら電話する」

そう言つて。

俺は彼を残し、自転車をこぎ出す。

俺の上空、雲は晴れ。高く伸びる藍は美しく。春の夜風が心地良  
い。

しかし。

この世界の空気は確かに淀み。藍に射すのは月明かりだけ。

俺は心の何処かで。この世界を憂えている。

それは何故？

と。

頭の中で。求めていた答えを囁くのは。

此処は。

俺の世界じゃ、ないんだよ。

おそらく自分。

人気がない道に入った、ので。

……加速。

加速加速加速加速加速加速加速。

だって、腹が立つ。有り得ない。俺がそんな事思う筈が無い。

此処は俺の世界だ。紛れもなく、俺の世界。此処しかないんだ。

此処が大事な大事な、俺達の世界だ。

すると。

笑って。

そうかも。

でも、間違ってる。大事だけど、ね。

此処は俺の世界じゃないよ。

「……俺の世界だよ」

小さく紡いだ言葉は、俺が起こした風に乗って流れていく。

嘘だ。

本当は気づいている筈。

行きたくて仕方がない。会いたくて仕方がないんだ。

そういう時は素直になった方がいいよ。そうすれば、きっと会えるから。

「誰に」

そうすれば、きっと知る事が出来るから。

教えてあげられるから。

「何を」

俺の事を。

……黙れよ。

心の奥底。俺は黒い地面に向かってそう吐き捨て。扱ぐのを止めて……速度を徐々に落としていく。疲れてしまったからではなく、目的地が近かったから。

其処は見慣れた住宅街。俺の家は、あの大きなベージュ色の壁をした家の陰に在る。まだ見えないけれど……父さんが待っている俺の家が、あそこにある。

静けさに包まれる中、ブレーキをかけ。キキーツという音だけが夜天に響く。

自転車から降りた後、空を仰ぐと。  
その空に、星はない。

外灯の柔らかな明かりの下。取っ手に手をかけ引いてみると、やはり鍵は開いていて。音をたてて開く扉のその先は玄関で、明るい。俺は無言のまま中へ入り。内側から軽く取っ手を引くだけで戸は

自然に閉まってくれるから、同時進行でスニーカーを脱いで。フロ  
ーリングの床の上上がった時に漸く、背後で戸の閉まるガチャの  
音。

父さんの料理の匂いが漂っている。今日の夕飯は、多分っていう  
か絶対カレー！。

「お帰り」

居間に入る。キッチンで鍋の中身を混ぜていた、エプロン姿の父  
さんが。振り返りはせず、俺に声だけを投げかける。

「……ただいま」

部屋の壁掛け時計を見やると、只今の時刻は午後7時半。

「飯食え」

「……うん」

「何だよ元気ねえな、どうした………か？」

「……ん？」

父さんの方へ視線を返すと。白い小皿に掬って味を見る、それは  
茶色い液体、カレー。ああ、ビンゴ。

「何？」

「ああ？」

「何か言ったよね？」

「どうしたって言ったんだよ」

「あー違う、その後」

あれ。こんなやり取り。確か前にも、誰かと。

それがいつだったかと思いつくとして、父さんはま  
た。

「……か？」

小さすぎて聞き取れない。

「え？」

「恋か！？」

「えー……」

正直、呆れた。俺が女子と上手く話せないのは、間違いなく父さ

んからの遺伝だと思っ。

言った本人が照れてどうすんだよ……。

「残念でしたー、違っよ。じゃあ俺、ぱぱっどシャワー入っってくるから」

ふん勝手に何処へでも行きやがれ、と。捨て台詞を吐く約四十歳。一頻りの苦笑の後、俺は着替えを取りに自分の部屋へと向かう。

濡れた頭の俺が、上は白いTシャツ、下には灰色のスウェットを纏い、居間に戻ると。

……何で？

エプロンはソファの上。それを脱ぎ捨てた父さんは……テレビに向かって一直線、である父さんの定位置ではなく。

なんと俺の席の向かいに座っていらっしやる。あるうことがテレビの電源は切っであり。既に食卓上に用意されたカレーの匂いと、深閑と静まった重苦しい空気が部屋中を埋め尽くして……。

「さっさと座れ」

俺の座る位置、つまり食卓を挟んで真正面を顎で指す。胡坐を掻いて座るその姿は、良く言えば威厳溢れる佇まい、悪く言えば極道の方。

おすおすと自分の位置に正座し。俯き加減に父の顔を窺っ。

「あの……」

「ああ？」

「……どうしたの……イメチェン……？」

言っってみて気づいた。それは意味が違っ。

「何がいめちえんだってんだよ」

そして父さんが言っど中国人の名前を呼んでるみたいだに聞こえる。

「じゃなくて、何で其処に座ってるのでしょうかという事を訊きたかったんですけど……あと、何でテレビを消していらっしやるのかという事も……画面上に何か気分を害するようなものでも映りなさったんでしょうかね……」

「いいじゃねえかよ、別に」

いや。それで済まされても此方が困る。

暫しの間、色で言うところの灰色の沈黙。やがて……食わねえのかという父の発した号令で、風岡家の食事はスタートした。

しかし……なんと味の無い食事だ。

いや、父さんは顔に似合わず器用なので、家事全般は卒なくこなす。だから料理も上手で、当然このカレーも美味しい、筈のだが。不幸な事に、この食卓にはその旨みと足して零ゼロになる恐怖の空気が流れていた。

この劣悪な食事環境を何とかしたい。  
そこで。

「父さん」

「あん？」

「……………何でもない」

しかし。これといった話題がなかった。

「……………ああ」

話題を振ってもくれなかった。

なあ父さん会話皆無だしテレビでも点けてみようよ音があったら大分雰囲気変わるよー。……そんな事も言えないまま、果たしてテレビを消した事に何の意味があるのだろうかという疑問だけが募っていく。

空気汚染の問題が解決されないうまま、先に食事を終了した父親。食器を下げる事もせず俺の姿をじーっと見つめているのを感じ……

必死に気付かない振りをしていた俺は、とうとう顔を上げてしまっ  
た。

目があった、その時。漸くせうせう父さんが口を開く。

「なあ、刹那」

……来た。

「お前に訊きたい事がある」

俺がスプーンを置こうとすると、それを制して食いながら聞け、  
と。

「……何？」

必然的に鼓動が高鳴る。カレーを掬うスプーンを操る手も震える  
震える。

……と。

父さんは。深く息を吐いた後。

「正直父さんはな、刹那。こういうの、どうやって訊いたらいいの  
かよくわからん。だから率直に訊かせてもらう」

勿体ぶつてないで早く言って欲しい。心臓に悪いよ。  
と。俺が声に出そうとした、時。

「父さんの事、好きか？」

……身体中の、全機能が、一瞬、停止、する。

「なっ……何！？ うああああ何それっ、何、何何何何ナニッ!？」

俺は思わずスプーンを置いて自分の身体を抱きしめる。背筋で寒  
気の徒競争開始だ。

「いや、ちと気になってよ」

「気になったって……っ、父さん動機が適当過ぎるよ!」

「仕方ねえじゃん。俺はいつだって真っ直ぐに生きてきた、今だっ



て真っ直ぐ進んでる。誰から何を言われようと、訊きてえことは容赦なく、その日のうちに訊いちまうのが俺なんだよ」  
「いやいや、大真面目な顔で貴方の人生を語られても……。」

……本当に、困った。

ええと、何でしたっけ。

父さんの事？ 俺が好き？ 父さんを？ もしも俺、好きですか？

何処までもマッチョな父さん。ボディビルダーですかと尋ねられる父さん。スーツを身に纏えば極道の方ですかとも問われる父さん。

家事が得意な器用な父さん。母さんのエプロンが似合わない父さん。幼心に似合わないよと言ってしまったばかりに、あー似合う似合うと言ってやっても次から次へと新しいのを買ってくる父さん。仕舞には俺の分まで買って来てしまった父さん。

俺を。誰が何と言おうと、ひとりで育ててやると。守ってやると。幼かった俺をきつく抱き締めて、涙と鼻水を垂らしながら、そう言ってくれた父さん。

俺は僅かに残っていた食事をかき込み、氷の融けた、頭にキーンとくるほどに冷たい水を飲み干す。辛かったからではない。父さんのカレーは何故かいつも甘口だ。

「ごちそうさん！」

「おい、刹那……」

問答無用だ。俺は立ち上がり、空になった皿を持って台所へ。それは水につけておき。

居間から飛び出してしまおうと。思ったけど。今先延ばしにしても、明日また同じ事を訊かれるだけだろうし……父さんの事だから、

返答するまで同じ事延々と訊いてくるんだろうし。そうだったら、ノイローゼになるのも時間の問題だ。

という訳で俺は。ドアノブを掴んだまま振り返り。父さんに向かって、正直に。

こつ。答えを叫んでみる。

「大好きだよ!!」

早足で部屋に戻った俺は、その勢いを保ったまま、灯りをつけずにベッドにダイブ。そして深く深く、羞恥の海へと沈みこんだ。身体が熱いの領域を通り越して冷たくなる。

どう考えても、あれは。高校二年の健全なる男子が、男親に面と向かって言う事じゃないだろ。

……母さんでも、そうだろうけど。

やがて。

いつまでもこつしても仕方がないと悟った俺は。

むつくりと起き上がって、洗面所に行って顔を洗って、歯を磨いて。

暗い部屋。紺のカーテンを引いて、鏡と化した黒を覆い。9時前だというのに就寝する。

大沢に電話する事も。父さんと言葉を交わす事もなく。

そつ。おやすみも言わず。

……行ってきます、も。

二日目…姫は眠る

闇の中。

俺はひとり。あの人の残した風を手繰って。

やがて辿り着くのは。

「さようなら」

あの日の記憶。あの日の感情。

さようなら？

あの日。俺はあの人の言葉を繰り返し、微笑んで見せた筈。

違う。

俺も一緒だよ。

ずっとずっと、傍に居るから。

するとあの人は。ありがとうと、音に為らない声で囁いて。

「私」

闇の中で響くのは。あの人の、声。

闇の中、たった一つ輝くのは。あの人の頬を伝って……地に堕ちる哀しみ。

「本当に……貴方の事……」

目覚めると。

俺は当然ベッドの上。視界を覆うのは天井の白。

何処からか涼風が流れ込んで来ているのに気づく。重い腕を持ち上げて、手の甲で目を擦り。そして左へと視線を流すと。

煽あおられてはためくのは、白いカーテン。そして柔らかに差し込む陽射し。

運転開始から完全起動まで、それなりの時間がかかる俺の思考回路。その為頭の中は霧がかかって、ぼんやり、ぼんやり。そんな中で、揺れる白をぼんやりと見つめ……

て。

白。

白、のカーテン。白いカーテン。白く輝い……ている訳ではないけれど、カーテン。

カーテン、白。  
白、カーテン、カーテン、白……

俺の部屋のカーテンは紺だった筈ですけど。

温もりと接している部分、従ってかなりの広範囲から、全身の血が流れ出す感覚。それによって俺は覚醒した。

しかし身体は動かさず。従って目だけが見開かれ、傍からは金縛りはたにあっているかのように見えるかも。しかし、金縛りの方がマシだと思う。

そう、あのはためきの背後に一瞬女性が見えまして、の方が。いや、靈感皆無な俺は生まれてこの方そんなもの見えた覚えは無いけど、小六の修学旅行の肝試し大会でペアになった女子が木の影を指さして悲鳴上げた時も中二の秋友達と町中歩いて俺一人が怪し過ぎる男性占い師に呼びとめられて貴方には巨大な黒い影が憑いているよヤバイよーなんて言われた時も、本当に全く何の気配も感じなかったけど……

ちよつと待て、落ち着くんだ俺。そう、深呼吸。冷静になれ、穏やかな心で考えろ、そうすればきっと真実が見えてくる、見えてくる。

この部屋で何が起こった？ ずばり、カーテンが変色した理由は何？

父さんが、寝ているうちに、付け替えた。

なんと五七五。

もう一度、ゆっくり、詠んでみた。

……おおーいいぞ十分にあり得るぞそれっぽいぞよし決定。

と、安堵の中で。

父さんがこっそり付け替えた説が採択されたカーテンを、とりあえず視界から除外しようと。俺は右向け右、百八十度方向転換をした、

のだが。

危うく。叫びそうになりました。

「……………」

何故なら、隣に人。俺と同じタオルケットに包まり、しかし俺に背を向け、恐らくは爆睡中。

人が、隣。隣で爆睡。人が爆睡、爆睡で隣、爆睡が人……

いつ、いや！

驚くほどのことではない。これはきつと、父さんだ。イメージチエンジを図り、その思惑通りなんと一晩のうちに見事な変身を遂げた父さんだ。

そうすると、此処に居る理由は。

……想像すると大変気色悪い、というか身の毛が弥立つ話だが。寂しくなった父さんが。

刹那今日一緒に寝るか。あん？ やだ？ そんなこと知るかよ、最近刹那が構ってくれなくて寂しいんだよ。……台詞の後半は実話である。

もしかすると夕飯後の俺のあの発言が原因か？ あれに感極まって思い切ってしまったのか？

嫌だ、余りに嫌過ぎる。  
が。

頼む、そうであってくれ。

なんだ、何の事はない。タオルケットの色も、あついでに床と壁の色も白に変わってる、その上家具の配置まで変わってるし無くなったものもあるみたいだけど、全然大した事はない。

この人が父さんである事で、万事解決。オーライオーライ。

そう、この淡く輝く艶やかな金髪。

父さん。

この細っこい肩。

……父さん。

「……………ん、ん」

漏らすのは何とも官能的な……

父さん　　ん!!

頭の中でスパーク炸裂、視界が赤やら黄色やらで埋め尽くされ。

色彩の賑やかさに頭痛をも煩<sup>わづ</sup>う俺は、白い天を仰ぎ嘆く。

嗚呼どうしよう父さん俺貴方の事を信じられなくなってきたよ親不孝な息子をどうか許してくださいアーメン俺は多分仏教徒だけど

……と。

俺が必死に父の面影、視界の端に柵引く花柄を想う中。

俺と寝台を絶賛共有中のその人物が、寝返りを打つ。思わず反応して、其方へ視線を流してしまった俺は。

その姿に、ざっと一分間は見入っていた。

恐らく。少女ではなく、少年、だ。

しかし。

綺麗、過ぎる。

小さな顔。透き通るように白い綺麗な肌。すっと伸びる整った眉、長い睫毛は当然金色。目鼻立ちの整い方も尋常ではない。

パーツも配置も、全てが完璧。ただ一つ文句をつけるなら、国籍不明であなた誰、な点だけだ。

天使様、とか。そんな言葉で済ませられる御容貌ではない。それはまるで……ゲームの世界。CGを見ているよう。

現代人類の発達した技術が可能にしたCG。それによって、理想を限りなく追及し、創り出された至高の作品。

しかし。

彼は俺の目の前で、静かに寝息をたてている。そう、紛れもなく彼は生きていて。

俺と同じ世界に存在している。

世界？

その言葉。

足を引つ掛けられ躓いた俺は。上体を起こし、自分の身体に掛かっていた毛布を、彼の方へ押しやって。白の中、色付いたスウェットの灰色を眺めつつ。

昨日の夢。登場人物その三が、死刑宣告宜しく仰られた、ある事



実を思い出す。

お前は「異世界人」だ。

異世界。

馬鹿な。

俺は夢から覚めたんだ。

そう、あれは夢だった。

夢じゃないと言われたけど夢。痛みは感じたけど夢。100%、絶対、絶対、夢。

いいか？ 考えてみる風岡刹那。

第一に、敵……凶器持参の怪物とのエンカウント。有り得ない。

第二に、中世ヨーロッパ風の町兼戦場、という世界設定。行った事が無い。後者はお断りだが、前者だったらむしろ行きたい、特にイタリア希望。

第三に、夏という時期設定。

季節外れ、今は五月で春。陰暦だったら夏だけど。

第四に、登場した、多分味方。

茶髪少女ならまだしも、背中に羽、の美少年。括弧銀髪、瞳の色変わる、魔法使用可。

出逢いたければ映画館に行ってください。

極めつけは。

ああ、声を大にして言っただけ、異世界なんて存在する訳がありません。

そつだ。何処をどうすればそのような事共が現実のものとなるだろつ、いや、ならない。

だから夢。

あの人々の死も。帰魂も。アルテスタ

あの時の悲しみも。

全て夢。

才下ガリ下サイ。我等ガ救世主様。

だってあなたは化け物で。

お前は魔天使だ。

全部夢。

「夢、だろ………？」  
なら。

今。現在進行形で目の前にある光景も、夢、か？

暫しの空白。悩んで、そして迷った後。  
結局。

「……もしもし」

俺は。

「どうか御目を御覚ましくくださいませ……」

目の前で気持ち良さそうに眠っていらっしやる麗しき人。大変申し訳ないが、起きて戴く事にする。

だって彼ならば解る筈。此処は何処君は誰俺は何？ 俺が知りた  
い事、少なくとも、いくつかは。

「もしもし」

しかし綺麗だ。同じ男である俺が見惚れるほどに美しい。此処まで完璧だとかえって現実味が失われる。幻なのかも知れないとすら  
思える。

いや、ひょっとしてそうなのか？ と。

心の中でごめんなさいを反復詠唱しながら、恐る恐る近づき……  
その肩目掛けて。

そっと、手を伸ばして。

やがて接触した指先に。伝わる、彼の熱。

温かい。

何故だろう。その熱が伝わってきた所為か、俺の顔まで熱くなる。

……いや！ 疚しいだなんてそんな！ この胸の高鳴りには一寸  
もそのような感情は含まれておりません姫ッ！

と、少年だが俺の中で彼の綽名は「姫」確定。

そこで起こす事が第一目標だと思い出し。思い切って、彼の腕の  
付け根を捕まえて。

揺らしてみる。

ゆさゆさ、ゆらゆら。

と。

あ、瞼が動いたひぎゃあああああ……

原因は俺にあるにも関わらず。

小心者は心の中限定に響き渡る声で絶叫し、思わず彼から飛びずさる。それでも落ちないという事はこのベッド、相当横幅のあるものらしい。

治まらない鼓動の高鳴り。

「……ん……」

俺の中で響くその音の合間に。彼の声。

嗚呼。目覚める。

と、思いきや。

彼はころり。俺に背中を向けなさる。

「寝返りかあ……」

と。落胆して呟きつつも、ほっと胸を撫で下ろした。その時。

不意に。彼が。

むっくりと起き上がり。足を折って座る格好となる。

俺は化石……じゃない、石化。半ば茫然として、その姿を見つめる。

薄手の毛布が背からずり落ち。露わになるのは、青を纏った華奢

な体、柔らかな白まで垂れる金髪の尾。

俺に横顔を晒しているが、横髪が覆いとなって鮮明には見えない。彼は俯いて、徐に自身の首の後ろに手を回し。白い手の甲で金を掬って……その白と金の狭間に涼やかな空を流し込み。ふわりと落ちてきた金は、彼の背に当たって滑らかに波打つ。

そして。両手をだらりと垂らした彼は。

顔を上げ、視線を流し。

硬直している俺に、セツト。

まだぼんやりを映している瞳。長い長い金に縁取られたその色は、宵を思わせる藍色だった。

絶え間なく光を発し続ける彼は。自分の姿を凝視する俺を、見つめている。見られていると意識して見つめ返しているのではなく。

それは、空を漂う雲を見るように。

彼は、なんて眩しい。……なんて、美しい。と。

其処で俺ははっとする。思い出せ俺、見とれている場合じゃないぞ。麗しき眠り姫の平穏なる眠りを妨害した、その目的は何だ？

言いたい事があった筈だ。

それを声に出せばいいだけ。簡単だ。

ほら、さん、はい。

「……とても、可愛らしい、ですね」

は？

俺は今、何を言った!?

可愛いですね!?

違うだろ? 言うなら美人ですね、だろ!?

しかしどちらであろうと、今この状況においては、確実に余計な

事であるのには変わりな……

と。

不意に。

閉じていた、彼の唇が。

うっすらと開いて、紡ぎ出す。

「……戒<sup>キッ</sup>」

すると、彼の手元。

不可思議な事に。白の上に、ぽっかりと浮かび上がるのは黒い円。

その中から、現れ。

やっぱり、夢だ。

彼がすつと手を添え……掴み。引きずり出すのは。

絶対、夢だ。

彼の瞳と同じ藍色をした、長い、長い、棒。

仕舞にその姿を露わにした。その先端から伸びる、綺麗な三日月を描く銀の刃。

鎌。

そう認識したときには、もう。

「……………あ」

それ以上、声が出なかった。

それはまさに一瞬の出来事。

いつの間にか。彼は、ごく至近距離に居て。その綺麗な指で、がっしりと俺の前髪を掴んで。

俺の背後からまわした、その刃を。…………俺の首に宛がっていた。

後からついてきた痛みは、髪を引っ張られている事で生じるものだけ。つまり、喉を切り裂かれてはいない。銀と俺の皮膚が、接している訳でもない。

しかし、この刃は氷のよう。その冷気が絶対的な圧力となり。押し潰された俺は、敏感に感じ取る。

その銀が持つ、死の匂いを。

「敵の本拠地に一匹で入ってくるとは…………いい度胸してんじゃねえかよ」

頭为天辺を俺の顔に向け。囁きに似た、綺麗な声。

美しい顔を上げると。頬に掛かる髪の毛。はらう事もせず、彼は。彼の持つ大鎌の切っ先の如く鋭い視線。それを放つ、その瞳の中の闇を深め。

「…………この、変態野郎が」

……………誤解です。

## 続2日目…姫 覚醒す

今更だが。

俺の名前は刹那という。

命名者は父さん。

この名に込められた願いは、「人生を全力で吹き抜ける一陣の猛き風と為れ」。勿論それは父さんから聞いた話だ。流石とでも言うべきか、全く以て意味が解らない。とりあえず何処から風が来たか説明してほしい。

しかし。

自分でこんな事を言うのは何だがセツナという響きが格好良い…  
…いや、止めよう。

兎に角、好きだから。この名を付けられた事に対して文句を言った事はなかった。

でもさ、父さん。

刹那って一瞬っていう意味だろ？

それが崇ってか。

俺、十六歳という若さで、早くも。

死にそうです。

いいえ。

……………殺されそうです……………。

背中を、ひんやりと冷たい汗が。じれったいほどの時間を掛けて



伝い落ちていく。

蛇に睨まれた蛙宜しく。彼の瞬まはたきの瞬間、一瞬だけ楽になるのが解るほどだ。鋭い鋭い視線を放ち続ける眠り姫様に射竦められて、俺は指一本動かせない。

何せ凶器を突き付けられて、お前なんか気分次第で何時でもあの世行きだぜ状態に陥ってしまっているのだ。極度の緊張に口の中はカラカラ。それを緩和しようと、ごくりと唾を飲み込んで、そして改めて気付く。

喉。

まだちゃんとある。

安堵出来る筈の確認。それなのにかえってぞつととして……全身に霜が立つようだ。

このまま黙っていても仕方がない、殺されるだけだ。何とかしな  
いと、と。

「……の」

あの。

ちゃんと言った筈なのに、音にならない。その所為か、鎌少年は微動だにしない。

くそ、この意気地無し、声ぐらい出せよ、と。挑戦を繰り返し。

五回目でやっと言葉になる。

「あのっ」

空間に放り出されたのは掠れた自分の声。自分から出ているとは、とても思えない小さな声。

とはいえ話せる状態には持っていった。大丈夫だ、話せばわかる。この言葉を後世に残した人は、言った直後に殺されたけど。

……泣きたくなった。

いや泣くな！ 頑張れ俺！ 話せばわかる！

「お、はようございます」

はじめは爽やかな朝の挨拶から。声の震えの所為で変なところで区切れたが、まあ良し。

と。其処で初めて超絶美少年の表情に、若干だが変化が起きる。

ほんの少し眉を顰めたその表情……アテレコすると。

何言ってるんだこの変質者は。

……だから、違ってる。

「誤解です……誤解、なんです」

「……何が」

「俺、別にあなを襲うつつもりは無いんです、邪よこしまな感情なんて、ほんの一握も抱いていないんです……」

吹き替え、その二。

何阿呆な事言ってるんだこの変質者は。

「あーもう、だから違ってますっつてば……」

「……何がだよ」

「俺人畜無害なんです、確かに剣道やってる時は目つき悪いとか怖いとかよく言われますけど、でも人に殴りかかった事も故意に怪我させた事も友達が書いたラブレターがびよう読んだ事も上靴に画鋲入れた事も……」

「……がび？」

彼が食いついて来たのは、意外なところだった。

「あ、がび、じゃなく、画鋲です」

がびよ、と。またまた俺の発したそれとはちよつと違う言葉を小

声で紡いで。暫しの間、点、点、点。

やがて。少し和らぎかけた視線を、彼は再び研ぎ澄ませ。

「訳わかんねえ事言ってるじゃねえ……マジで刈るぞ、コラ」  
刈る。刈る？ 刈る……

首。

うわ怖っ……

けど。

ええい怖れるな怯えるな怯むな。

兎に角喋るんだ。そうだ。折角、気になる事を見つけたんだから。  
声に出してみればいい。

「……画鋏」

そうだ。

「知らないんですか？」

と。

一瞬。彼が視線を逸らしたのを、すぐ近くに居る俺が見逃す筈も  
なかった。

「画鋏を知らない？ あの画鋏を？ コルクボードとかに紙を貼っ  
ておくのに使うアレですよ？ 学校じゃ金色した金属製の主流だ  
けど、プラスチック製のも近年急増中のアレ……ほら、よく上靴履  
いて踏んじやって気付かなくて、画鋏刺さってるよってふとした時  
に第三者から指摘されてあーってなるアレ」

今度はあからさまに浮かぶ困惑の色。

「嘘だ、本当に？ 本当に本当に知らないんですか？ 針んとこ曲がっちゃって使い物になんなくなつたやつが、たまに教室掃除した時集められたゴミの中に混じってるアレを？ じゃあポスター貼つとく時はテープ？ 全部テープ？ でもあれ貼り直したら粘着力落ちるから不便なんじゃ……あ、ひよつとして最近のテープはそういうところにも気を使って」

と。  
途中から、目を閉じて、眉間に皺しわを寄せて。震えているなと思つたら。

とうとう、苛立ちがピークに達したらしい。

そう。火山、大・噴・火。

「だあああああああ！」

え。

「だ……！？」

余りに驚いて、恐らくいつもの三倍程目を大きくする俺の前。見事なる変貌を遂げた姫君はカツと目を見開いて。

「黙りやがれこの脳味噌スカラ野郎が！ ああそうかよ、黙れなんつー言葉はてめえの耳には届きませんつてか、黙るつー言葉はてめえの辞書には存在しませんつてか！？ ならてめえの此処に深々と刻み込まれるまで何度でも言つてやる、喜べこん畜生がッ」

此処とはつまり、俺の頭の事で。彼は俺の前髪をきつつく掴んで頭をぐらぐらブンブン。これでもかというほどに揺さぶりだす。

「あ、あうあうあうあうあう……痛ッ、髪が抜けっ、抜けるっ、禿げるー」

「うるせえ、黙って禿げる！」

「それっにつ、危ない、ですっ、あなたが持つて、いらっしやる刃が、危険ですっ、さっ刺さりますってば」

「黙ってる！ シロはてめえと違って馬鹿じゃねえから、切れつつたもん以外に傷つける事なんか絶対絶対しねえんだよタコ！」

シロ？

視界が揺れてるから解らないが、犬なんて何処にも居なかった気がしますよ姫。

暴走シエイクが止まり、揺れと過度な痛みは治まったものの。頭はくらくらするし、彼の力が加わっているあたりがじんじんする。

嗚呼、何本かは抜けたとみて間違いない。

狂乱後の彼は疲れ果てたのか肩で呼吸。視線を伏せて。

「……訳わかんねえ」

やがて。先程とは打って変わって……小さく小さく、呟く。

嵐が去って。

不思議と俺は今自分が驚くほどに心が穏やかで、冷静で。彼が大声を出してくれたお陰で、

緊張の糸が切れたのだと思う。

目の前に居る彼を、先程より近く感じるようになったからかも知れない。

ともあれこれはチャンスだ。目眩が治まるまで少しの間待ち。大きく息を吸い込んで。

その息を少しずつ、伝えたい言葉に変えていく。

「俺、本当に不審者じゃないですよ」

「嘘吐くんじゃねえ……っーか黙れ」

「俺、どうして自分が此処に居るのかとか、解らないし」

「黙ってる」

「此処が」

異世界？

「何処なのかも、解らない」

「黙れ」

「あなたが誰なのかも解らないし、自分が此処ではどういう存在なのかも解りません」

此処では、って。どういう意味だよと、俺は俺自身に問いかける。その間に。彼は眼を瞑り。

「……黙れつつつてんのが聞こえねえのか」

「でも、黙っていたら俺はあなたに何も知ってもらえない」

すると。

彼は俺を見た。

冷たい、冷たい眼で。

「何も、知ってもらえない……だと？」

俺の言葉を苦々しげに繰り返す。

「……てめえの事なら知ってる。十分過ぎるくらい、知ってるよ」

「え？ あの、確か俺達初対面だと思いますけど」

何せ彼は超絶美人、万人が二度見するほどの容姿だ。こんな人街で見かけたら絶対に忘れられないだろう。周囲が放っておかないだろうから、彼自身声を掛けられ過ぎて誰が誰かなんて覚えきれない

と思う。

だから。俺が知っている事はあっても、彼が俺の事を知っているとは、到底思えない。

そう言おうとしたら。

彼が先に口を開いていて。

「てめえ……魔天使、だろ」

綺麗な声で告げた、その単語が。

俺の身体を締め付ける。

だってそれは。今見ている現実が、あの夢の続きだと示す言葉。

「……だから？」

否定は出来なかった。

違うと怒鳴る事も。何という事だ、そう言って、さめざめと泣く事も出来ず。

ただ、俺は笑って。

「だから何？ マテンシだったらいけないの？」

自棄になったんだと思う。

俺は。子供みたいな事を言っていた。

それ以前に魔天使って何だよ。何を根拠に言ってるんだよ。

魔天使だから武器突き付けてるのか。魔天使だから黙ってる、なのか。

此方こそ言わせて、否。思わせて貰う。

訳わかんねえ。

「そもそも、マテンシって何？」

彼は応えない。俺は尋ねているのに。

相変わらず、凍えるような眼で俺を睨みつけたまま。

「ええと……前にもさ、言われたことあるんだ。化け物だマテンシだ、あーそれに救世主だ、って。俺どっからどう見てもごく普通の人間の筈なのにさ………どういう基準で俺の事そういう風に言ってたのかな。なあ、君はどうして俺の事そう呼ぶの？」

応えてくれよ。

「それにさ、その時俺すっごい怖がられてたっていうか………助けた筈の茶髪の女の子にさ、お前が助けてくれる訳がない、何で助けるんだーって言われちゃって。もしかしてマテンシって敵キャラだったりする？ 凶暴で凶悪で、勇者様が滅すべき怖い怖いモンスター的な役割の」

お願いだから。

「マテンシは君等に害を及ぼしたりする存在なの？ それが普通のの？」

俺の声を聞いてくれ。

今話してるのは魔天使じゃない………否。

魔天使かも知れない。

けどそれだけじゃない。

俺は、俺なんだから。



ふつと息を吐いて。俺が続けて、紡ぐのは。

「なら、俺は変なのかな」

彼は今度こそ視線を緩和させて。その瞳、宵の中に。流れ星を、  
一つ。

それは戸惑い。

とうとう自分でも言ってしまったけど。

変なんて、言われるのは本当に久し振りだったんだ。

変よ。

まずは少女。

目の前で命の危機に瀕している人を救う事の、何がそんなに変なのかと思った。

次に銀髪の美少年。

同じ美少年でも、目の前の姫君とは180度違う印象。身体は細くとも彼は逞しい。強靱なオーラを纏っている。毎日あの鉄の棒を振り回して、世にも恐ろしいかの骸骨ズと闘っていてもおかしくない、というか似合ってます。

そんな彼は変連発。何発喰らわせれば気が済むのでしょうかと思うほど。

そう。

変だ変人だお前は相当な変人だな。

お前は変だ。

一日のうちに。もういいやと思うくらい、浴びせ続けて。そして世界に帰る魂。それを目の前にして、みつともなく涙を流していた変な俺に。

お前は優しい。

彼はそう、言ってくれた。

「俺は君に害を及ぼそうとなんて思わない、って……言葉だけじゃどんなに繰り返したって信じられないかも知れないけどさ、でも俺にはこうする事しか出来ないから、やっぱり言うよ。俺は君を殺したいとなんか絶対思わないし、傷つけたいとも……本当に、一ミリも、思っていない」

思ってたら危険だよ、と。俺はひとりで言って、ひとりで笑った。

「傷つけない。だからお願いだ……信じて」

彼は俯き加減。長い睫毛を震わせている。

その姿は酷く儂げで。

「ていうか……君を傷付けたいと思う奴なんかいるのかな」

俺は彼を俺の黒に映して。  
思わず。

「君、信じられないくらい可愛いから」

あれ。

また可愛いって言っちゃったよ何でかな言うならやっぱり美人とかじゃん。

と、その時。

彼の顔が真っ赤に染まる……。

いや、俺は生きているけど。

「なっ……なななななななななななななななななななななななあ……」  
これは一体何事か。

彼は目を見開いて。俺の髪を掴むその手が戦慄わななく戦慄く。

「なっ、何!? 俺何か変な事言った!?」

と。彼は不意に俯いて。頭为天辺を俺に向けたと思えば。  
低く、低く。

「……殺ス」

「えええ!? いやっ、だから俺には君に危害を加えるつもりは……」

其処まで紡いで。俺は言葉を切ってしまう。

尋常ではない量の殺気が彼から放出されているのだ。殺気計測器というものが存在するとしたら、恐らくその針が飛んでいってしまう程の量。それもその筈、先程の殺すは普通の殺すではなかった。確か送り仮名のすがカタカナだった気がする。

彼は未だ小さく震えながら、遙か下、地の底……地獄に向かって呪文の如く。

「この変態が……変態だ変態だと思っただらやっぱり変態かよこのど変態が……てめえは頭にどがつくほどの変態だボケ……」

「変態……あの、俺としては変で済ませて欲しいのですが……」

金の間から覗く、ギロリ。

「ひっ」

小心者は思わず情けない声を漏らしてしまう。

やばい。本気で、殺るつもりです、この御方。

嗚呼父さん今まで大変お世話になりました、俺は母さんの所へ行

きます、この親不孝者をどうかお許しください、貴方が俺に買ってください。くださったピンクドット柄のエプロンなら、俺の部屋の筆筒、一番下の段の一番奥に封印してあります、一度として着てはおりませんが、どうか形見として貴方が着てやって下さい……と。

俺が脳内で。遙か遠くにいらっしやるのである。父上に、即席の遺書を読み始めたその時だった。

バン、と。

俺の後方で。

扉が。豪快に開け放たれ、白い空間に響く音。

はっとした彼が、赤い顔のまま其方を見やり。

「……シーちゃん」

と。呟くのが聞こえた。

シーちゃん？

あれ。その名、何処かで。

少しの沈黙の間、俺が思い出そうと脳を回転させているうちに。現れた人物。現段階では顔を見る事は不可能であるその人が。

唐突に。

「っ……はははははははははははは！」

何とも豪快に。声を上げて、笑いだす。

はい？

## 続々式日目…はじまりは帰還と共に

折角。

何とか、最悪の事態は回避出来そうになっていたのに。

その状況は俺の、起爆装置に向かってジャンプ、によって急変した。

いや、それはわざとじゃない、わざとじゃないんだ、決して。彼を怒らせたと思わせる例の発言は、無意識の内にこの口からスルスルと滑り出してしまったのであって。つまりあれは事故、イエス、アクシデント。

と。  
そんな弁明すらも最早出来ない。そうさせているのが眠り姫様の殺気である……。

先程。彼の宵色の瞳の中に宿っていたのは、青く冷たい炎だった。しかしそれは今。煌々と、赤々と、轟々と音を上げて燃え上がるものへと変わり。周囲へと燃え移ったその炎は、此処に溢れる白を焼き尽くす。開け放たれた窓から流れ込む涼風にも冷まされる事はなく。寧ろ煽<sup>あお</sup>ってより激しく躍らせるだけ。

どっしよっ。

どうすればいいのだろう。

再び動けなくなった俺は思う。

この状況下。殺ス、と断言された以上。俺はその宣告を、黙って受け入れるしかないのでしょうか。

いやそんな不条理な！ だって俺には基本的人権が、公平な裁判を受ける権利が、控訴及び上告の権利が、というかその前に言論の自由がー！

と。  
そんなところに飛び込んできたその人物、姫曰く「シーちゃん」。  
彼はこの緊迫した状況を見て。

……俺の体内時計が正常であるかどうかは、鼓動が異常なほどに  
高鳴っている時点で怪しいところですが。

乱入者が、まさに一世一代の、史上最大級の、大笑いを開始して  
から。

もうかれこれ180秒、即ち3分が経過しようとしています……。

どうやら奇妙に思ったのは俺だけではなかったらしく。

「……何、笑ってたんだ」

漸く突っ込んでくれたのは、俺に刃を突き立てる麗しの姫君。

目を細くして、訝しげに彼の方を見詰める。こっぴどい顔も可愛  
らし、否。美しく見えるから凄い。

「それに……随分と遅かったじゃねえかよ、あ？」

そんな綺麗な顔して、綺麗な声で、あ？なんて仰ってしまうので  
すよね姫、と、傍はたから見てしみじみと思う。嗚呼、何故ヤンキー口  
調なのですか、一体何処で覚えたのですか。

というか遅いってどういう事ですか、説明を要求する。否、その  
前にまず、視線の端で煌めいているこの物騒な物を遠ざけて戴きた  
い。そしてこの状況を見て笑える乱入者は何者だ、笑っていないで  
助けてくれ、あーでも待ち合わせしていたという事はこの美少年と  
グルなのか、なら彼もまた俺を迫害しよう……。

「すまない」

俺の心の叫びの最中。未だ絶えなくすすくす、の合間から漏れ出す彼の声。

「……いや、つい、な……幾筋か予想はしていたのだが……いや、まさかこのような状況に陥っているとは思わなくてな……」

その声は。

聞き覚えのある声で。

「……予想だと」

怒りを噛み潰した声で、姫は仰る。

「ああ、だが……言っただろう？ 私の予想は覆くつされた……お前が起きてしまつとは、全く、思いもよらなかつた」

返ってきた答えに、ふん、とでも言うかのように姫君は顔を背ける。艶やかな金が白い頬を打った。

「起きたんじゃねえ。起こされたんだよ、このポケ野郎に」

「ほう、それは積極的な事だと。」

漸くすすくすを止めた彼は。積極的だと、と、姫様が小さく繰り返すのを遮るように。

俺の中で身元が殆ど確定したその人物は、公然と言い放つ。

「何よりだ、新参者が友好的なのに越した事はない」

新参者。

それは……俺の、事か？

姫君は疑問の色を表情に浮かべ、訝しげな視線を再び彼の方へ向け。

俺の代わりに彼に問う。

「シーちゃん……どういう意味だ、それ……」

「そのままの意味だ」

「そのまま、って、てめえ……正気か……？」

「残念ながら」

彼が此方へ歩いてくる音。恐らくは俺の傍らかたわで、立ち止まり。

「とりあえずこの子を解放してやってくれないか……プリジモ＝ノードレー」

プリジモ＝ノードレーと彼は呼んだ。恐らくそれが姫の名前。

「この子は我々の敵ではない、既に確証済みの事だ。離してやってくれ」

美人さんの視線が、理想が現実となり感激のあまり涙腺が緩みかける俺に向かう。その表情には疑問、そして途惑いと躊躇い。

俺は笑って見せた。スマイルスマイル、引き攣ってしまっているかも知れないけど、兎に角スマイル。

母さんが昔言っていた。

慌てたって仕方ないじゃない。困った時こそ落ち着いて、怖い時こそ笑うのよ。そうすれば大丈夫。

ほら、笑う門には福来たるっていうでしょ、と。

こういう時こそ笑わないと。俺は笑っていないと。



俺が浮かべるのはきつと、苦し紛れともとれるだろう醜い笑みでも。効果があつたのかは解らないけど。

プリジモさんは刃を俺から離す。

すーっと、首の後ろ側。俺を傷つける事なく、冷たい刃が通っていくのが解る。

そして彼は、前髪を掴んでいた手から、漸く、力を抜き。

巨大な、黒い……美しい、鎌。その銀色をした石突きを柔らかなベツトの上に。

そして。その整った綺麗な手に力を込め、ギュツと藍を握り込んだ、途端に。その藍も、銀も、一瞬にして闇と化してどろりと溶け、白の狭間に消えゆく。

嗚呼。

ようやく実感した。

助かったんだ、と。

ゆるゆると身体の力が抜けていき。完全に負荷が取れ去って、先程まで自分がどれほど強張っていたかが解る。まさに氷漬けの状態だった訳だ。

と。脳が氷漬けという単語に反応して。

あの時の記憶を呼び覚ます。

氷結する目だらけ骸骨。

そう。魔法。

「……これでいいか、隊長」

「ああ。いい子だ」

そして。その魔法を使用した人物は。

「しかし……相当変な上に相当失礼な奴だな、貴様は」

脱力した俺の頭の上に軽く手をのせて。

「何の前触れも挨拶もなしに、突然目の前から消えたかと思えば……  
…謝罪の言葉の一つも、弁明も」

振り返ると。

「ただいま帰りました、と。……その挨拶もないんだな」

風に揺れる銀髪。湖畔を映した翡翠色の瞳で俺を見下ろし。  
纏っているのは、例えて言うなら気高き獅子のオーラ。

それでいて優しい微笑みを持つ。

やはり、あの人が。

シルフィスⅡゼノⅡアルヴェルドが其処に居た。

「シ……ス」

紐解かれて出した声は、自然と彼の名を紡ぐ。  
そう呼べと、彼自身が告げた名を。

すると彼は頷いて。

「やはり帰ってきたな、セツナ。総隊長殿の仰った通りだ」

え、ソウタイチヨウって何、誰、と俺が問うより先に。

「総隊長？」

綺麗な声を響めて、密やかともとれる調子で。俺の代わりに問うたのは姫君で。

俺が彼の方に視線を返すと。

目が合って。彼の夜の中に俺が居た、かと思ったら。

次の瞬間には逸らされておりました。

そう、彼はシスの方を見て、というか睨みつけて。

「よりもよって何でレヴン＝レイルズリードが、この変質者の事知ってやがる」

嗚呼、やっぱり変質者ですか。

と。頂垂れると、背後の王子様は平然と。

「リモ。この子は『変質者』ではない。ちゃんとしたセツナという名がある」

思わず彼の方を見た。

り、リモ。

プリジモ、リジモ……リモ？

何か可愛い。

「つーかまず説明しろ。何でこの変態が俺の部屋に居やがんだ、まず第一にこの変態は何者だ、魔天使じゃねえのかよ」

きつい口調で問いを重ねるリモ姫。

「リモ。この子は残念ながら『変態』でもない。ちゃんとしたセツナという名がある」

平らな声で先程の返答を繰り返すシス王子。但し若干の変更有り。

「つーかさつきも言ったけど、この助平が此処に居るってこと知ってんなら、何でもつと早く来ねえんだ馬鹿」

更に更に重なる眠り姫。……答えは勿論。

「リモ。大変言い難いにくがこの子は『助平』でもない。ちゃんとしたセツナという名があ」

「だあああうるせえ解った、つーかなな事一遍聞けば解んだよ繰り返してねえで俺の質問に答えやがれこの野郎が！」

嗚呼……火山、噴火。

しかしシスは何ら動じる事はなく。寧ろ困った奴だとも言いながら目を瞑ってふつと息を吐き、おまけにやれやれと頭を軽く振り、彼を威嚇して尻尾を立てうーうー言うプリジモさんを宥めるように。

「茶化してすまない。だがそれらの問いへの返答は後にしよう」

何でだ、と声を荒げる姫の声を聞きながら。

俺はあの時、あの夢の中で。どういう意味だと問うた俺に、彼が言った言葉を思い出す。

後で話す。

彼はもうじき、答えてくれるのだろうか。

俺の疑問……彼ならば、その全てに答えを与えてくれるだろうか。

「この子に関しては、お前以外の者達も疑問を抱くだろうか。」

「一々話して回るのは面倒だ、だから隊の者を集めている」

その言葉。姫は怒りを通り越して、呆気にとられた表情をする。

「私とセツナはこれから総隊長殿の所へ向かわなくてはならない。

お前は先にコアとグレイダの部屋に向かっかけていてくれ。……他の面々には既に知らせてある。各々準備が出来次第其処に集う」

「シーちゃん」

苛々を露わにして、シスの名を呼んだ彼は。

「もう一度訊く」

暫し間を置き。そして。ピン、と張り詰めた空気に罅ひびを入れる、小さく、しかし確かな声で。

「……正気かよ」

低く低く、彼に問う。

それに対してシスが放った答えは。至極、簡単なもの。

「無論だ」

「……っ」

プリジモさんの美しい顔が、痛みを堪えるように歪む。

「……何で」

「それならば、後に話すと」

言っているだろう、と。シスの言葉を遮って。

「でもそいつは……ッ」

「魔天使なのに」

唐突に。

確かな声で。

放ったのは。俺だった。

なのに、どうしたことだ？

放られた、鋭利な。針の形をした言葉が。翻って俺の腹を貫く。

「……だろ？」

続きを紡いだ声が萎しぼんでいた。

確かに俺は自分で自分の腹を裂いた。つまり自殺。

しかし異様だ。

異常なほどに痛かった。

俺の身体は貫かれ、血しぶきを上げ……辺り一帯に鮮血を散布する。衝撃があった。

痛みに俯いて白を見つめると気付く。その白は血の赤に染まっているのではなく。陰って黒を帯びていた。

俺の黒。

きつと。

魔天使の黒。

何故か、そう思つて。そしてその途端、何故か、身体が震えだす。  
変だ。変だ、おかしい。

こんな筈じゃない。こんなに苦しい筈がない。  
だって、さつきは。

……さつき？

本当なら。

刃物突き付けられて。その理由が、魔天使だから。そう知つた時。

『俺を魔天使と呼ぶな。俺を恐れるな』

そう、自分を対象に怒りを露わにした彼に向かって叫んで……思  
いきりぶつけたつて、お釣りが来る程に。俺の感情は高ぶる筈だっ  
た。

本当は。

怒つて、怒鳴つて、涙を流して。

そう、遠慮する事はなかったんだ。感情を思いつきり曝け出して  
やったつて良かったんだ。抑える必要なんかない、その所為で危険  
人物とでも何でも言われたつて、別にいいと思う。どうせ夢の中な  
んだし、誰に嫌われたつて構わないから。そう、それが例え絶世の  
美人さんでも、だ。

でも、でも。

あろうことか、俺は認める方を選んだ。

そう。

よくよく思えばあの時からそうだった。

化け物と。

戦場の少女から。そう呼ばれたあの瞬間から。

刃の様。突き付けられた言葉。

それと戦う事をしなかったのは。したくなかったのは。する事が出来なかったのは。

俺が俺を抑えたからだ。

「彼等」の言っている事は正しいのだと。心の何処かで、頷いている自分が居たから。

全てを肯定してしまえ、受け入れろと。そう、俺を冷静に、冷静に宥める自分が居たから。

……滑稽だ。

今更気づく。

俺はとっくに肯定している。

俺の味方は誰一人としていない。

痛みを感じたのは。

それに。気づいてしまったからだ。



不意に、頭の上に置かれていた温もりが消え。そしてそれにはつとして我に帰る。

すぐ後ろでシスが息を吐いた。

そして。聴覚を取り戻した俺の耳に。

「魔天使だな。だがそれがどうした」

あの声が響く。

「世間における一般論を言うのであれば、確かに魔天使は冷酷非道、妖天族史上主義の立場に在り、他種族の排斥、殺戮を好む……世界平和においては当然、それを脅かす害虫の如き存在。しかし、だからといって奴等が一樣にそのような性質を持ち合わせている訳ではない。私も、彼と出会ってからまだ間もないが……だが、解る。この子は相当な変人で、馬鹿で……しかし」

その声は狡いと思う。

「優しい子だ。この子の言葉に……笑顔に偽りはない」

まるで風のように。涼しげで、すっと流れ込んで来て、耳の奥で広がって。

そしてあつという間に俺の一部に為って、俺の傷口を塞いでいく。

……一片の疑いも、持たせることはない。

「それに。魔天使であるからこそ、この子には、世界を変えられる可能性がある」と、私は思う」

その言葉を聞いて。

姫君は泣きだしそんな顔をして。  
知るか、と。ただ一言、そう言って。

俺に背を向け、ベッドから降りる。ふわりと、柔らかに金が波打った。

そして。それきり無言で部屋を出る。

シスの方に視線をやると。

姫の履いた靴の底が。硬い床を打ち遠ざかる、その音を黙って聞いていた。

姫が消えた後の、開け放たれたドアの方を見。そして恐らくは洗面所からの、水の流れ出す音を聴いていたシスに。

「さつき、さ」

俺はそう言った。すると、王子はすぐに視線を返してくれる。

「俺、シスが言ったのと、同じ事、あの人に言った。魔天使だから何、って」

翡翠色の瞳が、俺を見つめている。

「でも、さ。俺は他とは違うから、君を傷つけないから、だから信じるーなんて、大きな事言った割には……言った矢先に、もう駄目で。だって俺、俺の事が解らなくなっちゃったんだ」

ふとした事をきっかけに。本当に簡単に、ほんの一瞬のうちに……  
解らなくなってしまうた。

「無意識の内に……俺、自分の事」

信じろと言っておきながら。

信じて欲しいと願った対象が、その意図が。霧きりの中に隠れてしまつて。すっかり見失つてしまつたんだ。

彼に後頭部を向け、視線を前方に返すと。其処には壁。黒を湛えた白。

「……どうしよう」

すると背後の彼は。凜とした声で。

「受け入れる」

「……え？」

「お前を取り巻く事実の全て。それを受け入れると言っている」

俺を取り巻く、事実の全て。

それはつまり、此処が異世界で。

そして俺が。

「お前は魔天使だ。だからこそ『アスカ』に為れ。我々と共に保護者として、この世界を守るんだ。……この意味が解るな？」

保護者。世界を、守る。

そんな大それた事、と。俺は口元を歪めたけれど。

でも。

それは要するに。

他の人に認められるような、偉い事をしろって事だ。

そうすれば俺の存在は正当化される。それは正しいと思う。

それが、彼が提示してくれた答え。恐らくは最善の選択。

「解るよ」

出来るか出来ないか。それは今は問題じゃない。

そうする事で。そうしようとする事で。

このもやもやが拭えるのなら。

なら。

「……やる」

やってやる。

この夢が完全に覚めるまで。

「ところでシス」

「どうした」

「『アスカ』って何？ 人の名前？ 時代？」

飛鳥時代と言え。世界史選択者兼低偏差値の俺の頭の中には、  
聖徳太子、法隆寺、柿、としか浮かんでこないのだが。

そう。

やります、とは言ったものの。

俺が一番肝心な事を、まだ知らされていませんでした。

続々続ふつか目：「頑張るから」

「そうか」

シスはふむ、と腕を組む。

改めて彼の方へ向き直り、そして初めて気づく。その左手には畳まれた衣服。色からして恐らく、彼の着ているものと同じ上着。

「お前は知らないのだったな……まあ、異世界人ならば当然の事か。……解らない事が多すぎるあまりに混乱し、頭を壁に打ち付けたいとでも思っているのだろうか？」

いや、混乱はしてるけど、そうは思っていないですね。

「此处で話すのもいいが……総隊長殿が御待ちかねの筈。移動しながら話そう」

総隊長。

先程尋ねようとしたら、姫に遮られてしまったから。今度こそ、尋ねてみる。

「なあ、そのソウタイチヨウドノって誰？」

「『アスカ』……我々の属する組織の総轄者だ」

「あー……やっぱり偉い人？」

「偉い、と言えばそうだな」

そんな人が、どうして俺を御待ちかねなのだろうか。

魔天使なのに、と。

思ってしまった。慌てて首を横に振り、それを頭の中から払拭す

る。

すると、俺の様子を案じてか。

「気後れは無用だ」

そう言っつてシスは手にしていた上着を広げ。ああやっぱり同じものだ、でも袖は彼のもののように長袖ではなく半袖だ、なんて思っている間に。

ばっふ。と。

俺の頭に被せる。

……世界が、一瞬、闇に覆われた気がした。

これは。パトカーファッション、再来ですか。

「あの……ひょっとしてまたあのファッションで……」

頂垂れる俺を見下ろして、シスは溜息を吐いた。ええと、大変申し訳ないんだけど、吐きたいのはこっち……と、いつかも考えた事を思ったら。

「お前は頻繁に奇妙な言葉を使うな。異世界の言葉なのか、それは」

「え？」

「ファッションが通じない。」

覆いを後方へずらして視界を広げると、何を思ったか長い足を折ってその場にしゃがみ込み、ベッドの下を探っていらっしやる王子。こんな事を尋ねてみる。

「外来語はNGですか？」

「えぬじ？」

NGでした。

ならばカルテは勿論、カルタも通じないんだろうな。

と。其処で言語における、最も重大な謎に直面する。今まで気にしていなかったけど。

「……日本語」

「その奇妙な言葉は二ホンゴというのか？」

「違う……今俺が話している言語」

と。彼は布を被った俺の呟くような声に対して、あっさりはつきりこつ返す。

「馬鹿な。そんな筈がないだろう」

「じゃあ今俺は何処の国の言語を！？ 英語フランス語スペイン語オランダ語イタリア語ええとそれからチャイニーズ！？」

しまった、最後だけ英語に。

……と。

「セツナ」

立ち上がった彼の手には。

「それがお前の母国語ならば別に構わない、話すのを咎めるつもりはない。だが……事情を理解していない者の前でべらべらと披露するのは戴けない。益々変人に見られるだろうからな」

あの靴。

それを履いて、俺は町を歩いて。そして此処の空を見た。



その所為で。俺が日常的に見ていた空は霞んでしまった。

無意識下で比較されたのが。あまりにも美しいものだったから。

「……それは」

「ん？」

眉を顰められる。それがどうした、とでも言われるかと思いきや。

「何故その上着を着ていない？」

「え？ あ、着るのこれ？」

「当然だろう。何の為にそれを渡したと思っている」

渡したとさりりと言いましたが、それは些ちとか間違いではなからうか。しかし其処には敢えて触れず、素直に考えていた事を発表する。

「頭に被って俺の姿を隠すた」

「阿呆」

俺の回答を皆まで言わせず、シスはぴしゃりとそう仰り。

「これはお前の制服だ」

「……俺の？」

「隊員は皆これを身に纏う。部外者に見せる為の、アスカの証明だ」

両手で掴み、引き摺り下ろして。落ちてきたそれを眺めてみる。

動きやすさを重視して、なのだろう。こうして手で持ってみると、改めて軽い素材で作られている事が解る。フードとポケットがあり機能性も丸。濃い青地に、右の胸元には白い印……恐らく、飛翔する鳥を模かたどったもの。

何故だろう。被っていただけなら、感じなかったのに。

これを纏った瞬間。

完全に。彼等の世界に取り込まれてしまつような気がした。

「さつさと着てさつさと履け。総隊長殿の元へ行くぞ」

ほんの一瞬。

これでいいのかと。躊躇いが頭の中を過る。

けど、それ以上は。

そう、それは本当に。ほんの一瞬の事で。

俺はシスに再度促される前に、すつと腕を袖に通し……海の色に似た青に包まれる。

それは軽い青。しかし、恐らくは。途方もなく重い青。

俺はまだ重みを感じない。しかし、この先加えられるだろうその重力を受け止められるかどうかは。俺にはまだ、解らないけど。

やると決めた以上は。まだ振り返らずにいたい。

シスは似合うな、と微笑んで頷き。それから突然真顔になって。

「因みに上着しか持って来ていないのはわざとだぞ。別に記憶を頼りにお前の寸法を想定し、それに合うものを探し出すのが面倒だったからではないからな」

ええと。堂々とそんな弁明されなくても。

サイズぴったりのズボン持って来られても、それはそれで複雑なだけだからいいのだが。

白い寝室から出ると。其処では、静かに窓を覆うカーテンを日の光が貫いている。

しかし薄暗い部屋。壁際に寄せて配置された木製の机と椅子。机の上には分厚い本が一冊。それだけ。生活感などまるでない。

そして洗面所と風呂に繋がる戸がひとつ。それは開け放たれていて。其処に姫の姿はなかった。

気になったのは。この部屋、トイレがない。

しかしトイレ何処ですかなんて訊くと、行きたいのか？ と返してくるのが目に見えていたので止めておいた。

空色をした取っ手のない扉。シスがその前に立ち、手を翳すと心が丸く……金色に輝いて。そして無音で横にスライド。

あんぐりと口を開けた俺がシスに続いて、その先に開けた廊下に出ると。

二人を送り出した扉は、再び無言のまま空間を隔てる。

「す……」

「驚く事か？」

呆然として扉を見つめ、口を開けたまま頷く俺の耳が。傍らのシスさんの溜息を聞く。

「驚いてもいいが立ち止まるな。行くぞセツナ」

ずばり。

廊下は、広がった。

大人三人が両手を左右に存分に広げて歩こうと、指先さえぶつかる事はないと思われる程だ。

白く艶々した石の床に、白い壁、天井。両サイドの壁に、俺達が出てきたものと同じような扉が、均等な幅をおいて配置されている。しかし色はそれぞれ違い。同じものは一つとして無かった。

天井を見上げるとこれまた均等な幅をおき、球体の照明。柔らかな光を放ち、窓のない廊下を明るく保っている。

「電気があるんだ」

見上げて俺が呟くと。

「雷の力ではない」

前を歩くシスが否定する。

電気と雷は、ちょっと違うような、そんな気がするのだけれど。

「あれは光の魔法……分類としてはアリシティア聖光魔法だ」

「魔法!？」

「嫌いぞセツナ、あまり大声を出すな」

はつとして反省する。けど今は周囲に人はいない。

「あの球は、魔力を蓄積する性質を持つよう加工された特殊な石でアリシティア聖光魔導士が魔力を込め発光させるんだ。まあ、大半は総隊長殿の御夫人、フロア救護部隊隊長殿の力だな」

「……なんか、こんがらがってきた」

早くも、思考回路がショート寸前。

正直、訳が解らないカタカナ単語が多すぎる。

「アスカは約十五年前、世界を守る為に総隊長……レヴン＝レイルズリード殿が設立された組織の名称」

と。

シスが説明を開始したのは。

色彩に富んだ扉の群れを過ぎ、少し行ったところで角を右に曲がり。

階段に差し掛かった時だった。

それにしても。

先程姫がその名を口にした時にも思ったが、レイルズリードって何処かで聞いたような。

「各大陸にそれぞれアスカは存在する。だが最も大規模、且つ強大な戦力を誇るのが此処であり……総隊長殿は常にこの地にいらっしやる。それ故に此処は、総本部とも呼ばれているな」

成程、此処はソウホンブ、と。

シスからは見えないだろうけど頷き、頭の中で反復して確認しつつ。これまた幅の広い階段を上っていく。

螺旋状で、高く高く伸びるこの階段。手摺が無いから、ぼーっとして直進でもしようものなら間違いないと落ちる。

「アスカは常に本部におり各地から寄せられた情報及び依頼の管理を行う分析部隊、実際に任務に当たる戦闘部隊、そして傷や病の手

当てに当たる救護部隊、この三種の隊で構成されている」

ん？ ちよつと待て。

俺がなる、いや、入るのは、ひよつとすると。

「我々の任務の内容は多様だが、戦闘を伴うものが多いな。妖天族の救済、悪人の討伐……時には紛争等、諸自治体の問題に干渉する事もある」

我々。もとい、シスとその仲間達。

その中には、当然。

「案ずるな、入隊当初から危険な任務に同行させることはしない」

「……ぐえー」

「どうした、何を鳴いている」

やってやる、そう決めた時。

出来る出来ないは問題ではないと。そう思っていました。

そう、自信なんて後からついてくる、何事も始めちゃえば何とかなるもんさ。

しかし。

現在地は出発点。現段階での、何とかなる自信。元からあったかは不明だが。

確実にマイナスになりました。

脳裏に浮かぶのは、化け物と戦うシスのあの姿。

世界を守る。

悪い奴から民を守る。

殆どイコール。

ああ、普通に考えればそうだよね……。

「でつでも俺、あんな奴と戦った事なんか無い、というか戦闘経験ゼロだよっ!？」

「煩いぞセツナ。この階段は下は一階、上は最上階まで続いている、下手をすれば本部中に響き渡るぞ」

「あ、ごめん」

「全く。あんな奴とは？」

「えーと、ほら、シスが戦ってた……」

と。其処まで言ったところで。俺は言葉を切った。

気付いたからだ。

足音、会話。

上から、階段を下りて来る人がいる。

気付いた途端。鼓動が高鳴るのを感じて、俺は俯いた。

「ユーナちゃんは鬼畜だねえ……毎日毎日仕事しろシゴトしろっ!」  
としろー、いい加減言ってる疲れねえ?」

「疲労など感じません。これが私の職務ですから」

会話が鮮明になったかと思えば。

無言になる。

彼等……その二人が、俺の姿を見つけたからだろう。

俺からも彼等は視界に入り。俯いたまま、ちらと視線を流して見

ると。やはり同じ上着……制服を纏っており。

小柄な女性は短い茶髪。そして。もう一人、長身の男性の方は。

赤。

燃えるような、鮮やかな赤。

歩みを止めた二人の視線が、俺に向けられているのを感じる。

しかし、俺達が立ち止まる事はなく。靴音だけが響く中、静止している彼等の横を通り過ぎる。

すれ違いざま、シスが黙って会釈した。

と。

遠ざかっていくシスの背に向かって、不意に。

「へえー、シーちゃん特別任務？」

そう。全く重みを感じさせない、羽のような声をかけたのは、赤髪の青年。

するとシスは立ち止って。振り返る事はせずに。

「任務と呼ぶ程のものではありません」

ふーん、そう、と。赤髪さんは軽い調子で。

「程度だけで言うなら……相当の事しちゃってると俺は思うけどね」  
足場を失って。振り出しに戻る、プラスチックで一階まで落ち、  
硬い地面に叩きつけられる。そんな錯覚があった。



相当の、事。

そう言えば。姫君もシスに対し言っていた。  
正気か。と。

俺は両の掌をぎゅっと握り込んでいた。

やっぱり俺が『魔天使』だから。

俺の傍にいと、シスまで変だと思われるのか。俺の傍に平然と  
居る事、居てくれる事は、そんなに。

相当の事、なのか。

異常な事？ 咎められなきゃいけない事？

そんな筈ない。

蔑視される事が仕方ない事？

そんな筈がない。

変えたいんだ。

変えられるんだ。

そのために俺は、この青を纏ったんだ。

「……そうですね。確かにそうかも知れない」

シスが静かにそう言い、振り返ると。

俺が盛大に音を立て、息を吸い込むのと。

同時だった。

「ですが、それが」

「風岡刹那、十六歳！」

シスの声を覆って。

俺は叫んだ。

静寂の中、その声は響く。この螺旋階段を、上って、下りて。

「……魔天使です！」

跳ね返って。俺にもぶつかって。

でもそれでいい。

受け入れろって、言ったよな。

受け入れたら、力になってくれるって……言っただろ？ シス。

だから、受け入れるよ。受け止めてやる。

味方がいないと嘆くより。開き直ってしまった方が。

そうした方がずっと前に進んで行ける。

俺は逃げない。

「只今華の高校生活真っ盛り、剣道部所属！ 日本生まれで日本育ち、身長は成人男性の平均身長のちょい上くらい、純粋な日本男児です！ ちなみに日本から出た事はありません、いや、でした！」

俯いて。ぎゅっと目を瞑って。黒と化した、白い地面に叩きつける。

「こつちに来てからまだ一日ちよい経ったくらいだから、解んない事だらけで、混乱してて、まじ壁に頭ぶつけまくりたいくらいだけどつ……」

小さくなった言葉の端が微かに震えていた。

願わくは、その小心者の証明が聞こえませんが……。そして足が震え出しませんように。

「でも……頑張りますから！ この世界の為に、俺が出来る事……全力で、しますから！ 魔天使魔天使言われなくなるように、ちゃんと名前読んでもらえるように、認めてもらえるように、ちゃんと、ちゃんと、頑張るから、アスカになるから……」

俺の声が途切れた、その狭間。

シスが。くす、と。笑い声を洩らしたのが聞こえた。

「だから！」

俺は彼に背を向け。

呆気にとられて俺を見ている、随分と身長差のある二人を。真っ直ぐに俺の黒で捉え。

そして。

「宜しくお願ひします……！」

かなりの勢いで。  
腰を折った。

留まっていた段から落ちかけて、シスに支えられたのは言うまでもない。

「しかし、剣術を嗜たしなんでいるのだろうか？」

最上階に辿り着いて。

やはり窓のない、悪く言えば無表情な廊下を歩いていく。

ぼーっとしていた俺は。

それが先程の会話の続きだと気付くのに少し時間を要した。

「剣術、って言うか、剣道。竹刀しか使った事ない」

竹刀で。

あんな化け物と戦えるとは思えないから。

俺がこれから持つ事になるのは、きっと。

「だから……真剣なんて、持った事もないんだよ？」

声の調子を落とした俺。

そうかと答えたシスの前方に見えるのは、茶の巨大な扉。その色はこの白の中、一際鮮やかに映った。

あの扉の向こうに。レヴン＝レイルズリード……総隊長さん、つまり一番偉い人が居るんだ。

そう思うと緊張。というか、不安になる。

戦闘経験ゼロな、一介の男子高校生。しかも小心者というオマケ付き。

思えば、俺にあるのは願っただけ。

全く役に立たないかもしれない。

そんな奴が、あの堺を越えて良いのだろうかという不安。

と、シスが。

其方を消し去ろうとして、ではないだろうけど。

「だが、大丈夫だ」

またまた、さらりと。

大真面目に断言されても、俺は苦笑するしかない。

「何でそんな事……言えんの」

すると。

くす、と。また、彼は笑って。柔らかな光の下。

「頑張るんだろう?」

柔らかな声音で。彼は言う。

「お前が、この本部中に響くような大声でそう宣言した。だから私は信じる」

信じる。

それは俺の耳から胸まで落ちて。じんと。熱を帯びる。  
思わず俺は視線を落とす。

それは、嬉しかったから。ただ只管に嬉しくて。  
思わずにやけてしまって、その顔を見られるのは情けなくて。

嗚呼。俺は、どれほど。

この言葉が欲しかったことだろう。

「……あ、ああ、あー、あ……」

「やはり変だな、突然発声練習を始めるとは」

「え、えと、そうじゃなくて。そうじゃ、ないんだけど」

有難う。

そんな短い、ありきたりな台詞を声に出すのが、こんなに難しい事だっただろうか。

思いつつ、悪戦苦闘している間に。

シスは歩みを止め。続けて俺も、その場に静止する。  
顔を上げると。

目の前に聳え立つのは、木製の巨大な両開きの扉。

戦場となっていたあの町の、教会のそれとよく似ている。

そう。

辿り着いたんだ。

## 続々続々ツツカ目：懐かしい人

「なんじゃ……朝っぱらから煩いのう」

柔らかな長椅子の上。

横になっていたその長身の青年は。遠くに聞こえる、全く憶えない誰かの声に目を開け。顔を顰めた。

瞳は森林を映したような深緑色。その視界に映るのは。

右の瞳には彼と同じ緑。左には、穢れたものとされる黒を映し。顔にはまだあどけなさを残す少年の微笑み。

「元気すすね、うちの新人さんは」

どちらも、特異な尖った長い耳を持つ。

「新人り……ほう、シスが儂等を集めた理由はそれか」

「そんなのどーでもいいーけどよー、フウガ」

それまで。開け放たれた窓から身を乗り出し、外を眺めていた赤茶色の髪と浅黒い肌を持つ少年が。室内に身を戻し、壁に凭れかかり。その黄金に輝く、虹彩の極度に細い爬虫類の如き瞳に、フウガの足がはみ出している椅子を映し。

「俺等ん部屋の椅子、独り占めすんのやめてくんねー？」

「そうですわ全く……何て不躰な」

同調して頷き。同じく壁に凭れかかっていた美しい女性が、白か



ら離れてフウガに歩み寄り。良く似合う眼鏡の奥、鮮やかな蒼眼を鋭く光らせる。

「女性陣が遙々、西館から歩いてきた事を知っておきながら、椅子を譲らないだなんて。そんなところにさえ気を使えなくては、とても紳士とは言えなくってよ？　ねえ、エル」

「え！？」

「貴女も、そう思いませんか？」

顔に掛かった鮮やかな青髪を、手の甲で優雅に払い。話を振った少女の方へ視線をやる、と。少女のその頬は、彼女の髪の色である桃色を瞬時に通り越し。瞳と同じ赤に染まる。

「ミーウイちゃん……え、ええと、わた、わたしは」

豊満な胸の前で手を合わせ、視線を足元に落とし。

「わたしは……そっ、そういうところも、すっ、すすすすすすすっ」

ああ、そうだった。この子にフウガの事は。

と。ミーウイは眼鏡を人差し指で支え、やれやれと頭を軽く振り。

「もう、いいですわ……」

と。

その時扉が開き。

淡い輝きを放つ金色の長い髪。それをうなじのところで結わえ。

上着は前のチャックオープン、全開。

標準スタイルの眠り姫が現れる。

彼の登場に。それまで断固として動こうとしなかったフウガが、ばねで弾かれたように飛び起きる。

「おお……待っていたぞリモー！」

「待ってんじゃねえ……」

気色悪い、と。プリジモがフウガのキラキラ光線から視線を背ける。と。

「お　　す！」

「あらリモ、ご機嫌よう」

「ふふ、リモたんさん今日も美人ですね」

「んにゃ？　リモたんさんがこんな時間に起きてるの珍しいっすねえ？」

次々と声を上げる面々。しかし麗しの姫君はそれらの声に応える事も、彼等を一瞥する事もせず。姫君は室内に踏み込んで、黙って部屋の隅へ。

そしてしゃがみ込んで膝を抱え、自らの腕にその美しい顔を埋める。

「何だよなー、元氣ねーの」

彼と一番近い位置に居る黄金の瞳の少年が不満そうに唇を尖らせる。しかしその一方でフウガは椅子の上で立ち膝をし、背凭れに肘をついて。小さくなったプリジモ、その輝かしき姿を恍惚として眺めていた。

「しかし可愛らしい……いや、全く以て可愛らしい……」

「にゃはは、フウガさん、リモたんさんに手え出したらまったシスさんに制裁されるっすよー」

「まあフウガ、これ以上シス様の負担になったら、このわたくしが承知しませんわよ!？」

と。

いつもと変わらぬ様子の、彼等の会話を聞き流しつつ。

プリジモは。

先程降ってきた、「アイツ」の声……アイツの言葉を思い出す。

頑張るから……だから!

宜しく願います!

偽りはないと。シスが言った様に。

彼の声は酷く真摯なもので。

……それでも彼は魔天使で。

解らなくなる。いや。最初から解ってなどいない。解ったら苦勞しない。

だからこそ。耳について離れない。

思わず吐いた独り言は。

「でかい声出してんじゃねえよ……」

「む? おお、すまん。お前への愛が溢れ出し、つい……」

「あにゃ、リモたんさん煩かったんすか?」

彼は思う。エルフは面倒だ。

「にゃははは、ほら、煩いんですってー。グレイダさん、少し黙って」

「あー？ 何だよコア、俺は黙ってんじやねーかよ。や、待てよ…ひょっとして俺の心の声が無意識のうちに」

その時。再び扉が開き。

繋がった空間、その向こうに、茶髪の少女が現れた。

満面の笑みを浮かべ、巨大な瞳は爛々と、三百カラットの輝きを放ち。いや寧ろ全身から幸せオーラを発射する彼女は、嗚呼生きてるって素晴らしい、そのフレーズを現在大絶賛体現中である。

「みんな、揃ってるっ!？」

「シエラで最後。後はシス様がいらっしやるだけですわ」

代表したミーウイの答えに、そっかそっか、と。頷きつつ彼女は室内へ。

腕を上下に大きく振るるん歩きで部屋の中程まで進んだところで、エルが微笑み声をかけた。

「シエラちゃん、今日は随分嬉しそうですね。何か良い事でもあったんですか？」

すると、彼女はくるり、髪を大きく揺らして振り返り。

「そつなのそつなの！ もう滅茶苦茶いい事があったんだっ！ この良さは多分人生で一番だよー！」

言いつつ右手につくった拳を、えいえいおー宜しく。天井に向か

って高く高く突き上げる。

「おーおー……今日のシエラ、すっげーのー」  
グレイダが感嘆し、その特異な目を細くする。

そして。

誰かが、具体的な理由を尋ねる前に。

もう待っていてられるかとばかりに。

「あたしねっ」

そして何故かコアの方を向き。

「好きな人、出来ちゃった！」

「……はい？」

とりあえず。現在彼女と目が合ってしまったているコアが代表して  
首を傾げる。

シエラちゃん、周囲の沈黙などお構いなし。乙女のキラキラ大放  
出。

「失礼致します、レヴン総隊長殿」

シスが、もの言わず聳える扉に面してそう言う。

扉はその声に応えるかのように……独りでに開き始める。

ゴゴ、という大きな音が鳴り響き。開けていく空間に広がるのは、蒼と……やはり白。この建物を建築した人は、間違いなく白が好きだったのだろう。

やがて音が止み。大きく大きく口を開けた空間。

此処に、総隊長さん……レヴン＝レイルズリードさんが居るんだ。

「入るぞ」

シスの声に、俺は頷き。

その部屋に足を踏み入れた。

その瞬間に。俺の皮膚が……いや。外側、というよりは。恐らくは俺の内側が感じ取る。

変わった。

扉を境界に。空気が別物と化す。

目に見えない、冷たく只管に清らかな何か。聖の粒子。それがこの空間を埋め尽くしているように感じるのだ。しかし息苦しい訳ではなく、寧ろ清々しい気分になる。

部屋の形は上から見ると恐らく正六角形、天井はドーム状。そして。

俺達が止まった、部屋に入ってから五歩地点。其処から更に三歩ほど進んだ所から、壁と並行に正六角形を描いて窪んだ床。其処に透き通った綺麗な水が黙して溜っている。聖なる泉とでも呼ぶべきだろうか。

その中央に。此処に来るまで何度も見た、照明の役割を果たす球。一際大きなそれが床に、他と同じく、半分顔を出した状態こぼれで埋まり。

柔らかな、蒼色の光を放っている。

「青色発光ダイオード……」

「……セツナ」

「うわごめん、解ってるよ」

しかしそれだけ。

この部屋には他に何も無い。

俺の周囲を取り巻く、神聖な雰囲気。それを醸し出している筈のレヴン総隊長……肝心のその人の姿が何処にもないのだ。

ひよっとして不在？ 御待ちかね、なんじゃなかったのか？

疑問を抱いて横を見ると。シスは俺に横顔を向け。ただ、中央の発光体を見つめていた。

「あの、シス……」

と。俺が思っていた事を紡ぎかけた時。

「総隊長殿はご不在か」

静かな声で。

俺の心を読んだかのよう。此方に視線を向ける事なく彼は言う。

「そう尋ねたいのだろう」

俺は頷く。すると。

彼は口元に笑みを携えて。

「ちゃんと、此処にいらっしやるよ」

「……え？」

まさか、と思い。

俺も前方に視線を戻す。しかし其処にあるのは水と光。人など居はしないのだが。

「すぐに解る事だ」

解る？

一体、何が。

……と。

不意に。

発行体から。波紋が広がり。

『ようやく、来たね』

「……え」

声が、届く。

耳にはない。この声は、鼓膜を震わせて伝わっているのではない。頭に直接響いてくるんだ。

あの時と同じ感覚だった。そう、あの骸骨の声と同じ。

あの声は抑揚まるでなしのロボット声だった。聞いていて不快感さえ覚えた。

しかし。この声は違う。



温かで、穏やかで、心地良い。そして何故か懐かしい……男性の人の、声。

ああ。これ、テレパシーだ。これがテレパシーなんだ。そう理解した時。声が続けて言葉を紡ぐ。

『私の名はレヴン＝レイルズリード。  
アスカの創始者にして総隊長の位に就く者。

カザオカセツナ。  
私は……君に会いたかった』

俺に……会いたい？

「ええと……どう、して、でしょう」  
不思議だ。  
見えないのに。本当に存在を感じる。  
目の前に、じゃない。この空間全体から感じるんだ。この空間そのものが、総隊長、レヴン＝レイルズリードなのだろうか……そう思う。

空間が。俺の声に答えてくれる。

『君が、選ばれた者だからだ』

「選ばれた、者」

ええと。それは、俺が勇者ってことですか？

異世界から魔王を倒す為に召喚された、偉大な偉大な勇者サマサマ。

ベタ過ぎて笑える。でももし本当にそうだったらどうしましょう。

『すまない。』

説明もなしにこのような言い方をしても、混乱させてしまうだけだったね』

な。

……ひよつとしてひよつとすると。

俺の心、読まれてる！？

「すつ、すいません！俺馬鹿なんです、ああっしかも変人なんですー！」

「セツナ落ち着け」

隣でシスが目を瞑り、頭を左手で支えて首を左右に軽く振る。

しかし俺はというと。片手といわず両手で頭を抱え、既にパニック。

「でっでも、ああもつろくな事考えてなくてすみませんー！」

するとそれを見た……何処から見ているのかは不明だが。

レヴン総隊長さんは笑い声を洩らし。

『相変わらずだな。君は』

え？

「総隊長殿、それは」

どうやら、彼の今の発言に疑問を抱いたのは俺だけでは無かったらしく。

何処か声を潜めてシスが尋ねる。

俺は彼に会った事がなかった。正しく言えば、会った事がない。

確かに総隊長さんの声は……懐かしいと。そう感じる声だけれどもそれはきくと、彼の声を持つ独特の性質によるもので。ほら、都会生まれ都会育ちの子が田舎の田園風景を見た時、何故かわぁーなんか懐かしい、そんな感覚を覚えるアレだ。そうである筈。

だから。

相変わらずな筈がない、いや、ないですよ。

すると。彼の声はそれを否定した。

そして。

『……いずれ、解る』

この世界の人は、先延ばしにするのが好きだな。

『すまないな』

って。

「うああああ、すいませんっ、俺別にそんなつもりじゃあッ」

「何、そんなつもり？ どういうつもりなんだ、セツナ」

「どづいつつもりでもないんですってばー」

『いや……私の戯言と思いき聞き流して欲しい。』

さて。

本題に入ろう、セツナ君』

「あっ、はいっ」

返事ははい、と。シスが溜息と共に小さく呟く。……はい。

『君の事情は既に知っている。』

君は、アスカに入隊する事を希望するのだね？』

其処で漸く、気付く。

レヴン総隊長は。俺の意志を確かめる為に、俺を此処へ。

そう言えば。俺がアスカに為るといふ事は、公的に認められたものだったのだろうか。

シスが為れ、やれ、というものだから。だから俺がうんと言ってしまうは、それだけで全て事が進む気が。始まる気がしていたのだけど。

それは違ったのかもしれない。

此処で初めて。俺の入隊は、確固としたものになるんだ。

いや。

もしくは。

そう思うと、表情が自然と引き締まる。胸の高鳴りを感じる。

落ち着くんだ俺。そうだ。自分の鼓動より、水が石を打つ柔らかな音を聞け。落ち着いて……心を穏やかに。

言う事は、一つだ。

「……はい」

俺は。真っ直ぐ真っ直ぐ、前を見据えて。

「俺、やります。アスカに為ります……為りたいです」

その気持ちに偽りはない。

躊躇いは。

ないよな？ 俺。

「……宜しく、お願いします」

そして。俺は、蒼に向かって頭を下げ。伝われ、伝われ。それだけを願う。

すると。

少しの間をおいた後。

『よく解った。  
私は君を歓迎しよう』

俺は顔を上げ、発光体を再び、見つめた。

『世界の保護者の一員と為り、共に戦って欲しい。  
此方こそ……宜しく頼む』

「あ」

シスが此方を見たのが解って。俺も其方を見、目を合わせると。  
彼は微笑み、頷いた。

翡翠の瞳。其処に映る俺の顔にも、笑みが広がって。  
それから、前を見て。  
俺の口から紡がれた言葉は。

「有難う！ 爺！」  
オジ

……え。

え？

えー。

えーと……。

「な……」  
何を言った？

俺は今、総隊長殿に向かって何を言った？

爺……爺！？

いや、今のは果たして総隊長殿に向けられた言葉なのか！？ ひよっとしたらシスに、いやでもそっちも危ない事には変わりないし、年齢的にはきつと総隊長さんの方に適した言葉……

と。混乱の最中。

視界の端、不意にシスが手を上げたかと思えば。

ばし。

「あ痛っ！」

俺の脳天目掛けて。鋭いチョップが容赦なく振り下ろされた。

「この阿呆！ 総隊長殿に向かって、何という事を言っている！？」

「えっ、ええええ、いや、でも俺にもよく解らな……っ」

じんじんと疼く脳天を抑え、前後不覚の状態に陥った俺がシスの方を見ると。

彼の瞳は。真紅に染まっかけていて。

何故彼の目の色が変わるのか解った気がする。そう。少なくとも、今は。

酷く。怒っていらっしやるからだ。

シスさんでさえこうであれば、言葉をぶつけられた総隊長殿の怒りは恐らくマキシマム。

俺が、この無礼者がーと怒鳴られる、あるいはあららこんな礼儀がなっていない子は入隊できませんねーと早くも追い出される、その二パターンの当然の仕打ちを覚悟し。

シスが俺の後頭部をがっしと掴み、発光体に向き直って、自らも頭を下げようとしたその時だった。

総隊長殿は。

大声を上げて笑いだす。

ぼかんとする俺達の前で。彼は。

『……爺、か。』

そんな事を言われたのは久しぶりだな』

その声を号令に。

俺の後頭部に力が加わり、俺は床と並行に身体を折る事を強制される。

「痛ッ」

「誠に申し訳ありません！」

「うあああほんと反省してますすみませんっ、ってか自分で出来ますーっ！」

「黙れこの馬鹿者が！」



『シルフィス、構わないよ。私は怒りなど覚えてはいない』

「いえ、しかし……」

『爺……いいじゃないか。良い響きだ。』

寧ろ君からもそう呼んでもらいたい程だよ』

「……っ」

嗚呼、なんと慈悲深い方なのだろう。

感動の最中。総隊長さんがシスの名を再度呼んで漸く、加えられていた力が抜ける。

『さあ、もう行って構わない。』

シルフィス……一番隊の面々に、新参者の紹介を頼むよ』

頭を上げたシスは、はい、と。綺麗な声で、模範的な返事をし。

そして……溜息。

「本当に、失礼致しました総隊長殿……」

頭を上げてなお、あまりの失態に肩を落とす俺と。つい先程のはい、とは打って変わって深く深く沈みこんだシスの声。

応えるのは笑い声だった。

シスの一礼、真似して俺も一礼、の後。

俺は彼にフードを掴まれて、中央の発光体が光を失っていくのを見ながら退室した。

はい。

その後は勿論。

シス王子から、散々に罵倒されました。

## 続々続々続々2日目：変態と怒れる天使

唐突過ぎて、リアクションも何もあつたものではない。

「えーと……何ですか？」

ずり落ち掛けた眼鏡をくい、と定位置まで押し上げて。青髪的美女、ミーウイが改めて問う。

すると。幸せオーラ全開で、引き続き首を傾げるコアの方を見ていたシエラは。彼女の方へと向き直り。

「好きな人が出来ました」

口調を丁寧なものに変え、先程の宣言を繰り返す。

「……それは、今、ですか？」

「今ですの」

と。相も変わらずシエラはにっこり。鮮やかな茶を揺らし、大きく大きく頷いてみせた。

そしてそれは皆の前で公表すべき事なんですか？

という疑問は、彼女の胸の内に留めておく事にする。言ったら言っただで面倒そう。そう、大人の直感。

彼女が黙した事で、室内には沈黙が流れる。シエラも含め、全員揃って点、点、点、点。

「のう、シエラ」  
と。

声を発し、その沈黙を破つたのはフウガであった。

一見。この隊では一番の年長者、に見える男。勿論実際はそうではなく、彼の年齢の遙か遙か上に行く者がこの場に一人居る。……

とはいえ。対人経験が最も豊富、といえれば彼がそうである。

シエラがよく通る声ではい、と返事をし。今度はそのフウガの方へ向き直ると。

先程まで部屋の間際の姫君に夢中だった彼は。膝の上に肘を突き、両手を組んで。平たいその上に顎を乗せ、その表情は真剣そのもの。

再び静寂に包まれる室内。次に彼が放った言葉は。

「誰なんじゃそいつは」

「あにゃー」

思わずコアが頂垂れる。

いきなり、其処いつちやいますか。

「おー、俺も気になる気になる、何だよそれ、誰だー？」

フウガに便乗して能天気な声を上げたのはグレイダだ。溜らずミ  
ーウイが制止を入れる。

「グレイダにフウガ……貴方方二人ともちよつと度が」

しかし。それを遮ったのは。

「それはね」

シエラの声で。

幸せの笑みを湛えた彼女は。当てて御覧ぶー時間切れ、の一言もなく。

「セツナ君」

大変あっさりど、想い人の名を発してしまう。

そんなに簡単に言っちゃうのかよ、という面々の一瞬の戸惑いと、まあ言いたくなかったらあんな事言わないか、という暗黙の了解の後。

肝心の、「セツナ」について。

コアはあー、と。人差し指を立て天井を指し。

フウガは、確か先程の声の主がそんな風にを名乗っていたなと思  
い出す。

知らない者達は頭にクエスチョンマークを浮かべ。

その中で。異常な反応を見せた者が、一人。

「なっ……！？」

現在の時刻を考慮すると、彼らしくなく俊敏に。伏せていた美しい顔をぱっと上げ。

他の者の視線が彼に集う中。自身はシエラを、化け物でも見るよ  
うな眼で見つめ。

「セツ、ナ……セツナだと……てめえセツナだったのか……？」

シエラは笑みを消し、きよとんとして。彼、プリジモ「ノードレ  
ーが戦慄きつつ立ち上がるのを、その巨大な瞳に映し。  
そして頷く。

「うん、そつだよ。どうしたのリモたん、セツナ君の事知ってるの  
？」

愚問だ。知っているも何も、だった。

「……セツナ……って」

リモ。この子は「変質者」という名前ではない。ちゃんとしたほにやららという名がある。

リモ。この子は残念ながら「変態」という名前でもない。ちゃんとしたほにやららという名がある。

リモ。大変言い難にくいがこの子は「助平」という名前でもない。ちゃんとしたほにやららという名があ……

ほにやららに共通して入る名前。

それが。

それは。

「あの変態の名前じゃねーかッ!」

正しく言えば、変質者兼変態兼助平。

敢えて真ん中をセレクトしてみました。

そのまま階段に差し掛かっては、流石に危険という事もあり。

俺のフードを掴み、その華奢な腕で引き摺るとい荒技からは解放してくれたものの。

シスさんの頭からは、未だに煙が昇っています。はい、カンツカ  
ンです、怖いです。

しかし原因は俺にあるので。つい先程、俺の脳内辞書にストック  
されている全ての謝罪文句を試しきり。それに対しシス様から「も  
ういい」を連発されている以上、出来る事は何も無い。大人しく怒  
りを鎮めてくれるのを待つ道しか残されていないのであった。

と、言う訳で。俺達は現在、手摺無し螺旋階段を下っております。  
目的地は三階。総隊長殿の部屋は十階だったらしいので、移動に  
は結構な時間がかかるだろう。そう、シスが罵倒の最中に言ってい  
た。

その結構な時間を、こうして先導者に対し恐れを抱きながら過ご  
すのは、相当辛い事に違いない、と。

俺は肩を竦め、小さく小さく溜息を吐いた。

すると、おぞましい事に。

俺の、かなーり前を歩いていたシスが立ち止まり。此方を振り返  
る。

ビクツとして、一瞬身体の全機能を停止させた俺。その姿を映す  
瞳は……嗚呼、遠目からも解る。真紅のままだ。

「どうした……辛いのか」

加えて彼が放るのは、凍えるように冷たい声。

俺は、自身の肝っ魂が肉眼では捉えられない程の大きさへ縮みこ  
むのを感じつつ。只管に平静を装って、明朗な声で。平坦な問いに

返答する。

「いつ、いや？ 全然辛くないよ？ な、何で？」

「今、溜息が聞こえたような気がしたのでな」

この。両サイドで可能な紐なしバンジーを。試してみたくありませんでした。

そして更に悪い事に。

何を思ったか、シス様は此方を向いたまま黙り込んでしまう。

この状況はやばい、比較的やばい、と、比較の対象もないままに危機感のみを募らせる俺が。とりあえず、「行こうよ」「以外の言葉を何か喋っておこうと。

咄嗟に振った話題、というのが。

「今、何階？」

うわあ……しょうもない。

しかし。

「何階、と言われても答えようがないが………現在地は、七階と六階の狭間に当たる」

彼は答えてくれる。ただし声帯の氷は微塵も溶けていない。

うわあどうしよう。

と、そんな事を考えていても仕方がない。一先ず俺は、なるべく、なるべく明朗な声で。

「あ、ああ、そうなんだ。じゃあ後三階弱だね………まだ結構、ある



んだね」

するど。

「そうだな。結構あるな」  
と。

王子はそう仰り。

赤い瞳のまま、不敵な笑みを、浮かべなさる。  
ドキツとした。……色んな意味で。

「そうだな……奴等を待たせるのも癪だ、それに話ならばやはり、立ち止ってゆっくりするのに越した事はない……解った。いいだろ  
う」

そう言って、彼は。

「え……え？」

つかつかと。

此方へ向かって一直線。

「ごっごめん、その、解つたいいだろこの意味がよく解らないんだ  
けど……っ」

こつも物凄いオーラを纏いながら迫られると。気押された俺は後退してしまつ。

此処は螺旋階段で。しかも手摺が無いから。  
下手をすれば真つ逆さま。だから必然的に下を見ながらの後退だ。

正直危ない。本当に危ない。

「解らない筈があるまい……貴様が望んだ事だろうが……」

な。

二人称が貴様になっっている!?

「望み……!?!? すみません……俺っ、語尾にしたいとか付けた覚えがないのですが……っ」

と。

彼が。不意に笑みを消し。その場に静止したかと思えば。カッと目を見開いて。

「敬語!」

は、いらない。

「ひっ! はいっすみませ、いや、すまん!」

すると彼は再び不敵な笑みを浮かべ、歩み出し。着々と俺との距離を縮めていく。

俺も下がろうとするが。すぐ後ろに、もう床が無い事に気づき。

「御望み通り、移動時間を短縮してやろう……喜べ」

どうしようかと戸惑っているうちに、すぐ傍まで来ていたシス。彼はそう言って。

うあああやんぬるかなー!

と。メロス宜しく全てを捨てかけた俺に向かって。

すつと。手を、差し出した。

仲直りの、握手？

そんな馬鹿な、そんな馬鹿なと思いつつ。しかしこうするしか仕方がないので、俺も震える手を差し出す。

と。

自分から接する前に。飛び出してきた彼の手には、俺の手はさっと捕まえられて。

冷たい手だ。そう思った矢先に。

彼は。

「へ」

俺の身体を。かなりの力でぐいと引き寄せ。

だ。

だ……

抱きし、めて。

「なっ何、ななななな……」

「なぬ つ!?!」

フウガがあまりの衝撃に、奇声にも似た絶叫を上げて立ち上がる。意図せず、に、が、ぬ、に変換されてしまったというのは内緒だ。

「変態じゃと!?! シェラの想い人は変態で、そそそそれでもう既に……うぬぬおのれ、僕のリモに手を出すとは何と図々しい!」  
「僕の言うな……てめえの図々しさは天晴れだな、まじで」

先程大声を出した御蔭か、いつもの冷静さと不機嫌さを取り戻した姫。鼻息を荒くする殿を華麗にあしらう様は流石だ。

「して、其奴は一体どのような奴なのじゃ!?!」

と。此処で姫のシンキングタイムスタート。

フウガの熱い熱い鬱陶しい視線を無視しつつ、暫く考えた末。

「……フーさんを限りなく水で薄めた感じだ」

その例えに、コアはにやははははと声を上げて笑い。グレイダは驚きに特異なその目を丸くして。

「うお、まじかよ!?! じゃあフウガ二号かよ、うちの隊変態だらけになんな、なっミーウィー!」

話を振られたミーウィーは眉をひくつかせる。

「あらグレイダ、何でわたくしに仰るんですの?」

「ねーねー」

と。

その時シエラが注目、とばかりに手を上げる。異議申し立てますと言いたげな表情で、その巨大な茶の中に美しき姫君の姿を映し。

「リモたんきつと勘違いしてるよ。セツナ君は変人だよ、変態ーじやないんだよ？」

「あらら、何だか複雑ですね」

エルが柔らかな微笑みを浮かべつつ、やんわりと言う。現在この空間でマイナスイオンを放つのは彼女だけだ。

しかし。エルの癒しのオーラを跳ね返す程の負の気を纏ったプリジモは、顰め面のまま腕を組み。ふん、とばかりに右斜め下に視線を落して。

「冗談じゃねえ、変人で済ませんな……アイツ狂人だ……絶対絶対狂ってやがんだ……」

そう。

魔天使が。あんな真つ直ぐな言葉を紡げる筈がない。

あの言葉……あの、「信じて」が。シスの言う通り偽りでないのだとしたら。

狂っているとしか言いようがないんだ。

考えれば考えるほど解らなくなる。

だから腹が立つ。

彼ははっと息を吐き、眼を瞑って壁に凭れた。

その後。プリジモの憂鬱を他所よそに、彼等の会話は騒がしく展開し。

その異変が起きたのは。

笑いが止まらなくなったグレイダが壁を叩きかけ、ミーウィとシエラの制止により、部屋の壁大破がからがら未遂に終わったその時であった。

「むっ?」

「にゃ?」

フウガとコアのエルフ組が同時に怪訝そうな顔をし。その様子を素早く察知した、乱れ髪のミーウィが眉を顰め、問う。

「どうしたんです?」

「いや……声……それに、風の音がする」

「声に風、ですか?」

「おー、これは多分悲鳴っすね」

コアは、にゃはは、と笑いを洩らし。

流石は小悪魔、さも愉快そうにこう言った。

「セツナさんの」

その名に敏感に反応するのは、先程その人物が好きの人です宣言をぶちかましたシエラである。

「えー!? セツナ君が何で悲鳴なんか……」

不意に。

そう言えば。と、プリジモは思い出す。

アイツと一緒に居るのは。

華の一番隊隊長。

氷帝。

シルフィスⅡゼノⅡアルヴェルド。

「……シーちゃんの逆鱗にでも触れたんじゃねえのか」  
その一言に。彼を除く全員が、無言を保つ戸の方を見る。

やがて。

通常の聴覚を持つ者でも聞き取れるようになる、五十音の一番初めの音を、無限に連続させるその声。

大きく、大きく、大きくなり……

そして。

それが止まったかと思えば。

扉が、開き。

現れたのは銀髪的美少年。その背中には純白の翼。

「待たせてしまったな……すまない、この通りだ」

しかしその人物は直立不動。よりもよって仁王立ち。

「本当に申し訳ないと思っている、思っているが……このような状況下、気持ちだけでは済まされないので世の常というもの。しかし、これ以上責めるのは止めて戴きたい」

いや、別に誰も責めてないしと。全員が心の中で総突っ込み。  
当然その声が彼に届く事はなく。

「何故ならば！ こうして二人とも、無事に到着したからだ」

二人というのは、勿論彼と。  
苦しげに呻きながら足元で蹲っている、黒髪の少年の事。

どう見ても無事ではないのだが。しかし其方へは目もやらないから気付かない。……ひよっとしたら、気付いていながらの事なのかも知れないが。

ともあれ。一番隊長シルフィス「ゼノ」アルヴェルドは、その美しい顔を上げ。

そして、こう言うのだった。

「そう……移動時間を大幅に短縮してな！」

その瞳は翡翠色。



続×6・式日目…君を信じる

「ん？」

突っ込みどころ満載な登場を、さらりとやってのけた一番隊隊長。

彼は漸く自らの足元を。其処に蹲る哀れな黒髪を見る。

「セツナどうした、そんな所で何をやっている。到着したぞ？ さ

っさと立ち上がれ、さっさと」

「あ……うあうあうあ……」

「うあうあではない。さっさと立ち上がれと言っている！」

そんな無茶な。

と。

彼は激しい吐き気の中。心の中でそう訴える。そう、心の中だけで。

もう二度と。彼を怒らせるような事はしない。

俺は固く、そう誓いを立てたのです。

気がつく、いつの間にか。俺は部屋のソファに座らせて載いて

いて。周りには。見知らぬ人、数名か。

しかし今一状況を飲み込めていない俺は俯いて、御人形さん宜しく御淑やかに、小さく小さく纏まっている。

「うおおおおお！　すげえ、すげえぞ隊長どん！」

「何がだ」

「コイツ魔天使だってーのに全く覇気を感じねー！」

と。俺の傍らで、凄まじい音量の雄叫びを上げていらっしやるのはガングロ少年。赤茶色の髪は癖毛の酷い俺に負けず劣らずツンツン跳ね。そして何より。

俺を覗き込むその瞳。その色が、金色だという点まではまあいいとしよう。

問題は虹彩。

これは、余りにも細くないか？　これじゃあまるで……

鰐<sup>ワニ</sup>。

いや、鰐に限らず、爬虫類全般。多分恐竜もこんな瞳をしていたんだろう、そう思わせる。まさか人の目を見てジュラ紀に思いを馳せる事になるうとは。

まあ。ジュラ紀は置いておいて。

シスと恐竜君以外は。俺からある程度の距離を保ち、近づこうとしない。

感じられるの視線は四通り。

もの珍しいものでも見るかのようなフレッシュな視線。

多分俺の様子を窺う慎重な視線。

何故か、熱い視線。

そして最後は。

後方から感じられる。鋭く刺すような、身に覚えのある殺気混じりの視線……。

「お前達」

と。声を発し、シスが俺の隣に腰を下ろす。

うわ長い脚だなと、俺が思わず羨望の眼差しを向けてしまつ中で、彼は優雅にその脚を組み、更に腕を組み。

「紹介しておきたい者がいる……というのは、瞭然だな？」

「はいはい」

明るく、この白い空間に良く通る声。放つたのは。

「新入りさん、でしょ？」

と。背後から俺の視界に現れたのは、見覚えのある少女の姿。短めの短パンと白いニーソックスに彩られた脚線美が眩しい。

俺を真っ直ぐ見据える、キラキラ輝く大きな瞳は鮮やかな茶色。

それと同色の艶やかな髪を靡かせ。

彼女はすたすたと此方へやって来て。

俺の、と、とととと隣に腰を下ろす。

そして固まる俺に向かって。ごく間近で、にーっこり。

「半日振り」

「あ……どっ、どっも」

高鳴る鼓動を聞きながら、彼女の名を思い出して。はっとする。シエラ「レイルズリード」。

レイルズリード。

「あっ、あー！」

急に声を上げたもんだから。シエラちゃんはきょとんとしてしま  
う。

「何？」

「いや、あ、何、でもない」

「そう？ あっ、そうそう！」

そう言っつて、パン、と。彼女は胸の前で手を打ち鳴らし。

そして、真顔で。

「セツナ君は、変人だよな？」

「……はい？」

その質問の意図が。理解出来ない。

すると彼女は。陰に潜んでいた、その正体を鮮明にする。

「変人で、変態なんかじゃないよねっ？」

えーと。……何で？

疑問に思いつつも、そんな眼で見つめられると頷くしかない。し  
かし本当はどっちでもないと言いたい。

と。その時、右隣から。

「話の続きを、したいのだが」

「うわ、ごっごめん！」

圧が掛けられた声に、胸のしこりが取れないまま、俺は焦って前  
を向く。コラ俺の馬鹿野郎、彼は絶対に怒らせないと誓ったばかり  
だろ？

早急な対応が功を奏して事無きを得る。シスは声のトーンを標準  
ラインに戻し。

「シエラが言った通り、私の隣に居るこの子は新入隊員だ。彼の入隊に関しては、総隊長殿からも許可が下りている。この通り……この子は妖天族、それも魔天使だ。しかし、アス力であろうと、ありたいと願うその意思は、我々のそれと寸分の違いもない」

沈黙が走る。その中で。

俺の左隣で。シエラちゃんが、頷いてくれたのが解った。

「ではセツナ」

「え」

俺の名を呼んだ彼は、柔らかな背凭れに身を任せ。

「挨拶を頼む。言っておきたい事を言っておけ。全てな」  
全て。

不意に思う。

彼等に、全てを理解してもらうには。どれほどの時間が掛かる事だろうか。

「全てな、って」

俺が苦笑したのを見て。シスは。

「今、お前が言っておきたい事だ。お前の意思であるならば何でもいい」

またまた。難しい事を言う。

「……うん」

それでも。

難題を突き付けられた俺は。やっぱり立ち上がるしかなくて。

俺は温もりを払って。  
やっぱり、そうする。

自分が。部屋に居る全員の視線を一身に受けているのを、改めて感じる。

俺は大きく息を吸い込んで。

「風岡、刹那といいます。はじめまして、じゃない人もいるけど、とりあえずはじめまして」

自分の言葉を、紡いでいく。

「今日から、アスカになりました。でも……俺、馬鹿だから、はっきり言つて、アスカが何なのかまだよく解つてないです。アスカが何で、それがどれだけ大きなものを背負ってるのか、まだ、あんまり。……つていうのも、俺がアスカに入った理由……世界を、守りたいって、強い思いがあったからじゃないんです。こうなる事が、アスカに為る事が、今の俺に出来る全てだと思つたからです」

其処までで、ひとつ。俺は唾を飲み込み、口の中を潤して。  
そして。その先に来る、言葉を探して。

「俺は」

俺は眼を瞑る。すると、黒い闇の中に、薄らと赤。  
そう。その中で、見つけ出したのは。

「……俺は、異世界人だから」

反応は、無かった。

予想していたのは、は、とか、エクスキューズミー、とか、そん

な筈ないじゃん、とか。

もつとも、それは。彼等が示したものが、聴覚で受け止められるような反応ではなかった、それだけかも知れない。目を開ければ、彼等は目を丸くしていたりとか、自分の耳を疑う素振とか。

うん、きつと、そうだ。それは当然の事だと思う。

だから、それを恐れているのは。きつと俺が弱いからだ。

「それに、魔天使だから。得体が知れないから……不気味かも知れないし、怖いかも知れないし、それに……俺みたいなのが近くに居る事自体、駄目です、無理です、って、思つかも知れない。それは、きつと仕方がないことで」

俺は。目を開けて、光を浴びて。

それでもまだ怖いから。俯いて。

「でも」

笑ってみる。

「すいません。俺……それが嫌なんです」

言葉は沈黙に抱かれる。その沈黙は、徐々に心地良いものに変わっていく。

彼等が、俺の声をちゃんと聞いてくれている、それが解るから。

内に秘める思いは、知れないけれど。それでも。

俺は。顎を上げてみる。

「だから俺はアスカに入ったんです。俺は、俺の事を解ってもらいたいです。いや、完全理解してほしいなんて望まない、ただ……俺を、俺として見てほしいんです。俺は風岡刹那で、確かに怪しい奴だけど、変人なのかも知れないけど、それでも兎に角、風岡刹那で……」

其処で、自分の名前を繰り返したのに気づく。

あーあ。やっぱり。上手く言えない。

「あー……つまらない動機かも知れないけど、でも、それが俺の全です。はい、とりあえず全部です、これで以上です」

半ば無理矢理話を締めて、俺はソファに腰を埋め。身体力を抜いた、その途端。

「主の志向はよく解った」

重低音。それが生じた沈黙をすぐに裂き、響いた。

俺は発言者の方を見る。向かって右……シスの隣に聳え立つ長身の男性。長い深緑色の髪を、後頭部、高い位置で結わえ。同色の瞳が俺を見下ろしている。

美形だ。

ただ。その美形の耳は、異常な程に尖っていた。

「しかし、ひとつだけ理解出来ん点がある。……異世界人、じゃと？」

特異な耳に目が行っていた俺ははっとする。



やはり、来た。

俺が再度睡を飲み込んで、そうです、と。肯定しようと、口を開きかけると。

「フウガ。この子の話は本当だ、偽りなどではない」

シスが平坦な声でそう言い放つ。フウガと呼ばれた青年も負けじとその低い声を張る。

「何故言いきれる？ 証拠などあるまいに」

「私が証拠だ」

そう言っつて。シスは俺に銀色の後頭部を向け、彼を見上げる。

「セツナには悪いが、私の能力チカラを使用させて貰った。だから解る。なんならば私が視みたもの、その全てを……お前の中に移して自ら確かめてみるか？」

すると。フウガさんは視線を逸らし。

「……要らん」

「そうか、それは残念だ」

声色を変えずそう言い、視線を前へ返したシス。その美しい横顔を見て思う。

シスの力つて。一体、何だ。

それは、そんなに絶対的な物なのか。しかも、それを俺に使った、つて。

「この子は異世界人だ」

そう言えば。俺は何かを忘れてる気がする。

そう、大事な何か。確か、シスに言われた事。

「何らかの力により、時空障壁を越えてこの世界へとやって来た者。この子は昨日、戦場となっていたシルドジークに突然現れ……そして突然消えた」

と。俺は再び、はっとする。

突然、消えた。

俺自身は消えた覚えがないから、俺が消えたのは、恐らく眠っている間。

俺が来たのも。きっと眠っている最中で。

俺の移動には、眠るといふ動作が関わっている。

それは。夢である故かも、知れない、けど。

「昨夜、帰還後に総隊長殿の元へ行き……その事について御報告申し上げた。すると総隊長殿はこう仰った。『その者は再びこの世界に現れるであろう。但し彼が現れるのは、最も強い導きがある地点』

「導き？」

思わず声を発した俺。シスは俺の方へ視線を流して。

「現在お前が履いている靴の事だ」

俺は、一頻り眼を白黒させた後。

ばつと下を見る。其処にあるのは自分の足を柔らかく包んでいる白。

「これ!？」

「そうだ。総隊長殿は、お前の魔力が最も色濃く残ったもの、それがお前を引き寄せるだろう、と。だから私は、お前が長く接していたもの、つまりその靴を取りにあの町へ戻り……そしてそれをリモの部屋に……リモの寝台の下に忍ばせておいた」

成程、と。俺は頷き。

しかし総隊長さん凄いなーと。再度頷きかけ、て。

「つておい!」

発した声が誰かのそれとかぶる。その人物は恐らく俺の背後から、主成分が殺気である鋭い視線を向けるその人だ。

「リモは相当の事がなければ目を覚まさないからな。私の部屋に置いておくのもいいが、それではつまらないだろう?」

「じゃあこいつが俺の部屋に居たのはためえの所為か……つまるかつまんねえかで決めやがったつてのか……」

リモさんの声が震えている。脳内のボキャブラリーが乏しい俺は、つまらないの反意語がつまるのかは解らないが、怒りに震えるその姿はさぞ美しい事だろう……つておい。

「そうだ」

悪びれもなく彼は答えた。

嗚呼。俺はこの人の所為で死にかけたのですね。

「そして、お前はやはり、此処へ来た。総隊長殿の推測の通りだ。

……全く以て、な」

しかし。彼のお陰で、俺は路頭に迷わなかったんだ。知らない大地で。知らない……しかも俺を恐れ、嫌い、憎む人々の中を。駆けずり回らずに済んだのは、彼のお陰。

とは言っても、俺がこの靴に呼び寄せられたのなら。シスが行動を起こさなければ、俺は今頃あの町に居たんだろうな。平穩を取り戻したあの町。きっと、俺の事を憎んでいる人々の町。そう考えると、感謝するべきなんだと思う。

不意に思い出すのは。俺の事を信じてくれた、俺に向かって微笑んでくれた、あの少女の事。

そう言えば、彼女はどうなったのだろう。相当深い傷を負っていた筈のあの少女は、俺が目覚めた時、あの骸骨と共に消えていた。

シスならば知っているだろうか。

「以上が、私の知る全てだ。ちなみに質問は受け付けない」

思案の中、話の終わりを告げる言葉。シスはふつと息を吐き、足を組みかえる。

と。

「奇怪な話ですわね」

ですわ？

お、お嬢様口調、いや、声色からするとレディー口調!?

一体誰が、と視線を巡らせ。

すぐにその人物を探し当てた俺は、またしてもその御姿に見惚れてしまう。

腰の辺りまで真っ直ぐ伸びた、海の如き濃青色の長髪。そしてよく似合う眼鏡の奥に、俺……の、隣のシスを映す空色の瞳。美しく、そして見るからに聡明そうな女性が、腕を組み凜と立っていらっしやっただ。

「まさかそんな事があるなんて……けれど、シス様が仰るのですから真実なのでしょう。わたくしは信用致しますわ」

「そうですね。シスさんが言うんですもんね」

と。同調してそう言ってくれたのは、その御隣の。

これまた、美少女。

ふんわりと、花開くように微笑んで細めるのは、兎宜しく赤い瞳。髪の色は乙女の桃色だ。後方になるにつれ短くなるというヘアスタイルで、真中で分けた長い前髪が、その豊満な胸の辺りまで垂れている。

「それに、わたし達の世界の他にも、いろんな世界がある……考えるだけで楽しいです。だからわたしも信じます」

「おー、俺もー！」

と。おっとりとした彼女の声に被さる大音量。上げたのは恐竜少年だ。

嬉しい。

自分を信じてもらえたのではないという事は解っている。けど、嬉しい。信じるという言葉浴びるのは。途方もなく、嬉しい。だから、有難う御座います。そう言おうと腰を浮かせた俺を。

「は」

後ろから伸びてきた腕が。捕まえてぎゅっと抱き締める。

「えええ！？」

「にははははー、俺もばつちり信じるっすよー、シースさんっ  
にはは！？」

「それは何よりだ」

有り難い、それは有り難い、しかし猫少年君、君の顔が見えませ  
ん。

彼の所為で腰を下ろす事も立ち上がる事も出来なくなった俺の横  
で。シスが再び、長身の耳長青年の方を向き。

「フウガはどうだ」

すると。集まる視線の中、彼は隣に居る姫君の方を向いて。

「さあおう」

「便利な言葉だ」

「……こつち向いてんなアホ」

これはフウガさんに向くりモさんの綺麗な、かつ尖った声。

すると俺を捕獲している猫少年が。不意に明朗な声で彼に問う。

「リモたんさんはどうっすかー？」

俺はこの時、漸く姫の方を見た。

俯いて口籠っている彼は、やはり光を纏い。長い髪をうなじの辺  
りで一本に結わえた髪型が大変よく似合っている。いや、きっと彼  
はどんな髪型をしても似合っただろうな。三つ編みとか見てみたい。

……こつちというのが邪な思考というのだろうか。

俺がこつそりと反省した時。彼は。綺麗な声で紡ぎ出す。

「……シーちゃんの話は、信じてもいい」

嗚呼、と思う。

けど。お前は信じない。

彼は、きつとそう言いたいんだ。

それでもいい。

後で。一緒に居る中で。信じてもらえるようになれば、それでいいから。

それが、俺の目標だから。

「……みなさん……有難う御座います」

俺は言った。

「君も」

見つめる先で。顔を上げた姫の視線が、俺のそれと一瞬、ぶつかって。姫の頬が、ほんのりと赤く染まる。それを隠そうとしてか項垂れるが、もう遅い。肌が白いから、闇の中に身を隠してもあまり誤魔化しが効かないのだ。

やっぱり可愛い。可愛すぎて目に毒だ。

と。

「シエラさんは？」

その時、猫少年が彼女に問うたから。

「あたし？」

俺もシエラちゃんの方を向く。そう言えば彼女は一声も発していない。絶対信じねえと吐き捨てられたらどうしようかと、一抹の不安が過る中で。

「言つまでもないでしょ？」

きよとん、とっていた彼女は、猫少年に向かってそんな事を言う。

「え？」

そう、首を傾げると。彼女は俺の方を見て。解んないかな、そう  
呟き。

「信じるよ」

そして。にっこり。

「好きな人の事を信じるのは、当然でしょ？」

「…………え？」

今、何と仰いました？



続×7・ふつか目：一番隊諸君

「好、き？」

彼女が放った、ような気がするその言葉。反復する俺の笑顔は硬直している。

「好きと、仰いました？」

するとシエラちゃんはにっこりのまま。ゆっくり、大きく、はっきりと頷いて見せ。

「そうですよ」

その明朗な声は室内によく響き、四方八方から俺の身体に激突。あちらこちらで火災が発生、頭からは濛々と煙が上る。

恐らく、というか間違はなく。俺の顔は赤い。いや、顔だけといわず身体中赤い。何故ならば酷く熱い。俺を捕えている猫少年にも、ばっちり伝わってしまったに違いない。

と。

俺にくっついていてる彼が言う。

「にははは、何だ、シエラさん本気だったんすねー」

知ってたの！？

この際、水着なんか無くたっていい。そう、この海色の上着と地球産の灰を纏ったまま。

灰色の空の下。崖の上から、唸りを上げる冬の海へとダイブしてしまいたい。それくらいしないとこの熱は冷めないだろう、何ならそのまま流してくれちゃっても構わない……

ちよっと待て。落ち着こう、俺。

彼女の「好き」の意味は。まだ、はっきりした訳ではないんだ。そうだ、ひよっとしたら。

「……ライクの方？」

「らいくって、何？」

しまった、英語は通じなかった。畜生、日本の現代っ子にとっては相当な痛手だ。

だって。ライクを日本語にしたら「好き」で、ラブを英語にしても「好き」なんだ。言葉にすると同じだけど、意味合いがかなり異なってしまう。

いや、でもラブは「愛」なのか。しかし、

愛じゃない方？

なんて訊くのも嫌だ、恥ずかしすぎる。

くそつどうすればいいんだ、どうやって伝えればいいんだ、どうして俺はこんな所だけ父さんに似てしまったんだ、そして周りは何故無言なんだ、何故こんな状況に陥らねばならなかったんだ、と。俺が悶々としていた時だった。

無邪気なここに全開のシエラちゃん、ではなく。背後、というか俺の右隣に腰を下ろしているシスさんが。

あっさりさっぱりはつきりずっぱりと。

「何だシエラ、お前セツナの事を愛していたのか？」

ダイナマイトに。チャッカマンで点火。

きつ……気の所為だ。

シエラちゃんが頷いたように見えたのは俺の夢だ幻だ。

「ちっ違う！ 違う筈だ絶対違う、そうだよ違うに決まってるよー

！」

彼の方を振り返って必死に訴える俺の前で。彼は顔色一つ変える事なく。

「何故お前が答えるんだ」

「だって、だって違う、だから、そもそも俺達は……」

出会ったばかり。

そう言つと恐らく、返ってくるのは「それがどうした」。

そうかも知れないけど、でも、しかし、けれども、例えそうであつても……。

と。火花を散らす思考回路で、俺がその先を辿っていると。シスはふつと息を吐き。

「別にお前達の色恋沙汰に口を出すつもりはないが……その事ならば後日、二人でじっくり話し合ってくれないか」

「はい」

明朗な声で返事をしたのは勿論シエラちゃんです。

熱い頬の俺は項垂れつつ、心の中。密やかに、こつ囁く。

ごめん。……話し合いは、無しで。

「コアもそろそろ離してやれ」

シスがそう言い放つと。

コアさん、つまり猫少年にはやは、と軽快に笑い。俺を捕まえていた腕から力を抜く。

漸く解放された俺は。色々と力が抜け、ふらふらとソファの上に腰を下ろした。

「では」

すると。入れ替わりにシスが、立ち上がり。俺の姿を翡翠色の瞳に映して。

「新入りの挨拶も終わった事だ、此方も自己紹介といこうか」  
「おお！」

と。その金色の瞳を輝かせたのは恐竜君だ。先の会話で八割弱の体力を消耗した俺が、しかし本当に変わった虹彩だな、と虚ろな視線を送っていると。

「さて、私からいくぞ、セツナ」  
シスは自身の胸に左手を当て。名を呼ばれた俺がはっとして彼の方を向くと。

彼は微笑んで。

「私は戦闘部隊一番隊長……名は、シルフィスⅡゼノⅡアルヴェルド。聖天使族と虹族、双方の血を受け継いでいる。所謂、混血と呼ばれる類たぐいの者だ」

え？

と、俺は。二回、瞬き。  
そして。

「……はい？」

天使？

それに、虹？ 族？

ふと思い出すのは。

昨日。シスが俺にした、最後の質問。

種族は？

俺が、魔天使であるように。  
彼は。彼もまた。

人間じゃ……ない、のか？

するとシスは。俺の混乱を察知したのだろう。

「お前の世界の事情は知らないが……とりあえず此方には、人族、と呼ばれる多数の種族が存在している。……頭に入れておけ」

「人、族……」

人間じゃなくて。人族。

それは、例えば。此方の世界のRPGやファンタジーの世界に登場する、エルフや人魚や妖精さんみたいなものだろうか。

そんなものが存在する。

それって。

凄い。面白い。

「じゃあシスは、天使なんだね？ だから翼があるんだね？」

おれが身を乗り出すようにして尋ねると。

シスは聖天使族だ、と訂正して。そして頷く。

……凄い。

「何だ、嬉しそうだな」

「え？ 別に、そんな事ないよ？」

「そうか？ ……ならば続けよう。私の武器は……見た筈だな？」  
俺は頷く。

彼が使うのは。彼の髪と同じ、銀色に輝く鉄の棒。しかも三本に分解可能。今もその状態で、彼の太腿に取り付けられたホルダーに収まっている。

そして。

「それから……大したものではないが、幾つか魔法を修得している。  
得意なのは氷の精霊魔法だ」  
クランティア

またまた、良く解らないカタカナ単語が出てきたが。シスの言葉の意味は解る。

骸骨を一瞬にして氷の華の核と化した、凄まじい冷気。

あれが彼の魔法だ。

「簡単だが、以上だ。宜しく頼むぞ、セツナ」

「……うん」

そして彼は。再び俺の隣に腰を下ろさず、壁際へ。恐竜君の隣で白に寄り掛かる。

「じゃあ、次はあたし！」

と。横でシエラちゃんが飛び上る。

くるりと方向転換し、此方を向き。後ろで手を組み、軽く屈んで。  
「あたしはシエラ……シエラレイルズリード。一番隊の聖光魔導アリシテイレイ士だよ。救護部隊アーティアなんだけど、戦闘部隊にも所属してるの」

彼女が口にするのは。薄らと聞いた覚えのある単語。  
そして。

「種族は、人間だよ」

……俺が焦がれていた、響き。

種族として。彼女は、自分の種族として、その名を紡いだ。

改めて気付く。

此方では。人間である事が、当り前では、ないんだ。

「あたしの得意なのは聖光魔法<sup>アレシディア</sup>。癒しと光の魔法だよ。セツナ君が怪我したら、あたしがずばっと治しちゃうからね」  
「ず、ずばっと……」

此方も懐かしい響きだ。

「アスカって大変なんだ。任務で忙しいし、辛い事だった結構多いし。けどね、みんなと一緒に居ると楽しいの。それに、世界を守ってるんだーって、すっごく誇らしく思うのね」  
と。彼女はにっこりした。

それは只管に明るくて。只管に強い、笑みだった。  
「だからセツナ君も頑張ろう！ うん、宜しく！」  
そして。彼女は手を差し出して。

あんな事があった後だけど。俺も笑って、手を差し出した。  
触れた彼女の手は。柔らかくて。温かで。それを感じて、やっぱり俺の頬は熱くなる。

繋いだその手を、大きく二度。縦に振り。それを、ふっと切って。

彼女は再び、俺の隣に腰を下ろす。

「次、どーうぞ」

「おっしやああー！」

と。次に俺の前に、威勢良く現れたのは。健康的な浅黒い肌と、爬虫類の眼を持つ恐竜君。

彼は俺の傍らでしゃがみ込んで。俺をその特異な瞳で見上げ。にっ、と笑って白い歯を剥き出しにし。

「よ、変態」

だから、何故だ。

と、それが伝わったのか。彼は豪快に笑い声を上げ。

「冗談だって の！ 宜しくな魔天使、俺はグレイダ、竜族だ」

ああそっか、種族は色々あるんだっけ。

で。今度は竜か、何だ、竜か。

りゅ……う！？

ドラゴン！？

「ま、此処じゃ珍しい種族同士、仲良くしよーぜ」

珍しいじゃ済まされない。伝説だ、想像上の生き物だ。

しかし彼は、見たところ虹彩以外は普通の人間。何処がどのよう  
に竜なのだろうか。

と。俺が彼の姿を再度観察していると、彼は。何だよ変な反応だ  
なーと、再び声を上げて笑い。

「でよ、俺の武器はバーレニウスっつーんだ。三代目くらいなんだ



けど、これが結構自信作だよ。よっしゃ、今度会わせてやる、楽しみにしとけ！」

「は、はい」

とりあえず、返事をしたけど。

会わせるって。貴方の武器は生きていらっしゃるんですか。

疑問点を幾つか残して、彼はよっと立ち上がり。

「じゃ、いーぜ」

と。

少しの間をおいた後。

「なら、次はわたくしが」

次に眼鏡美人が壁から背を離し、数歩前へ。腰まで伸びた真っ直ぐな海色の髪が波打ち、美しい。

「御機嫌ようセツナさん」

「ご、御機嫌よう」

「わたくしは海霊族……人魚のミーウィと申しますわ。どうぞ宜しくお願い」

「はあ、此方こそ……人魚!？」

俺のリアクションに彼女は眉を顰める。

「可笑しな事を仰る人。貴方は魔天使でしょう?」

頷く。何度も頷く。

人魚。

それも、魚人じゃない。

冒険者の憧れ。童話の世界の住人。

まさか目の当たりにする日が来ようとは。しかし彼女の容姿もまた、普通の人間チックで。

ああでもシスも普段は羽生えてないし。何かのはずみでこの美脚に鱗の生えるのだろうか。ひよっとしたらこの白いズボンに隠されているだけで、今も鱗がびっしりなのかも知れない。

俺がその、ちょっと嫌な考察に集中しかけた時。彼女は再び紡ぎ出す。

「わたくしは精霊魔導士<sup>クランテイレイター</sup>。破壊系の魔法専門ですの。破壊系の魔法って結構強力ですよ。足手まといにはなりませんわ」

「そ、そうでしょうね……」

「あら、嬉しいですわ」

そう言っただけ彼女は笑みを浮かべる。大人の色香漂う微笑だ。

「ではセツナさん、またお話ししましょう」

はい、と俺が軽く頭を下げ。彼女が頷いて、青を靡かせつつ定位置に戻ると。

「にやはは、じゃあ次俺が行きまーす」

と。背後から猫少年の声。

振り返ると、其処に彼の姿はなく。

「こっちつすよ」

声に導かれるままに、前方に視線を戻すと。

「……あ」

彼は。彼は確か。

「はじめましてセツナさん。俺の名前はコアっていいいます」

「君、あの時の」

「はい。セツナさんが来た日……シルドジークで、<sup>アルテスタ</sup>帰魂の導き手だ

った奴つすよ」

幼げな、可愛い笑顔で立っていたのは。帰魂の時、中央で舞っていた少年だった。

アルテスタ

フウガさんと同じ、つんと尖った耳が、藍色の髪からはみ出している。左耳には白い紐状の耳飾り。そして。

瞳が。左が深緑で、右が。

俺と、同じ。

「俺は母方がエルフで、父方が墮天使なんすよ。だからこっちの眼が黒いんす」

と。彼は長い袖から覗いた人指し指で、自身の黒を指し。

エルフト。そして、ダ天使、と。俺の種族とは、頭の子だけが違う言葉を口にする。

……エルフ!?

「エルフって、エルフってあのエルフ!? あの耳が尖つ……あああそういえば尖ってるー……」

「には、そうつすよエルフつすよ。でもこの耳尖ってるだけじゃないんです、とびつきり良いんです、便利つすよ」

うわあああそれ知ってるー、と。

震える声で言いつつ頭を抱える。

何て事だ。まさかとは思っていたけど。

天使や竜や人魚に加えてエルフまで。RPGの世界じゃ定番な亜種エルフまで。じゃあ妖精もホビットもいるんだらどうせ、いいよもう驚かないよ……。

とか、心の中で叫びつつ。

鼓動の高鳴りが静まらないんですけど。

と。俺がだらりと手を垂らしたところで。彼はにやは、と挟んで続ける。

「俺も魔導士なんすけど……レルナティア 舞踏魔法が得意っす。ソレ使う人ってアスカでも珍しいんすけどね」

はい、ティア族確か三つ目。レルナティア。

此処まで来るとどんどん来い、そういう気分になってくる。覚えたかはまあ置いておいて。

「じゃあ、一緒に頑張りましょう。何卒、宜しくお願いしまーす」と、軽く一礼。

そして彼は。ミーウェイさんの御隣の、桃色の髪の少女に目配せしてから。後ろで手を組んで後退する。

自分の番が回ってきたその少女は、頬を赤らめ、おずおずと一歩前へ。

そして、俺に向かって深々と腰を折り。

「ど、どうもはじめまして！」

「はっ、はいどうもはじめまして！」

明らかに振り絞ったのだと解る大きな声に、俺も思わずそう返す。すると彼女はぱつと身を起こし。……恐らく、ミーウェイさんよりも豊富な胸の前で指を組み。赤い瞳に俺を映して。

「わたし、エル＝クルベリーです。花族の者です……でも、踊りはあんまり得意じゃないんですけど」

照れ笑いするエルちゃん。彼女の言い方だと。

花族という種族である、イコール踊りが得意。

そういう方程式が成り立つように聞こえる。一般常識なのだろうけど、残念ながら地球産の俺には通用しない。

「わたしの武器は短剣です。あと、精霊魔法……克蘭ティア……雷の精霊魔法を少々使えます」

そして。言い終えた彼女は、ふうと息を吐き。

頬を赤らめたまま。花開くように、ふんわりと微笑んだ。

「宜しく申し上げます、セツナさん」

俺はぼーっと、見惚れて。

返事をする事さえ。忘れていた。

と。

コアさんがにや？ と疑問符付きで言ったのが聞こえ。はっと我に帰った、その時。

ガス。

「あ痛っ!?!」

後頭部に振り下ろされた鋭い衝撃。シエラちゃんが驚きに声を上げ。

星がちらつき、視界は涙が滲んで曇っていく。

「……いで……」

頭頂部を抑えて何事かと後ろを振り返ると、其処には。

まさに。光。

「次……俺だ」

完全無欠の美を誇る、麗しの眠り姫様。

「い、一体何をなさったのですか！？ この痛みは何によるものなんでしょうか！？」

混乱に裏返った声で俺が言うと。答えたのは彼ではなく、その隣に舞い戻っていたコアさんで。

「にははは、踵落<sup>かかと</sup>としっすよセツナさん  
「踵落とし！？」

そんな、姫がそのようなアクティブな事を。ていうかどんだけ身体柔らかいんですか姫。

そんな眼差しを向ける俺から、ふん、とばかりに顔を背ける彼の頬を、淡い金が柔らかかに打つ。

「プリジモ」ノードレー……星と虹の混血だ」

星。虹。

それが何を示すのか全く以て不明だが、流石姫。綺麗な取り合わせでいらっしやる。

「武器は鎌。……じゃあな変態、俺からは終わりだ」

「あ、あははは……早い」

「うるせえ」

見た目からは想像できない程にぶっきらぼうな姫は、そう吐き捨てて部屋の隅にお戻りになる。

しかし。この脳天の疼きさえ消えない、短過ぎる自己紹介文の中で。先程も言われた「変態」という呼称は、彼から広まったものだと気付く。

止めて、欲しい。

と、こっそりと項垂れつつ。再び正面を向いて、ソファに腰を埋

めると。

「では」

俺の前。聳え立っていたのは。

「最後は、儂<sup>わ</sup>じゃな」

放つのは重低音。長身の美青年である。

細長い目。深緑色の瞳が、俺を見下ろしていた。

「儂の名はフウガ……一番隊の副隊長じゃ。種族は、一目瞭然じゃろっ」

そう。その尖った耳は、コアさんと同じもの。

俺が放ったはい。それを聞き、彼は続けた。

「儂は己の肉体のみで戦う。……それから、二階の医務室を任せられておる。病に侵された者を看護するのが仕事じゃ。体調が優れぬ時は儂の元へ来ると良い」

はあ、了解です、と。何でこの人老人口調なんだと、今更ながら不思議に思いつつ、俺が頷くと。

不意にグレイダさんが、豪快に笑い出す。

「セツナ止めとけ、こいつ超変態だかなー、何されっかわかんねーぞー」

「そうなんですか!？」

その問いに。何故かフウガさんは答えず。

黙って、姫の隣へと。

それを見て。少なからず不安を覚える俺でした。

ふつと小さく息を吐き。此方を見たのはシスだった。

「これで全員だな。名は覚えたか？」

「……多分。うん、多分ね」

正直に言つと、武器とか魔法とかは覚えられていなかった。

「そうか」

すると。シスは背を白から離し。

「では解散する。本日は休日だが……最近骨族の残党が、セイラム各地に頻繁に出現している。何時いつ緊急の出動要請が来るか解らない。それを心に留めておけ」

了解、解つた、はい、と。ぱらぱらと返答が来る中。シスは俺を、その翡翠色の瞳の中に映し。

微笑んで。

「お前は任務だ」

一瞬。彼の言葉の意味が理解出来ず。瞬き二回の後、漸く気付く。

「え？ これから任務に行くの？」

「そうだ」

「俺が？」

「そうだ」

ふと思い出すのはシスの説明。彼によると、任務内容は専ら戦闘……。



「セツナ君頑張れ」

と。隣でナイススマイルとガッツポーズを決めるシェラちゃん。残念ながら小心者である俺は、おう任せとけと笑顔を返す事など出  
来ず。そう、あたふたと。

「が、頑張りたいです、頑張りたいけど、でも俺武器もまだ」

「だいじょーぶ!」

持っていないし渡されても多分使えない、そう返そうとしたが遮ら  
れる。

「戦闘はないよ」

「え?」

「そうだ」

と。振り返ると、彼は既に俺の傍らに居て。

「これから行くのはシルドジークの巡回任務……念を入れての、な」

ああ、そっかーなら大丈夫だーと。口ではそう言いつつも。

不安が拭えないのは何故だろう。

続×8・フツカ目：発つ前に

隊長殿から解散が掛かったので。

部屋から出ていくミーウイさん、エルちゃん。彼女等に会釈されたので、俺も笑顔でお返しする。多分俺の笑顔は引き攣っていた。女性と話す時はどうも固まってしまう。

と。

其処でフウガさんはまだ隅から動かない姫君に突然ハグを迫り。シスが冷やかな声で放った制止と、何より姫の近づくんじゃねえキツクが炸裂。

姫の身体の柔らかさと、フウガさんの変……人つぶりに、俺はただソファの上で唾然とする事しか出来なかった。

そのやり取りを俺の隣で目撃し、声を上げて笑っていたシエラちゃんも。じゃああたしも用事あるから行くねまたね、と。ノックアウトされたフウガさんを立たせ、彼を部屋の外へ押し出してから。その細い手を、干切れてしまうのではないかと思う程にぶんぶん振って去っていった。

猫少年ことコアさんはまだその場におり。

グレイダさんは。姫の部屋と構造が同じならば、寝室に通じる戸を開け放ち。その中に入ってしまった。

「シーちゃん」

と。静かになった空間を、その綺麗な声で揺らしたのは。

姫君ことプリジモ「ノードレー」。シスの瞳が彼を真っ直ぐ捉える。「話したい事、あるから。……今日の夜、部屋行ってもいいか」

え。

俺が身を捻って、姫君の方を向くと。

目が合って、その夜色の瞳の中に俺が居たかと思えば。やはり、すぐに視線を逸らされる。解ってはいるけど、やっぱりちくりと心が痛い。

「構わないが……そういう事ならば任務から帰った後に、私がお前の部屋に赴くぞ」

すると。

姫は俯いて、首を小さく横に振る。

「いい。……俺が行く」

「にははは、リモたんさんはシスさんに浸<sup>ひた</sup>りたいんすよ。癒して欲しいんすよねー」

と其処で。はっきり言って怪しい内容を声に出してしまったコアさんに対し、姫睨みが発動。

「……何訳解んねえ事言つてやがんだ」

にはははは、とコアさんが愉快そうな笑い声を上げる中。シスは怪訝そうに眉を顰めた。

「癒す？ ならばシエラの方が良いのではないか？」

表情で解る。

嗚呼。この人、本気で言ってる。

姫は苛々した様子で目を閉じ。しかしすぐに眼を開けて。

ほんの一瞬だけ、俺の姿を一瞥したあと。つかつかと部屋を出ていった。

残されたのは四人だ。俺達はいつ出掛ける事になるんだろうと思

いつつ、ふと寝室の方を見ると。

グレイダさんが。

床や壁の白とは全くと言っていい程に合わなそうな、木製のローテーブル。相当重そうなそれを。

楽々と片手で持ち上げて……。

「な!？」

「あんな反応おもしろいなー」

そんな、真剣に目を丸くなさらくとも。

彼は平然とそれを、ソファの前に配置し。天井に向かって、大きく大きく伸びを一つ。そして徐に俺の隣まで来て、ソファにすとんと腰を下ろした。

「……グレイダ、さんって」

「あー? どうした魔天使」

……魔天使。

「あの、俺、セツナです」

俺は、再度名乗る。

認める。良く解らないけど、兎に角、認めた。

俺がそうであるという事は、シスが……この世界の人々が。そして自分が。知っている事。

けれど。それでも魔天使と呼ばれるのは嫌だ。

「出来れば、その……俺の事は、名前で呼んで下さい」

「おー、そっかそっか、あんなセツナって名前だったのなー」  
ん?

違和感一つ、不意に落つ。

「あれ、俺、ちゃんと名前、言った……」

あれね。何だか自信が……。

「よね!？」

ぱつと振り返った、その先で。シスはやれやれと頭を軽く振る。

「何故此方を見る」

「にはやは、だいじょーぶつす、言っただつすよ。俺はちゃんど覚えてますもん。グレイダさんの頭がアレなだけなんでー」

にこやかに答えてくれたのはコアさんだった。ほんのり、いや、かなりの毒舌風味だった気がするのは俺の気の迷いだろうか。

と。コアさんは天使の如く無邪気なにつきりのまま。

「セツナさんお腹空いてませんか？」

あ。そう言えば。

お腹が鳴るといふ失態は曝していないけど。

「はい、結構」

と。正直なところを声に出してみると。

「……すまない」

返ってきたのは、重たい重たいシスの声だった。

その瞳は空の蒼。額に手を当てるその様は、ああしまったやっちやった、その台詞を見事に体现している。

「食事の事など頭からすっかり飛んでしまっていた。そうだな、お前には食事が必要不可欠だったな……くそ!」

ダン。

という、音。

「ちょ、シス!？」

彼は固く握り込んだその拳、手の甲を壁にぶつけていた。しかし相手は力一杯ぶつけようともしぶくともしない石の壁、彼の手が割れていそう怖い。

「私とした事がとんだ失態を！ 本当にすまない……くそ、かくな

る上はこの額を壁に打ち付け」

「いいよ、そ、そんな事しないでいいから、俺の為に血を流す必要なんかないからー！」

俺は慌てて立ち上がり、壁の方に向き直ろうとするシスを制止する。

そう、誰にだって失敗はある、其処まで自分を責めなくてもいいけど、食事が必要不可欠じゃない人なんているんだろうか。

先程と言いま今と言いま、ひょっとして彼ってアレだったりするのかな。そんな考えが浮上したところで、コアさんがやははと笑い声を上げ。

「じゃあ、食堂から何か持ってきてあげます」

「うわそれは有り難い、んですけど、いいんですか？」

「いいんですよ。俺これから水差しに冷たい水貰ってくるんで」

……天使だ。

「じゃ、じゃあお願いします！ ね、シス、ほら、俺確かにちょっとお腹空いてるけど、言うまでもないなと思っただから敢えて言わなかっただけだし、シスが気付けなくても無理ないし、あーそれにした今解決したから！」

すると、すまない、と。再度の謝罪の後、シスは再び硬い白に凭れてくれる。

まさかこのまま俯いて、勢いをつけて後頭部を強打、なんて事はないだろう、と。俺はほっと息を吐き。コアさんが寝室から黄色いポットらしきものを持って来て、にこやかに手を振り部屋を出ていくのを見届けてから、ソファに腰を下ろす。

と。

「すげーな」

先客のグレイダさんが。白い歯をむき出して笑っていて。

「隊長どんと漫才できんのな、あんた」

「漫才……なんですかね、今は」

彼の顔から笑みが消え。そして、首を傾げる。

ひよっとしてまた俺、踏んじゃいけないスイッチに向かって大ジヤンプを。今朝の経験上、不安に駆られる。

「あの、俺何か……」

「あんたさ、何で敬語なんだ？」

「え」

「だってよ、こっからは仲間だろ？」

仲間。

その言葉が。じんと響いた。

「敬語とかいらなくね？ あー、エルとかコアはいつつも敬語だけだよ、でもよ、あんた隊長どんにはそんな話し方しねーじゃん。だからよ、俺にも敬語ナシで」

あ。

「な？」

何でだろ。言葉が。うまく、出てこない。

「なー」

う。

「……うん」

それは。頷いた後に出てきた声で。

すると、それを聞いたグレイダさんは。にっ、と笑って。  
「仲良くしよーぜ。歳だいぶ離れてるだろーけど、そういう事は気にすんな」

「……え？ だいぶ離れてるって、グレイダさ」

言いかけて、其処で急ブレーキ。

そう。敬語はナシ、だ。

「グレイダ、歳いくつ？」

見た限りでは。彼の顔立ち俺のそれより幼いくらいだ。

しかし。彼はお、と、疑問符を付けた一音を発して。

「おー、歳なー……なーシス」

ん？ 何故其処でシスに振る？

「どうした、また自分の歳を思い出せないのか」

……ん！？

「なっ……」

「おー、やっぱり反応おもしろーのな」

「いっいや、まじまじと観察されても困るっていうか、てかなっ、何で！？ 記憶喪失！？」

「おー。だいぶ長く生きてっからな、よく色々忘れちまっんだよな」

「長………！？」

と、其処で。瞳の色が翡翠色に戻ったシスがふつと息を吐き。  
そして、さらりと。

「竜族は長寿だからな。一万年程は生きるらしい」



い。

「しかし、物忘れが激しいのはお前が頭を使わないからだと思うぞ」  
「お？ そうなのか？」

ち、まん、ね……

「一万年!？」

「何だセツナ、突然立ち上がるな心臓に悪い。そして大声を出すな  
煩いぞ」

いや。此処は立ち上がらせて下さい大声を出させて下さい。

「万!？ 千を超えて万!？ 零が四つ付くあの単位!？ じ、じ  
やあグレイダって今一体幾つ」

「今年で九七三歳だ」

ま。またまた、さらりと、王子様は涼しい顔で何を仰つていらっ  
しゃるか。しかもグレイダはあーそうだったかもなー、と。

そして。

「あー、でも人型とれるようになったのは十五年前だ」

溜らず俺は頭を抱えて蹲る。すぐに飛んでくるシスの声、大丈夫  
か。

いいえ、大丈夫じゃありません。

嗚呼、やばいです父さん。俺の健全だった脳が汚染されていきま  
す……。

「さてセツナ。任務に行く前に、な」

グレイダに、とんでもない力で腕を引き上げられて。立ち上がった、いや、立ち上がらされた俺が、ソファの上に腰を落ち着かせてから。

「現段階で……どうしても、これだけは知っておきたいという事はないか？」

シスが。そう尋ねてくれた。

「勿論、今全てを説明し尽くす事は不可能だ。説明する事が多すぎるからな。お前は種族の事も魔法の事も、アスカの事も、この世界の常識も……何一つ、知らないのだから」

俺達が。この部屋に留まった意味が、漸く解った。

「移動中、アスカについては多少説明したが、まだそれも十分ではないしな。……何か言ってみろ。私の知る範疇で、だが……答えてやる」

「うん」

俺は、頷いて。

そして俯き、其処にあった自分の掌を見つめる。

訊きたい事。

それなら、いくらでもある。

シスの力とは何なのかが、知りたい。先の皆さんの自己紹介で訳わかんない用語が沢山出てきたから、それ一つ一つについて丁寧に教えて戴きたい。俺が全てを覚えられる可能性は限りなく零に近いけど。

アスカについてだって解らない事だらけだし。この世界の一般常識だって、俺の世界のそれとはかなり異なっているのだろうから、

知らないし。

それから。

どうして。俺は此処に居るんだろう。とか。

本当は。それが一番知りたい事だった。

どうして俺がこんな事に。

……ようこそ此処は異世界ですそうです貴方の世界とは違う世界ですそれから貴方は人間ではありません化け物です妖天族です魔天使ですはいアスカに入ってください。

こんな事。それは多分、要約するとこんな事だ。

でも。きっと彼に聞いてもそれは解らないと思う。

だって先程、彼は言った。みんなの前で言ったんだ。「これが私の知る全てだ」と。

だったら何を尋ねよう。

俺が今、知りたいと強く望む事。短時間で。俺の一部に出来る事。

やがて。

探し当てた俺は。顔を上げ。  
紡ぎ出す。

「魔天使は……何で、嫌われてるの？」

シスの翡翠色だった瞳が。一瞬にして、蒼く染まる。

「何だセツナ、魔天使なのに知らねーのか？」

「グレイダ、その子は異世界から来たんだ。この世界の歴史など知

る筈がないだろう」

あーなるほど、と声を上げ、背凭れに身を任せるグレイダ。彼は眼を閉じた。

振り返ると。シスも目を閉じていて。

少しの間、沈黙をおいて。その唇は紡ぎ出す。

「解った、いいだろう。……お前が知りたいと望むのであれば、答えてやろう」

開いた時。その瞳は。

紫色。

「嫌われている、と言うよりは……恐れられている、憎まれている……そう言うべきか」

彼の声音は。

波の立たない……とても、とても静かなものだった。

「魔天使とは……世界の北端、極寒の大陸レオリーヴに息衝き、闇を好む……妖天族に分類される種」

成程。

だからあの町……シルドジークのあの子は、俺の事をそう呼んだのか。

「奴等は」

と。

シスの視線が。落ちる。

「奴等は十六年前……レオリーヴ統治王族ウインの下、全世界に向け宣戦布告。世界戦争を引き起こした」

ウイ、ン。

その名を聞いた瞬間に。言いようのない何か背を走って。

何だ？ これは一体。

今上つてきたこの感じは、一体何なんだ？

それが解らないまま。シスは、話の続きを紡ぐ。

「何故その時発起したのかは解らないが……その目的は、ウインが支配する妖天族のみの世界をつくる事だった。戦闘能力に秀でた種族だ……奴等は他種族連合と互角以上の戦いを展開し、目的達成のため只管に殺戮を繰り返したという。犠牲者は数十万にも上る……ほんの一年間で、な」

「数十、万……」

先程、万と聞いた時とは、性質が全然違う驚きが。実感となって俺の身体を打つ。

そうなんだ。だから、みんな俺の事を。

「しかし戦争中に……総統であったウインの消息が不明となった事で、奴等は士気を低下させ……何とか他種族連合が勝利を収めた。だから今日の世界がある」

「消息、不明？」

「そうだ」

王様が、行方不明？ それで戦争終了？

そんな……そんな事が。

だったら其奴……ウインが居なかったら、最初から戦争なんて俺は。歯を食い縛る。

ひょっとしたら。俺が恐れられる事も、なかったかもしれないの

に。

「しかし現在も、『ウインの残党』と呼ばれる妖天族が各地に留まり悪事を働いている。だから人々は奴等を恐れている……アスカが創設されたのも、元を辿れば奴等から民を護る為だ」

「え」

じゃあ、此処は。

魔天使を。倒す為にある組織。

だったら。

俺は。ふつと微笑んで。

その途端、身体から力が抜けて。それだけ自分の身体に力が入っていたのが解る。

「じゃあ、俺が入るって事は、やっぱり大変な事だったんだね……てか、魔天使がアスカ、って」

俺は。此処に居るべきなんだろうか。

此処に居ていいんだろうか。

「……でも」

でも。

「それでも俺……」

「何だよセツナ、気にすんなって」

と。グレイダが、俺に手を当て擦ってくれる。何か、あまり似合わないというか。

だから俺は彼の方を振り返って。笑って、こう言ってみる。

「こつこつ時はさ、軽くぽんぽんーって叩いてくれるもんじゃないの?」  
「するど。」

「おー? 叩いてもいいのか?」

「え」

「止めておけ。死ぬぞセツナ」

ああ。成程。

机、片手で軽々と持ちちやう人だもんね。

「セツナ」

呼ばれて顔を上げると。

シスは微笑んでいて。翡翠色の瞳に俺を映していて。

「……ん?」

首を傾げた、俺を真っ直ぐ見つめて。

「お前は、アス力になると決めた。自分の意思で、決めた」

そうだろうか?

「……うん」

俺は。

大きく頷いた。

と。その時扉が開いて。

「あにゃ?」

バスケットと水差しを抱える、という小柄な彼にはきつそうな格好で。コアさんが入ってきた。

「何すか、重大なお話の真っ最中つすか？」

「いや、もう話は終えた。……セツナ」

「あ、はい」

「もう、いいか？」

もとい、もう訊いておきたい事はないな？

「うん、大丈夫」

「にははは、そうっすか」

と。コアさんは水差しと、バスケットをローテーブルの上に置く。すると甘い匂いが此処まで漂ってきた。

食欲をそそられ、その中を覗くと。

其処には。

「あれ、これは」

「にはは、プランっすよ」

あの町でシスから貰った、パンのような食べ物が沢山詰まっていた。そうか、これはプランというのか。

「どうぞ召し上がれ。あ、グレイダさんは軽く遠慮して下さいねー」

お礼を言って。一つ、手に取って。

この甘味を噛み締めつつ、思う。

魔天使として、アスカとして。

俺は、これから。



続×9・2日目…やわらかな言葉

部屋の住人だという二人に見送られて。

発光を経て、開く扉。

繋がった境界を跨いで、柔らかな光の満ちた廊下に出ると、すぐに。

「プリジモ＝ノードレー」

と。

先導者は、姫君の名前を紡いだ。何の脈絡もなかったものだから、俺は二度瞬きし。

「へ？」

「嫌われてしまったようだな」

うぐ。

ぐさつと来る言葉を平然と放ち。肩を竦める俺を他所に、彼は歩き出す。俺はどんなに傷つけられようと、後をついていくしか仕方がない訳だが。

……ちよつと嫌味を言ってみる事にする。

「そうだね。でも、それは誰かさんの所為でもあると思うな」

すると、誰かとは誰の事だと、声色を微塵も変えず問ってくる銀髪。本気で尋ねていらっしやるのか。

「シスの事だよ」

「ほう……私か」

「そう、私」

「何故だ」

もう一度言う、否、思う。本気で尋ねていらっしやるのか。

「だって、目が覚めたらプリジモさんのベッドの上でっ」

「べつとは何だ」

そうでした、英語は駄目でした。くそ、日常会話から外来語を除くと、これもコミュニケーションに不都合が生じてしまうものなのか。てかベッドを日本語にすると何なんだ。

「えーと……ひ、人が横たわる台、寝る時に横たわる台っ」

「ああ、寝台の事か」

寝台というのか。ああ、そう言えば寝台列車とか言うよね。

また一つ賢くなりました。

「そっそう、それ！ 顔も知らない奴が寝台の上に居てさっ、同じ毛布共有してたりしたら、流石に変態と思われたって仕方ないっていうか、あーでも弁解はしたけど、でもさ、あんな可愛い子だったら一度や二度くらいそういう経験してたっておかしくないし、ひよっとしたらそう思い込まれちゃって……」

その時シスが不意に立ち止まる。慌てて俺も急ブレーキを踏んで「……どうしたの？」

すると彼は、此方を向いて。怪訝そうに眉を顰め。

「可愛いだと？」

……食い付いて欲しいところとは、少し違うのですけれど。  
とりあえず俺は頷いておく。

「うん。プリジモさんって何か可愛いんだよね」

「……それ、本人に言ったのか」

と。目を細めるシス。ああ、そうだねと。俺が事も無げに頷くと。

彼はふつと溜息を吐き。おまけに額を掌で支えて。

「馬鹿者」

「え!？」

「いいかセツナ、世の中には言って良い事と悪い事があるんだ」

そんな世間の一般教養を口にし、シスは俺に背を向けて再び歩み出す。俺も当然その後が続く。

「全く……リモがああなるのも無理はないな」

「ひよつとしてタブーだった？」

「豚だと?」

ああもう、だから駄目なんだってば。けど、それにしたって酷い聞き間違いだと思う。

「言っちゃ駄目だった?」

「ああ」

「……何で?」

全体的に見ればカラフルなドアの群れから抜け。角を曲がり。あの螺旋階段に差し掛かり、そして下っていく中で、俺は。先程、赤

い眼のシス様によつて存分にスリルを味わわされる事となつたのを  
思い出していた。

アレは多分、どんなバンジージャンプより怖い。本当に物凄い加  
速度だつた。彼の翼は美しい、それゆえに棘があるのだと思ひ知ら  
されました。

「あの子は恥ずかしがり屋なところがあるからな」

「うわ、可愛い」

「それに加えて、お前は初対面だつたし……外見的に少々、だつた  
からな」

そんな言い方をされると、何だか貶されているような気になる。  
そりゃ、俺の容姿は平々凡々。何処からどう見てもごくごく普通  
の日本人ルックス。シスや姫みたいな、立っているだけで光を放っ  
てしまうような美人ではないけど。

「そうだね」

なんてね。別に僻ひがむつもりはない。

解っている。シスが言いたいのはその様な事じゃなくて。

先程から、俺達と同じ……アスカの制服を纏つた数人とすれ違つ  
て。その視線が、必ずと言つていい程俺に集うのを感じているから。

だから、解る。

「ともあれ……仲睦まじくやっていく為には、相手が不快に感じる  
ような事はしない方が良くに決まっているだろう？」

「うん。じゃあ、今度会つた時謝ってみる」

俺は。段を踏み外さないよう気をつけつつ、歩みを速めて。

シスの隣に、ついてみる。

彼はその翡翠色の瞳で、俺の方をちらと見て。しかしすぐに視線を前方へ戻し。

「いや……謝るのはどうかと思うぞ。あの子は気難しい、何が起爆装置だか私にも未だによく解らないからな」

「そっか」

じゃあ他の対策を何か講じておかないと、と頷き。

ん？

……ちよつと待て。見事に話を逸らされた気がするんですけど王子。

と、もやもやが残る中。

其処で。一階に到着。

俺達が出たのは大広間。

高い天井には、例にもよって球体が。大きなものが中央に一つ。

そしてその周囲に四つ、小さな球体。

壁はやはり白だが。

向かって正面には、恐らくガラス状の物体で出来た透明な部分、地球ではよく見かける自動ドアチックなもの。あれが出入り口なのだと一目で解る。

「外に出るの？」

「否」

俺の問いに短くそう答え。シスは玄関へは向かわず、右へ移動。広間を抜けて通路に入る。

と。其処は、またしても階段になっていた。

相当巨大だろうし、階段多いし。移動するだけで足腰が鍛えられそうな建物だ。

「シスは恥ずかしがり屋なタイ……性格だったりする？」

「そう見えるか？」

「全然」

「……そうだろうな」

と、そんな事を話しつつ。

螺旋とまではいかないが、内側へと緩やかなカーブを描いて地下へと続く階段を下り。

やがて、辿り着いたのは。

円形の、部屋。

橙色で文字が書かれた扉が幾つか。均等な幅を保って配置されている。

「……此処は？」

「我々が今居る、この大陸の名はセイラームという」

彼は相当重要と思われる情報を、俺が焦ってしまうくらいにさりりと紡ぐ。

けど。

「シス、質問の捉え方が大規模過ぎるんじゃない」

するとシスは、俺の言葉を遮って。

「セイラームの各地……要所に繋がっているのがこれらの扉であり、総隊長殿が空間を繋ぐ時空を操作している。大陸内任務の際は、短時間で着く事が出来る為に此処を使用する事が殆どだ」

ああ、ちゃんと続きがあった訳ですね。

それにしても総隊長さん凄いな、と。感嘆しつつ、俺は近くにあって一つを見つめる。

つまりワープルーム、のようなものだろうか。

「じゃあ……えっと、シルドジーク、だっけ？ この中のどれかを開けて入るだけで、其処にひとつ飛び出来ちゃうんだ？」  
「ひとつ飛び、という言い方には些か違和感を覚えるがな」  
シスはそう言っただけ。ある一つの戸の前に立った。  
俺も彼の元へ行く、と。

その扉には。橙色の文字で。

『シルドジーク』。

ん？

……何故読める？

そう言えば。シルドジークで、アルテスタ帰魂を見て……あの歌を、聴いた時も。

俺は。何故かあの知らない言語が理解出来た。  
すーっと。日本語訳を纏って、当然の事のように流れ込んできた。  
あれは一体……

「セツナ」

と。呼びかけられてはっとすると。目の前には、取っ手に手を掛けるシス。

「行くぞ」

俺は表情を引き締めて。頷き。

彼が、戸を引くと。

予想に反して。時空が歪んで、その中にキヤー吸い込まれるーとなる訳ではなく。

その先には、ある景色が開ける。

「……あ」

家具のない。影を帯びた、小さな、部屋。  
壁は。煉瓦の暖色だ。

シスは何の躊躇もなく、雰囲気のみで異なる二つの空間の境を  
跨ぎ。あちらへと踏み出して行ってしまう。

俺も。おずおずと。彼の後に続いた。

二人の隊員を送り出した扉は、自動的に閉じ。

俺のしているうちに。そう、瞬く間に。

壁の一部と、化す。

「……シス、扉が壁になっちゃったよ」

「ああ。そういう仕組みになっているからな」

へえー。

声に出したその言葉が、俺の頭の中でエコーする。

へえーへえーへえーへえー……

って。

「どうやって帰るんですか!?!」

「大声を出すなど何度言えば気が済むんだ阿呆。変える方法ならば  
ちゃんとある、案ずる必要のない事に気を取られるな」

溜息と共にお叱りの言葉を飛ばし。彼は、埃っばいだけで他には  
何も無い部屋の中を進み。数歩歩いただけで目の前までやって来る、



木製の扉を開け。そして、さっさと外に出てしまおう。

案ずるなど言われても苦笑するしかない俺が、後に続く、と。

「あれ」

「整然と並んだ木製の長椅子。祭壇へと伸びるのは桃色バージンド。」

見上げると。その天井は丸ごと巨大なキャンバスで。鮮やかな色彩で、美しい自然が見事に描き出されていた。

そう、其処は。

教会。あの時の教会である。

「……此処に通じてたの？」

「そっだ」と。

神様に向かって祈りを捧げていたらしい、シスの視線の先に居た、黒、ならぬ空色だがに明らかにシスターズコスチュームである服を身に纏った少女が。俺達に気づき近づいてくる。

「こんにちはアスカ様」

垂れ気味の眼を細め、優しくにっこり微笑んで。シスの会釈に応じて、頭を深々と下げ。

それからゆっくりと顔を上げ、羽の如く柔らかな声音で紡ぎ出す。「神父様なら御不在ですね。先日の襲撃で親族を亡くされた方々の御宅を訪問なさっているのです」

「構わない。我々は町の巡回に来た」

「まあ……本当に有り難う御座います」

と。その時初めて、彼女はシスの背後の俺に視線を向け。

まあ、と。可愛らしく目を丸くする。

「其方の、アスカ様は……妖天族の方でいらつしゃいますか？」

ゆっくり、ゆっくり紡がれた言葉。躊躇う必要などないと解って

いたから、俺はすぐに肯定する。シスが此方をちらと見て。

「新人でな。アスカたるに相応しい、勇敢で心優しい人物だ」

「まあ……」

彼女は。俺を、その栗色の瞳で見つめつつ、驚きを示すその言葉を繰り返す。

俺も驚きだ。だって、勇敢って。心優しいって。有り難い、有り難過ぎて背中がむず痒くなるほどだ、しかし俺の何処が勇敢で心優しいのでしょうか。

検証する為。これまでの彼との出来事を振り返ってみよう。

初日。

なかなか起きず苛々されて、早く起きると頬を抓つかられる。正座して質問攻めされる。悲しみに涙を流し、そしてこの時に優しいと言われる。訳のわからない事を繰り返して怒られる。頬を抓つかられる。

本日。

姫君に刃物を突き付けられているところを目撃され、笑われる。大声を上げて怒られる。総隊長さんに失言してキレられ、脳天にチヨップを食らう。フード掴まれて引きずられる。階段からダイブし、超低空飛行の旅に御招待される……

計。優しいと言われた回数、一回。

勇敢さが見え隠れした回数、零回。

結論。

シスが放った俺の紹介文が、何故そうなったのか、という疑問に対する答え。不明。

と。丁度思考に切りがついたところで。

「それは……素晴らしいわ」

と。彼女は、俺に向かって微笑んだ。

「貴方が王族の代行者としての道を選んだのは、神様の御導きあつての事だわ。過去と現在の苦難を乗り越えた時、貴方は……きつと、この世界に真の平和を齎して下さる」

そんな、大それた事を。しかもそういった類の事は、シスや総隊長さんにも言われた覚えがある。

真剣を持つての実戦経験ゼロの地球産男子高校生、括弧かっこ一般市民に、きつとこの方は世界を守って下さるとか天下を平定して下さるとか期待をされても、困る、と言えばそうなんだけど。

でも。ひよつとしたら、それが俺が此処に来た理由なのかもしれない。そう言えば総隊長さんも、俺が選ばれし者だとかそんなような事を言っていたような気がしないでもないような。

だとしたら。

「頑張ります」

任せて下さい、大船に乗ったつもりでいて下さい、なんて。偉大な偉大な勇者様からは程遠い俺には言えない。だから俺は。ただ一言、そう言った。

すると、彼女は綻ほころんで。

ゆっくりと目を瞑り。

左手は胸に。眉間に右手の人差指と中指を当てて。

「新たなアス力様の道の先に、光あれ」

そう言って。胸の前で腕を組む、教会では御馴染みのポーズ。

そして紡ぐ。

「ティアータ」

どうやら、俺の中には便利な異世界語翻訳機能があるらしく。また、教えてくれたんだ。

ティアータの意味は。「祝福を」。

昼下がり。

澄んだ青空には、綿の如き白い雲がぽっかり浮かび漂う。昨日と比べ気温は低いような気がするものの、大地に降り注ぐ陽射しは眩しく。

外へ出た俺は天を仰いで、その光に手を翳した。

今日もいいお天気です。

シスの話では。シルドジークは本来、和やかな雰囲気のある町、らしい。けれどやはり昨日の今日で、お天道様が高く高く昇っているにも関わらず、町行く人は少なく。寂しい印象を受けるといのが現在の現状。

けれど。そっちの方が好都合というか、気が楽というか。

人が多ければ多いほど。俺の身体には力が入る。この町の人に見られる事を恐れてしまうから。

通りには。和やか、と聞かされて俺が勝手に想像する、のんびり散歩する老夫婦や、笑いながら町中を駆け回る子供達の姿はない。

しかしすれ違う人々は必ず、この上着を見ては、立ち止まって御辞儀をする。

その中には。シスに護られたにも関わらず、避難が解除された途端、恐怖に駆られてすぐに家に帰ってしまったのだと申し出る者がいた。彼等は礼を言えなかった事を謝罪し、そして涙を流しながら何度も何度も感謝の意を伝えた。

俺の髪と瞳の黒を見て、慄き表情を強張らせる人も少なくはなかったけれど。その度にシスは俺を、勇敢な新入隊員だと紹介した。それでも、大して反応が変わらないのがきつかったけど。

「さて」

と。商店エリアに差しかけたところで。シスが立ち止まり、此方を振り返った。

翡翠色の瞳の中に、海色の上着を纏った俺の姿が映る。その右胸には羽ばたく鳥の印章。自由とか、解放とかを意味しているのかも知れないと思った。

「お前に、行ってもらわなければならぬところがある」

ちゃんと聞いていなかった俺は。瞬きを数回繰り返した後。

「へ？」

するとシスは咳払い。硬い煉瓦にぶつかって跳ね返り、俺に突き刺さる。

「……ごめん」

「お前には行かなければならないところがある」

「何処？」

俺の問いに彼は微笑み。長く綺麗なその指で、自身の背後を指す。

「この先に広場がある。帰魂アルテスタの儀を行った場所だ。……其処で、少しの間待っていて欲しい」

「えー……」

待っている、という事は。一人で突っ立っていないなければならないという事。

正直、不安だ。

アンチ魔天使、と言えば殆どの人が該当するだろうから……そう、過激派。彼等が石とか投げ付けてきたらどうしよう。精神的にも肉体的にも、深刻なダメージを受ける事間違いない。

しかし、指令を出した人物は。

「大丈夫だ」

「その自信は何処から来るんだよ……」

するとシスは、左手の拳で自身の胸を軽く打つ。

「此処から来る」

「……だろうね」

はい。天然確定。

天然シスはくるりと方向転換。腕を伸ばして広場の方向をピシイと指し示し。

「では行けセツナ、これは任務だ！」

致し方ない。上司の命令には従うしかない。

「りょうかーい」

と。気の抜けた返事を返し。俺は人生初の任務を敢行する。

アレは多分八百屋さん。

えーと、色彩からして今度は果物屋さん。

ああ、あつちは肉屋さん、と。その時視力が良い俺は、主婦と思わしき人々の狭間からちらと顔を出す、緑色の塊を発見する。……  
やばい悪寒が。一体何の肉扱ってんだろ。

と。のんびりと歩き、辺りの様子を窺いつつ。

やがて辿り着いた、アルテスタ帰魂の広場。

……だと、思うのだけれど。

「……噴水なんてあつたっけ」

コアが踊っていた中央。確かに平かだった筈の其処には涼しげな噴水が。何処から湧いて出てきたんだろうと思つても、そんな事を聞ける人が周りに居る訳でもなく。

いや、人ならいるんだけどね。

先程から遠巻きに俺の姿を眺めている数人か。しかし彼等は、此方と目が合つと視線を逸らす。どう考えても話しかけて良い雰囲気じゃない。

俺は肩を竦めて。溜息が出た。

罵倒される事もないし、石を投げられる事もない。けれど孤独だ。俺は今一人で立っているんだ。誰も頼る事は出来ない。今は遠くに居る人々が、意を決して俺に襲いかかってきたら、戦闘経験ゼロの俺はたちどころにノックアウトされてしまうだろう。

なんて。虚しい。

フード被っちゃおうか。いやでもそんな事しても何も変わらない、けど少しでも視線を遮る事が出来るのなら、だがしかし……うーむ。

なんて。

悩んでいるのに疲れた俺は。

やがて、一人しゃがみ込んで。ふと視線を落とした先に、煉瓦の裂け目に芽吹く緑を見つける。

「……うーさーぎーおーいし、かーのーやーまー」

何故か想起された、有名な歌を零に近いボリュームで歌い出す。

「こーぶーなーつーりし、かーのーかーわー」

あれ、その先なんだったっけ。解らなくて、必然的に鼻歌と為る。

おお、何だか気分がのってきたのぞ。音量も次第に大きくなる。

よーし、そのまま二番に突入。

「何の歌？」

「うあああっ!?!」

びくっとする小心者風岡。すると、ふっと息を吐く声の主。

「何て声出すのよ、もう」

鼓動の高鳴りが治まらないまま、振り返ると。

「あ……君は!」



現れたその少女は、栗色の長い髪を揺らし。悪戯っぽく微笑んで。

「で？ 答えてくれないの？」

「え」

「私は、何の歌、って聞いたのよ」

俺はごめんと笑いつつ、立ち上がり。彼女に向き直った。

クリーム色のシヨールに白いブラウス。赤を基調としたロングスカートが良く似合う。

そう、彼女は。

あの時。俺を信じてくれた少女。

見ると、後ろの方にシスが立っていて。町の女性数人に話しかけられていた。わーい、流石は美少年。

と、俺は其方に視線をやりながら。

「ふるさと、っていう歌……だよ」

「そうなの？ それじゃ、レオリーヴの事を歌った歌？」

レオリーヴ。

厳寒な大陸。……闇を好む、妖天族の住まう地、か。

俺は、彼女の顔を見て。しかし口籠る。

ええと。何て、説明したらいいんだろう。

「違うんだ、俺の故郷はそこじゃなくて……えっと、もっと、もっと遠い所って言うか……」

異世界という言葉が露骨に使うのはいかんだろう、と。表現に苦しむ俺を見て、彼女は声を上げて笑った。

「言いたくないなら別にいいわ」

「言いたくないって言うか……言いつらいというか……」  
「あなたって本当に変な人ね」

やばい。話が、出来ません父さん。貴方の遺伝子を受け継いだ所為です。

以前上手く話せたのは、危機迫った状況だったから。相当必死だったからだ。

今こうして面と向かって会話するとなると、やはり女性の前限定のあがり症が発動。

思わず俯く、と。その視線の先に。

「脚……怪我、治ったの？」

綺麗な。微塵も傷のない彼女の脚があった。

「そうなの。アスカ様に治して戴いたのよ」

「あ、あー、シス？ そっか、シスって傷も治せるんだ、へー」

「うん、アスカ様って凄いわ」

「あはははは、そうだね」

全くもってその通りだ、と。思いつつ、心の中でひっそりと溜息だ。シスのようになれる気が全くしない。

と。

「あなたもよ」

顔を上げると。少女は。ガラス玉のような綺麗な瞳で。俺を真っ直ぐ、見ていた。

「あなたもアスカ。私が助かったのはあなたのお陰」

彼女はあの時と同じ笑顔。しかし、目から伝う悲しみは消えて。

「ありがとう」

頬が。赤くなるのを感じた。

彼女の頬も。俺につられてか、赤くなる。彼女は俯いて。

「これね、どうしても言いたかったの」

眼下の煉瓦まで視線を落とす。俺が先程見つけた若葉の方向。

「光を浴びたあなたは倒れちゃって、目を覚まさなくて。本当は、目を覚ますまで待つていたかったけど……脚の事もあつたし、あそこに居る聖天使族のアスカ様が約束して下さったから、私、彼に連れられて避難所に行ったの」

「約束？」

彼女は。頷いて、目を閉じて。

「あなたと、もう一度会わせて下さるって」

そして再び目を開けて。

繰り返す。

ありがとう、と。

頷く事しか出来ない俺に。やっぱり変な人ね、と。明るい笑い声を上げて。

「そうだ。ね、あなたの名前を教えて」

「え」

「なーまーえ。教えて？」

そんな、可愛らしく首を傾げられると。ますます体温が上昇してしまっ。

うああ落ち着け俺、名前だ、名前を訊かれているんだ。

「お、俺は……セツナって、いいます」

「セツナ。いい名前」

セツナ、と。もう一度繰り返した後。

彼女は、自身の名を口にする。

「私はアマリナ。アマリナ＝フランコット」

アマリナ。

どくん、と。心臓が、跳ねあがり。

体温が。急上昇する。

何だ、これ？

あがつているからじゃない。そう。それだけでは、突然こんなに鼓動が激しく高鳴り出す筈がないんだ。

意味が解らないまま。背に流れる汗を感じながら。

震える唇で。俺は。

「……その名前」

意味の解らない事を口にする。正直、自分がその言葉を放った意図が、全く、解らない。

しかし。

彼女は答えてくれる。

俺の奇妙な反応に、怪訝そうな顔をしていた彼女は。再び微笑んで、誇らしげにこう語る。

「そうよ、私の名前は、王族様から貰ったの。セイラーム統治王族、アマリナ＝レイルズリード様から」

アマリナ＝レイルズリード。

ああ、また、レイルズリード。

でも違う。そうじゃない。

この心臓は。次々と重なっていく、レイルズリードというラストネームに反応しているのではなくて。

俺は。

俺は……

また会おうよ。

その時は。

もっと沢山、貴方の話、聞かせて。貴方の事が知りたいの。

ね。約束。

「セツナ、何？ どうしたの？」

ああ。

これは。

彼女の声だ。

俺は自分の胸を押えて。身に纏う白を、握りしめて。

治まっていく自分の音を聞きながら。俺は、兎に角笑ってみせる。

「……何でも、ないよ。アマリナ……さん」

俺が。出来る限り平かな声で。自らの口で発した、その名が。

俺の耳を。強く、強く……打つ。

続×10・式日目：勇敢で 優しくて

「頼みがあるの、セツナ」

少女アマリナは。光の下輝く艶やかな髪を大きく揺らして。軽く身を屈めて。

「あの灰色の上着、私に出来ない？」

え。

と、一瞬何の事か解らなかった。しかし。すぐにああ、思い出す。

俺が彼女の脚の怪我を見て。とりあえず処置をと思い、巻いたのが自身の着ていた灰色パーカー。昨日の夜は、Tシャツだけで寝るのはちょっと肌寒く感じたから。とりあえず棚から引っ張り出して着たんだっけ。

部屋着で、よく着ていたんだけど。別に愛着がある訳でもなく。

「いい……けど」

「本当!？」

俺があっさりと頷いてみせると、彼女はわあ、と声を漏らして。

「ありがとう!」

そしてにつこり。

喜んでもらえて何よりだが、何で？

あれはごく普通のパーカーだ。地球産であるという事で物凄い価値が生じるのかも知れないが、しかし彼女がそれを知る由もなく。

「私、大切にする! 絶対、絶対大切にするから」

「え? いや、でも、アレそんなに高いものじゃないよ?」

戸惑いに俺がそう言つと。彼女は、途端に笑顔を消して、頬をぷつと膨らませる。

ひよっとして俺はやってしまったのか、ああそつだよねプレゼントの値段言う奴なんていないよね。と。早くも後悔を始めた俺に、彼女は。

「だから、何？」

「え、えーと、だから」

口籠つてしまう。

するとアマリナさんは。ふつと息を吐いて、微笑む。

その笑顔は。何と言つか。俺には察し得ない、複雑な何かを湛えていて。

そして。ふつくらとしたその唇は。

光の下、消えさつてしまつような、小さな小さな声で。

「……な人から貰つたものだったら、何だつて大切にするわよ」

あまりに小さ過ぎて聞こえませぬ。

と、申し訳なさに肩を竦め。丸まつた背で首を傾げる俺に。

彼女は首を軽く横に振つてみせ。

「何でもない」

また。にっこりした。

それきり黙り込んでしまった俺とアマリナさんは。

ずっと待つてくれていたシスの元へ戻る、が。

うわー取り巻きが居る。きゃーって声が聞こえるよ、きゃーって。  
「ん？ もう話は済んだのか？」  
と。

俺達の視線に気づいたシスは優雅に微笑む。そんな顔して見つめ



たりなんかしたら、周囲の女の子達失神しますよ王子。

彼はでは、と軽く会釈して。苦笑いを浮かべる俺の元へ帰ってくる。

「ならば帰還するぞ」

「え、帰るの？ もう？」

「ああ。もうすべき事は終えた」

スベキ事ハ終エタ、とな？

俺達がした事と言ったら。ぶらぶら町の中を歩き廻り、アマリナさんと再会し。

なーんだ。

「本当に大した事じゃなかったんだね。全然危なくなかったし」

「大した事ではない、だと？」

と。シスは俺の言葉を繰り返し眉を顰める。

瞳の色は翡翠色のままなので、怒髪天！ という訳ではないと思うけど。一度圧倒的恐怖感を与えられてしまうと人は……：少なくとも俺は、それを二度と味わわない為に、必要以上に怯えるもので。

「い、いや！ だ、大事だよ、うんうん」

慌てて。腕を組んで繰り返し頷く、と。彼の眉間の皺は消えてなくなる。

「解ったならばいい。……それから、危険がなかった、というがな、セツナ」

「え？ まさか、俺の気付かないところでとんでもない修羅場が！

？」

と。「危険が無いのは当然だ。私は冗談は言うが嘘は吐かない」

「冗談は言っただ……」

イエス、脱力。

すると隣から、くすくすと可愛らしい笑い声。見るとアマリナさんが口に手を当てて笑っていた。

「セツナ、アスカ様と随分仲良くなったのね」

脱力感マックスな俺は。本当にそう見える？ と、問うてみる。

すると答えたのは彼女ではなく。というか、俺の問いに対する答えなのかも怪しいところだが。

「そうだな…… 実に良い関係を築けてきているな」

天然注意報炸裂である。

アマリナさんを自宅まで送り届けると。彼女の両親まで家の外へ。御兩人とも、俺の姿を見て青褪めたのが見て取れたが。娘が命の恩人だと紹介すると、何とか恐れを取り払ってくれたようだった。

「また、会えるよね。何時だって、会える……」

彼女は視線を落として。静かに、ゆっくりと、そう紡ぐ。

問うているようでもあった。確信を露わにしているようでもあった。

だから。俺は、声には出さないけれど。

頷いて、肯定して見せる。すると、それに気づいた彼女は顔を上げて、微笑んで。

「本当にありがとうございました。御元気で」

一時の。別れを告げる。

「ひよつとして、本当は巡回なんて必要なかったんじゃないの？」  
と。俺は、教会へと戻る道を辿りつつ。やはりちよつと前を歩いているシスに向かって声を伸ばした。

「アマリナさんと約束したから……だから、俺を此処に連れて来てくれたんだよね？」

依然として日は高くあり。彼の背を照らし出す。

不意に、風が吹いて。流れる銀髪が美しい。

「その為だけに来た訳ではない。骨族は全滅を確認したが……妖天族達が様子を見に来る可能性も、無い訳でもないからな」

「無い訳ではない、つて。なんか意味深な言い方だね」

ふと横に視線を流すと。和やかな町、の代名詞。追いかけてこずる子供達を漸く発見。

「先の襲撃が、奴等の知能層によって仕掛けられたものだったならば……の話だがな」

「知識層つて？」

「妖天族の中でも高い知能を誇る……堕天使や魔天使と呼ばれる種の事をそう呼ぶ事がある」

はい、脳内にしっかりメモ。

ただし俺のメモは。ある程度一杯になると、自動的に古いデータを排除していく傾向があります。

と。シスはふつと息を吐き。

「しかしその可能性は相当に低い、司令塔が居なかった事から窺える。自我の無い骨族に襲わせたところで……我々に阻まれ、大した被害は出せないのが目に見えているからな」

其処で。不意に引つ掛かる。

大した被害？

「恐らく先日の骨族達は、十六年前の戦争の際セイラムまで連れてこられた者の残党だろう。奴等は集団で行動する習性があったので……長い年月をかけて個体が集い、ある程度の集団になったので近場を襲った、と。そんなところだろう」

死んだ人が、居るのに？

「……人は」

と。俺が立ち止まって放った声は、とても微かなものだったけど。シスは歩みを止め。此方を振り返り、真っ直ぐに俺を見つめる。

「人は……死んだ」

その、翡翠色の瞳を。その中に映る自分の姿を、俺も見据えて。

「死んだら、駄目なんだ。人が死ぬのは……殺されるのは」

悲しいよ。

遠くで紡いだ言葉が。ふわりと、俺のところへと戻って来て。

「凄く……悲しいから」

俺の喉を使って。もう一度、音に為る。

「例え、ほんの一人でも……駄目なんだ」  
シスが。視線を落とすのが解った。  
「俺……」

人が死んでいくのも。  
棺に縋りついて、悲しむ人も。見たくない。

だから。  
そう思うから。アスカである俺が、望むべき事は。

「俺は、みんなを護りたい。……俺、戦闘未経験者だし、全っ然強  
くなんか無いし、しかもかなり小心者だけど、でも」  
と。

「お前は強いよ」  
シスは。瞳を蒼に染めて。  
ふっと微笑む。

「お前は強い。……勇敢で、優しい」  
事実無根だ。

「シス……あのさ、さっきから思ってたんだけど、いや、思ってる  
だけで言わなかったのは狡いと思うけど……俺、俺は勇敢じゃない  
と思うし、特別優しい訳でもないと思う……」  
思う、を無駄に多く含んだ言葉を。真っ直ぐに受け止めたシスは。  
「誰だって自分ではそう感じるものだ」  
多分。否定した。

「お前はあの少女を庇った。此方で目覚め、何が何なのか訳が解ら  
ないという状況下で……ただ殺されそうだからと、自分の身も顧み  
ず」

「……無謀、だったよね」

「勇気と無謀は、違う。」

しかし。彼は首を横に振り。

「無謀であつたとしても、だ。事実、あの少女はお前に救われた。お前がいなければ……彼女を救う事は出来なかつた。私には間に合わなかつた」

再度俺を見た瞳には。徐々に緑が帰ってきていて。

「お前のお陰で犠牲者を増やさずに済んだ。……礼を言う」

そう言つて、彼は。

「有難う」

頭を、下げ。

俺の身体は、一瞬硬直する。

「え！？ いったいいよそんな、全つ然いいから、俺に頭下げる事なんかないから！ てか、どうせならアマリナさんに、俺と一緒に生きていてくれて有難うをつ、あーもう、頭上げようよッ！」

するとシスはくす、と笑つて。頭を上げ、顔に掛かつた髪を払い。  
「優しいな」

その声に。頬が。熱くなる。

俺は彼を指差して。その手を縦に大きく振りつつ。

「そつ、そんな馬鹿な事を仰つてくれるな！ お、おお俺の何処がっ」

「お前は今、私の面目を保とうとしてくれた。それに、アルテスタ帰魂の際……」

…お前は、顔も名も知らぬ者の死を悲しみ……彼等の為に泣く」

「ああ、アレ!? アレは……アレは、何か、雰囲気呑まれちゃっただけだよ!」

シスの声を遮って半狂乱。恥ずかしさに身体が膨張、破裂してしまっただけだ。

「しかし雰囲気呑まれたという事は、おま」

「あーはいはいっ、オツケーオツケーシスの言いたい事はよく解った、だからさっさと帰ろう! うん!」

俺は問答無用で歩み出し、シスを追い越す。

しかし。彼は数歩といかず、すぐに俺に追いついてしまった。くそっ、足の長さの違いの所為か。

と。

「目的地の位置も解らない奴が先陣を切るな、阿呆」

「……う」

へいへい、その通りで御座いますよ。

教会に戻ると。白髪混じりの眼鏡男性……神父さんが戻っていらっしやう。彼もまた、空色の衣服を身に付けていた。と、いうことは、こっちじゃ聖職者の衣服は空色で統一されているんだろうか。地球産の俺にとっては、酷く違和感があるのだけれど。

見るからに優しそうな彼は、俺を見ても何も言わず。ただ微笑んで、有難う御座います、と。予想通りの柔らかな声でそう仰った。

「今後の襲撃への心配は不要だ」  
と。断定したらしいシスは。彼と、先程のシスターにそう伝え。

彼等の穏やかな視線に見送られつつ。俺達は、小部屋へ移動する。

薄暗く、埃っぽいだけで他には何も無い部屋。

勿論、アスカの総本部へと通じているのだろうが。其処で一抔の不安が生じる。

「さつきさ、ドア消えちゃったんだよね……」

「どあ？ どあとは何だ？」

俺の学習能力の無さが身にしみた。

「ごめん、扉の事」

「成程……了解した」

シスは。先程白い戸であった筈の壁に手を当てて。  
「消えたのではない」

と。訳の解らない否定をする。

「えーと……」

「目に見えないだけだ」

「えーとお……」

肉眼では見えない？ ならば心の眼でも使えば見えるのだろうか。  
と。試しに目を瞑ってみる。しかし、冷やかな闇が出迎えてくれるだけ。

「何を目を瞑っている。阿呆かお前は」



「う……溜息混じりに言わないでくれるかなそういう事……本気で落ち込む」

肩を落とした俺に、落ち込め、と吐き捨て。  
シスは。

「私は戦闘部隊<sup>ファイクリーダー</sup>一番隊隊長、シルフィスⅡゼノⅡアルヴェルド。総本部への帰還を願う」

黙する壁に向かって。早口で、無機質にそう言う。

すると。

発光。

扉が再び姿を現すのでした。

「……………もう驚かないよ」  
とか言いつつ。本音は、今回で最後にしよう、だ。

空間を越え。再び白い空間に戻ってきた俺は。思わず、ふっと溜息を吐いていた。

「どうした。疲れたか？」

「うん、軽くな。でもまだ大丈夫、結構行ける感じだよ」  
振り返ったシスの前で、ガッツポーズを決めてみる。

町歩いただけでへばってたら、この先やっていけない気がする。  
新入隊員なんだし、今日は入隊一日目という事で、スケジュールも一杯だろうし。休んでなんかいられない。

「無理はするな。この後の事はなかなか体力を使う事だ……初日から倒れられては此方が困る」

「大丈夫だよ、全然！ で、具体的には何をやるの？ 施設見学？  
あ、一番隊って事は二番隊とか三番隊とかもあるんだろうから、  
他の隊の皆さんにお願いしますの菓子折りとか？」  
「いや」

この二秒後。シス王子は、俺を凍り付かせる一言を放つのでした。  
そう。

「戦力を見る」

流石、得意なのは氷の魔法。耐性ゼロの俺は力チンコチンだ。

「……戦力？ それは、一体どのような」

「お前の剣術がどれほどのものか見る」

く……解っていたさ。ああそうさ、解り切っていた事さ。それでも訊かずにはいられなかった、予想とは違う答えが返ってくる事を期待していた。

結果は、やはり。

ビンゴー！

「うつつ……」

項垂れる俺に、シスはすまないが、と前置きをして。

「明日からは任務があるからな、本日中に済ませておきたい。体調が優れないというならば、少し休んで、何か腹の中に入れてから」

ああ、そうですか。

また来週、という選択肢はないのですね。

なら。

「そっかそっか、うん解ったよ……」

俺も、シスと一緒に。いや、アスカの仲間と一緒に。世界を守ると、戦うと。そう決めたから。

今、怖い嫌だ俺止める、なんて喚いたら。スタートラインにも立てないから。

「解った！ 俺やる、やりますよ！ よーしっ、相手は何処のどいつだこの野郎ー！」

ええい俺も男だ！ と、やけくそになって腕を振り回す俺。

シスはくす、と。貴人宜しく優美に笑って。

「案ずるな。相手ならば私が務めてやる」

……失言で御座いました。

続×11・ふつか目…竜と姫と訓練場

階段を上がって上がって、俺達は一階へ。

しかし、やはり外へ出る訳ではなく。エントランスホールを横断し、今度は左の通路へとレッツゴーだ。

しかし。この先待ち受けている苦難を思うと、どうしても足が重くなる。

いいえ、これは行きたくない怖いやだーという精神からくる重力ではなく。これはそう、俺の中に眠っていた動物的本能が目覚めた為だ。身の危険を感じ取り、自らを護ろうとする防衛本能。だから、どうしようも出来ないのです。

「そう肩を落とすな。戦力を見ると言っても、別に殴り殺す訳ではない。ほんの少し武器を交えるだけだ」

と。俺の様子を案じてか、珍しく並んで歩いてくれているシスの言葉。

しかし。俺の頭の中では、「殴り殺す」という部分だけが響き渡る。そう、その部分だけが、だ。その後の否定は、そのインパクトが大き過ぎるあまりに潰されてしまっただけ存在感ゼロ。

しかも。

ずどーん、って。

「なあシス、さっきからずどーんだのはこーんだの、日常生活じゃ全くお聴き申し上げられない珍妙かつ避難警報発令中な音の数々が俺の鼓膜を揺らしてるんだけど……」

「先客が居るんだろうな」

……はい？

「じゃあ何！？ 俺達はこのどかーんばこーんの中でちんまりと剣を交えなきゃいけないの!？」

「ちんまりとは何だ。派手に戦い合いたいとでもいうのか？ この私と」

そういつつもりで言ったんじゃないし、正直そんなの御免です。

それに何だよ、この私と、って。其処に妙ーに圧がかかっていた気がするぞ畜生。

しかし次の瞬間には、ああそりゃあそうだよな、と合点する。

彼は隊長さん。それは、隊で一番強いって意味なんだろうな。

いや、それはある意味、安心していいのではないのだろうか。  
悪いなセツナ、この私は手加減だけは下手なんだすまないなフハ  
ハハハ……なんて事にはならないだろうし。

と。必死に自身を安堵の中に持っていきこうとするも、なかなか上手くはいかない中で。

……嗚呼。

時の流れとは非情なもので。

俺達は、激しい音の中。その場所へ到着してしまっ。

アーチ状の入口。色も硬度も鉄っぱい材質の、その扉の上には。  
大きく、当然異世界の言語で。……えーと、翻訳機能発動。

「……訓練場？」

「そうだ。武器も此処に用意してある」

彼の言葉の後半で、中から聞こえてくる音は消え。辺りは静まにかえる。

「行くぞ」

と。シスが戸に手を掛けたから。

覚悟を、決める。

音をたてて開く扉の先に開いたのは、広い、広い、空間。

俺の学校の体育館の倍程はあるだろうか。天井も随分と高く、其処にはやはり球状の明かりが沢山。

そして。

部屋の奥で。轟音をたてていた……いや、見るなり多分音をたてていたのは一人なんだろうけど、その二人が。

同時に此方を見。一方は早、視線を逸らし。

もう一方、つまりは俺をその特異な瞳に映し続ける、轟音の犯人と思しき彼は。肩に担ぎ上げていた謎の物体を大層な音をたてて下ろし、此方に無かつて大きく手を振り。その声は体育館を揺らす。

「おーす！」

シスがふつと息を吐き。そして彼等の身元を割る。

「グレイダにリモ、か」

「グレイダに……プリジモさん!？」

言われてみると。あの美しく流れる金髪、そして遠くから見ても光輝いているのが解る御容貌は、確かに彼が姫君である事を物語っている。

見目麗しく、可憐である筈の姫君がどうして、汗と涙と、ちょっと

とは血に濡れているかも知れないこの地を踏んでいらっしやるのだろうか。

疑問を抱いたまま、静まった訓練場内を歩み。結構な距離を歩いて、ガングロとガンシロという白黒コンビに近づく。

「おーすセツナ、初任務お疲れなー！」

「任務じゃねえだろ……依頼来た訳でもねえんだし」

と。つん、とそっぽを向いているプリジモさんは。上着の袖を腰に巻き、固く縛って。藍色のインナーはタートルネックにノースリーブで、透き通るように白く細い腕を曝している。美しい髪は赤い紐で、高い位置で一本に結わえ。つまりは男の憧れポニーテールである。

そして、にかにかと笑っているグレイダは。

何やら、機械的な……煙突、を持っていらっしやる。

そう、自棄に凹凸の多い筒。その中程から、緩やかな曲線を描く太い突起物が一本。

俺は開いた口が塞がらないまま、それを恐る恐る指差して。

「あの、その、煙突は……」

「おー？ 煙突じゃねーよ。バーレニウスだっつーの」「ばれ……」

そう言えば。彼曰く。

俺の武器はバーレニウスっつーんだ。

「え、じゃあそれが、グレイダの武器!？」

「おう、バーレニウスだ。よっしあ、よく見てろっつーの」

と。彼は、身の丈より大きなそれを軽々と持ち上げて。小さな蓋をばか、と開け。

大きく大きく息を吸い込んで。その中に、

息を、吹き込む？

……違う。

息じゃない。

音が違う。

それに。彼の口元から。光が漏れ出している。発生した熱気が。此方にまで流れてくる。

彼は。

「……火を」

吹いてる。

呆気にとられる俺の前で。彼は火炎放射を止め。こんなんでいかと、蓋を締め、金具で止め。

「リモ！」

と。姫君の名を、呼ぶ。

「もう一発、行くぜー！」  
すると姫は。

そちらに視線を流し……目を細め、ふつと溜息を吐いて。

「……壁に向かって撃つてりゃいいだろうがよ」

「だってよ、戦ってる感じしねーもんよ。ただ撃ってたってつまんねーじゃん。もうちょい付き合ってくれたっていいーじゃねーの」



そう言って笑い、グレイダは。

煙突の先を。姫君に向け。

其処には、赤い光が、集う。

周囲を取り巻く熱だけが原因ではない、嫌な汗が。背中を伝い落ちていくのが解った。

「ぐ、グレイダ……撃つ、って……え」

どういう事。そう、俺が紡ぐより先に。

シスが俺の腕を掴み、数歩退かせ。そして、静かな声で。

「よく見ている」

グレイダと、同じ事を言う。

そして。

「ドンッ！」

グレイダが、巨大なトリガーを引いた途端。

叫びと共に。赤い光が。劫火と化して噴射される。

「うあ」

俺は思わず手で顔を庇う。物凄い熱と風だ。

魂が宿ったかのようなそれは、とぐるを巻いて唸りを上げ。対象を飲み込もうと猛スピードで走る大蛇は、瞬く間に一文字を描いて壁に衝突する。

が。赤と橙の余韻が残る、そのライン上に。既に姫はいない。

一体何処へ。

「セツナ、彼処だ」と。

シスが顎で指すのに促されるまま、其方を向くと。

「ええっ!?!」

其処は何と、天井近く。彼は、傾斜九〇度の壁に着地せんとしていた。

高く、そして素早く。飛び上がっていた羽の無い天使は、身を翻して、グレイダへと踵を返し。壁に、その……微かに緑色の光を放つ足を付いて。再び大ジャンプを繰り返そうと膝を曲げた、その一瞬で。

その手に。無から出でた、あの鎌を得る。

其処でグレイダが第二波を放った。

瞬く間に、姫の居る位置まで伸びる火炎。

しかし、姫は壁を蹴ってそれを避け。猛スピードで地面に衝突、かと思いきや、脚を前に蹴り出して、生み出した風により速度を落とし、見事着地。

そして。

第三波が来る。

彼はそれを右に素早く移動して避け。火炎の軌道と並行に、グレイダに向かって突進する。

彼は。一陣の、金色の風の様。

俺の前を通過したけれど。

速過ぎて、よく、見えな、かった。

けれど、ほんの一瞬見えた銀の煌めき。

気が付くと。プリジモさんは、グレイダの後ろに、背を向けて立っ  
ていて。

「あの魔天使野郎に見せてやるだけってえなら」

鎌の切っ先を。彼の喉仏に突き付けていて。

「……もういいだろ、馬鹿」

ゲーム、セット、だ。

そんな状況にありながら、笑い声を上げるグレイダ。彼のいーぜ、  
を合図に、プリジモさんの持つ鎌は闇と化した。

彼等の戦いを、呆然と見つめていた俺は。  
はっと我に返って、額の汗を拭う。

「やっぱりモは速<sup>はえ</sup>ーのなー、なかなか捕まんねーもんな」

「……当てる気もねえくせに、んな事ぬかしてんな」  
彼等の交わす言葉を、薄らと耳に流しつつ。

たった今、目の前で繰り広げられていた事に。あまりにも現実味  
が無<sup>が</sup>さ過ぎて。

俺は夢を見ていたのかと思った。

いや。もしかしたら、最初からそうなのかも知れないけど。

でも。

兎に角、これがアスカなんだ。  
これが。戦闘部隊。ファイクリーダー

と、俺は息を飲む。

凄過ぎるん、ですけど。

「見学はどうだった？」

シスの声に、振り返ると。彼はこんなに暑いというのに……おまけに長袖の下に、これまた長袖タートルネックという厚着なのに、汗一つ掻いていなかった。

「……凄い、んだけど」

まだしっかりと据わっていない声で、感想を述べる。するとシスは、御二人さんの方へ視線をやって。

「リモは風の精霊魔法クラウンティアの扱いに長けており、それを使用して機動力を上げている。あの子の脚が緑色の光を纏っていたのが見えただろう？」

「あ、うん、何とか」

「あれが風の精霊魔法だ。戦闘中はずっと使用し続ける。リモは生まれ持ったの魔力の量が尋常ではないから……そういう戦闘形態をとっても苦ではないんだ」

「へ、へえ……」

消費量が多くても賄まかなえるほどの貯蔵タンクが、あの華奢な身体の中に在るといふ事か。

「そしてグレイダは……世界最強と謳われる種族、竜族だからな。怪力の持主で、そしてその身体は打たれ強い。それに、あの子は意外と器用でな。部品を何処からともなく失敬してきては、魔導銃を自分で組み立てて武器にしている。案外脆いがな……まあ、扱い方が悪い所もあるだろうが」

そりゃ、あんな馬鹿力で扱われたら壊れるでしょうよ。

「しかし、だ」

と。彼は俺の方に視線を戻し。

「リモは魔力が多い故に身体に掛かる負担が大きく、あまり長時間は戦えない。グレイダは機動力に欠ける」

シスが放ったのは失礼な言葉。すると例の二人が此方を向く。

グレイダは確かにそーかもな、と大笑いし。プリジモさんは明らかにむっとして俯いてしまう。

王子は彼等にちらと視線をやって。

それから再び俺を、その翡翠色の瞳に映して。微笑む。

「つまり……任務中の戦闘においては、弱点を補う事が大切になる訳だ」

「あー、成程」

うんうん、と。俺が頷く、と。

シスは左足の爪先を……入口ではない、もう一つの鉄の扉の方へ向け。

「では、そろそろ我々も始めようか。ついてこい、武器庫に行く」

うぐぐ。

と、俺は背を丸くする。

嗚呼。いよいよです。

続×12・フツカ目…出逢う銀

「此処に入るのは久しぶりだな」

扉の前に立ったシスは、押し黙るそれを眺めつつそう言った。

「アスカは個々人で当然武器を所有し、滅多にそれを変える事は無い。それに最近では、戦闘経験のない新人隊員が少ないので……皆それぞれ熟練した武器を持って入隊する。だから此処の武器は滅多に使用されないんだ」

じゃあ俺みたいなのって珍しいんだ、と。ちょっぴり傷心の俺の前で。

鉄製の重そうな扉を、シスが楽々と引き開けると。

其処には。

先程もそうだったけど、その御世辞にもがたいが良いとは言えない身体の何処にそんな力が。と、一人想像の世界へ突入しかけた俺を。

強制的に現実へと引っ張り戻す光景が待ち受けていた。

灯りはなく。訓練場から漏れ出す光に照らされる、薄暗いその空間。

出迎えてくれたのは。長い棒の先から鋭く伸びる銀。そう、槍。いかにも重そうな鉄球のついた鎖や、鞭なんかもある。

そう。其処は武器庫で。此処にあるそれは。

全部、本物。

俺は静かに息を飲む。

シスに招かれるまま、ひんやりとしているその中へ踏み出して。

「剣でいいんだな？」

「あ、うん」

そう。

用があるのは。鞘に収まり、その輝きを休めているのだろう、剣。それが配置された一角へと歩みを進める。

安置された刃が、鋭利な視線を俺に向けている気がして。背筋が凍る思いだった。

此処に息衝く武器は全て。いや、全ての武器は、何らかの目的があつて命を吹き込まれた。

それは護る為。もしくは、戦場で主の敵を、一人でも多く討ち滅ぼす為。

静寂を破りたいと。力になりたいと。戦わせてくれと。

願う声が聞こえてくるようで。長居していたくない空間である事に違いなかった。

と。そう思う一方で。

「剣といつても色々あるのだが……」

シスの言う通り。大きさも太さも、柄の形も、バラバラで。この中から自分に合うものを探すのは相当難儀そうである。

不意にシスは身を屈め、その群れの中から、まず一本取り出す。刀身が細く、見るからに軽そうなそれ。

「これはどうだ」

と。俺に手渡す。

鞘から刃を抜く事はせず、取り敢えず柄を握った感覚で選んでみる事にした俺は。

「あ、これ、駄目かも」

握り込んだ際、手にフィットしない。パス。

と、シスにお返しする。

「ならばこれは」

二番目に彼が渡してくれたのは。大剣、と呼ばれる部類に入る大物で。腰につけるのではなく、背負うようにして持ち歩くタイプ。見た目通り。やはり重い。

柄は結構太め。これにマッチする手の大きさって。

「これは論外」

「そうか、ならばこれはどうだ」

前の二者の間を取ったような大きさ。

丁度良いくらいだけど、でも。

「……柄が好みじゃない」

残念ながらお返しする。と、シスはすぐに次を差し出す。

「これは」

「……振り辛い」

「こっちは」



「……これは、ちょっと」

「これならどうだ」

「……幅が、微妙かな」

と。次から次へと剣を差し出していくシスと、気に入ったものが見つからず返し続ける俺。

いつの間にか空間の醸し出す恐怖も忘れ。一心に選び続ける、のだが。

うーむ、予感的中。一言に剣と言っても、千差万別。

と。

「ではこれは」

流石に申し訳なくなり、もうある程度で我慢するしかないかも知れない、と。諦め掛けた時だった。

シスが差し出したのは。焦げ茶色の鞘に収まった剣。大きさは程良い。

柄を握ってみる、と。

「あ」

この掌に見事に収まる。持っていて心地良い。

「これ、いい！」

やっと出逢えた喜びに、俺が笑顔で声を上げると。

「抜いてみる」

シスは。  
眠る銀を呼び覚ませと言った。

「刀身が欠けているかもしれない」  
「……うん」

鼓動の高鳴りを感じる。緊張に、それを握る掌から汗が滲みだす。しかし、自然と震えはなかった。

俺は、選び出した剣を横に。鞘に手を掛け。

一気に、引き抜いた。

現れたそれは息を始める。

真っ直ぐ伸びる、目映いばかりに美しい銀が。闇の中で煌めいている。

その切っ先で、天井を指してみた。角度を変え、それが映す影と光はゆっくりと流れる。

「どうだ」  
「……綺麗だ」

シスの問いにそう答えて。俺はただ、ふっと息を吐いた。

不思議だ。

俺は竹刀しか持った事がないから。真剣を持つ事は、不安で堪らない事だと思っていた。

人を傷つけ、殺す。その手段を得てしまう事は、途方もなく怖い事だと。辛い事だと、思っていたのに。

こうして目の前にある刃はただ美しく。

この剣が手の中にある事を。素直に受け止めてしまえている。こつある事が。自然なのだ。俺の五感が訴えている。

不思議で。

きつと、それは。戦場で、誰かを護る為に戦っていかなければならない俺にとっては、良い事で。

けれど少なからず。恐怖にも似た違和感を、感じる。恐怖の対象はこの刃ではない。

俺だ。

またしても予想を裏切っていた俺。俺が俺じゃないようで、怖い。

「……真剣など、手にした事もないと言っていたな」

シスが言いたい事が。何となく、伝わってくる気がした。けど。それに応える事はしない。したく、なかった。

「そつだよ。持ってたら銃刀法違反で逮捕だよ」

俺はそう言つて。すぐに出番が来るのだからうけど、一旦銀を鞘に戻す。光は闇の中へ。すつと、滑らかに滑り込んでいった。

「じゃ、やるつか」

シスの方を振り向くと。

彼も。草色の鞘に収まった剣を手に使っていた。先程俺に渡してくれた中の一つだったと思う。

「ん？ あれ、シスつて棒使うんじゃないの？」

「そつだが…… 剣士相手には剣を以て戦った方が良いかと思つてな。

かなり昔だが……姉上に剣術を教わった事もあるしな」  
「へえーそうなんだ、お姉さんにねー」

……お姉さん？

「お姉さん!？」

「どうしたセツナ、突然大声を出すな。何か倒れてきたらどうするつもりだ」

「だ、大丈夫俺の声そんな威力ないから！ てかお姉さん!？ シスってお姉さんいたの!？ うわ、一体どれほどの美人がっ」と。

「いた、のではない」

意味深な言葉を放ち、シスは目を伏せた。その瞬間、銀の間から翡翠から蒼への変化が見えたような気が。

しまった、これはお決まりのパターンだ。ひよっとして俺、まずい事言った？

「え……いや、言いづらかったら無理に話さなくていいって言うか、えと、つまり聞いてごめん……」

あたふたと。出来る限りのフォローをした俺に、シスは。

「いる」

もし俺がお笑い芸人だったら。こけてあの槍の収められた板に激突、全治二か月の重傷を負っている。

そもそも、いた、を訂正した時点でこうなる事は気付くべきだったんだろうが。それって絶対、言い直すとこじゃないと思うんですけど……。

「では、行くぞ」

「……了解、隊長」

「シスで良い」  
「……知ってる」

最早緊張なんてぶっ飛んで、寧ろリラックスというか脱力して。

グレイダの起こした熱気の所為か。ほんの少しだけ暖かくなった  
武器庫を後にする。

訓練場の御二人さんは休憩中。プリジモさんが壁に寄り掛かって  
休んでいる傍らで、グレイダは大の字になって寝そべっていたが、  
俺達が来ると立ち上がり。

「おーっ、セツナはシスと戦<sup>や</sup>んのかよー？」

「うん、そうなんだけど、グレイダはどうしてひ……」

おっとっと。

たとえば今も昔も変わらず愛され続けている、海洋生物的スナツ  
ク菓子だけど。

「プリジモさんと訓練してたの？」

「おー、あのよ……」

彼はその後、大きな大きな間をおいて。

「わり、何でだったか忘れた」

俺は思わず手の甲で二度空気を打つ。おいおい。  
と。其処で何故かグレイダはにやっと笑い。

「なー、何でリモの事プリジモさんって呼んでんだ？」  
単純明快、嫌われているからです。

と。それはあえて声には出さず。

「失礼かなーと思って」

自分にとって柔らかく感じられるよう言葉をセレクション。  
するとグレイダは。

「なー、それ違うつての。リモはリモとかリモたんって呼んでやっ  
た方が喜ぶんだぜー」

「そうなの！？ てかりモたんって……たんって可愛いね」

「な……ち、<sup>ちげ</sup>違え！ 誰が何時喜んだってんだ、妄想してんのも大  
概にしやがれバーカ！」

暑い所為ではなく、別の何かで頬を赤く染めた姫がこれまた可愛  
らしくお叫びになる。

それでもなかなかこの訓練場全体には響かない。やはりグレイダ  
の声は凄いのだと実感した。

「セツナ」

と。シスが俺の名を呼んだから。

俺は、彼の元へ。

竜姫コンビから少し離れた位置。俺達は距離を置き、向かい合っ  
て立ち。

互いに鞘から銀を抜き、鞘は足元へ。

剣は光の下。先程より、ますます爛々と輝いている。

「……宜しくね」

俺は小声で、それに向かって囁いた。

「では、始める。私が止め、と言うまで……剣を交えるぞ」

「うん」

俺の返事に、シスが頷くのが見えた。

俺は深呼吸。吸って吐いてを二度繰り返す。そして目を閉じ、精神を集中……。

やがて。目を開けた俺は深々と頭を下げ。顔を上げてから。「胸をお借り致します」

と。シスが微笑んで。何だそれは、と声を伸ばし。剣を、構える。

俺も。柄を両手で握り込み。煌めく銀のラインを、対峙する者の中軸に合わせて。

「全力で、掛かってこい」

シスのその声を聞いたから。

俺は大きく大きく息を吸い込んで。

唇を、引き結び。

地を、蹴る。

続×13・2日目：剣士セツナ

手にした刃は、右斜め下に向け。  
走り出した彼は。凄まじい速さで、間合いを一気に詰めていた。

シスは驚きに一瞬目を見開く。が、しかしすぐに視線に鋭さを戻し。

彼が素早く振り上げ、縦一閃に「敵」を切り裂かんとするそれを。自らの持つ刃と交わらせる。

走る衝撃が、全身を貫いた。

金属がぶつかり合う、鋭い音が。波紋となって空間を揺らす。

彼の動きは思っていたよりもずっと速く。そして。加えられる力も、予想よりも遙かに強く。

その力に対抗しつつ。シスは、彼の整った顔を……その瞳を、間近で見<sup>み</sup>。

其処で気付き。そして、戸惑う。

これが。

あの、セツナなのか？

その表情には。生まれて初めて殺傷能力を有する武器を持った事、それに対する恐れは愚か。

緊張の色も。昂奮の色さえも、無い。

それどころか。彼の黒の中には冷気がある。



交戦者を凍てつかせる瞳。

これは、と、シスは直感する。

此奴の瞳は。戦いに生きる者の、瞳だ。

「真剣を持つのは、初めてだったな」

「うん、って……さっきもそんな事訊かれた気がするよ？」

返ってくる声は、何時もの彼のそれと同じ。それがあえての事なのかは解らない。

シスは自身の声を平かに保ちつつ、こう問うてみる。

「どうだ、扱っている感覚は」

「そうだね……ちょっと待って、考える」

と。

其処でセツナは刃を逸らし。

飛びずさり。すかさずシスが放った横一闪を、いとも簡単にかわしていた。

シスの攻撃の範囲リーチ外に一旦退避した彼は。再び剣を正面に構え。

「……普通、かな」

冷気を携えた眼でシスを見つめたまま。やがて、セツナはそう言った。

「普通、か」

「そう、普通。竹刀で戦やり合ってる時と全く変わんないかって訊かれたら、どうなんだろうって感じだけど」

そして。

「てか」

彼は、微笑む。

「シス、ちゃんと手加減してくれてる？ 実際、さっきの一閃は結構ヤバかったよ」

「すまない」

シスは一度息を吐き。手加減を考えている余裕のない状況に追い込まれていた事……

そして。

彼の剣士としての実力が。

自らの剣の腕を遥かに凌駕している事に気が付く。

「じゃ、もう一丁！」  
と。

セツナは再び。素早く斬り込んでくる。

繰り返す、威力と早さのある斬撃。しかし、力任せなどでは決してない。

彼の繰り出す攻撃の全ては。シスの剣の軌道を読んだ上で、精確に放たれている。

つい先程手にしたばかりの剣は、まるで彼の身体の一部であるかのよう。自在に剣を振るう今の彼に、無駄な動作などは一つとして無い。

だからこそ。剣の使用に慣れていないとはいえ、アスカ最強の一

角と謳われる一番隊隊長を押す程の攻撃と為っているのだ。

交わる度に銀は鋭く鳴き、火花が散る。

まさに光の交差。

広がる衝撃。槍と化して届く響き。

「すっげーのな、セツナ」

その特異な黄金の瞳に、剣を交わらせる二人の姿を映しだしていたグレイダが。珍しく音量を落とした声で感嘆した。

「隊長どんが押されてんのなんて、滅多に見れねーし。てか、アレだと二番隊のユーナとも互角でいけるくらいじゃねーの？ まじで凄え」

二番隊と言われると。

どうしても、隊長の名が思い浮かぶ。

そう。恩人の名が。

プリジモは小さく息を吐き。眼を閉じ、闇の中に浸った。

「シーちゃん剣使ってるからな……何時も使ってる棒と攻撃範囲違えし、上手く戦えねえのも当たり前だろ」

そう言いつつ、彼は髪を解き。ふわりと流れ落ちた金を、今度は項に近い位置で結わえる。

目を開けると。

その宵色の瞳に映る黒髪は。本当に、天才と呼ばれるあのシスと互角……いや、それ以上……それどころか、一方的に押ししているようにも見える。

大したものだと思う、けれど。

絶対、声に出してやんねえ。

「なーなー」

と、その時。グレイダのにやにやが視界に入ってきた。鬱陶しい、とでも言いたげに目を細め、しかし彼の方へ視線は遣り。

「……何だつてんだよ」

「セツナの綽名、何にすんだ？」

プリジモはつん、とそっぽを向いた。

「……あんな奴名前前で呼んでやんねえし」

「おー？ 名前じゃねーよ、綽名だつての」

そういう事じゃない。しかし、それを言っても解らない奴だと言う事は百も承知。

仕方ない。強いて言うならば、だが、と。

彼の整った唇が。微かに動いて紡ぎ出す。

しかし。鼻も目もいいが、耳だけは若干遠いグレイダは聞き取れず。

「あ？」

と、首を傾げる。

途端に頬を赤くした姫君は、口を完璧に閉ざしてしまふ。

二度も言っつてやるか。バーカ。

と。

其処で。

唐突に決着は着いた。

ほんの一瞬シスが見せた隙。切っ先があらぬ方向を向いた、その瞬間に。

セツナは力を込め、斜め右下から銀を一気に振り上げる。

ガキイン……と。

一際大きな波紋が広がり。反響を残し。

一呼吸遅れて。

弧を描いて舞った銀が、地に落ちてたてた音。波を重ねる。

それが。仕舞の合図。

「はい」  
と。

彼は冷たい瞳のまま、口元を歪め、微笑み。  
その額からは。一筋、つうと汗が伝う。

「一本、ね」

「……もう、いい」  
と。シスは軽く、首を振る。

「十分だ……止め」  
若干呼吸を乱す俺は、彼から視線を流し。少し離れたところに転がる、彼の剣を眺め。  
そして。

彼の白い喉に突き付けていた剣先を、ゆっくりと落とし。地に、  
向け。  
よろよろと後ずさる。

嗚呼。心臓が、高鳴っている。それを、やけに強く感じる。  
こんなの。本当に久し振りだ。

彼と剣を交えている間。わくわくしていた。  
凄く楽しいと。誤魔化しようがない程に、強く、強く、感じていた。

ああ。この感覚。  
……酷く、懐かしい。  
でも。

今はとりあえず、いや、とにかく、暑い。背中とか汗でヤバいです、冷たい水が飲みたいです、冷たいシャワーに入りたいです。  
と。

「素晴らしいな」

剣を左手に委ね。タオル持って来てれば良かったなど、右の手で額の汗を拭う俺に向かって。

シスは微笑み。

「まさかこれ程とは思わなかった……素晴らしい。本当に」

静かな声。俺の中に染み入ってくる隊長殿からの有り難き言葉。それが素直に嬉しくて、思わず頬が緩んでしまう。

「あはは……ありがとう。でもシスも流石だよ！ 本業棒使いなのにさ、剣もこんなに使いこなせるんだ」

「私の事などどうだっていいだろう」

そう言つて。剣を拾いに向かうシス。

どうでもいって、と。苦笑いする俺も、鞘を取りに戻り。激しくぶつかり合っても輝きは衰えない、美しい刃を鞘に収めてやる。そう言えば、刃のアフターケアとかつて何もしなくていいのだろうか。

と。

「セツナ　！」

巨大な声で俺の名を呼ぶのは、当然グレイダ。彼の方を向くと、手をぶんぶん振っていらっしやる。

「すげーぞあんた！ まじ感動したわ　！」

か、感動をありがとうー、と。ちよつと違う気もするが、俺も叫んで手を振り返すと。彼は何故か、地をその手で叩きつけ、轟音を上げながら大笑い。此処まで伝わってくる振動を感じつつ。あの怪力を考えると、彼が手を振っている時に近づいていったら、どれほ

どで空気を裂く音が聞こえ始める事だろう、そんな事を思う。

「しかし、お前は本当に強かった」

背後からの声に振り返ると、シスは大分歩み寄って来ており。俺の傍らで立ち止まり。

「またの機会には……私の棒術と、手合わせ願いたいものだな」

「いや、俺勝ち目ないと思うし……」

「そんな事はない」

「そんな事ない事ないよ」

実際、シスが本気で戦ったなら。棒を豪快にぶん回し、間合い詰める間もなくタコ殴り、おまけに魔法で氷漬け。草原にでも放置されて自然解凍、嗚呼太陽って素晴らしいと思いきるのがあるところだろう。

「ともあれ、お前の力がいかほどのものかは、しっかりと見せて貰った」

そう言って王子は腕を組み。

「戦場でも十分通用する実力だ。これほどならば今すぐにでも……戦闘のある任務に同行させようと平気だろうな」

「へ」

……ほら見る。

本気を出していらっしやる訳でもあるまいに。俺はいとも簡単に凍り付く。

「大丈夫だ、前線に出すような真似はしない。それに、お前にはま



だ命の危険が伴うような事もさせない。少しずつ慣れさせていってやる」

ぐ、ぐぶつ。

「……ほ、本気なんですか」

畳みかけられて大ダメージを負った俺に。

シスはクリティカルヒット付属で、止めの一撃を決めるのであった。

「勿論」

「うあああ……」

哀れ、俺はがくつと膝をつく。

いや、喜ぶべき事なのかも知れない。恐らくはそうなんだろう、上司となるシスに認められたという事なのだから。

「どうしたセツナ。民を護りたいのだろう？」

「う、うん」

「ならばそう頂垂れる必要などないだろうが」

うん、そうなんだけど。

でもやっぱり。稽古として対峙するシスと、戦場で対峙する敵って全然違う気がするし、当分の間は安全なところで訓練を積んだ方がいい気がするんだ。何てったって、恐らく多分きつと八割方ビギナーズラック。

という事を。訴えようかどうしようかの境で悩んでいると。

シスは大層素敵な笑顔で仰った。

「では戻るぞ。どうだセツナ、腹が減っていないか？ 恐らくもう夕時だぞ、夕食の時間だぞ」

今は食い気より恐怖なんですけど。いや、熱って気持ちが悪いの身体にとっては、水を飲めるのは有り難い事だけだね。

うーむ、それにしても素晴らしい笑顔だ。姫というよりは勇者で王子で、という感じが強いシスには、美貌、美人、綺麗！ という印象はない。だからあまり意識しないのだけれど……やはり彼は美少年、その笑顔は優美で、尚且つとんでもなく格好良い。

悔しい訳じゃないけど。ええ、そんな感情一ミリも抱いてないけど。

「どうしたのシス、ひょっとしてシスお腹減ったの？」

こんな事を言ってみた。と、シスの反応は。

「馬鹿を言うな、何故私が腹など空かせなければならぬ。しかし……お前が私と食事を共にしたいと言うのであれば、してやらない事もないぞ」

そう強がらず。お腹空いてるなら、腹が減ったぞ、って言えばいいのよ。

何せ彼は、昼から何も食べていない。コアさんが持ってきたプランに、全く口をつけなかったんだ。空腹でない訳がない、これまで腹の虫が鳴らなかつたのが不思議なくらいだ。

と、俺は苦笑して。

「じゃあ一緒に食べようよ、ね？ わーいご飯だ、お腹減ったー」  
すると。シス隊長は、満揚げにうんうん頷き。

「ああ、ああ、そうだろうな。やはり腹を空かしていたか……思った通りだ。では、早速食堂に向かうとしよう。……ああ、そうだ。あの子達も連れていく事にするか」

素敵スマイルのまま、彼等の元へ向かう彼の背を見送りつつ。俺は思う。

ひょっとして。昼間の事、まだ気にしてたの？

続×14・式日目…ゆっくりおやすみ

二階。辿り着いたのは、これまた広ーい部屋。

「長ーい机が数本並び。

理科室とかにありそうな丸椅子、それに腰掛け。隊員達は腹を満たしたり話に花を咲かせたりと、自由な時間を謳歌している。

其処は賑やかで、温かな空間であった。

俺達が食堂に辿り着いたのは、結構前の事。

自分の所為でこの空気を壊したくない俺は、フードを被り。部屋の隅の方の席についている。

さて。御待ちかねの食事は、既に俺の目の前にある、のだが。

「…………カエル」

カエルぴよこぴよこみぴよこぴよこ、合わせてぴよこぴよこむぴよこぴよこ。

超スローテンポで三回詠唱。しかし…………嗚呼、哀れ哉。

飴色の液体の中。贅沢にも丸ごと一匹がそのままの姿で投入されている茶色いそれが、再び息を吹き返して天高く跳ね上がる事はない。

「どづしたセツナ、食べないのか？」

隣からの声。艶のある木製のスプーンを持っている、持っている

だけで使用していない俺が、其方に視線を遣ると。

シスがそんな綺麗な顔をして、俺の目の前に配置されたそれと全く同じグロ料理を食していらっしやる。スプーンでちよっと切って掬って、口へ。流石はシルフィス隊長だ、実に模範的、美しい食事の仕方であらっしやる。嗚呼、何だか白い皿が金色に、スプーンの木色が銀色に見えてきた。

この料理をチョイスしたのは俺ではなく、この王子様である。

此方の料理といたら「プラン」しか食べた事が無い。そんな此方のグルメ事情には全くと言っていいほど知識が無い俺に。

どうせ食堂に來たのだから、もっとしっかりと食事！ というものを食べ。……とは、シス隊長の御達しで。

もっとしっかりと食事！ というものがどのようなものか、そしてカウンターに立つ顎髭あごひげ万歳な小父さんとどうやり取りをしていいか解らなかつた俺は。

じゃあ、シスのおススメを。

と。

するとシスは得意げに胸を張り。ああ、任せろふふふ、と。

暫くして彼が持ってきたのがカエルスープだった。

因みに、向かいの席ではグレイダが巨大なパンに食らいついている。何故か俺達三人の一団から席を二つ空けた所に座っているプリジモさんは、何か飲み物を飲んでる。

と。

其処でとうとう、俺の腹の中の虫が鳴いた。

「うっひひ……」

くそっ、カエルが何だよ！ カエルって意外とポピュラーな食材

なんだぞ、鶏肉みたいな味がするらしいんだぞ！

という訳で。

勇気を振り絞ったというよりは空腹に負けた俺は。

恐る恐る、カエルさんにスプーンを向け。

シスがしている様に、一口大に切る事を試みる。見たところ皮に相当な弾力ありそうだから、と。思い切って結構な力を加えてみたところ。

「うああああ……」

「どうしたセツナ、何を怖いしている」

どうしたもこうしたも。

意外とさつくり切れて。勢い余ってスプーンの先は皿に当り、大部分を削られたカエルさんは大崩壊。中から緑やら橙やらの……

野菜。

「……野菜詰めだったんだね」

と。すぐに隣から。

「野菜詰めではない。肉野菜詰めだ」

シス曰く。

料理の名前は、「バルプの抜け殻の肉野菜詰め汁」。

何処からどう見てもカエルにしか見えないのですが、実はこれは

カエルではなく。

バルブという名称の生き物の抜け殻、だそうで。バルブは山に生息する生き物で、抜け殻を食べるのが一般的らしい。それにしても綺麗に脱ぐものだ。

知らない事が山積です。

食事終了。

カエルスープ、結局完食。

「かなり美味しかったよ。おススメありがとう」と。俺が笑顔でシスに伝えると。

「本当にそう思っているのか？」

食事を終え、立ち上がった彼は。……怪訝そうな表情をする。

な、何だこのリアクション。

まさか。

敢えて自分の嫌いなものを持って来て。美味しそうに食べる振りをしていたというのか？ そんな、一体何の目的で。

考えを巡らせつつ。とりあえず頷く、と。

「ならば『かなり』ではなく、『凄く』、と言え。伝わる印象が全

く違つ」

俺のドキドキを返してくれ。

その後。

フードを被っている為にすっかり怪しい人物である俺と、一番隊隊長シスは、何とか小父さんに食器を無事返却。

部屋まで案内しよう、と言うシスに。

「あ、うん、ちょっと待ってて……」

と、俺は。少し待って頂いて、自分が座っていた椅子に立てかけていた剣を取りに戻る。

そう、頂き物なんだから大事にしないと。こんなにじっくりくる剣きつとそうそう無い、無くしたら大変だ。

と。剣を持ち上げた俺に気づき、先程追加注文した為まだ食事が済んでいないらしいグレイダが顔を上げた。

じゃあ俺行くよ、と声をかけると。彼は何やら音を発してくれたが、ものを頼張っている為に残念ながら理解不能。

苦笑した俺は。そうだ、と思いプリジモさんにも会釈をする。しかし彼はやはり無視、俺の事など視界にも入れない。

何時になつたら言葉を交わせるようになるのだろう、と。  
ほんの少し。不安が過つた瞬間でした。

温かな空間を後にし。

俺達は、悪く言えば無機質な廊下へと。再び、踏み出していた。



今は何時頃だろうか。時計が無い上、窓が無いから時間の感覚が狂う。今この状況では、じっとりと背に積もった疲労感だけが時間の流れを感じさせてくれる。

そう。どっと疲れが降ってきた。先程までは薄らとしか感じなかったのに。……空っぽだったお腹が満たされたからだろうか。

「疲れただろう。今日はもう休んだらどうだ」

「そうだね……あ、でも風呂入りたいな」

「ならば入れ。部屋に付いている。……公衆浴場もあるかな」

それって混浴？

なんて御決まりの質問を声に出す気力も最早無くて。俺は頷き。

「うん……ふあああー」

張り詰めていた神経が緩んだ所為か、欠伸が出た。

其処で。漸く気付くんだ。

「なんかさ」

俺は声を伸ばして。やはり少し前を歩くシスにそれを放ってみる。

「緊張しっぱなしだった気がするよ」

「緊張」

「そう」

思えば長い、長い一日で。

姫様との出会いがずっと前の事に感じられるけど。実はそれは今朝の事。

仲間になる人達の前で自己紹介して。自己紹介を返されたのも。シルドジークに行つて、アマリナさんと再会したのも。

この剣を貰ったのも。  
シスと。剣を交わらせた事も。

全部全部、今日の出来事で。

「一時も気が抜けなかったから。疲れるのも仕方ないかも」  
「そうだな……入隊初日だったしな。色々詰め込んでしまっ  
て申し訳ない」

「ごめんごめん、シスを責めるつもりじゃないんだよ。そう、俺は  
笑う。」

すると彼は、ちらと此方を見て。

その瞳が。蒼に染まっているのが解った。

彼の眼の事は、結局教えてもらえなかった。今訊いたって、頭に入  
ってくれるかどうか怪しいところだから、尋ねる事はしないけ  
ど。

少なくとも、今は。解ったような気がするんだ。  
多分、心配してくれてるんだろうな。

だから。背に向かって小声で紡ぐ。

ありがとう。

聴こえたかは解らない。其処から先、シスは黙って歩き続ける。

俺は。次々と移り変わっていく扉の色を。ただぼんやりと眺めて  
いた。

俺が案内されたのは、ワンフロア上って三階。緑色の扉の前だった。

アスカ総本部にはまだ空き部屋が多いらしく、汚さない限り自由に使っていていいらしい。意外と適当なんだね。

「手続きは私が済ませておく、安心しろ」

「了解。ありがとうシス隊長」

「隊長は不要だ」

と。敬礼をしてのそんなやり取りを交わした後。

空けてみる、と。シスに促された俺は手を伸ばし、その中央に当たってみる。

発光。

黙っていた壁がすーっと、音もなく開き。白い部屋に満ちた暗闇が出迎えてくれる。

カーテンが開いた窓から、ぼんやりとした光が差し込んでいる。

あれは月灯りだろうか。

「照明装置は……其処にある」と。

先に入っていったシスが。ドアの脇の壁の一部となっている、淡い黄光を放つ丸に掌を当て。途端に、あの柔らかな光が満ちた。

「一人部屋が嫌ならば後で考慮してやる。遠慮なく言うといい」

シスの気遣いに対し、平気だよ、と返しつつ部屋の中に入っていく。夏だというのに部屋を埋める空気は冷たく、ひんやりと涼しい。

これならクーラー要らずだ。

部屋の中には、木製の机と椅子が一式。入口の他に扉が二つ。手前側の一つは開け放たれており、中を覗くと洗面所と風呂。

姫の部屋と同じだ。

「寝台はその部屋だ」と。

シスが指す扉を開けると。其処は、ちょっと姫の部屋の空間とは違っており。

まず勿論ベッドがあり。奥には両開きの洋服箆笥のようなものが設置されている。

そしてベッドの横にはものを置ける台があつて、その上には既に黄色いポットが。

先程シスがやって見せたように、照明装置を探して、点灯。光を得た室内に侵入し、ポットを手にとって掲げてみた。表面がざらざらしている。材質は不明、しかしなかなか重量があるぞ。

「これ使つて良いの？」

「ああ、食堂から水を貰つてくるといい。……上の引き出しを開けてみる」

引き出し？ と視線を落とすと。その台には二段引き出しがあり。促されるままに引いてみると、其処には白いマグカップが二つ。

そう言えば、洗面所があるけど。其処の水は飲めないのだろうか。

俺の疑問を察してくれたのか。シスはこう付け加えた。

「食堂では氷を入れてくれるからな」

ああ、成程。

「照明が切れたら、アーティファ救護部隊の者に言って魔力を充填してもらえ。そうだな……救護部隊の拠点は七階で、其処に行くのもいいが……まあ、シエラに言うのが一番早いだろうな」

「うん、了解」

「風呂に入りたいのならば、ちゃんと手拭いが部屋に備え付けられているから安心しろ。確か……」

シスは筆筒を指差し。

「それの中に入っていた記憶がある」

開けて見て確認。ああ、ちゃんとあります隊長。

「了解」

「それから洗濯は風呂場でしろ」

「りよ、了解」

「後は……暑いのなら窓を開ける」

と。シスは窓に近付き。両開きになっている窓を開け放つと。

宵の涼風が流れ込んでくる。脇に留められた白いカーテンが揺れた。た。

「質問は」

俺に向かう言葉を短くそう紡いで。しかし窓の外を眺め、美しい銀髪を風に靡かせているシス。俺ははいはいと手を上げ、彼の注

目を引いた。

視線を闇から光の中へと戻し。翡翠色の瞳が俺を映す。

「質問あるよ。トイレは何処にあるの？」

「といれ、だと？」

トイレ、イズ外来語。

「えーと……あつ、あつ、解った、便所！」

「そんな事を大声で言うなはしたない」

思いきり眉を顰められ。あ、そうだね、と認めつつ、素直に謝罪出来ない自分が居た。

「しかし、それならば……確か廊下を挟んで向かいにあつた筈だな」  
ああ、そう言えば、他とはちょっと違う扉があつた気がする。けど部屋にはないのでですね、何だ、ちょっと不便だな。

と。其処でまた一つ、疑問が浮かぶ。

「筈だなんて……何で覚えてないの？ 毎日使うじゃんか」

するとシスは。

あろうことが。首を、横に振った。

「え？ あの、シス、何の話してるか解ってる？」

「何だその言い方は……解っている。私が便所の位置を正確に把握していない事を理解しかねその理由を求めたお前が、毎日使用するから当然知っているだろうという主張をした。どうだ、間違っていないだろう」

はい。完璧です。

俺が頷くと彼はふっと息を吐き。

「だから私はそれを否定したまでだ」

……オイオイ。

「いや、だから、否定する事が間違っていると思うんだけど」

「何故だ」

「何故って……」

明らかに、表情に困惑を映す俺に。

シスは、平然と。

「虹族は排泄行為を行わない」

「……へ？」

「私は虹族だ。虹族は魔導生命体、即ち魂を核とし集合した魔力により肉体を形成している種族だ。それ故に他種族とは大幅に性質が異なる。……その全てを説明するには、丸一日あっても足りない程だがな」

「……魔力、で、出来、た、種族？」

魔力？ 目に見えないもの？  
でも。

でも。

俺は彼の元へ駆け出して。突然何を、と驚きに目を丸くするシスの、その手を取った。

綺麗な手。その手は冷たい。  
彼の手に、俺は触れている。

「触……れるよ？」

「当然だ。虹族を形成する魔力は完全に結合し、具体化している。  
相当の事が無い限りは、離散する事はない」

「よ、よく解んないけど……」

「解らなくても構わない。兎も角、私が今此処に存在し、生きてい  
るといふ事は紛れもない真実だ」

そう言ったという事は。俺の考えが薄らと解ったのかなど。

思いつつ俺は、彼の手を解放する。

するとシスは微笑んで。

「説明なら、明日からまたじっくりとしてやる。だから……今日は  
もう休めるんだ。脳も身体も、な」

と。

俺の頭に。解放された掌を、ぽんと載せて。

「……ええと……シスさん……？」

続けて戸惑う俺を見て。彼は、目を細める。

翡翠色を取り戻したその瞳には。温かさが満ちていた。

「御休み」

柔らかな声が耳を打つ。



頬が熱くなるのは。  
仕方のない事だと思います。

結局、風呂に入らないまま。  
暗闇の中。柔らかなベッドの上、横たわった俺は。流れ込んでくる夜風を感じながら、ふっと目を閉じた。

実際。これが現実なのか、それとも夢なのか。まだはつきりとは解っていない。

現実なら。

此処は地球とは全く次元を異した世界、つまり異世界で。よく解らないけど、俺は六十億分の一の確率に見事当選し、招かれた。偶然俺が現れたところに、任務中のシス達が居て、出会って。アスカに入って。

これからは。種族だの魔法だの……向こうじゃファンタジーの中でしか見える事まみの出来ないような、非現実的単語の数々に埋もれて

世界を護る為に戦う。

ごく普通の男子高校生が、だ。

そんな話があり得るのだろうか。いや、あり得て良いんだろうか。

俺は寝返りを打ち。目を開けると、前に横たわる俺の剣。

これが。もし夢の中だったら？

此処は俺が無意識化で創り上げた空想の世界。出逢ったのは全て、  
空想から出でた人々。

再び目を瞑って。嗚呼、意識が墮ちて行きそう。夢と現の狭間で、  
こんな事を考える。

でも。そうだったらやだな、と。

やがて俺は。静寂の中、眠りに落ちた。

光と闇しか存在しない世界で、俺は。  
遠くの方から届く、懐かしい声を聴いたんだ。

優しい声。愛しい声。

俺は。その声の主に、ずっと恋い焦がれていた気がする。  
会いたくて仕方が無かったんだ。

そう。

多分。

あの人に会う為に。

俺は。此処に……

続×15・ふつか目……ここから彼の物語は始まる

静寂と穏やかな光の中。昨日の任務の報告書に筆を走らせていた銀髪の少年は、はたとその手を休めた。

目を瞑り、意識を研ぎ澄ませ。

収集範囲を拡大させる。

と。

先程まで確かに其処にあった筈の「彼」の意識が。跡形もなく消失しているのに気付く。

嗚呼、やはりな。そう思い、目を開け。

その空色に移ろった瞳に、廊下とを隔てる鼠色の扉を映す。

その向こう。近づいてくる意識は仲間のもの。

そう言えば昼間に、部屋に来ても良いかと尋ねられたのを思い出す。

急ぎ作業を一段落させ。

彼は。紙の横、硝子の筆置き皿に、手にしていたそれを置いた。

と。

その時。部屋の奥に配置された椅子に、窓を背に腰を下ろしている彼にまで届く、戸を手の甲で一度だけ叩く音。続いて、入るぞ、と綺麗な声。

「構わない」

彼はふっと息を吐きつつそう返す。

少し間を置いてから。扉の中央が例の如く発光し。姿を現すのは。淡く輝く金色の髪を持つ、絶世の美少年。

視線を伏せ、部屋の中へ踏み出し。自身の身体が完全に室内に呑まれると、立ち止まる。

背後で空間が動き、再び黙する壁と為ってから数歩進み……しかし、またすぐに歩みを止める。

何時もそうだった。

彼は絶対に、自分から他人の傍へは寄らない。触れられる事を、極端に恐れているから。

例え。自分に手を伸ばした者が誰であろうと。

「グレイダと訓練していたな」

と。シスは不意に目を閉じ。

闇に閉ざされた世界の中で、改めて。彼が纏う、力の波長を感じ取った。

グレイダとの交戦中にも感じてはいた事だが……昨日のそれとは格段に違う。安定している。

「魔力の状態を見る限りは、もう異常無いように思われる。だが……具合の方は平気なのか？」

目を開け。翡翠色の瞳に訪問者の姿を映し、そう問う。

と。光を纏う程に美しき少年は、小さく頷き。平気じゃなかったらあんな奴と戦えるかよ、と、何処か愚痴にも似た声を漏らす。

確かにグレイダは、例え訓練であろうと敵に回したくない相手

だ。

彼は戦いの神と称される竜族の者。

仲間相手の訓練だ、勿論手加減はしていただろう。威力も、火球を打ち出す速さも、戦場で彼が放つ劫火に比べれば温いものだった。しかし、竜族の吐く火炎の威力は凄まじい。あれでも相手の肌を熔解するには十分、一撃でも命中すれば致命傷になりかねない。

リモを当たるといふ事は……コアやフウガに断られてしまったか。それとも、彼の持つ機動力を見込んでの事か。

と。其処で肝心な事が過る。シスは自ら思索を断った。

「話したい事があるんだったな」

波音を立てない静かな声が、沈黙を揺らす。其処で初めて、宵色の瞳が声を放ったシスの姿を映した。

其処には。本物の闇が在る。

「……わかんねえのか」

……解らない、訳でもない。

「セツナの事か」

平かに彼が紡いだ名前。来客は微かに視線を揺らした。

「今朝、あの子とお前之間に何があつたかは知っている。お前が魔天使を激しく嫌悪している事も……まあ、今のこの世界に、彼等に対し良い感情を抱く事が出来る者が居るかどうかは怪しいものだがな」

「それが解つてて、何で俺の部屋にアイツを……」

明らかに風を立てるプリジモの声。俯き加減で対峙する相手をきくと睨みつけた。鋭い視線、しかしシスはその針を真っ向から受け

止め。

「お前が目を覚ましてしまっているとは思わなかった」

あの時、大笑いの中。合間に紡ぎ出したそれと、同じ事を口にする。

彼はばつと顔を上げ。

「そんな事……ッ」

と。

「眠っているお前を……私が、起こすつもりだったからな」

金色が、揺れる。

その表情に。驚きと戸惑いの色が散った。

「お前には予めあらかじめ会わせておいた方がいいと思った。隊の者全員が集めたあの場で突然対面させれば……私やあの子が、お前達を信用させようとどんな話をしたとしても……受け止めずに飛び出して行きかねない、と」

だから信じて。

と。「彼」の言葉が、頭の中で木霊する。

「彼の話聞いて欲しかった。セツナは信用に足る人物だと、知っておいて欲しかった」

シスの声と重なって。彼は視線を伏せ、長い睫毛を震わせる。沈黙の後。シスはふつと息を吐き。

「だが、確かにリモの部屋に置いておけば面白い事になるだろうと  
いうささやかな考えがあったのも事実。私は嘘を言った覚えはない」

……「彼」の言葉が、弾け飛んだ。

再び、鋭利な視線でシスの姿を捉え。

「……てめえ、まじ、腹立つ」

「そうか。すまなかったな、お遊びが過ぎたようだ」

くす、と。睨まれている当人は声を漏らして微笑んだ。

細められた目、中央に嵌る翡翠に。温もりを、優しさを、湛えて。

プリジモは思わず。視線を落とす。

怒りにはなく。温かさから、逃げたかったから。

「ああ、そうだ……セツナが出現した際お前の部屋にすぐに行く事  
が出来なかったのは、隊の者を集めて回っていた為だ。それは別に  
あえての事ではない」

と。

「……あと、少し」

其処で、プリジモが。震えているようにも聞こえる微かな声で紡  
ぎ出す。

彼は。腿の横に収まっている両の拳を、固く固く握り込んで。

「……来んの、遅かったら……まじで、アイツ、死んでたぞ」

そう。俺が。俺がアイツの首を。



しかし。

ほんの少し、沈黙を置いた後で。

「何故だ」

シスは。そう、首を傾げて。

「何故死ぬ」

解りきっている答えを。態々ちやわん求めようとする。

「お前があの子を殺す筈が無いだろう」

その上。目の前にあつた通路を塞いで。

お前を信じているぞと。その翡翠色の瞳で……強く強く訴えかけてくる。

だから。

「……何でだ」

明らかに震えるプリジモの声。

「何でそう言いきれぬ……」

その声音は。悲痛とも取れる。

シスは。最早自分の姿を捉えてはいない彼を、ただ真つ直ぐに見つめ。

こつ。紡ぐ。

「プリジモスタノードレー。お前が命の重みを誰よりも知る……断罪クロテ人、だからだ」

藍を突き通して差し込む、柔らかな光の中。  
声が聞こえる。

立たなきゃ。行かなきゃ。会いに行かなきゃ。

だって、そうしないと。

……筋肉番付なあの方が、覆いを取り払って此処まで迎えに来て  
しまう。

「刹那！ この阿呆野郎が、まだ寝てやがんのか、ああん！？」

ほら、戸越しに声が聞こえてくる。それは勿論、只管に野太くて、  
野太くて、野太い声だ。

その台詞からは。すいません極道の方でいらっしやいますか、と  
恐る恐る震える手を上げ質問してみたくするような、圧倒的なオー  
ラを感じ取る事が出来る。しかし身元が完全に割れている以上それ  
は無用だ。

でしょう。マイダッド。

「起きてねえなら返事しろこの野郎！」  
そんな無茶な。

と。思った瞬間に、なんとも豪快に扉が開かれた音。余りの勢いに開かれた扉は壁に激突、する音。

侵入に伴う足音を聞き、流石にまだ重い、重すぎる臉を抉じ開けて。光と影を帯びた天井から徐々に視線を横へ流していくと。

ああ。今日は薔薇柄です、母さん。

全くそんなもの何処で見つけてくるんだ畜生。エプロンを取り扱っている店舗は、彼への販売を自粛して戴きたい。

と、ぼんやりと。普段の俺ならば怖れ慄く筈のその光景を眺めていると。

「いつまで寝てんだくそつたれ。今何時だと思っただ？」

吐き捨てるように彼が言う。怒りに胸筋が動いたのが解った。

しかし朝っぱらからくそつたれなんて汚い言葉を使うな父さん、教育に悪いぞ。

そう思いつつ。

「……何時？」

帰ってきた答えは。午前七時三十分。

開・眼。

「嘘!？」

「嘘じゃねえよ、嘘だったら何で俺がわざわざ部屋まで来るんですかあ？」

妙に語尾が上がった言葉。四十近いおっさんの放った高音に寒気を覚える、しかしそんな事はどうでもいい、とにかく、ばねに弾か

れたようにがばと起き上がり。

机の上に配置された目覚まし時計を見る。

確かに。紛う事なく。明らかに。

「七時……半……」

何故だ。

と。ベッドの上で正座の俺。がっくりと頂垂れると。

全くこの馬鹿野郎は、毎朝起こしに来いつてののか？ 「冗談じゃねえぞこの野郎が、けどお願いしますお父様つてえなら聞いてやらない事もないぜ……」

「……おい刹那、聞いてんのか」

全く。耳に入ってこなかった。

だって。

目覚めたばかりの俺が纏っていたのは、あの海の青。

右胸には、大空へと羽ばたかんとする、白い鳥の刺繍。

お前はアスカだ。

記憶の扉が自然と開き。この鳥と似た……白く、美しく、そしてちよっぴり怖い翼を持つ、銀髪の美少年の声が木霊する。

アスカに為れ。私達と共に、世界を護るんだ。

世界を。

異世界を。

「父さん……」

「ああ!?!」

俺は。その青と白を見つめたまま。父親に、こっつ頼む。

俺の頬、抓ってみて。

この時感じた痛みを。

俺は多分。一生、忘れない。

## レイルズリード的休憩譚・セツナ編（前書き）

このレイルズリード的休憩譚では、キャラクターの自己紹介を少々です。

此方は、物語の進行とは全くと言っていい程に無関係なものです。今後お読み頂く上で、「此処を読まなければ解らない事がある!」という事は一切ありません。読み飛ばしてしまっても大丈夫です。

第一回は主人公です。では、どうぞ。

## レイルズリード的休憩譚・セツナ編

どうもー、風岡刹那です。

えーと……何だろ。

こう言うの慣れてないから、正直何話したらいいのか解らないです。

あつても、自己紹介ってか自己アピールって、将来就職活動の時とかに大活躍するスキルなんじゃないかな。大事だよ、今の御時世。今のうちから頑張るといた方がいいから……よし、じゃあ身近なところからコツコツと。

えーと。

七月二十日生まれの蟹座、十六歳。

高校二年生です。

詳しく言うと二年三組、それから剣道部所属。特技は剣道で趣味も剣道です。

勉強は出来ません。進路に一抹どころか二十抹くらいの不安を抱いています。

親友っていうと……大沢、になるのかな。大沢とは部活一緒だし二年になってからクラスも同じになっちゃったし、一緒に居る時間が結構多いです。

でも、ホモじゃないから。断じて違うから。

クラスじゃ他の人とも結構話してます。あーでも、確かに女子と

話すのは苦手です。

駄目だよねこういうの、一番物語の主人公とかになっちゃいけないタイプだよね。

いや、万物に共通する件じゃないけど……ほら、よくあるじゃないですか。お姫様を救いだすアレ。

もう、何て言うか。

お姫様抱つことが、えーと、アレとか、本当見てるだけで駄目です、無理。抱く必要もない羞恥心に悶絶して死にます。

好きな食べ物は……基本雑食なので何でも食べます。

見た目がうわってのは軽く引いちゃうけど、それでも食べます。だって成長期だよ、まだまだイケるよ。

ちなみに身長は一七八・八、体重は……これも言った方が良いのかな？

まあいいや。六〇・七です。

それから、家族は。所謂父子家庭です。母さんが居ません。

俺がまだ小さい頃に母さんが病気で死んで、それからは父さんと二人で仲睦ま……いややめよう！

平和に生活を営んでいます。

父さんによると、俺は母さん似らしいです。

あ、そうだ、うちの父さんは……一言で表現すると、筋肉エプロンマスターです。職業は大工さんです。

兄弟姉妹いないので、大沢ん家がちょっと羨ましくなったりもします。大沢は上に成人した兄一人と姉二人、中学校の弟と妹が一人



ずつ、それから小学生の弟が一人。ああ、先月また男の子が生まれ  
たそうです。結構な大家族です。

それから……容姿は極々人並です。はい。

そういえば、剣道やってる時とそうじゃない時で目が違っつてよ  
く言われるけど、別に自覚は。

でも……あつ！　　いっいや、いやいやいや、何でもない、本当に  
何でもないです！

……はあ。

ああそうだ、よっ、容姿と言えば！

異世界人って何であんな美人さんばっかなんだらうな！

いや、単に俺の周りに超絶美人さんらが偶然集合しちゃっただけ  
なのかも知れないけど。それにしても美人です。姫……プリジモさ  
んとか、常に光を纏ってる感じだもんなー。

あと、シスとか。シスは絶対もてると思う。うん。

ええと。あと話す事話す事、話す事は、と。

あ、性格。

自分の性格。

……どうなんだらう。

最近、っていうか「向こう」に行くようになって、何か自分が解  
らなくなってきたちゃって。

上手く説明出来ないけど、何か違うんです。今までと違う、自分が変わった……ん、じゃ、ないかな、えーと……

昔からそうだったんだけど、意識してなかった事が、解る、感じる、ように、なった、のかな？

……聞き流してください。

大沢からよく言われるのは、お前って本当鈍感だよ、です。もっと良く周りを見る、そして気づけ、ともよく言われる……けど。

見てるよ？

だから、そんな事ないと思うんだけど。

人間……じゃなかった。  
魔天使って、複雑です。

三日目…さあ 任務に行きましょう

あの日まで。

俺は何も知らなかった。

この身体は希望に溢れ。

「此の地に満ちる闇を吹き飛ばし、新たな世界を築きあげる」。  
そんな、巨大過ぎる理想を追い求め。只管に疾走してただけの  
愚者だった。

それが。

闇の中に潜んでいた事実が、「アイツ」によって俺達の前に照ら  
された、あの日。

気付いたんだ。

俺には最初から。

夢を実現する力も。天命も。無かったという事に。

なら。俺は何をすればいい？

俺の存在理由は何処にある？

果てしない苦悩と、思索の中。

やがて。答えを見つけ出す。

そうか。これが俺の天命か、と。

世界の為に戦う事。

それが。俺の、たった一つの……

地球産の俺が、地球で過ごした「今日」という一日は。

実に空虚な一日だった。

と。そう言うのは、別に何もしていなかったからではなく。

では、一日中部屋でゴロゴロしていた訳でもないのに空っぽという言葉を使う理由は何なのか。

それは「今日」「一日を振り返ってみると解る。

そう、「今日」は。

異世界パニックだか何だか知らないけど、寝坊して。

遅刻ストレスだったけど無事登校して、ぼーっとながら授業受けて。

放課後は、毎週木曜日は剣道部の練習が休みだから、帰る以外特にする事もなく。まあとりあえず、ぼーっとしながら自転車で帰宅して。

父さんと、ぼーっとテレビを見ながら夕飯の白米と味噌汁と焼き魚を食べ。ぼーっとしながら風呂に入り、歯磨いて、寝巻きに着替えて、その上から海色を纏い。

ぼーっとしながら、眠りに落ちた。

……とにかく、ぼーっとしていたのでありました。

あまりに酷いぼんやり具合だった為に、大沢を筆頭としクラスメイト達に心配されたし、父さんには病院行くか？ とまで言われた。今冷静に振り返って考えてみると、本当に申し訳ない事をしたと思う。

どうしたのかと問われても、別に何でも無いよ、大丈夫だよ、としか答えられなかった。

何でも無い訳が、無いのに。

要するに。原因は解っていたんだ。

けど。それは絶対に声に出してはいけない事だとも、解っていたから。

実は結構前、時間にして多分十五分程前から、眠りの底から意識を取り戻していた俺は。

ゆっくり、ゆっくり。目を、開けてみる。

と。

視界を埋め尽くすのは白。

視線を左へ、左へと流していくと、其処には。

光に貫かれた白いカーテンが、微塵も動く事なく留まっていた。

この時点で。此処が、この空間が。「向こう」ではない事が確定する。

猛スピードで手の甲で目を数回擦った後。俺は巨大なばねに背を弾かれたかのように勢いを付けて起き上がり。

巨大なベッドの上を四つん這いで移動。それから裸足のまま、白い石の床の上に着地。白の持つ冷氣が、足の裏から俺の身体へ流れ込むより先に、光に溢れる窓へ駆け寄り。

白の覆いを。取り去る。

と。

「……凄い」

声が漏れ出す。口元が、何故か弛む。

多分、俺は綻んで。昨日先導者がやって見せたように、窓を開け放っていた。

快晴の空の下。其処に広がるのは大草原。

この部屋にまで吹き込む、涼やかな初夏の風が渡ると。若草は次々にその身を倒し、朝日を反射して煌めいた。それは、まるで光の波のよう。

そう、言つなれば深緑の大海原だ。その向かって右手には、山が遠く臨める。

そして。その海の間じゅうには。

嗚呼。……町がある。

それは。遠目に見ても鮮烈に解る程に、色彩豊かな町。立ち並ぶ屋根は、赤に青に緑に黄色、一通りの色彩を網羅しているようだった。

俺が此方で知っているのはシルドジーク、暖色尽くめの町だけだから、他がどうなのかは解らないけど。けど、此処まで統一されていないのも珍しい気がする。

しかしそれは。朝日に照らされ、静けさを保つ今は感じ取る事が出来ないが……その地に住まう人々が持つ活気を、精一杯象徴した結果なのかも知れなかった。

何もかも、鮮やかな感覚。朝っぱらから身に受けるには、刺激が強すぎると思えるくらい。

そう。其処に広がる、鮮烈なこの景色に、視覚を。

吹き渡る風の音。そして、何処からともなく聴こえてくる、甲高い……恐らくは鳥の鳴き声に、聴覚を。

頬を撫でる風に、触覚を、突き刺されて。

俺は、思う。

夢じゃない。

それでも、何だかまだ足りなくて。実感が欲しくて欲しくて、だから俺は、自分で自分の頬を抓ってみる。すると痛い。

やっぱり。夢じゃ、ないんだ。

何もかも、現実。

何故かは不明だ。しかし俺は。「向こう」の世界と此方の世界を、確かに、行き来している。

俺の周囲を取り巻いていた、深い深い霧が。まるで、この空のように。晴れ渡っていくのを、感じていた。

窓を閉めて、ふつと一息吐き。天井に向かって大きく一つ伸びをしてから、俺は再び動き出した。アスカの上着は脱ぎ、ベッドの上に放置、しようとする。目に入ったのは。柔らかな白の上、横たわる細身の焦げ茶色。

訓練場の武器庫から発掘した、俺の剣。

美しい銀をその鞘の中に収め、それは眠っている。再び起こすのは、何時の事になるだろう。ふと、そんな事を考えた。

不意に頭の中に浮かんだのは、戦場のイメージ。重く苦しい。地獄の夢。

軽く頭を振って払拭し。俺は剣の上に、俺の纏っていた青を掛けた。

それから。ベッドの下から例の靴を取り出し、履いて。部屋の奥に配置された洋服箆笥を開け、中から白いタオルを取り出し。



寢室の外へ出て。此方でもカーテンを開け、洗面所へ。

傷一つ無い鏡に映るのは、他の何者でもなく自分の顔。久し振りに黒を見た気がして何故か安堵し、俺は表情を緩ませる。殆ど微笑んでいるに近い、自分の顔から視線を落とす、と。

また新たな発見がある。白いコップの中、立て掛けられているのは紛れもなく。

「うわ、まんま歯ブラシじゃん!？」

地球産のそれと非常によく似た歯ブラシ。色は勿論白だ。

別に構わないけど、何でもかんでも白に統一し過ぎだと思つ。白ばかりの空間に居たら、人間は精神がおかしくなってしまう、と何処かで聞いた事がある気がするぞ。

そんな事を考えつつ。歯磨き粉を探す。しかし、何処を探しても例のチューブは見つけられない。

ひよつとして、此方には歯ブラシは存在しても歯磨き粉という概念は存在しないのか？

じゃあ一体どうすればいいんだ。ああもうシス助けてー、と。早くも異文化という壁の前に崩れ落ちそうになった、その時に。

不意に。コップの横に潜んでいた、透明な瓶に入った液体が目に入る。

俺は眉を顰め。一人、呟く。

「……ひよつとして、これ？」

どうもはじめまして。液体歯磨き。

「お早う、セツナ」

……俺が。アスカの制服を纏い。それでも一応人目を忍び。  
トイレに行っている、その二、三分の間に。

御越しになってなっただけいらしゃった銀髪の美少年殿は、光渡る部屋  
の中央。腕を組み、長い長い脚を見せつけるかの如く仁王立ち。  
無音でスライドした緑色の扉の向こう、現れた俺をその翡翠色の  
瞳に映すなり、彼はそう爽やかに朝の挨拶を放ち。必殺の王子ス  
マイル、大・炸・裂、だ。

眩しいやら何やらで、俺は視線を落としてしまっ。

「お早うシス、いい朝だね、うん、爽やかな朝だよな」

「ん？ 表情が優れないなセツナ。どうした、体調が悪いのか？」

いいえとんでもない、全く以て何でも御座いませんです隊長殿。  
俺が顔を上げ、苦笑いしつつそう返すと。

彼は。怪訝そうに眉を顰め。

「本当か？」

俺がうんうんと二度頷くと、来訪者は表情を緩め。

「ならば構わないが、体調が優れない時には遠慮無く、迅速に私に伝える、無理はするな。……ああ、それから敬語は不要だ、そして私の事はシスで構わ」

「あー、うん、知ってるよ、大丈夫」

ないと言っているだろう何度も言わせるな阿呆、という、シスごとシルフィス「ゼノ」アルヴェルド一番隊長殿の言葉を遮りつつ、俺は漸く部屋の中へ。

背後で空間が隔てられるのを感じた後。俺はああそうだと口を開く。

「歯磨きの事なんだけどさ、あー、えっと……」

と。俺は問題のブツを取りに、洗面所兼バスルームへ。小さな硝子瓶を持って戻ろうとすると、既にシスは背後に立っており。その端正な御容貌が、ピカピカの鏡に映っておりました。

「何か不具合でもあったのか？」

「え、不具合？ いや、それは多分無いんだけど」

「多分？」

「いや、絶対無いんだけど、あのさ、これって」

「歯磨き液がどうかしたのか？」

その言葉を聞いて安堵する。

ああ、やはりこれは歯磨き用品。てか歯磨き粉、ではなく歯磨き液。そりゃそうだ、粉状じゃないものを敢えて粉なんて言う筈が無い。

と。其処で、全く気にも留めなかつていなかったある事への疑問が浮かぶ。

「……よく考えてみたらあれって粉なのかな」

「粉？」

「やつ、何でもない。あーそうそう、訊きたかったのはさ……歯磨きって、これを歯ブラシの上に何滴か垂らせばいいんだよね？」

と。

「はぶら……」

「え！？」

歯ブラシ。歯、ブラシ。歯用の、ブラシ。ブラッシング……

が、外来語！？

「あああそつか、あー、成程」

其処まで気が回らなかった。

こんなもの一体どう言い表わせばいいんだ、無数に存在する言葉の中から、この形状に相応しいものを選び出すのは困難極まるぞ畜生、えーと、ええええと、と。

其処で小首を傾げたシスが。コップの中に収まっている現物を見て。

「……まさか、歯櫛の事か？」

これ、こつちじゃなんて言うのと。実物を掲げて問えば良かったのだと反省した。

「それでだ、セツナ」

と。

まだ木製の椅子と机しか無い、空っぽな部屋へ身を戻してから。  
シス隊長はこう切り出した。

「これから私が何故此処へ訪れたかを話すが……念の為だ、予め言っておこう。私は別に、ただ単に遊びに来た訳でも、お前を朝食に誘いに来た訳でもないからな」

……引き締まり掛けた身体から、一気に力が抜けてしまう。

そんな事別に思ってます。何でこの人ってこう、見事なまでにアレなんだろうか。

「解ったか？」

「……了解」

「そうか。では、其処に置いてある紙を見る」

はい？

其処とは何処か、と。シスが視線を向ける方向に俺も目を遣ると、机の上。

先程まで何も無かった筈の其処には、確かに白が置かれていた。それを手に取って見るといふ事か。俺は悟り、朝日を浴びて鈍く輝いている机へと歩み寄る。

と。

その紙。裏側が透けていて、黒が見える。

何か文字が書いてあるんだ、と。捲ると、其処にはやはり幾つかの文。

勿論、異世界語表記である。

「読めるか」

背後から、シスの静かな声。

「……多分」

俺は頷いた。翻訳機能は、俺の命令要らずで発動する。

一番上段、一番大きな文字で書かれた一文、というかタイトルを読み上げると。

「任務、依頼、書」

「その通りだ。やはり言語の面で不自由は無いようだな」  
成程、それを確かめたかった訳だ。

地球産の俺が何故、異世界語翻訳機能を備えているのか。その理由は解らない。

けど、便利だし。何より勉強する手間が省けてほっとした。だって俺の英語の成績は相当酷いよ。ね、大沢。

と。其処でシスに続きを読むよう促されたから。

俺は紙を手にとって振り返り。タイトル以下の文を読み上げる。

「えーと……任地、セイラム大陸西部、港町フラミスカ。依頼者、サーナ町長、リーゾン＝シーギル氏。任務内容……は、フラミスカ内に潜伏していると思われる……誘拐組織、の、討伐」

読み終えた俺が顔を上げると。シスは柔らかに微笑んで。

「素晴らしい。満点だ」

「……読めるってさっき言ったじゃんか」

ほんのりと腹立たしさを覚えた俺の、ささやかな反抗は完全に無

視され。

シスは笑顔を消して。事の詳細を語り出す。

「フラミスカ付近の町サーナで、近頃若者が失踪するという事件が立て続けに起きていた。彼等が殺されたのか攫われたのか解らないまま、町長等が独自に調査を続けていたところ……その調査隊の一員が、夜中に数名かの秋族の者達が少年を誘拐している現場を偶然に目撃した。そしてその時同時に、奴等がフラミスカの方角へ去っていつているという事も判明したそうだ」

秋族、と。また知らない単語が出てきたけど、それは一旦置いておき。

「でもさ、本当に犯人は……その、フラミスカって町に居るの？その町の方角に向かってたってだけで、実はその付近に潜んでるって可能性も」

「阿呆」

彼は眼を閉じ、たった一言で俺の意見を撥ね退ける。

「誘拐した若者を海外へ送り出すには、何が要る？」

「え？ ああ、ええと……乗り物、船？」

「そうだ。それから扇風機だな」

な。

な、な、なななななな……

何言ってるんのこの人！？

しかしシスは至って真面目だ。開いた目、中央に嵌っている瞳の色が、海の如き濃青色だから解る。

けど。けど……。

「だが、扇風機となると発着場が要る。しかしあの地方は地形が平かな場所が無い。……その上、扇風機での移動は人目を引く。よって使用は不可能だ。従って、船が必要である為に、奴等はまず確実にフラミスカの内部に潜んでいる。……恐らくは行商人組合の振りでもして誤魔化しているのだろう。攫った者達を魔法により眠らせ、袋の中にも詰めておけばなかなか解らないだろうしな」

「……あの」

はいはい先生質問です、と、俺は手を上げてみる。シスの視線が俺へと移ったのを確認し。

俺は。

「……センプウキって、何ですか」

と。

「お前の世界には扇風機が存在しないのか？」

いいえ。あります。ばっちりありますとも。今じゃクーラーに立場を取って替わられようとしてるけどね。

「いや、無い訳じゃないけど、ある訳でもないような気もしないでもないような……」

「どちらだ」

まあいい、実物を見た際に話してやる、と。シスはふつと溜息を吐く。

異世界文化は複雑だ。

「全く……話を戻そう。既にフラミスカの町長には通達が行き、町



内での戦闘……及び、本日早朝より港に在る全船舶を一時的に出港禁止にする事を承諾して頂いている。我々は……お前はまずは朝食を取るべきだな。簡単に朝食を取った後、地下の扉がフラミス力近辺に通じているので、其処から移動。到着後は敵の巣を探し出し、そして一気に叩く。……大体は解ったか？」

成程。扇風機の事は引つ掛かったままだが、概要は理解した。した。ちゃんとした、した、けどね。だから、頷いて見せたんだけど。

「……それって、俺に話すって事は、俺も行くん、だよな」

「当然だ。初めての任務にしては些か厳しいものと為るかも知れないが……まあ、お前の実力ならば平気だろう」

最早肩を落とすしかない。それは買い被りすぎです、隊長……。すると。彼はくす、と声を漏らして優美に笑い。大丈夫だ、と頷いた。

「何も一人で赴かせる訳ではない」

「そりゃそうだよな、行かせる気だったらびつくりだよ……」

「だからそう案ずるな。私が居る。いざとなれば私が護ってやる」

……嗚呼。

女の子だったら。こんな奴にこんな事言われたら、卒倒する、かも知れない。

健全なる男児である俺は、ほんの少し情けない気もするけど。でも、嬉しい事には変わりなかった。

ありがとう、そう言おうと口を開きかけた、その時。ああ、と、シスが思い出したとでもいう風に声を上げる。

「それに、コアやリモもいるしな」  
「え」

コアさん。

それに……プリジモさん!?

絶世の美貌を誇る、金色の髪の眠り姫。

俺魔天使無理、つかアイツ個人的に嫌いだ馬鹿宣言をぶちかまして下さったに等しい御方。

やっぱり不安だ。不安、過ぎる。

### 続3日目…彼等は思っ

「あっコアだ！ おっはようー！」

シスの部屋の前に立っていたのは。一番隊の頼れる聖光魔導士アリシテイレイターと、シエラ・レイルズリードその人であった。

彼女は歩み寄って来る同志に向かって、笑顔で手を振っている。そう、その華奢な腕を、千切れんばかりにぶんぶんと振り回しているのだ。耳の良い彼には、風を切る音が聞こえてくるようである。

あの元気は何処から来ているのか。彼は時々不思議に思う。

「お早う御座います、シエラさん。シスさんに何か御用ですか？」  
そう、笑顔を返しつつ問い掛ける、と。

彼女はうん、と大きく大きく頷く。艶々とした茶色い髪が跳躍した。

「今日はあたしの割り当て無いのかなあ……と思って訊きに来てみたんだけどね、シス今居ないんだ。お出掛け中美たいだよ」  
「割り当て……任務のつすか？」

「そうだよ、と直ぐに返された明朗な声を聞き。  
その中に秘められ……ているというよりは爆発しているかも知れない、ある色を垣間見て。」

「ははあ、成程、と。」

「勘の良いコアは忽ち理解する。」

「シエラさん、セツナさんと任務に行きたいんすね？」

すると。

微塵の間隔も空ける事なく。太陽の如く輝く笑顔、もとい乙女のオーラ噴出モードのまま。

「うん！」

恋心も、此処まで大っぴらだと考えものだ。

「にははー、と苦笑するコアを他所に。シエラはいてもたっても居られないといった様子で、床から踵かかとを離したりつけたりを繰り返す。

「ねえねえコア、シーちゃんに会わなかった？ シーちゃんから今日の任務の事何か聞いてない？」

と。

「じゃ……」

其処で。

コアの小悪魔スイッチ。オン。

「あー、聞いてるっすよ」

「ほんと!？」

「はい。今日は俺達が任務行ってきます」

「えー、そうなの？」

一瞬全開になったキラキラを潜め。唇を尖らせて、明らかに不満げな顔をするシエラ。

そんな彼女に、コアは敢えて笑顔を繕ったまま。

「はい。今日は俺と」

「うん」

「シスさんと」

「うんうん」

「リモたんさんと」

「うんうんうん」

「セツナさんで任務行ってきまーす」

「ええええっ!?!」

と。

シエラはただでさえ巨大な目を更に大きく丸くし。

「何、セツナ君任務なの!?　なのにシーちゃん、あたしを連れて行かない気なのっ!?!」

「にははは、そうみたいっすねー」

これは裏切りにも似た行為だと。絶望を表情に覗かせたのも束の間。

眉を吊り上げ。

……シエラは腕を上下にばたつかせ始めた。

「もーシーちゃんのバカ馬鹿ばか莫迦!　これ絶対問題だよ、だって救護隊員いなくてどうするの、あたしが居なくてセツナ君が怪我したらどうするつもりなのっ」

「にはははー、大丈夫なんじゃないっすか?　シスさんそれなりに聖光魔法アリンディア使えますし……それに何より、怒りに駆られたリモたんさんが、セツナさんが剣抜く暇も与えず敵みんな倒しちゃいますって」

セツナに関する情報に、シエラの羽ばたきは中断された。

「へえ、セツナ君の武器って剣なんだね」

「そうっすよ。シスさんからさっき聞いたちゃいました」

「そっか、剣なんだー……………じゃないよもうッ！」

と、声の限りに叫んだ彼女は。大声を出した為頭が冷えたのか、腕を組み、目を閉じて何やら考え込む。コアはその様子を、黒と深緑の瞳でにこやかに観察し。

やがて。

かっと目を見開いたシエラ「レイルズリードは。

とりあえず、コアの眉間をびしいと指差して。

こう、宣言する。

「あたしも行く！ 絶対行くから、駄目だって言われても駄目だから、絶対絶対行くから！」

にゃっははー。

さあて、どうしますかね。女嫌いの新入りさんは。

俺が怖いか。

冷たい沈黙の中。木霊するのは「悪魔」の声だった。

影の差した寝室。寝台の上、横たわっていた彼はむっくりと起き上がった。温もりを帯びた白、それを染めていた淡い金色が緩やかに流れ、彼の背に沿う。

絶世の美を纏った少年は俯き。黒にも似たその宵色の瞳に、天を指す自分の膝を映していた。

眠気は無い。

先の知らせの為に、完全に覚醒していたからだ。

そう。

任務だ、リモ。

早朝。一番隊隊長がこの部屋を訪ね。無理矢理に彼を目覚めさせた後の、第一声がそれ。

否応なく開始される、任務内容の説明。寝惚け眼でぼんやりとしていた彼だったが、上司が放ったある言葉を聴覚が受け取った瞬間に、その靄は吹き飛んだ。

誘拐。

任務内容は、誘拐組織の討伐だ。

サーナで失踪していた若者達が、現在フラミスカに潜伏中の、秋族の者達によって攫われている事が判明した。我々はフラミスカに赴き、犯人等の身柄を確保。そして誘拐された者達を解放し、サーナまで送り届けなければならぬ。

今回出勤するのは私とお前、コアと……任務の空気に一刻も早く慣れさせたいからな、セツナも同行させる。

さて、只今からの動きに関してだが……私はこれからセツナに任務の概要を伝えに向かう。彼奴はまだ独りでは出歩けないだろうから、共に食堂に行き、食事を済ませる事もしくはならない。しかし、そう時間は掛からないだろう。

準備が出来たら私の部屋で待っていてくれ。全員が集まり次第出発する。

彼が持つ、天性の記憶能力。不幸の能力でもあるそれが、先刻のシスの説明を一言一句違わず記憶し。それと同時に、悪魔の言葉をも呼び起こした。

それは、決して思い出したくない傷。忘れ去ってしまいたい、屈辱の日々の記憶。

全部、全部。忘却の彼方へ投げやってしまえたらいいのに。



そつだ。

そつする事が、もし、出来るのなら。俺は。

と。

心の深淵に堕ちていくと共に、頭痛に似た感覚が迫ってくるのを  
覚えた彼は。目を閉じ、軽く頭を振ってそれらを払拭する。

そして。生じた振動に柔らかに波打つ金色。それを、手の中に収  
まっていた深紅色の紐で、項に近い位置で結わえ。

再び開いたその眼には。静かな炎が灯る。

寝台の上を移動すると、見えるのはその脇に揃えられた焦げ茶色  
の靴。それを履いて彼は立ち上がり。温もりから、離れた。

そして。長い長い金色を靡かせ、柔らかな光の注ぐ廊下に出。

これから赴く地に潜む狂気を。深く、深く……そして静かに。

憎悪する。

誘拐……人身売買。

自由を、平穩を、希望を。何もかも奪い去って。

平然とその利益を貪る者。

彼等は最早、人ではない。

悪魔だ。

絶対に。許さない。

## 続々参日目：癒し少女も共に行く

「あー……おはえひ」

早かったね、と。そう言うのは危険なので、流石に止めておく事にする。

何故ならば。俺は現在、大絶賛食事中。異世界の特産品であり……それが標準スタイルなのかバスケットに詰められて登場した、焼き色鮮やかなプランを口の中に押し込んでいる真っ只中なのであります。

ちよつと上に用事がある、と言ってシスが食堂を出ていったのがほんの数分前の事。

「此方」じゃ魔天使アンド変態呼ばわりされている俺だが、「向こう」じゃごく普通の高校二年生、つまりは食べ盛りである。よしシスが帰ってくるまでに全部食べ終わっちゃおう、なんて意気込んでいた俺だったが、彼の帰還の方が早く、所謂敗北を喫してしまった。しかしそれにめげる事なく、かえって一層速度をアップした訳なのだが。

「……ああ」

余りの醜態に。お前の食事姿など見るに堪えぬわと思し召した為か。俺の隣の席に腰を下ろしたシルフィス隊長殿は、濃青色に移ろった瞳、其処から発せられる憂鬱そうな視線を逸らし。

俺が彼の美麗なる銀を見つめる中。ふっと息を吐いて、明らかーに肩を落とす。食堂を満たす和やかな雰囲気、賑やかに談話する声の中、消え入ってしまいそうに小さな御声でこう仰る。

「……頑張れ」

あれ？ 何か暗くない？

的中、だった。

いやはや……驚くほどの暗転である。

五階に在るといふ彼の部屋への移動中、彼は全く以て無言。例の如く先行するその背中にも、何処か藍色の影が差している気がする。嗚呼隊長殿、あのほんの数分間に、一体何があったのですか。俺がおろおると、その声を掛けようか掛けるまいか必死に検討している間に。

シスは立ち止まる。と言う事はつまり、目的地に到着した訳だ。俺達の目の前には、俺の部屋のそれと何ら変わらない、中央発光式の扉。色は灰色。シスの髪の色とかけてるの、なんて疑問が思い浮かんだが、声に出すのは止めておいた。

無言のまま。シスは扉の中央に白い手を当てる。

扉は無音でスライドする。

「うわ……何か切ない」

「何がだ？」

と。

その時。

部屋の中から、何か白いものが飛来する。

それは。猛スピードで俺、

「へ」

の。隣へ突進し。

すつと、その手を顔の横へ動かしたシスの。人差し指と中指に挟まれて動かなくなる。

微動だに出来ず、二度瞬き。漸くはつとした俺が、刺客の姿にピントを合わせると。

それは中世ヨーロッパを思わせる代物だった。

「……羽ペン？」

「遅えんだよボケ野郎が！」

……嗚呼。この声は。

と。其処でシスが、俺の代わりに犯人の名を口に。

「すまない。……シエラ」

え！？

「な、シエラちゃん！？ 嘘、俺は今のはプリジモさんだと」

困惑と混乱の最中。もう、と。良く通る彼女の声が廊下まで届く。

「羽根筆投げたのはあたしじゃないよ」

「え!？」

「そんな事は解っている。今の『すまない』はリモの行為と言葉に  
応え、皆に対し待たせてしまつてすまない、の『すまない』だ」  
「え、でも、あ、あれ」

部屋の中を、見る、と。

其処は、シスの仕事場だと思われる空間。

机の上には、分厚い本が数冊並ぶ簡易な金属製本棚。それからガ  
ラス製の小皿が一つと、俺が先程見せて貰つたのと同じような書類  
が数枚か。

「にやつははー、お早うつす、セツナさん」  
と。

机と対になっているのであろう椅子、それに腰掛けている人物が、  
可愛らしく微笑んで声を上げた。

にやははーという笑い方と、尖った耳。そして、左の瞳には深緑。  
右の瞳には俺のそれと同じ、黒を映す。

猫少年こと、オッドアイエルフ・コアさんである。

「全然早くねえし。寧ろ遅ようだ馬鹿」

暴言という名の鋭利な刃で俺の胸を貫くのは、やはり彼。

机の横の壁に凭れ。宵色の瞳から発せられる視線は、自身の足元  
へと向け。艶やかな長い長い金髪は、項に近い位置で一本に結わえ  
ている。

絶世の美少年こと、眠り姫ことリモことリモたんこと、プリジモ  
|| ノードレーである。

そして。

「おっはよーセツナ君、いやっ、セツナ!」

目が合ってしまったから。俺は最早、彼女の巨大な巨大な瞳の中である。

太陽の如く輝く笑顔。

手は腰に。そして勿論仁王立ち。

短めの短パン着用、白いニーソックスを纏った脚線美が眩しい。

「……シエラちゃん」

再び声に出す、彼女の名。シエラ＝レイルズリードは自身の茶を揺らし、大きく大きく頷いて。

「うん！ あたしも任務、行くからね！」

俺は苦笑し、頷き、かけて。再び思う。

あれ？

シエラちゃんの名は。シスが教えてくれた、今回の任務のメンバーの中にあっただろうか。

「……何だと？」

と。案の定シスが怪訝そうな声を上げる。

「今日の任務に、お前は」

「行きます！ いーきーまーす！」

「今回の敵は、お前の聖光魔法アレシティアが要る程の強敵ではな」

「何それ、そんな事解んないじゃんかっ！」

いと判断した。だからお前を要員には加えなかった……と、シスの言葉は続いていたのだが。

シエラちゃんの声の大きさが圧倒。恐らく彼女には、最後の「かった」が聞こえたかどうかくらいだと思います。

「とにかく、あたし今日暇だし！ ぜーったい、足手纏いにはなら

ないし！」

「……それは、解っている」

と。シスは小さな、しかし確かな声でそう紡いで。困った奴だとしても言いたげに、ふっと息を吐き、目を閉じる。

「そんなに共に行きたいか」

シスが放った問いに対し。寸分の間も置かず、返ってくるのは。

「行きたいよ！」

彼女の意志の強さを表す言葉、声。

再び開いたその瞳は、まだ濃青色のままだった。

「解った。いいだろう」

それを受け。シエラちゃんの瞳がキラキラ光線を発射する。

「ほんとっ!？」

「ああ、構わない。回復魔法の専門家が同行するのに悪い事は無い。任務内容は……リモ」

やったー、わーいやったよセツナ、と喜びに飛び上るシエラ嬢の傍らで。

名を呼ばれたりリモさんは。その綺麗な顔を微かに上げ、視線をシスへと流す。

ぐは、本当に綺麗だ。見てるこっちが申し訳なくなってくる程に綺麗だ。

と。俺が彼の余りの眩しさに目を細めていると。

「お前に任務内容の説明を任せる。……頼んだぞ」

え。どうして自分でしないんですか隊長。

俺が彼の方を窺うと。シスは俺の視線などお構いなしに、アスカ



の制服の上着と同色の、海色の瞳で  
真っ直ぐにリモさんを見つめ。

「……解った」

そう承諾が来ると、頷いて。そして、皆に背を向けた。

「行くぞ」

……えーと？

こんな緊迫した空気の中で、コアさんがにやははーと笑っていら  
っしゃるのは何故だろう。

地下に潜って。それだと言われた扉を開くと、其処には深い深い  
闇。

「あーそっか、町に直接繋がってる訳じゃないんだっただね」

と。何故か足取りの重いシスの代わりに先頭に居た俺が、彼の方  
を振り返ると。

「……ああ」

どうしたんだろうこの人。

そんなシスの横には、相変わらずにここを笑っているコアさんがおり。そしてその後ろでは、リモさんがシェラちゃんに説明を行っている。いや、説明自体はもう終了し、質問タイムに移行したのかも知れない。フラミスカの特産品って何だっけー、と、シェラちゃんが首を傾げたのが見えたから。

「い、行こう、か」

とにかく、だ。

此処で立ち止まっても仕方が無いので。俺は先陣を切り、闇の中へと踏み出した。

ひんやりと冷たい空気が肌にはりついてくる。踏み締める地面は柔らかい。土だ。

「何処に続いているの？」

そう問うと。反応してくれたのはシスではなく、その御隣のコアさんだった。

「はい、この先はハンナの森っすよ」

「ハンナ？」

何だか、女の子の名前みたいだ。

と。

そう思った瞬間、何か冷たいものが背筋を駆け巡った。これは…アレだ。ほら、怪談話でよくあるアレ。この森の名前の由来は…  
によによによによ、という。

「あにゃ？ セツナさんどうかしたんすか？」

「いつ、いや？ 別に何ともないっすよ」

コアさん口調で返してみた。

そうです、俺は心配無用です。どうかしたのかという質問なら、

貴方の御隣の隊長殿に投げかけてやって下さい。

「さあ、レッツゴーレッツゴー」

「何だそれは……待て、セツナ」

え、何、と。俺が振り返ると。

シスは腕を捲り。右手をぎゅっと握り込んで、その手を前に突き出して。

「光輝せよ」

そう……唱え。掌を天に向け、その手を広げると。

其処には、小さな光が発生していた。

それは、ふわりと浮き上がり。空気を入れられた風船みたいに膨らみ、シスの頭の大きさ程になった。そして、その下に添えたシスの手から、少し離れた所を漂う。

「成程、照明か」

「そうだ。……では、進むぞ」

うんはいあありようかい。各々がバラバラの反応をし。一同は闇の中へ。

冷気と黒の中を、黙して進み。ちよつと行くと、上へと続く階段が姿を現す。

皆を残して、シスは独り階段を上っていき。筋肉番付宜しく、行く手を塞いでいる石の天井を、軽々と持ち上げた。

異空間を四角く切り取ると。優しい光が指し込み、静寂を湛えた闇は潜んで。

覗くのは、絵画の中の様な世界。一面、鮮やかな緑だ。

そして。声が、届いた。

それは恐らく、草陰に身を潜める虫の声。今まさに空の青に向かって羽ばたかんとする、鳥の声だ。

シスに続いて階段を上り切った俺は。

柔らかな土を踏み締め、歩み……天高く伸びる木々の生み成す、木漏れ日を浴びた。

この空間を流れる空気が、澄み切っているのを感じる。穏やかな温もりを感じる。

不意に。風が吹いて。木々のざわめきが繋がっていった。目を閉じて。声を聞く。

嗚呼。

「……あつたかい」

「セツナって本当に変な人だよな」

え。

と。振り返ると、シエラちゃんが傍に居て。後ろで手を組み、木々の狭間から覗く空を仰いでいた。

「魔天使なのに光を浴びるのが好き」

「……光を浴びるのが好きって訳では、ないと思うけど」

「でも、平気なんですよ？」

彼女の瞳が俺を捉えた。途端に父さんから受け継いだ俺の遺伝子が作用し、麻痺に似た感覚を覚えてしまう。こうなると、あはは、と笑って頷く事しか出来ない。

だから、そうしたら。

「だったら変だよ」

シエラちゃんは、笑った。

「……うん」

「でもあたし、それは胸を張っていい『変』だと思う」

胸を張っていい、「変」？

「だから好きなんだ」

シエラ「レイルズリードは。小さく小さくそう言って。目を閉じて。頷いて。」

「ねえセツナ」

俺は。頬が熱くなっていくのを感じながら。

彼女の言葉を聞いた。

「あたし」

私は

「セツナともっと話したい」

私はね

「セツナの事、もっと知りたい」

貴方の事が知りたいの。

「……………な」

「え？」

声が聞こえる。

もう少しで聞こえそうなのに。もう少しで、届いてくれそうなの  
に。

「……………俺」

「何？」

俺は。

お前を。

……お前を、ずっと……

「シエラ、そしてセツナ！」

鋭利な声が。俺達の名を呼び。俺は漸く我に帰る。

まさかあの御方が御怒りになったのかと思い。シエラちゃんにはごめん、ぼーっとしてたと弁明し、慌てて其方へ向き直る、と。

「私はこれから飛行してフラミスカに先行し、敵の本拠地を探っておく。お前達は纏まって移動しろ、いいな、解ったな、森には危険が盛り沢山だからな！」

「へ」

森には危険が盛り……だつ、駄洒落だ！ 翼王子が寒い親父ギャグを仰った！

身も心も凍りついた俺を他所に。

リモさんは何やら呆れ顔、シエラちゃんはどうぞいってらっしゃいと軽く手を振り、コアさんにははーと微笑んで。

肝心の王子様兼隊長殿は。

翼、オープン。

したかと思えば、既に地面を蹴り。土埃と葉を舞い上げて、天高く飛翔。木漏れ日を通り切ってそのまま見えなくなってしまった。

「シーちゃんも困ったもんだよねえー」

彼が消えていった青と緑の狭間を仰ぎ、シエラちゃんがふっと息を吐く。

「何が……？ ああ、あの寒さが……？」

「え、セツナ寒いの？」

思いつきりきよとんとした顔を向けられてしまった。ひよっとして、彼処に気を取られていたのは俺だけだったりするのだろうか。

と。  
「あにゃー、そうっすね、セツナさんは知らなくて当然っすね」  
そんな事言われたら、気にならない筈もなく。

「……何を？」

当然。尋ねてしまっ、と。

コアさんはにっこりして。こっ、告白する。

「シスさんって虫嫌いなんすよ」

え。

「……はい？」

「虫嫌い、なんですあの人。そりやもう無差別に。どんなにちっちゃいのも駄目」

嗚呼。目の前を。異世界産の羽虫が横断していく。

風岡刹那、十六歳。

生まれてこの方。母さんの死以来、此処まで衝撃を受けた事はありませんでした。



## 続々続みつか目…森を抜ければ其処は

優しい暗がりと、緑と。この地に生きるもの達が上げる、心地よい音に抱かれながら。柔らかな土を踏み締めて、一行はハンナの森を行く。

森を背景にするには異質な気がする、金色の髪を持つリモさんは、一番後ろを黙して進み。

何時もならば先導者であるシス隊長殿は、虫嫌いの為早々と離脱したから。代わりに先陣を切るのは、姫君とは対照的にこの景色がよく似合うエルフのコアさんである。ひよこひよここと軽快に進んでいくその細い背に視線をやりながら、俺はぼんやりと考えていた。

彼はどんな風に戦うのだろう。

シスは氷の魔法を使う。まだすっかりとは見たことがないが、あの鉄の棒をぶん回したりもするんだろう。

リモさんは。鎌を出して、それをぶん回して戦う。

シエラちゃんは。これは先程聞いた話だが、彼女も杖を、リモさんのように無の中から取り出して……ぶん回すかどうかは不明だが、兎に角、使用するのだという。

親切にもこういう原理か教えてあげようかと言われたが、またの機会に御願いますと返しておいた。正直なところ、原理まで詰め込んでたら、この俺の少ない脳味噌が何時限界を迎えるか解ったものではないから。

まあそれはさておき、俺はというと。今この右手に収まっている剣。それで戦う訳なのだが。

えーと、確かコアさんが得意だと言っていたものは、と。昨日の記憶を手繰ってみると、脳内検索は割と直ぐに目的物を発見してくれた。

そう、レルナティア。

レルナティア  
舞踏魔法。

と。頭の中であてられる漢字。お陰で何となく予想はつくのだけ  
れど。

何だか。やっぱり。少なからず。奇妙な感じが、する。

「多分、フラミスカはもうすぐですよ」

と。

その時、それまで黙って俺の隣を歩いていたシエラちゃんが、明朗な声をあげた。

考えに耽っていた俺がはっとして彼女の方を見ると、忽ちにつきり  
りが返されて。俺はというところやはり目を合わせられず、あははと笑  
って進行方向に視線を返す。

「ハンナの森を抜けるとすぐ見えるんだ。そんなに大きい訳じゃない  
けれど、港町だからね、商業が盛んで、人も沢山」

「人が沢山」

「そう」

彼女が大きく頷いたのが解った。何故だろう。彼女の放った「そ  
う」は、何処か嬉しそうだった。

其処でふと、それとは別のある疑問が脳裏を過る。そういえば、  
だ。

「けど、人が沢山いるんだっただけ……えーと、誘拐犯？ その人達を見つめるのって、大変じゃないかな。シスさ、さつき、見つけておくーって言うてたけど」

すると。

「え？」

彼女は、明らかに疑問符を付けた声を上げる。

シエラちゃんの方に視線を向けると、彼女はきよとした顔をしていて。大きな丸い瞳に俺の顔が映っているのに気がついて、情けなし、俺は再び進行方向を見ざるを得なかった。

視線を逸らした事に腹を立ててしまったのか、彼女は少しの間黙っていた。

しかし、やがて口を開く。

その時には、前方に微かに白が。この森の端が、見えてきていた。

「そういえばセツナ、知らないんだっただね。シーちゃんの実力のこと」

良かった、声色から判断すると、怒ってしまった訳ではないようだ。アマリナさんの時といい、どうも俺は女性に対して失礼な事ばかりを……

えーと、そうじゃなくて。気にするべきなのは、其処じゃなくて。

シスの能力。

「……うん、知らない」

シスは教えてやると言っていたけど、結局のところまだ彼の口からは語られていない。色々あったから、俺が聞くのを忘れていたから、というのもあるかも知れないけど。

けど。相当気になる、そして何より、手の届くところにある謎の一つだった。

そういえば、彼は言っていた。俺の過去を、見た、と。

「シスには、他の人の過去が解るの？」

ちらとシエラちゃんの方を見て、そう尋ねてみる。すると彼女は、首を傾げた。

「微妙かな」

「ビミョウ……」

「うん。シスはね、人に触ると、その人が見てきたものが見えるんだって」

俺が。見てきたもの。

「触った瞬間から、その人の時間を遡るみたいな感覚だつて。見てきたものがどんどん巻き戻るの。だからね、見たい時間を指定できる訳じゃないし、その人がその時考えてた事とか、聞いた事とかは解らないんだって」

「心が読める……訳じゃ、ないんだ」

「うん」

巻き戻る。

記憶が。その人の物語が。

それはきつと、音声の無いDVDを、終いから巻き戻しているのを見るような感覚だろうか。

媒介に刻まれた映像が、過去へ、過去へと。第三者である彼を引き込んでいく。

ボキャブラリーが乏しい俺は。次のように形容する事しかできなかった。

「なんか……凄い、ね」

「うん、便利みたいだよ。酷い被害にあつて、話せなくなっちゃった人の記憶とか見られるし。犯人特定するのに役立つからって」

「そ、そっか。でもそれって、一種のプライバシーの侵」

「でもね」

俺が現代日本の時事問題を持ち出した時。彼女はそれを遮って、宙のある一点を指すように、指を立てた。

「シスの能力は、それだけじゃないの」

「え」

「シスの凄いところはね、周りにいる人達の情報が、黙ってても入ってくるってところなんだよ」

……はい？

これには流石に。目を白黒させざるを得なかった。

ええと、何だ？ 周りにいる、人達の、情報が？ 黙ってても、入ってくる？

理解しかねる。すると、彼女は俺の様子から察したのか、こう補足した。

「それがどんな感じなのかは分かんないけど……自分を中心にして一定の距離内にいる人達の、名前とか種族とか歳とか、そういう情報がゼーんぶ入ってくるんだって。その時その情報がどの人から来てるのかは全部解るから、どの人がどこにいるのかとかも全部解るんだって」

え、えーと？

ええと、つまり。

ええええと、詰まる所……シスには、他の人の名前とか種族とか歳とかを全部知る事ができて。その人々の位置関係も解る、ということだろうか。

「な、何となく、解った」

「ほんと？ 良かった」

俺がそう頷いたのを見て、自分でも難しそうな顔をしていたシェラちゃんはにっこりして。

「でも、やっぱりわかんないって思ったら、シーちゃんに直接聞いた方がいいよ。そんな力持ってるのシーちゃんだけだしね」

それは御尤もです。

けど。今の彼女の言葉には、シスが異常……いや、特別であるということが表示されているようだった。

シスは。異世界に住む異世界人で。それは当然の事で。けど。

異世界人にとっては異世界人である俺が、普通の存在ではないのと同じように。彼は、異世界人にとって普通じゃない。

何故。

それは、特異な力があるから。

じゃあ、それは何故？

「……なんか、複雑だ」

そう呟いた俺の傍らで。え、何、と、シエラちゃんが首を傾げて。

そして。ああ、と。こう言うんだ。

「シスの力の事なら、分かんなくても仕方ないよ。あたし達だってよく分かんないんだから」

「……そっか」

と。小さくそう紡いだから、気づいた。

それまで周囲に在ったものとは違う、甲高い声。それが、遠くから聞こえてくる。

気づけば、終着点はすぐ其処で。

前方ではコアさんが立ち止まり。にやはは、と声を上げ、此方を振り返った。

歩みを速めた俺達の視界は、すぐに明るくなり、開けた俺の視界に映るのは。

なだらかな斜面を成している、草原。それを越えた向こうに広がる、白。そして青だ。

その町は、白く。遠くから眺めている俺の黒には、酷く美しく映った。

穏やかに揺れているであろう濃青色には、嗚呼、流石は港町。幾つもの、巨大な木造船が浮かんでいるのが解る。

此処が。港町、フラミスカ。

「綺麗な町でしょ？」

隣から、シエラちゃんの声が来て。俺は前方に広がる光景を見詰めた。めながら、頷いた。

「傍から見なきゃ、この綺麗さは解らないんだよね。町の中に入っちゃったら、もう兎に角賑やかだね。殆ど商売人の為の町だから、今更鑑賞して楽しむなんて人いないんだよ」

彼女の言葉を聞きながら、俺は。

あの日。そう、俺が初めて異世界に来た日の事を思い出す。

夜空を見上げて、その美しさに感嘆し、「凄い」と口にした俺に。シスは「普通」だと答えて。そして何故だか、済まない、と。そう、言っただけ。

何故謝るのかと返しておきながら、それでも、勿体無い気は拭えなかった。

町から伸びて、俺達一行から向かって右、少し離れたところを走り。森の中へと続く、幅の広い土の道。

その上を。馬に似て非なる、白い毛を持つ四足歩行の生物が引く車が走って来て。手綱を操っている、恐らくは商人と思しき中年の男性が、此方に気づいて右手を挙げる。

と。シエラちゃんが嬉しそうに笑って。彼に向かって、この青い空をかき混ぜるが如く、ぶんぶんと手を振った。



重荷を積んだ木製の車輪が立てる、ゴトゴトという音。それを残し、馬車もどきは森の中へ消えていく。

その音が、やがて絶えてから。相も変わらずにここにしているコアさんが、にやはは、と声を発した。

「さて、行きましようか。シスさんを待たせる訳にはいかないっすもんね」

けど。あまり時間を経た気はしないけど……今なら解る。

何もかも。慣れてしまえばどうしても、五感は無麻痺して。普通だと感じるようになってしまった。

それは。俺の世界でも、きっと同じ。

「漸く来たな、お前達」

シルフィス・ゼノアルヴェルド隊長殿括弧虫嫌いは、町に入ると直ぐの所で、気風漂う仁王立ちをして待っていらっしやっただ。あーあ、なんか周りに居る女性達が黄色い声出しちゃってますよ王子。というかこんなに目立つちゃって大丈夫なんだろうか。犯人等に気づかれちゃってもお構いなしなんでしょうか。

しかし、同時に納得する。成程、彼のその特異な能力を以つてすれば、迷子になる事は絶対でない訳だ。……俺達も、彼も、ね。

と。銀髪が相当目立つ美少年は、ふつと華麗に微笑んでみせ。

「皆無事で何よりだ」

「あはは……シスもね」

苦笑しつつそう言うと、彼は例の如く眉を顰め。

「何？ 何故私の事を案ずる必要がある。私が無事にお前達の元へ帰ってこなかった事などあるまい」

ええと、確かに貴方に出会って三日目という俺の知る限りでは無いですが。

まあ、シエラちゃんが横で、確かにね、と小さく呟くのが聞こえたから。付き合いが長いっぽい彼女が頷くのであればそうなのである。

「……で？」

其処で。

リモさんが、少なからず苛々を含んだ声で、短くそう放つ。

彼の方を振り返ると、彼もちらと俺の方を向いて。ほんの一瞬視線を交わらせるが、やはり直ぐに逸らされてしまう。

けど。この時ばかりは、逸らされて良かったと思った。

その視線が。酷く鋭利だったからだ。

それは昨日の朝、ベッドの上で刃物を俺の首筋に突き付け、他ならない俺に向かって放っていた視線と似ていた。

理性を失った荒々しさは無い。彼の視線は、そう、言うなれば静的で。ただ、只管に冷たい。

相手をその場で凍てつかせる、圧倒的な冷気。

その奥に死の気配を携えて。震える事すら出来ない程の恐怖を齎すのだ。

しかし。その視線を向けられている当人は、全く臆する事無く。

「ああ、敵の位置ならば確認済みだ。……全く以って予定通りだ。

奴等は移動手段を失い、峙たぐで大人しく息を潜めてくれている」

平然と発せられたシスの言葉。それを受け取ったりリモさんの視線は、寸分も緩まることはなく。寧ろ、更に鋭さを増して。

綺麗な声で、こう、紡ぐ。

「執行許可は……出てねえんだな？」

執行？

「……ああ。我々に求められているのは、身柄の拘束のみだ」

シスが平らかにそう答えると。リモさんは刃を伏せて。そして、ふっと、眼を閉じた。

途端に身体力が抜け。自分が無意識のうちにどれ程緊張していたのかを。そして、周囲の空気が穏やかさを徐々に取り戻していくのを感じた。

やはり、姫君は怖い方だ。彼に掛ければ例え今時期でも雪が降つてきそう。

けど、それより気にかかったのは、だ。

執行って、何を？

もやもやを携えたまま、俺が隊長へと視線を戻すと。シルフィス  
「ゼノ」アルヴェルドは、ふっと息を吐き。それから。

夕暮れの色。紅を写した瞳で。

「では、只今から確保に向かう。……私に従い、行動しろ」

彼が背を向けたところで、俺ははっとし。そして、唾を飲み込んだ。  
だ。

嗚呼、隊長。つまりは、作戦開始な訳ですね。

## 続々続々ミツカ目：港町に行く

シエラちゃんの言っていた通り。

港町フラミスカは、人と音と。その外観とは裏腹に、色彩にも満ちたところだった。

シスを加えた俺達海色一行が、現在進んでいるのは町の大通り。

地球産の現代人である俺からしてみれば、申し訳ないが少し古風に見える服装をした人々は。その身に纏うものが多種多様であるように、髪と瞳の色も様々だった。

恐らく、各々の趣味ではなく血統……つまり、その者の属する種族によるものなのだろう。この世界に、いかに多くの種族が存在するのか解る。

そんな、色とりどりの人々が自由に行きかう通りの端々では、商人達が思い思いに露店を展開していた。

ある者は即席の屋台、またある者は堅い石の地面の上、広げた布の上に。遙か遠くから。そう、ハンナの森を抜けた時見えた海……この町の白の美しさを映えさせて、自身もまた輝いていたあの海を渡って。此処に辿り着いたのであろう、これまたカラフルな商品がずらりと並んでいた。

食料品と思しき、透明なビンに詰められた何か。腕輪や指輪、ネックレスといった装飾品。いかにも高価そうな綺麗な石、多分寶石ちーちーという人のものでは無い声を聞いて其方を見ると、顎髭蓄えたがたいの良い商人の腕に、いたちに似た小動物が抱かれていた。あれはペットか、それとも長旅の相棒か。

と。

暫くは。変質者宜しく海色フードの下から、黙って周囲の様子を眺めていたのですが。

とうとう、耐え切れなくなりました。

雰囲気には、ではない。この賑やかな雰囲気は嫌いではない。嫌いじゃ、ないん、だけど。

一行の最後尾に付いていた俺は歩みを速め。先導者に戻った銀髪の王子様の隣に付く。

先程から黄色い声出しまくりであるギャラリーからすれば、何あの怪しい奴邪魔なんですけど消えろや、とでも言ったところだろうか。フード部隊は俺一人ではないから、まだ変人度数は低めだと思っただけ。

「どうしたセツナ」

と。

俺に気づき、冷涼な声が問う。

「……うん」

「何か問題でも生じたか？」

「……うん」

「そうか。何だ」

この人にとって、この状況は問題では無いのだろうか。

いや、正しく言えばこの人達にとって。もっと正しく言えば俺達にとって。

「あの、みんなこっち見てるし。その、えっと、ね」

「言いたい事があるならばはっきり言え、焦らすな」

「……はい」

「敬語は要らない」

「……うん」

三度目の点、点、点、うん。

放った俺は、一人闇の中項垂れる。どうでもいいけど、こつしてフードを被っていると夏の日差しから頭を護れて涼しい。

嗚呼。

……本っ当に、どうでもいい。

と。

声に出す事を憚っていた俺は。思い切って打ち明けてしまう事にする。

「こんなに目立っちゃって、いいのかな、と、思って」

だってそうだろう。

今俺達が向かっているのは、若者達を攫って外国に売り飛ばそうとしている極悪人のアジトなんだ。

町中でこんなに目立ってたなら。ひよっとしたら、この人混みの中に紛れているかも知れない諜報係から、アスカが来ていると犯人グループに情報が伝達されて。町の外に逃げられてしまうかも知れない。

罨を張られるかも知れない。

攫われた人を。何の罪も無い人を。人質にされてしまうかも知れない。

俺達は、彼等を命の危機に晒してしまうかも知れないのに。

するとシスは。そんな俺の考えを見透かしたように。

「大丈夫だ。奴らが逃げる事は出来ない。それに、攫われた者達に危害は加わらない」

「……何で？」

相変わらず騒がしい周囲。

誰かの発した、アスカ様、という声が。俺の発した小さな何でを、消してしまった気がしたけど。シスは俺の声をちゃんと捉えて。荒くなる事のない、綺麗に平らかな声でこう紡ぐ。

「然るべき理由がある」

美しい横顔。恐らくは怪訝そうな顔をしてそれを見ていた俺は、進行方向に視線を戻して苦笑した。

「俺はその理由が知りたいんだけどな」

「後で話す」

「またそれですか」

後でって、何時だよ。

焦らすなと言いたいのには此方だ。何時だって彼は言い出してくれるのが遅いから。

俺はシスの能力の事を、後方で俺と同じフード組のリモさんと話している、シエラちゃんに聞いてしまったぞ。

と。

そういえば。能力。



その時、ふと思い出して。俺は少し考えを巡らせて。ああ、成程と。自分で一つ、疑問を解決する。

けど、重要な問いがまだ残っているから。やっぱり、ムカつく。

すると。

……やはり彼には、人の心が読めるのだと思う。

「すまないな」

バラバラに突っ込んでくる、音の中から。独り言に似た綺麗な声が、一つだけ浮き出して。

受け取ってしまった俺は。黙って溜息を吐く他ないんだ。

「着いたぞ」

と。

辿り着いたのは。ごく普通の一軒家の前でした。

「本当に、此处、ですか」

俺は、一同を導いてきた隊長殿の方を仰ぐ。途端に返されるのは、眉を顰めた怪訝そうな表情と。

「本当に、とはどういう事だ？ 私がお前達を全く関係ない所へと連行したとでも思うのか？ ……セツナ、以前も言ったと思うが、私は冗談は言うが嘘は」

「言わないんだよね。わかってるよ」

付け足して言えば、彼と話すときは敬語不要。天然注意報全開中で、可愛い事柄に虫が苦手。

幅の狭い、小さな通りに入ったから。通行人の数は少なくなったけど、その数少ないうちの何人かは立ち止まり此方を見ている御様子だ。あの人達を避難させなくて良いのだろうか、再び疑問に思う。

「さて、始めるぞ  
と。」

緊迫感が全く感じられないままに、開始の合図を出された隊長殿は。

コアさんの姿を、その翡翠色の瞳に映す。

先程からずっと笑顔でいる彼は。その笑顔を真顔に変える事も無く。

「にゃっはー、了解っす。封鎖、行きます」

そう言った、途端に。

空気が、変わった。

彼から少し離れた所に居る俺でも、感じる、生温かい風。それが、彼の黒に似た深緑色の髪と……左耳のみにつけられた、耳飾りを、揺らす。

五秒程待つてから、コアさんは。

右足を曲げて爪先で地面をトンと打ち。それを左足でも繰り返して。それからその場で一回転。

突然何を、と。呆気に取られていた俺を振り返って。

シエラちゃんは、悪戯っぽく微笑む。

「魔法だよ」

その言葉が、俺の聴覚を経た時。

コアさんが右手を、目的地である建物へと付き出して。パチン、と。指を、鳴らす。

それと同時に。辺りを包んでいた暖かな風が。不意に、音無く走り出す。

「これがコアの魔法」

此処からは。恐らく、俺の第六感が受け取った感覚。

風は突進し。命じられるままに、俺達を含む建物の周囲を囲み。部外者である通行人を隔てて、見えない壁となる。

それは恐らく、酷く強固な壁だ。

呆然とするしかない俺に、シエラちゃんは近づいてきて。セツナ君すっかり、と。優しく背を摩ってくれる。

「びつくりした？ コアの舞踏魔法レルナティアはね、身体を動かして、魔力を操るの。相当魔力操作が上手くないと使えない魔法だよ」

成程、だから舞踏か。

そう納得した俺の方を向き、コアさんはそれほどでもないっすよ、と頭を搔く。

と。

其処でシスが。黙したまま、ゆっくりと歩みだした。

いよいよ敵との接触かと、片手で胸を押さえ。誰も武器を手にしてはいないが、小心者である俺は思わず剣の柄に手を掛ける。

俺の胸の鼓動が速まっていくのを携えて。立ち止まった隊長殿は、扉の前に仁王立ち。

そして彼が放った言葉は。

「御免下さい！！」

「……………へ？」

出てこいでも、アスカだでも、ゴヨウアラタメダルでもなく？  
ごめんください？

あまりの衝撃に、視界に映るシス様の背がモノクロだ。透明な壁の外の少数のギャラリーがみんな揃って呆然とする中で、シエラち

ちゃんとコアさんはくすくすと笑い出し。

「……またやんのかよ、それ」

フードを脱ぎ、艶やかな金を陽の下に晒していたリモさんは。目を閉じ、掌で額を支えている。

彼の放つ神々しい光を浴びて意識を取り戻した俺は、重大な事に気づいていた。

またやんのかよ、それ。

また。

「え、てか、また？ またって言った！？ ひよっとして常習犯なのあの人!？」

「いや、最近始めたんだよ。それまでは何も言わないで黙って入っててただけだね、それだとつまんないよなっ」

「……ひよっとしてシエラちゃんの提案？」

そう、まだ俺の背に触れたままである彼女の方を見ると。シエラちゃんは首を横に振る。

「うっん。あの人の自発的な考え」

「そ、それは素晴らしい」

どうする、部下からあの人が呼ばわりをくらってるよシスさん。

と。そういうやり取りをしている間にも、シス王子は幾度となく御免下さいを連発。

……その甲斐あつてか。

「……何だ、煩えな」

それまで黙っていた扉が開き。

燃えるような赤髪と、同色の瞳。それを携えた、中年の男が姿を現した。

### 続々続々続々3日目：アジト突入

開いた扉。その隙間から覗く赤髪。

麗しき隊長殿は。閉じられないようにと考えての事だろう、すつとその戸に手を掛けて。

恐らく、彼は微笑んでいる。

それはきつと氷の笑み。敵味方の区別無く、見た者を凍てつかせる恐怖の笑みだ。

「漸く出て来てくれたか……実に有難い。通行人の少ない通りであるとは言え、他人の家の前で大声を上げ続ける事に、多少なりとも羞恥の感情が芽生え始めていたところだったからな」

……言ってる事は、微妙だけどね。

それでも充分過ぎる程に冷気を帯びた声音だ。

へえ、そいつはすまねえ事をしやした、まさかアス力様とは思ってもありませんで、と。シスの言葉を受け取った赤髪は口の端を曲げる。けど、彼から少し離れている俺から見ても解るんだ。

シスを捉える彼の赤には。申し訳ないという謝罪の念は愚か、愉快さも窺えない。

見えるのは。焦り。それと、ほんの少し、恐怖。

男はシスを凝視したまま、暫し黙し。ちよつと唇を舐めてから、再び低く紡ぎ始める。

「しかし、アス力様がこんな裏通りまでいらつしやるたア、珍しい事もあつたもんだ」

「珍しい？ そんな事は無い。我々は依頼が来れば何処へでも赴く」  
「そうですかい……依頼ねえ」

そして。空虚を詰めた笑い声を上げる。

何だか嫌な声だ、と。そう思つて視線を逸らした。その先に居たのは、丁度その不快な音の源が見えない位置に立っているリモさんで。

彼は、固く両の手を握り込み。敵を護る扉を突き破つて……そのまま、あの人を殺してしまうのではないか。そう思える程に鋭利な視線を放っていた。

その姿は酷く美しくて。そして。

嗚呼、何故だろう？ 酷く儂げにも映った。

と。其処で笑い声が止んだから。

俺ははっとして光から視線を移し。再び、闇の中に埋もれた赤の方を見る。

「して」

男は口元に笑みを携えたまま、言葉を発す。

「アス力様が、こんなしがない一商人なんざに何の用ですかい？」

「ああ」

短くそう言った隊長殿の表情を、此処から窺う事は出来ないけど。それでもやっぱり予想はつく。

彼がふっと小さく息を吐いたのが聞こえたから。恐らく、小さな笑みを漏らして。平らかな声で、こう紡ぎ出す。



「商品を見せて戴きたい」

商品。

その言葉を聞いた途端、商人の顔が凍てついた。

「やっちゃったね」

密やかに。恐らく俺に向かって、シエラちゃんが囁いた。

「頑張ってたけど。けど、もう逃げられないよ」

確かに。アレは、悪い事して商品手に入れちゃいました、と暗に示している顔だ。

というか、ね。最初から決まっていたのだろう。逃げられない事は、決まっていたんだ。

シスの能力が逃がさないんだ。例え彼等が、何処へ行こうと。

「どうかしたか？」

と、シスの声。氷の融けた犯罪者は、慌てて笑みを取り繕う。

「い、いや、別に、何もありませんよ」

「そうか。それは何よりだ」

「ええ……ああ、そう、そうです旦那。商品、と言われましてもね、あつしらはアイユープからセイラムの特産品を仕入れにね、つい先日この町に着いたもんで……まだ何にも手元には」

彼は其処で切ったけど。無いんですよ、だろ？

最早、その言葉は苦し紛れの言い逃れにしか聞こえない。

シスはゆっくりと首を横に振って。

「いや、ある筈だ」

普通なら解るはずもない事を。彼の言葉を、否定して。さらに。

「フラミスカ近郊、サーナで入手した……貴公等では値の付けようがない程に価値のあるものが、な」

そう、畳み掛ける。

明らかに引き攣る男の笑み。再び暫しの沈黙を置いて。

「……何を仰ってるのか、あつしには、よく」

「解らないか。そうか」

シスは、一瞬俯いて。そして、くす、と漏らす微笑。  
再び顔を上げた時、王子はどんな顔をしていたのだろう。

「だが、全ては中に入って調べれば解る事だ」

風前の灯となっていた男の笑みは。とうとう、消えた。

「すまないが中を調べさせて戴こう。貴公の言う事が正しいのならば、何も見つかりはしない筈……そうだろう？」

彼はもう、何も言えない。

黙している。ただ黙して、目の前に聳える裁きの天使の顔を睨みつけている。

「身の潔白を証明したいのなら……素直に従い、我々を中に入れ、隅々まで調べ上げさせる事だ」

「……そう、ですかい」

俺は。男の声を聞き、剣の柄を握り込んだ。どう考えても、わか

りましたどうぞ好きなだけ調べちゃって下さいっていう雰囲気じゃない。

緊迫する空気。その中で、全く緊張感の無いコアさんのには、  
が響く。

と。

「どうだ。了承してくれるか」  
首を傾げ。返答を促すシスに。

「なら……」

闇の中から。

「しょうがねえなッ！」

彼の腹部に向かって、鋭利な銀が、飛ぶ。  
ナイフだ。あの赤髪、ナイフを隠し持っていたんだ。

「シッ……」

ス。

と。俺が彼の名を叫ぶ前に。

彼の背からは白き翼がはえ。後方の空を蹴るようにして、素早く  
上空に飛翔していた。

込められた力の行き場を失い、勢い余って前方へつんのめる格好  
となった赤髪。空を舞う能力を得た王子様は、男の傾斜のついた広  
い背中に御足を付き。その土台を蹴って、陰りのあるアジト内へと  
飛び込んでいく。

見事な早業だ。と、呆気に取られたのは俺だけではなかった。

貫かんとしていた筈が、逆に蹴られた男は呆然として。ナイフを持った右手を突き出したまま、両膝と左の掌を、いや、其処から更にバランスを崩して、右肘をも、地に付く。

無様な姿を晒した男は、立ちあがろうとするけれど。

「ぐお……ッ」

……加えられた痛みと重圧の所為で。叶わない。

「……リモ、さん」

俺は。麗しき姫、だった筈の少年の名を呼んでいた。

彼が。地面に平伏す男の手を、凶器を持った右手を。その足で。踏み付けていたから。

男が痛み凶器を離れた。持ち前の身体の柔らかさで、身を屈めて。その刃を没収した、その後も。

まるで、砂の地面に描いた絵を消すかのように。『害虫』を抹消せんと。ぎりぎり力を込めていく。

痛え、痛え、やめろ、やめてくれ。そう苦悶する敵を見下ろすその瞳には、冷気しか感じ取る事は出来なかった。

「リモさん」

声が。それ以上大きくなならない。それに、名前しか紡げない。

何かが胸の中でぐるぐる回っている。回転が速すぎて、意味が解らないものとしか掴めない。

その困惑の中で。

視界の端で、コアさんが開け放たれたドアの中を指差したのが見えたから。彼の方に視線をやると。

「行って下さい」

彼は。こんな状況下で、うつすらと微笑を浮かべてそう言った。

「セツナさんとシエラさんは、シスさんの後追って下さい。多分、残りと戦ってますから。この程度の相手なら、シスさん一人でもお釣りがくるくらいでしょうけど」

けど、まあ、手伝って楽させてあげて下さい。と。

コアさんの言葉に、足が動きかける。中から、複数の男の怒声が重なり合って聞こえてくる。けどやはり、目は姫の方へ行ってしまう。

「俺は此処に居ます。敵さん方が外に出てくる事があれば、迎え撃ちますから。……リモさんも、多分後からそっち行きます」

「……でも」

いくら犯罪者だからって。

あんなのは、酷過ぎやしないだろうか。

俺は実物なんて見た事無いし、見たいともしたいともされたいとも思わないけど。……実物は、もっともっと酷いんだろうけど。あれじゃ、まるで拷問だ。

と。俺の視線が向かう中で。

「痛え、だと？」

痛い痛い、繰り返す男に。

リモさんは首を擡げて、囁くような声でそう問うて。

そして、続けて紡ぎ出す。

「嘔吐いてんじゃねえよ……痛みなんて感じねえ筈だろ。てめえ等は……人じゃ、ねえんだから」

一瞬にして。深々と刻み込まれる言葉だ。

「セツナ」

と。

その時、シエラちゃんが、茶の艶やかな髪を揺らして、視界の中に飛び込んできて。

その綺麗な茶の瞳の中に、俺の姿を映し出し。しっかりして。そう言っかのように、俺の肩を軽く二度叩いて。

「行くっ！」

俺の脳内にまでよく響く声で、そう命じたから。

俺は頷き。剣を抜いて、闇の中へと突入する。

颯爽と突入していったシスは。何時の間に組み立てたのだろう、鉄の棒を手に、男達と戦闘中だった。

相手はざっと見て四人程。けどそのうちの二人はもう気絶していたから、現在相手をしているのは二人。その誰もががたいの良い中年で、先に出て来た男と同じ、赤い目と髪の毛をしていた。

俺達が今居る部屋の中は薄暗く。家具も殆ど無くて、在るのは大きなテーブルに二、三個の椅子くらいだった。

生活感がまるで無く、人が住んでいる家とは思えない。まあ多分、一介の商人だと偽って空き家を借りたんだろうけど。

「セツナ、シエラ！」  
と。

一人の男の、奇声と共に繰り出された長剣の一振。それを右に避け。シス隊長殿が俺とシエラちゃんの名を呼んだ。

「はい！」

「お前達は囚われた者達の所へ行け！ 此処から右の通路を歩き、階段を上った所にある部屋だ」

よく通る声での、シエラちゃんの返答。何時もより鋭利な声で紡ぎ出したシスは、相手の剣と自身の武器とを交わらせ。向かってきたもう一人の男にあいている左の掌を向け、一瞬のうちの生成した氷の飛礫つぶてを飛ばす。

それは腹部にクリティカルヒット。男は畜生、と声を漏らして倒れ込む。

凄い。そう感嘆して……いるのは、シエラちゃんの顔を見る限り俺だけなんだろうけど。

とにかく、まだ動かない俺達に向かって。シスは加えてこう叫ぶ。

「まだこの先に二人居る……頼んだぞ！」

「何ですと!?!」

二人!? 二人も俺に相手をしろと言うのか!?!

いや、シエラちゃんもいるけどね。けどシエラちゃんは女の子だし。アスカだから決してか弱くはないんだろうけど、回復担当の魔導士らしいから、おらーお前等全員血祭りじゃあーと攻撃する事は出来ないと思う。

そして。土壇場になって。今更ながら考える。

真剣を振るうという事は。下手をすれば自分の命を失う可能性……

……そして、相手の命を奪ってしまう可能性があるという事だ。相手がどんな武器を持っているか解らないし。人質を取られるかも知れないし。

それに。もしも俺の持つ「力」が相手より上で。打ち勝つ事が出来たとしても。

俺にはまだ手加減をする勇気が無い。

でも。

「戒<sup>キツ</sup>!」

隣ではシエラちゃんが、リモさんの時とは違って光の中から。大きな宝玉の嵌ったクエスチョンマーク型の木の様なもの、それが天辺についている臙脂色の杖を取り出す。





予想はついていたけど。それでも驚いて、心臓が跳ね上がった。角を曲がれば、其処は恐らく階段。其処で待ち伏せしていた長身の男が一人、現れ。俺目掛けて、鈍く輝く刃を振り被る。武器は真剣。俺の持つそれより、少し長めだ。

早く、大きくなった鼓動。けど、心の中で。それに消されないくらいしっかりと、咳く。

俺は、戦える。

そして。力を込め、降ってくる凶器を迎え撃った。相手の銀と俺の銀。打つかって鋭利な金属音が鳴り響く。

「……っ！」

重い！

酷く重い剣だ。物凄い力……力の塊。力任せに俺を押し潰そうとしてくる。

けれどそれは、不器用な剣ツノキでもある。

力強いだけで、技術は無い。これならば、容易に隙を作らせ。そして、撃つ事が出来るだろう。

問題は、何処を切れればいいか。何処を切れれば致命傷を与えずに済むかだ。

シエラちゃんが居るから、そんなの構う事無いかも知れない。アマリナさんの傷を綺麗さっぱりと治してしまったシスのように、シエラちゃんも傷を癒す事が出来る筈だから。

けど、こんな事言ったらお話になりませんかと言われるかも知れ

ないけど。血が噴き出すのを見るのは嫌だ。何度も言うが俺は小心者だから、多分罪悪感が半端ない。

さて、何処を切る。足？ 肩？ いや、肩は首に近いから、狙いが逸れれば非常に危険だ。

なら。なら……腕だ。

右腕。見た所奴の利き腕は右だ。其処をやってしまえば、もう奴は剣を振るえない筈。

と。

狙いを定めた俺が仕掛ける前に。筋肉隆々とした男は、こうしていても埒が明かないと踏んだ為か、後方へ飛びずさる。

荒い呼吸は興奮している証。彼はゆっくりと剣を構えて、剣先を俺に向け。獣の如く獰猛に睨みつけながら、不意に口を開く。

「お前……魔天使かア？」

此方に来るようになってから早三日。俺はもうそろそろ、そう言われる事に慣れた方がいいと思う。

だから俺は一度目を閉じて、ふっと息を吐いて。再び彼の目を見据えて、シスの真似。なるべく平らな声でこう放つんだ。

「そうです。よく解りましたね」

「馬鹿が、解るに決まってるだろうが！ てめえの目に髪の色……それにその手を見りゃあ、一発でなア」

「あー、成程……って、手？ この手を見て、ですか？」

剣を持っていない方の手を広げてみせる。すると男は再び突入してきた。

突然だった。無駄だと思えるくらいに思い切り剣を振り上げるから、迎え撃つ余裕はあったけど。俺を動揺させて不意を衝こうでも画策したんだろう。

本当はもつところ、何で堕天使がアスカにいるんだよとか、何か別の話題に持っていこうとしたが。俺が予想外の反応を見せたから、突撃してきた。そんなところだろうか。

「……何で手を見たら、俺が堕天使だと解るんですか」

「ああ！？ てめえざけてんのかア！？」

「いえ、ふざけてなんかないですけど……ッ」

力任せに何度も何度も剣を振るう男。その剣を防ぎ、少しずつ後退しながらの対話。

答えをくれたのは、俺の後方で俺達の戦いの行方を見守っていたシエラちゃんだった。

「妖天族は海霊族と同じで色々な種に分けられるんだけど、その中には人型の種が二種類あるの。堕天使と堕天使」

「……だ？」

「堕天使。堕天使は手足が真っ黒ですごく鋭い爪を持ってて、あたし達のは全然違ってるんだ」

「そ、そうなんだ……」

苦笑いしつつ。連続的に加えられる力の断片に、そろそろ耐えられなくなってきたから。理解出来た所でもう行きましようか、と。

俺が唾を飲みこんで。

既に見え見えの隙をついて、素早く背後にでも回り。ずっぱりやっつけてしまおうかと。

そう覚悟を決め。実行に移そうとしたその時だった。

「何いつまでもものろのろノロノロやってやがんだこの阿呆新入りが  
! ! !」

廊下に響き渡る麗しき御声。

残念ながら振り返る余裕は無かったけど。シエラちゃんがあっ、  
リモたん！ と嬉しそうな声を上げたから、予想的中。

今まで以上の力を込められた剣。それを俺のそれにぶつけて、そ  
のまま根競べに持ち込もうとする男。その力に必死で耐えながら、  
俺は、後方に凜と立っていらっしやるであろう彼に向かって声を放る。

「すみません、初めてだからどうしたもんかよく解んなくて！」

「はあ！？ 大馬鹿かてめえは！ なら何で其処にいやがんだ！  
引っ込めボケ！」

「え？ だ、だって」

コアさんに行けって言われたし。シスにも頼んだぞって言われた  
し。第一貴方は、玄関先でどS姫と化していらっしやっただじゃない  
ですか。

そう言う事は出来ず。というか、言えないうちに。

もの凄い勢いで此方に向かってくる、足音が聞こえて。

そして轟く姫君の御命令。

「とりあえず退け新入り！」

え。この状況で、それを仰いますか？

しかし。それは、相手の方が可能にしてくれた。

男が、猛スピードで接近してくる金髪の姫君に気づかない筈がなかった。

殺気剥き出しの彼は、放っておいたらどうなるか解ったもんじゃない。しかし俺は防戦一方だったから。とりあえず、危なそうな姫の方からやってしまおうと思ったのだろう。

奴は俺から再び飛びずさり。

俺もシエラちゃん的位置まで後退し。姫に命ぜられるまま、奴から距離を取ろう、

と。

した時には、リモさんは既に。あの訓練場の時と同じように、俺の横の壁を蹴っていて。一瞬のうちに奴の背後まで移動。

男には、方向転換する暇すら持たせず。

その緑色の光を纏った御足で。

「がッ……」

男の頭部に、激しい蹴りを御見舞しておりました。

男は当然前方へ倒れ込む。巨体が落ちて、地面を揺らすのを感じた。

リモさんかというと、うって変わって優雅に降り立ち、しかし男の傍らでヤンキー座り。髪の毛をむんずと掴み、ぶんぶんと揺らして意識を確認していらっしやる。

その様子を見ていて。とりあえず、思った事は。

アクティブなんだね。

でもこれでは異世界人さん等には伝わらないだろうから、自分なりに変換してみた。

「に、肉体派なんだね」

「そうだよ。フウガの次に肉体派」

真顔で頷くシエラちゃん。と。噂のその人は並んでいる二人を一瞥し、それから眼下の赤に視線を戻して。

「談話してる場合じゃねえだろ……コイツは俺がやつとくから、てめえらはさっさと上行きやがれ」

「え、でも」

リモさんが行った方がいいのではなかるうか。そう言おうとしたら、彼はふっと目を伏せる。

「煩えな」

「え、うるせ……」

「今の見て勝手解っただろ」

「いえ、あんまり……てか凄過ぎて真似出来な」

「いいから行け。ソラ、連れてけ」

空？ 空って……何故だ。  
と。

「了解だよ！」

何故かシエラちゃんが明朗にそう応えて。問答無用で俺の手を取り引っ張って、誰もいない階段へと進む。

手を繋いでいるから、狭い階段を、二人並んで歩かなければならず。暗がりの中、遣伝子の所為で思わず火照る類。一人で歩けるから、ちゃんと歩くから。そう言ったけれど、何故か彼女は離してくれない。

「……あの」

と、いやな汗をかいている俺が小さく小さく漏らした声。それに応えて、ではないだろうけど。シエラちゃんも声を響め、こう紡ぐ。

「多分人質取られてると思うから、これから言う事をよく聞いてて」

途端に。心臓が高鳴る。

やっぱり、人質を。

恐らく俺は酷い表情をしていたのだろう。シエラちゃんは、優しく微笑んで。大丈夫、と口にして。

「多分だけどね、動くな、って言われると思う。だからあたしは、どうしようどうしようって、戸惑ってるフリをするから、セツナは庇うフリして、あたしを背中隠して。で、ずっと話し続けて」  
「え？」

「犯人に向かって話し続けるの。もう諦めて下さいとか、こんな事して何になるんですか、とか。そんなに時間は要らないけどね」

時間？ と。

怪訝そうな顔をする俺に向かって。シエラちゃんは、大きく頷いてみせた。



「コアは魔法を見せた。シスとリモたんも、戦っているとこ見せてくれたでしょ？」

嗚呼。あと三段で、到着する。

三。

「だから」

二。

「今度はあたしの魔法を見せてあげるよ」

俺達は。二階に辿り着いた。

続×6・参日目…君は涙を流せるのに

ゆっくり、ゆっくり。歩みを進めて。俺達は、二階に一つだけある部屋…開け放たれた扉の方へ向かう。

扉の向こうに見える空間は明るい。けど視界にはまだ誰も映らないから、囚われた若者達も犯人グループの生き残りも、此処からの死角に居るのだろう。

その証拠に。近づく度に大きくなっていく、誰かの。恐らくは、犯人の、ヒステリックな呼吸の音。

剣の柄を握る手に、思わず力が入る俺。その肩をシエラちゃんが小突いて。振り向いた俺に向かって、彼女は掌を広げ、平行になるよう床に向けて小さく二度上下。恐らくは此処で止まれの合図。それに従うと彼女は頷き、殆ど無に近い声でこう囁く。

「一気に、どん、ね。せーので、セツナを先頭に突入」

一気に、どん。せーので、突入。俺、先頭。

と、頭の中で重要単語を往復させて。これ以上声を出すのは憚られたから。俺は黙って頷いて見せる。

すると、それに応えるようにシエラちゃんも頷き。少しだけ、微笑んで。

その大きな瞳に。扉の奥を、映し出し。

「じゃ、始めよう」

その言葉に。俺は進行方向へと踵を返す。

と。

シエラちゃんは、敵に聞こえてしまおうのではないかと思える程、大きく、大きく。俺が思わず再び彼女の方を見てしまおう程、盛大に息を吸い込んで。

そして。思い切り。

「せーのッ！」

叫ん、だ。

同時に俺は思い切り背中を押されて。凄い衝撃に、前方を見ていなかった俺は危うく倒れそうになる。わ、わ、と情けない声を漏らしつつ、しかし何とか体勢を立て直し、事無きを得た、のだけれど。

動くな、と。響くのは低く鋭い声で。

其処には下に居たのと同じような、がたいの良い男が立っていて。その太い腕で人質を羽交い絞めにして、震える人質の首にナイフを当てがっついて。

……という、俺の予想とは裏腹に。

「うッ、うつつ動く、なな、な！」

響くのは裏返った高い声。

「あれれ？」

俺に続いて入って来たシエラちゃんが、そう呟いて首を傾げる。彼女にとっても予想外の相手だったのだろう。事前に伝えられた作戦では、シエラちゃんが怖がって俺の背後に隠れる予定だったのだが。これでは、彼を恐れる振りをする事自体が難しい。

それでもシエラちゃんは、とりあえず素早く俺の背後に回ったが。

其処は、向かって左の壁にカーテンの無い大きな窓がある、結構な広さのある部屋。

其処に唯一動くものとしてあったのは。

恐らく俺よりも三、四歳は幼いであろう、細っこい少年だった。下の男達とは、瞳と髪の毛の色くらいしか共通点が無い。

部屋の壁際から均等な間隔で並べられている、六つの茶色い袋。大きさからして、それには人が一人つつ詰まっているのだろうが…  
…小さな彼は、その、左から三番目の袋の傍らに膝を折って座り。

震える両手で。小さな銀の刃を、確かに茶へと。その中で黙している、人へと、向けていた。

「……何してるの？」

思わず俺は声を放る。

だって、わからない。彼はこんなに小さいのに。

「自分が何してるか、わかってる？」

どうしてこんな道を進まなければならなかったんだ？

すると、大きく肩を上下させる彼は。俺達を、涙の滲んだ目で睨みつけ。

「うるさい！ こ、ここ、こいつを、殺されたくなかったらっ、大人しく、そ、その武器置いて、さ、さっさとどっか、い、行っちまえッ！」

荒い呼吸を挟む、とぎれとぎれの言葉。俺はそれに従って、剣をゆっくりと白い床に置く。シェラちゃんも同様に杖を置いた気配があったが、そんな事してしまったら魔法が使えなくなるのではないだろうか。

まあ、そんな心配は余計なものだろう。俺は彼女に言われた通り、小さな犯人に向かって話し続けるだけ。

人質は取られているが、相手が相手な分プレッシャーも軽減だ。ふっと息を吐いて。俺は、言葉を紡ぎ始める。

「そんな事しても何にもならないよ。もう、どうにもならない」

「うるさい！」

「君は負けたんだ。君の仲間はみんな、俺の仲間が倒しちゃったから。残ってるのは君一人だから」

「黙れッ！」

「商人なら賢いこつよ。捕まえた人達に何もしないで降参した方が絶対得だと思う。俺はこっちの裁判の仕方なんてわかんないけどさ、その人を傷つけて返すよりは、無傷で返した方が罪は絶対絶対軽くなるから、多分だけど」

「だ……黙れって言うてんのが、いき、聞こえ、ないのかよ！ だ、黙らないと……本当にコイツ殺すぞ！」

と。其処でシェラちゃんが俺の背をトンとつつく。小声で何か言うのを止めたから、きつと準備が整った合図。俺の出番はもう終わりという事だ。予想よりずっと早い。

安堵する。でも。

「殺す、って」

それでも俺は続ける。

震える少年は俯いて。鋭利な視線を下し、物言わず横たわっている



「セツナは一応目瞑って、そんで腕とかで押えてて！」  
「わかった」

俺に鋭い声で指示を飛ばし。俺がそれに従った瞬間。  
彼女は再び。彼女の支配下に入った光に、命ずる。

「『包囲せよ』！」

「はい、お疲れ様」

柔らかさを取り戻したシエラちゃん言葉に、俺が目を開けると。  
其処には彼女の笑顔と、茫然としている少年の姿があった。

何も言わず……いや、言えず。瞳は空虚を映し。その様子は、まるで心そのものを失ってしまったようだった。

その姿を俺の黒に映しつつ、彼女に何をしたらかと問うてみた。すると、シエラちゃんは微笑んで。

「結構難しい聖光魔法だよ。心に魔力で膜を張っちゃうの。冷静な人とかだと失敗しちゃうんだけどね、あの子みたいに心を乱してるとやりやすいんだ。入り込む隙が出来やすいから」

「心に、膜……」

「凄いでしょ」

「う、うん、凄い。素晴らしい」

とか言いつつ、実感的に、仕組みが全く以って掴めない。何だか奇妙な話である。

てか、そういえば心って何処にあるんだろうか、と。俺は自身の胸を軽く叩いてみる。やっぱり、此処ら辺？

俺がそんな事をしている間に。褒められちゃった、そう言って笑っていたシエラちゃんは、リモさん同様杖を光と化させ、消し。それから茶色い艶やかな髪を揺らして、心を「包囲」された少年の方へと向かい。彼の腕を取り引き摺って動かし、袋と垂直に寝かせる。そして、俺の方に視線を返して。

「この子が眠りの魔法使ってたんだよ。下の人達は魔法使えなさそうだったし、この子魔力結構強いみたいだし、というかね、部屋に入った瞬間からこの子の魔力の気配してたし」

成程。つまりこの少年は、「眠らせ屋」として奴等と一緒に居た訳か。

彼がどんな人かなんて解らないし、どんな事情があったのかは知らないけど。年端もいかない少年を引つ張って一緒に悪事を働かせるなんて、あいつら最低だ。姫君様に手をぐりぐりされても仕方ない……って、いや、やっぱりアレはやり過ぎか。

と。シエラちゃんは一番壁際に配置されている袋の方へ行き。その傍らにしゃがみ込んでから、俺に向かってにっこりして見せる。

「あたしの魔法のお陰でその子魔法維持できなくなったから、多分もうそろそろみんな起きるよ。出してあげよう」



「あー、そつかそつか、じゃあ俺はこつちから」

俺も足元にあった剣を持ち、一番左側の袋まで移動。眠っている人を引つ張り出すのは重労働だ。女の子一人にやらせる訳にはいかない。

というか。よくよく考えると、先程あの少年を移動させるという仕事を彼女に任せてしまったのは相当まずかった気がする。彼は細くて背も小さく軽そうだったとはいえ、人間脱力しきっていると、運ぶのは相当重く感じるというし。

気が利かない自分を反省しつつ。腰を下して自身の後方に剣を置いて、言うなれば巨大巾着袋である袋の紐を緩める。

「う……」

中から。微かな呻き声。覗いてみると、シエラちゃんと同じ色の髪持つ、女性。

う、女性か、などと女性超苦手系遺伝子を持つ俺は思ってしまっが、軽く頭を振りそれを払拭。しかし覗いているのは怪しすぎるから、とりあえず袋の口を手で持って広げて、声だけ放る。

「平気ですか？」

「……………此処は？」

返ってきたのは震えている声。

ああ、そつだよな。あんながたいの良い荒くれ連中に捕まっただ。相当恐ろしい思いをしたに違いない。

「あ、大丈夫です、悪い奴はみんなやつつけましたから」

察した俺は、なるべく明朗に、ヒーロー宜しく言ってみる。勿論

俺がやつつけた訳ではないけれど。

と。少し間を置いて。女性は俺に、相変わらず震えた声で問いかける。

「あなた、は……誰、なのですか？」

「へ？ 俺？」

「あなたは……アスカ、様？」

「あ、はい、そうですよ」

「なら……姿を、見せて」

え。

「だって、あなたは、あいつらの、仲間、かも知れない……私を、からかって……」

「え？ いや、そんな、そんな事は」

ないです。そんな事がある筈がない。

そう言おうとしたら。彼女は。涙声で、続けてこう紡いだ。

「アスカ様の、あの、制服を、着ているのを、見るまでは……私は、信用、出来ないわ……」

ああ。そうだよな。

彼女から俺の姿は見えない。彼女にとって俺は、まだ得体の知れない何者かなんだ。不安要素満載の。

だったら。だったら。

……だったら？

其処で、はっと気づく。

今俺が姿を見せたら。彼女は安心……する、のか？

制服ならば問題ない、ちゃんと着てるし。

けど、俺の髪は黒。俺の瞳は黒。なぜなら俺は魔天使だから。

不意に思い出すのは全てのはじまりの日。シルドジークで、アマリナさんからぶつけられた言葉。

どうして？ どうしてこんなことをするの。

あなたは化け物で。私達を殺しに来た筈なのに。

……………今。怯えきっている彼女に俺の姿を見せたら、どうなる？

非情にもぶつかってきた、一つの疑問。答えなどとうに明確だ。

ならば、どうしよう。俺はどうするべきなんだろう。

考えて考えて、それでも思い付かなくて。シエラちゃんの方を見やると、彼女は只管に自分のすべき事も全うしていた。彼女が必死になって袋から出そうとしている青年は、まだ眠っているようだった。

「……………あ、の」

背中に嫌な汗が流れる、俺の耳に届くのは。急かすように中から発せられた声で。

彼女はきつと袋の入り口を見詰めている。アスカの制服を纏った俺が現れる事を願って。

でも。でも、俺は。

嗚呼。俺はシエラちゃんとは違う。俺には。彼女に安堵の光を齎す事は出来ない。

「……すい、ません」

俺には、出来ない。

俺は結局、謝罪の言葉を口にする。どういう事、と。涙声が問うけれど、それ以上は何も答えられない。

まだ鞄に収めてやれない銀を取り。ただ黙して立ちあがって、救うべき人に背を向けた。

シエラちゃんが、小さく俺の名を呼んだから。俺は振り返り。

「ごめんね」

明らかに心配を映した瞳に映されて、躊躇われたけど。そう言う。それ以上は彼女の顔を見られなくて、俺は俯いた。

そして彼女にも背を向けて。足は重いけれど。何とか、歩み出して。部屋を出ていく。

手にした銀は、床の白をさして。  
部屋を出て、暗がりの中に入ると。階段の最上段に、長い金の先  
を白に垂らして。リモさんが座っていた。

何時から居たのかは解らないが、俺の情けない台詞は聞こえてい  
たと思う。影を帯びた空間でも、尚輝き続ける彼は、俺の方へ視線  
を流す事はせず。

「逃げたのか」

短く。そう、綺麗な声で発した。

俺はその場で静止する。彼からは、まだ若干二メートルくらいの  
距離があった。

逃げた、か。

「そうです」

俺はその綺麗な横顔を、まっすぐ見て返答する。

「俺では、あの人に安心してもらう事は出来ないと思いました。俺  
じゃ……救えないと、思った」

「何だ、それ」

溜息かな。ふっと息を吐いて、彼は目を閉じる。

「俺に打つかって来た時と違って、随分と弱気じゃねえかよ」

それを聞いて、俺は思わず笑ってしまう。

嗚呼。そういえば、確かにそうだな。

「あの時は殺されそうでしたから、必死だったんです。それに、あの時は若かったんですよ」

再び繰り返される、何だそれ。

若かった、なんて変な言い方だろうか。正しい気もするけど。あの時の俺は、此方の事情を何一つとして知らなかったから。

そっだ。俺は事実を知って、受け入れたんだ。

「俺は、自分の種族の事を知ったんです。シスから戦争の事を聞いて……何で憎まれてるのかも、聞いた。世界の敵として、酷い事を重ねてきたんだから……憎まれるのも当然ですよね」

と。リモさんは目を開け。

それまで俺の姿を避けていた、宵色の瞳に。その酷く美しい瞳に。俺の姿を映し出す。

「だから、逃げました」

微かにだが、鋭さを含んだその視線。逃げずに受け止めて。

「御願いですリモさん、俺の代わりにシエラちゃんを手伝ってあげて下さい。袋から、寝てる人何人も出してあげなきゃならないから女の子一人じゃ、キツイから」

すると彼は視線を床の白まで落とし。

「……や、ソラなら大丈夫だろ」

どうやらソラというのは、シエラちゃんの事をさす綽名らしい。

シエラシエラシエラシエラセラソラ、みたいに。……ちよっと無理矢理感があるけど。

と。ソラという響きの誕生について考察している間に。大丈夫だと  
言っておきながら、彼は立ちあがり、部屋へと向かってくれる。

「あ、ありがとうございます」

「煩え下行ってる」

感謝の言葉を撥ね退けられてしまい、苦笑いしつつ考える。彼が  
通り過ぎる瞬間、ふわりと良い匂いがした。多分シャンプーの匂い  
だろう……って、自分気持ち悪。

まあ、とにかく此処に残っていても邪魔なだけなので。俺は一度  
肩を回してから、階段を下りていく。

と。中腹まで下りた所で、不意に届く姫君の声。

「セツ……おい！ ちょっと待て馬鹿！」

セ？ セラ？ それともセツナ？

いや、待てとிட்டたから多分俺だろう。シエラちゃんが部屋の中  
で一世一代の大挙行をしたとなれば別だけど。

下行つてると言われた気はするが、回れ右して階段を駆け上る。  
すると、上から二段まで来たあたりで。部屋の入り口に、何やら  
美し、いや、思い詰めたような顔つきで立つ彼の姿が見えたから。

「何ですか？」

そう問うと。彼はう、とばかりに一度視線を斜め右下に落とし。  
そして、何故かほんのりと頬を赤く染めて。

長い長い沈黙の末。

「……………お疲れ」

……オツカレ？

「あ……お、お疲れ様です」

咄嗟に返したけど。何が起こったかよく認識出来ぬ間に。そう、俺が目を白黒させている間に。

視界の中、モノクロになってしまった彼が再び俺の顔を見る事は無く。ただすつと、部屋の中へと消えていった。



続×7・みつか目：フラミスカ・ツーリズム

一階に下りると、何故か。あちこちにバタバタと倒れている筈の、筋肉質満載の男達は一人としておらず。闇の中でも凜と輝く銀髪を持つ美少年様だけが、仁王立ちして待っていていらっしやった。

彼はやってきた俺を見るなり、怪訝そうにこう仰る。

「どうしたセツナ。顔がおかしいぞ」

うぐ。

悪かったな、顔がおかしいのは元からだよ、と。そう言い返したら言い返したで、また何か天然爆発な事を返してくるんだろうなこの人は。

だから、俺はその刺々しく感じるフレーズはスルーして。

「いや、ちょっと。リモさんってよくわからないなあと思って」

「リモがどうかしたのか？」

「うん。お疲れって言われた気がする、よく覚えてないけど」

「そうか。それは可愛いな」

それ、言っっちゃ駄目って言ってなかったっけと、思わず苦笑い。

するとシスは微笑んで、何故だか俺にぐぐいと歩み寄り。えー何どうしたのと問う前に。

「とりあえず、敵の始末は終わったようだな。よくやった」

そう。俺の黒を。頭を、撫でる。

「……あのさ、それ止めた方がいいよ」

「何故だ」

「……色々と恥ずかしいから」

「そうか？ 私は余り羞恥を覚えなかったぞ？」

「それはシスがそういう性格だから……って、え？」

違和感があったから、彼の言葉を再生してみる。

私は余り羞恥を覚えなかったぞ？

私は、って。

「シスの頭に触れる事が出来る人が居るの！？」

するとシスは眉を顰め。俺の頭から手を離し、胸の前で腕を組む。

「何だ人を汚い者のように。毎日風呂には入っているんだぞ」

「いや違ッ、そういう意味じゃなく、つまりシスさんの、えーとあー、あー言い表し難いっ！ よ、要するにっ」

語彙力の少ない俺が頭を抱えて苦労している、と。シスはどうやら俺の言いたい事を悟ってくれたらしく、やれやれと軽く頭を振り。「お前の事だ、私が頭に触れられると怒るとでも思っているのだから」

何か違う気もするけど、まあいいや。

「うん」

「ならばそれは間違いだ。残念ながら、私はお前が考えている以上に寛容だぞ」

「……へ、へー」

「それに、頭を撫でられたのは昔の話だ」

不意に。シスの瞳が、薄らと青みを帯びた気がした。きっと当時の事を思い出したのだろう。

「私が副隊長の時代に世話になった隊長……現二番隊隊長、クレア  
ージン隊長殿にな」

「くれあー、じん」

何だか面白い響きの名前だ。でも、『こつち』の人に言わせれば、  
俺の風岡刹那って名前の方がよっぽど変な名前なんだろうな。

と。シスがその時、ああ、と。何かを思い出したように声を上げ  
た。

「何？」

「クレアージン隊長殿には、アスカに來た最初の日に会っている筈  
だぞ」

「え？ 俺が？」

「そうだ。今日戦った相手と同じ、秋族の……赤い瞳と赤髪をした、  
長身の隊長だ」

あ。

「あの人か……」

そうだ。手摺なし螺旋階段で、俺が殆ど叫びに近い自己紹介をし  
たあの人。あの時の会話を思い返してみると、発する言葉の端々に  
ちよっと嫌味な感じがあった気がするのだが。

「いずれ共に任務をする日も来るだろう。あの方は強いぞ、楽しみ  
にしておけ」

「し、シスが言うつて事は相当なんだね」

どうしよう。色んな理由から御会いしなくなってきた。

「……さて、私は上へ向かう。お前は外に出ているか？」  
頷くと。

そうか、では。そう言つて、彼は俺の横を抜けて行く。一人にな  
つてから不意に、外に鞘を置いてきてしまつていた事を思い出した。

剣を漸く休めてあげられるな。  
そんな事をぼんやりと考えつつ。俺は光の中へと戻るんだ。

こちらにも。リモさんに手を踏まれていた赤髪の男の姿はなく。  
「にははは、セツナさんお疲れっす」

唯一出迎えてくれるのは猫少年の癒し系スマイルで。彼は俺に、  
手に持っていた剣の鞘を渡してくれる。銀をその鞘に収めてから、  
有難う御座います、コアさんもお疲れ様です。そう言って。俺のは  
癒し系では決してないが、とりあえず笑顔を返す。

無風空間となっていた筈の其処には、涼風が流れ込んでいた。そ  
れは見えない壁が消え去った証拠だ。コアさんは戦いの終わりを聴  
き取って、もう既に魔法を解いてしまっていたのだらう。エルフの  
耳ってやつぱり凄い。

俺は心地良い風を感じながら、深呼吸して。自身のやるべき事を  
終えたという充実感を、身体の中に満たそうと。

そして。あまり役に立つ事が出来なかったという霧。人を自分の  
手で救う事が出来なかったという霧。それを、全部追いやってしま  
おうとする。

するとその時。

「セーツーナさんっ」

軽く節をつけて。コアさんが、俺の名を呼んだから。

「はい、何ですか？」

と、右へ首を傾げて見せると。コアさんも左に首を傾げ、鏡のようになる。

「な、何ですか？」

「敬語使ってる俺が言うのもなんっすけど……俺にも敬語無しで御願います」

「あ、あー！」

「とうかつすね、敬語使う相手ならフウガさんとミーウェイさんくらいが丁度いいっすよ。あの二人は年上ですし……フウガさんはあまりお近付きになりたくない感じの人ですし、ミーウェイさんは大人ーって感じするんで。シスさんは隊長さんっすけど敬語使われるの嫌がりますし、リモたんさんとかエルちゃんさんとかシエラさんは同い年くらいだし。グレイダさんは滅茶苦茶年上っすけど、上過ぎで実感わかないし正直言っつてあの人馬鹿でしょ？」

「ば……か!？」

それにフウガさんに関しても何か酷い事を仰っていた気がする。ど、毒舌だ。

しかし酷く辛い事を言っておきながら、その笑顔は可愛らしい。この子、実はとんでもない子かも知れない。

「俺も、多分セツナさんより結構年上っすけど、敬語はいらないうす。だから俺にも敬語無しで」

「あーわかりました、あ、じゃない、わかった」

まあ、例え本性がとんでもない子でも、普通に話せと言われたら難くない。シスやグレイダは現在進行形で敬語無しの会話をしているし、シエラちゃんとも何だかんだ言っつて普通に話す事に成功しているから、多分エルちゃんとも大丈夫だ。

ただ一つ、問題として残るのは。俺、リモさんと敬語無しで話せるだろうか。もの凄く拒絶される気がするんですけど。

コアさんの話では、赤髪の男達はシスが「収納」したのだと言う。  
「分析部隊ラナスって話聞きました？ 任務に行く時って、絶対隊長さんが副隊長さんが分析部隊に『任務行つてきまーす』って言いに行かないとなんないんですけど、その時に捕獲用の球くれるんですよ」

その球というのは、赤と白のコントラストが絶妙なあれではなく、透明なもので。捕獲したい者を、気絶や睡眠状態、またはシエラちゃんがやってみせたように心を封じたりと、何らかの形で動けなくしてから入れておきたい。本当は一人余裕で入れる程に巨大なもののだが、自在に縮小可能。そしてその縮小は……構造はよく解らないけど、空間自体の縮小らしく。つまり中に入った者に害はない。

成程、それならば持ち運び楽々だ。

そして。捕えた者の行く先は、というと。

「アスカの本部からそんなに離れてないところに、收容所があるんですよ。其処に持ってって。で色々、ねー」

……だそうだ。

話を終えて俺が思い出したのは、シルドジークの事で。

あの老婦の死体が無くなっていたのは、シスがそれに「収納」したからだったのかも知れない。うん、きっとそうだ。

と。

「セーラーナー！」

その時、建物の中から。その艶やかな髪を豪快に揺らし、シエラちゃんが飛び出してきた。

き、喜色満面で向かってくる。二つの大きな瞳が発するキラキラは、只今上空にある夏の太陽にさえ負けて、な……。

……まずい。と。

危険を感じた時にはもう遅かった。

「うあッ!？」

俺を襲ったのは、そう、衝撃だ。あまりの衝撃に、俺は持っている剣を落としてしまった。

何故ならば。し、しえ、シエラ、ちゃんが。俺に、だきだきだきだきだき……

足の裏の導火線。ついた火は瞬く間に俺の脳天まで上って来て。

しかし花火なんて綺麗なものにはならず諸共爆発。最早熱などは感じない。熱という概念を越えた何かは感じるけど。

やばい、デスする。つまり。死ぬ。

と、油断すれば意識が吹っ飛んで、魂が蒼穹の彼方まで行ってしまっいそうなかで。

シエラちゃんの興奮に高まった声が。プロのタイプライター並みの速度で、白くなりかけた俺の脳内に文字を打ちつける。

「ねえセツナ、あのねあのね、シスがね、『この者達は私がサーナ

まで送り届ける。お前達はフラミスカの町長に任務の終わりを告げてくれ。その後は、私が戻るまで自由に置いていて構わないが……まあ、夕暮れ時程に港の方に集まってくれ』って言ってるね!」  
と。ピクリとも動けないでいる俺の視界に。アジトから出てきた姫君の姿が映り。

「……町長んとこなら俺が行ってくる」

「てね、リモたん言ってるでしょ？ だからねセツナ!」

「はっはははははははは、は、は、はい」

「あたしと一緒に町見て歩こうよ!」

えーと。

えーと。

えーと……だ、駄目だ。思考回路が上手く働いてくれない。

何だ。この状況は何だ。そして今から俺が突入せんとしている状況は一体何なんだ。

女の子と一緒に、町を歩くと言う状況。

検索中、検索中。あ、該当文字を発見。

綴りは。でいーえーていーいー。

ば、馬鹿な。そんな馬鹿な。小学校時代に連れションからも卒業した身の上だ。そんな英単語が俺の脳内の辞書に存在する筈がない、絶対はない!

と、混乱と困惑とほんのり絶望が入り混じって頭の中を巡回している中で。背後に居たコアさんがやははーとさも愉快そうに笑いながら移動し、俺の視界の中のリモさんの隣につく。その手には、俺が先程落とした剣があった。

「にはは、なら俺もりもたんさんで行きます。邪魔しちや悪いです



し」

あ、あれ？

ナ、ナンカジャマシチャワルイトカイツテルコエガキコエル。

「それにリモたんさんを一人にしとくと、それはそれで危ないんで」

「……何が危ないってんだ？」

「にははは、町には危険が多いっすからねー」

オレニハステニイノチノキケンガセマツテイルキガスル。

最早何が何だか分からなくなってしまった俺の耳に。届くのはやはり、彼女のよく通る声で。

「やった、決まり！ じゃあ早速行こう！」

「え、あ」

と。俺は彼女の腕からは解放されて。少しは楽になったけど。すぐに手を繋がれてしまい。心臓の鼓動は依然高鳴るまま。

「ね、ね、さつきリモたん！ 此処の名物教えてもらったから！ それ食べようよ！」

否応なしにその手を引かれてしまうので。もうどうしようもなく。

「じゃあ後で、港で落ちあいませよー」

コアさんのその声を背に受け。

……俺とシエラちゃん、昼過ぎのフラミスカに乗り出したのだった。

「ねっ、美味しい？」

見ないようにしてるけど、声の調子で解ります。

シエラちゃんは多分今、眩いばかりの笑顔で。そんな感じでそう問われると。俺は返答しない訳にはいなくて。

とりあえず、答えてみた。

「す、素晴らしく美味しいよ」

先刻、俺達は大通りに向かい。きゃーアスカ様よーだのアスカ様ー俺の店にも来てくれよーだの、彼方此方から声上がる中、フラミスカの名物『ランプエル』を購入した。

其処は、彼方此方で展開されている露店とは違い。商品がショーウィンドウに並べられ、その上から店員さんが顔を出しているという、おばさんコロッケ下さいチツクな店。

俺は此方の世界のお金なんか持ってないから、当然シエラちゃんにおごって貰う形となり。彼女が女性店員さんに、五百円玉程の大

きさの丸い銅色の硬貨を一つ渡し。商品を二つ受け取り、そして、キラキラした笑顔で俺に渡すまでの過程を、フードの下から見ていて。

心から思った。

情けない。男として、色んな意味で、情けない。

食べられるというコインに似た白色の何かの上に、紫色の、円形に整えられた謎の物体が乗っているという、形状がアイスクリームに似た『ランプエル』は。アイスクリームとは違って冷たくなかつたし、食べた瞬間に柑橘系のものと似た酸味と甘味がふわーっと口の中全体に広がるという、奇妙な感覚の食べ物だ。……有難いんだか有難くないんだか今の俺には判断がつかないが、アイスクリーム同様片手で十分持て、歩きながらも食べられる。

だから、もう片方の手は。繋いでいる、というか、繋がざるをえない、というか。

現在、俺達がランプエル片手に歩いているのは。大通りを外れた、人通りの少ない道。大通りの人々の声はあまり届かず、結構静かだ。だから余計に自分の鼓動がよく聞こえる。彼女の手の柔らかさとか温かさとかを、余計に感じてしまう。余計に緊張する。

そんな中で。

「ねえ」

道の真ん中で、シエラちゃんが立ち止まって。俺と繋がっているその手を揺らしたから。

「は、はい、いや、うん」

同じく静止した俺は。彼女の目は愚か、顔すら、姿すら見る事は出来ず。視線を前方に向けたまま、落ち着かない声で彼女のねえ、

に伝えてみる。

と。

「あたし、頭巾脱いでもいいと思うな」

頭巾？

彼女が発したのは。地球産現代っ子の俺にとっては、ちょっと古めかしい気のする言葉。

俺は一旦、唾を飲み込み。砕けてしまった声の欠片をかき集めて、何とか音となるようにして。

「……ひよっとしてフードの事？」

「ふーど？」

視界の端に居る彼女が、首を傾げたのが見えた。そりゃそうだ、フードって外来語だしね。片仮名にしちゃったら二通りの意味がある言葉だしね、多分関係ないけど。

けど。彼女の言う頭巾も、俺の言うフードも、指しているものは同じ。俺の黒を日射しから、そして人々の視線から守ってくれている、この海色の事だ。

「……け、けど、これ脱いだらさ」

俺は其処で言葉を切る。その先を言うのは憚られた。

と。

シエラちゃんは俺の手を離して、ととっと移動し。俺と真正面から向かい合う。

彼女の持つ『ランプエル』は、もう既に半分ほど欠けていて。彼女の、真剣さを映す瞳は。まっすぐ、まっすぐ、この世界の住人達は皆恐れている筈の、俺の黒を捉えていた。

「うん、魔天使だってみんなわかつちゃう。でも、セツナはアスカだもん」

「……そうだ、けど、さ」

曖昧に笑って、俺が視線を逸らすと。彼女は、さっと俺の視界の中心に移動してきて。

「さつきはね、仕方なかったと思う。セツナの考えた事、何となく解るよ。……けど、セツナはアスカなんだから。自分の事隠す必要なんか無いんだから。だって、アスカの制服ちゃんと着てるし、人間のあたしが隣に居るし、それにセツナ怖い顔なんかしてないし、きつとみんなセツナの事怖がったりしないよ！……あたしは、セツナの目の色も、髪の毛の色も、好きだよ」

嗚呼。心臓が爆発しそうだ。

多分俺の顔は真っ赤だろう。……いや、顔だけじゃないかも知れない。頭の天辺から足の先まで、体中が熱いから。

激しい鼓動と、その熱の中。騒がしくて、熱くて熱くて、最早ぼーっとさえしてきた俺の視界の中央で。

シエラちゃんは微笑んで。こう、紡ぎ出す。

「だってね、セツナの黒は優しい黒だもん。姉さんの黒と似てる気がするんだ」

姉さん。

「……それって、アマリナ＝レイルズリードさんの、事？」

何故か、自然と思いだされたその名。

シルドジークで、アマリナさんは言っていた。彼女は、セイラーム統治王族、アマリナ＝レイルズリード様から名を貰ったのだと。

すると。シエラちゃんは一瞬、その大きな目を更に大きく丸くして。そして、俺の顔から視線を逸らすことなく小さく頷く。

「そうだよ。誰から聞いたの？」

「え、えーと……し、シルドジークの、仲良くなった、男の子」

俺は何となく嘘を吐いていた。女の子と言ったら、それはそれで危険な気がする……って、俺は何を考えているんだ。出てけー出てけーと強く念じて、今考えた事全部払拭。

「苗字が、一緒だったから。もしかしたら、そうかな、と思って」  
そっか。彼女はそう言っただけ。少しの間俯いて、何やら考えているようだったけど。やがて俺の隣に戻り、手を再び取り。そして、また歩きだす。

海の見える、白の町の中を。海色の服を纏って進む。色彩的には申し分ない。それに精神的にもキツイから、俺としてはこのまま、海の中に隠れていたい。

と。俺の内なる想いが伝わったのだろうか。スローペースな歩み。止まりそうだけど、しっかり前には進みながら。

再び口を開いたシエラちゃんは、もうフードの事には触れず。

代わりに、自身の姉。アマリナ＝レイルズリートの事を話してくれた。

「あたしの姉さんは、アマリナ＝レイルズリート。あたしとは十六歳違いで、セイラムの統治王族だった人。……人間なのに黒い髪と、黒い瞳を持っていた。あたしが物心つく前に、戦争で死んじゃったんだけどね」

「そ……う、なんだ。戦争って……十六年前の？」

「シスから聞いた？」

「うん」

「そっか。……でね、だからあたしは」

俺達の横を、中年の女性二人組が。微笑んで会釈しつつ、擦れ違っ  
ていった。

擦れ違いざま、シエラちゃんは話を中断し、笑顔でこんにちはと  
応え。俺は黙って会釈を返した。彼女達は二人とも、髪の色は水色  
で。瞳の色は灰色に近かった。遠くから見たら、白目に見えてしま  
うかもしれない。

「……会った記憶、無いんだけど」

ちよつとだけ間を置いてから、シエラちゃんが話を再開したから。  
ひよつとしたらこ、ここ恋人と思われたんじゃないだろうかなんて  
どぎまぎしていた俺は、再び彼女の「話」に意識を集中する事にす  
る。

「凄く優しい人だったんだって。母さんが言ってた」

「……そっか」

「それにすごい美人。リモたんにも負けなないよ」

「そ、それはもの凄い美人だ」

「うん。あたしの部屋に写真あるから、見においでよ。見せてあげ  
る」

行こうかな。そう返しつつ、「写真」はこの世界にもあるんだ、  
なんて考える。実際に彼女の部屋に訪れる事は頭がない。だって訪  
問しようとしたら……俺はきつと、その道中で意識を失う。

「……姉さんは」

と。不意に。彼女の声が、少し沈みこんだ気がした。

俺が彼女の方を横目で見ると、彼女は俺の顔を見ておらず。足元  
の白に視線をやっていた。

「戦争で、死んで、ね」

「……死ん、じゃって？」

らしくなく重たい声は。静けさを抱いた声は。俺の煽りを受けて。

不可思議な事を、紡ぎ出す。

「……『風』に、なっただって」

風。

ねえ。

私、決めた。

私……『風』になる。

私。

みんなの為に、時を繋ぐわ。



涼やかな風が流れる中。陽は、だんだんと暮れてきて。白い町は、  
橙に染まっていく。

日暮れの時を迎えたら。その姿は美しいのだろう。きっと。いや、  
絶対。

「……そういえばさ、この町の風ってなんかいいよね」と。

俯いていたシエラちゃんは、俺と視線を交わらせて。その表情は  
微笑を取り戻した。

「うん。そうだね」

浮き上がって来た彼女の声が。俺の感覚を確かなものにする。

任務終了が知らされたから、大半の船は出航したんだろう。夕陽に染まった港には、木造船は数隻しか残っていなかった。

ああんアスカだとそんな奴等の都合に付き合ってる暇なんざねえんじゃボケカス……という感じで、逞しき船乗りさん達の暴動とか起きなかつたのかちよつと心配だったが、この整然とした様子を見るとそんな事はなかつたらしい。大通りでは黄色い声が飛んでたし、本当にアスカって凄いいんですね、はい。

港の端の方、番号を付けるとするなら一番ポートで。コアさんが物資を入れるのに使われるのであるう巨大な木箱に凭れかかって立っているのを見つけ。潮の匂いの漂う中、俺とシエラちゃんは彼に近づいて行つた。

声が届く所まで来てから。コアさんは可愛らしい微笑を浮かべ、首を傾げる。

「にははは、お疲れ様です。楽しかったっすか？」

「うん、すっごい楽しかったよ！」

そう、直ぐにシエラちゃんが満足げに大きく大きく頷いてくれるが、俺としては謝りたい気持ちで一杯です。

目を合わせる事は愚か、話しすらろくに出来ない奴と町をぶらぶらして、おまけに暗い話題に持ち込ませてしまつて。楽しかった筈があるうか、いや、そんな筈がない。彼女には、是非他の逞しい素敵男子と恋に落ちてもらいたい。

と。

「にはははー……いやいや、それは何よりっす」

……あれ？

何だろう。

……今一瞬、彼の微笑の中に何か得体の知れない不気味なものが

覗いた気が。

い、いや、多分俺の気の所為だ。

「あー、リモさんならあそこに居るっすよ」

そう言つて彼は、港の出っ張つた部分の先を指差す。其方を見ると、其処には眩しく輝く陽が在つて。海の蒼を赤く染めてしまったそれは。もうじき自身が染めた水に浸かろうとしていて。

そして。其処には。その神々しささえ感じられる光に照らされ、陰りを帯びた金も。

「さてさて、二人で歩いてみた感想を詳しく聞かせてもらえませんかねー」

……気の所為じゃ、無かつた気がする。

そんな事絶対の九乗くらい話したくないから、あははーと曖昧に笑つて誤魔化そうとした、のだが。

シエラちゃんが、俺の隣から一歩前に出て。

「うんっ！ あだね、セツナつてすつごくね」

え。

「ちょ、ちよつと待つてシエラちゃん！ そこ乗っちゃうの！？」  
と。彼女は振り返り。きよとん、として。

「え？ 駄目？ あたし、セツナの素敵などこ一杯見つけたから、それコアに話してあげたいんだけど」

「な……」

馬鹿な！ あの沈黙づくめのデー、じゃなく、徘徊の、何処から俺の素敵など見付けたというんだ！ 駄目な所ならいくらでも

発見できるぞ、例えば女の子におごってもらっちゃった所とか何一つ気の利いた話出来ない所とかランプエル食べるの遅い所とか！

「だっ、駄目だめ駄目だめダメ、駄目、絶対！」

だから俺は、かの有名なあのポスター宜しく、腕を顔の前でクロスするというポージングと合わせて言ってみてみた。

するとシエラちゃんは。

「えー」

……心から残念そうな顔で。肩を落とし、俯いて、しまう。

うわあ。やばい。く、苦しい。

胸の底から湧きあがってくるような、その苦しみに早くも耐えかねた俺は。

「うっ……うっ……あー、もうッ、じゃあいいよ！」

「本当!?!」

と。途端にシエラちゃんは顔を上げ、返されるキラキラ光線。ひよっとして俺、騙されたのではなからうか。しかしやっぱ駄目、無理、なんて言うのはやはり憚られてしまい。

「う、うん……いや、でも、そういうの聞くの嫌、じゃなくて、恥ずかしいからさ、俺……リモさんのとこ行ってくる」

悩みに悩んだ俺は。最後にとんでもないことを言ってしまうしまったとさ。

という訳で、俺は現在、目的イコール姫君に近づいています。

俺が、重い足取りで進み。着々と接近している間にも。俺に背中を向ける彼は微動だにせず、ただ沈んでいく夕陽を見詰めているようだった。

五メートルくらいまで距離を詰めた時点で、彼は一瞬此方を振り

向きかけたけど。無視かどうかは解らないが、また真っ直ぐ夕陽の方を向く……彼の頭の動きは、長い髪が示してくれるから、よく解るんだ。

そう。夕陽の光の中、影を帯びた淡い金。涼風に撫でられて、緩やかに、淑やかに、流れる彼の優美なる尾。

その尾が風に遊ばれるのを見ている間に。俺の脚は、目標までの距離、凡そ二メートル地点にまで到達していた。

行ってくるなんて言っちゃったけど。もう来ちゃったけど。話す事なんて無い。というか、てめえとなんか話したくねえよボケと言われて終わりそう。

とか、思いつつ。

「夕陽、綺麗ですね」

彼が何を思っつて、夕陽を眺めているかは解らないけど。とりあえず、夕陽と。それに染められて自らも輝く、海が凄く綺麗だったから。俺は、そう放ってみた。

すると。

「……アレは、宵に追われる光だ」

プリジモ＝ノードレーは。俺の言葉に対して。凧の様な声で、そう紡いだ。

「宵に、追われる」

彼の言葉を繰り返した俺に。リモさんは、そうだ、とも、ああ、とも言わず。

「……昼間の太陽見て、綺麗とか思った事、ねえだろ」

その代わりにそう言う。はい、そういえば。そう俺が応えると。光を見詰めるその光は。

「昼間の太陽見たって……大抵の奴は、温かいとか、有難いとか、  
そんなくらいで……綺麗とは思わない。……アレは、俺等の世界と混  
じり合ってるから」

混じり合う。

「朝陽は宵を払う光で、夕陽は宵に追われる光……頂上から下され  
たから、俺等の世界を拒絶して、終りの刻を拒絶して……混じり合  
う事を嫌う。だから只管に純粹で……」

俺等の世界。終りの刻。

彼の言う宵って。

本当に夜の事だろうか。

「……だから、綺麗だと感じる」

ひよつとすると、それは。

「……って」

「……え？」

「昔読んだ本に書いてあったのを、今思い出した」

なんだ。そうか。

「リモさんが考えたんじゃないかなかったですね」

「そんな意味わかんねえ阿呆な事考えねえよ。つか、アレに意志  
があつたら迷惑なだけだ。太陽が昇って、それで沈むのは自然の摂  
理だろ馬鹿」

そうですね、と。俺は声を上げて笑う。  
確かに。気まぐれでもうやだ無理俺今日昇らないー、なんて言われても困る。

と。

其処で不意に、疑問が一つ。

「リモさんって、嫌いなんですか？ 夕陽」

「……あ？ 何でんな事聞く」

「いや、だって、今の話聞いてたら」

すると、彼は振り返る。馬鹿かお前は、とでも言いたげな表情。緩やかに移ろって光を与えられた金は、先程までとは違って変わって自らも光り輝き。宵色の瞳は影を深め、視線には鋭利さを偲ばせる。

「……嫌いだったら見てねえだろ」

「あ、そうですね。えっと、じゃあ」

彼と向かい合った俺は。気がつく。

「あ、朝陽は嫌いですか」

奇妙な事を訊いていた。しかもその訊き方も微妙。好きですか、じゃなくて、嫌いですか。  
当然怪訝そうな顔をする姫君。

「……別に、嫌いじゃねえけど」

「……別に、ちゃんと答えてくれる。」

「じゃ、じゃあ、昼の太陽、とか」

「……別に嫌いじゃねえよ」

「なら、あの……森は、嫌いですか？」

あれ。奇妙どころか、先程の会話とも何の関連がなくなってしまう。  
った。

「……別に」

けれどやはり、姫は言葉を返してくれる。だから俺は続ける。

「じゃあ、草、とか、花、とか」

「……どっちだよ」

「あー、なら、花で」

「……別に」

「じゃあ、草は」

「……別に」

「あ、空。空はどうですか？」

「……別に」

「じゃ、じゃあ、人は」

「……ヒト？」

と。別にを繰り返していた彼は、僅かに首を傾げる。俺は頷き、肯定する。

「そうです、人。人は、嫌いですか？」

「そいつによるだろ」

「……な、なら」

その時俺は。漸く、気づいた。

自分が本当は何を聞きたかったのか。



「……俺の、事は」

彼の目が。僅かに見開かれて、大きくなる。その中に映っている自分の姿を見るのが嫌で、今度は俺が視線を逸らした。

その先で。足元の白は、リモさんの影で黒く染まっている。

「俺の事は、嫌いですか。……絶対、嫌いですか。絶対絶対、嫌いですか」

本当は。嫌いですか、じゃなくて、許せませんか。そう聞きたかったんだと思う。

ベッドの上で鎌を突き付けられた時の、彼のあの言葉、あの反応から考えると、だ。彼はきつと、魔天使を酷く憎んでいる。昨日俺の仲間となった人々の中で、誰よりも、そう、ずっと強く。

何より、シスの所為とはいえあんな状態になっちゃった訳だし。

やっぱり魔天使は最低最悪尚且つ変態、みたいに思われても致し方ないと思う、けど。

仲間として、一緒に任務をこなしていくからには。一緒に戦っていくからには。

ほんの少しでもいいから、俺の事を許してほしい。

心を解いてほしい。俺とちゃんと話してほしい。笑って見せてほしい。

……そう思うのは。俺が、我儘だからだろうか。

と。

彼は不意に、俺に背を向けた。その動作が、あまりにも突然だったから。

馬鹿じゃねえの。お前なんか、魔天使なんか大っ嫌いだ。視界に入ってるだけで腹が立つ。

そう、言われるかと思った。

けど。彼は俯いて。暫く黙りこんだ後で。

「……ぜ、絶対、嫌いかって訊かれたら……」  
「え？」

顔を上げた俺の視線の先で。金を頂に近い位置で結ぶ、赤い蝶々が揺れていた。

「……それは……判断、つかねえ、けど」

風のようにだった声は。風に煽られて、不安定に波を立てる。

「けっ、けどな……ぜっ、絶対絶対嫌いかって訊かれたら……  
……そ、それは、それでもねえかも知れねえような、んな気がしねえ  
でもねえような……」

音楽記号で言うならば、デクレッシェンドが付属した彼の声。だんだん、だんだん小さくなっていった。

最後に残ったのは、殆ど、零に近い声で。それでも、波音の狭間から、確かに俺の耳まで届く声で。

「……気が、する」

彼は、そう紡いだから。

温かい何かが、ぶわーっと。足の裏から一気に俺の胸まで押しあがってきた。

そして、何故だろう。

夕焼けに焦がされた所為かな。

目の奥が。熱い。

続×8・ミツカ目：彼の名は劫火

目の奥に在った筈の熱は、いつの間にか溢れだして。俺の頬を伝っていたんだ。

嗚呼。俺はなんて迷惑な奴なんだ。

女の子無理苦手病と小心者症候群だけで、もう十分過ぎる程に最低な奴なのに。十六にもなる男子高校生が三日間で二度も泣くなんて……此方に来てからは、更に涙脆症まで加わってしまったようだ。

自分が涙を流している事に気付いた俺は。慌ててしゃがみ込んで、組んだ腕の中に顔を埋めて。自分の醜くなった顔を、光から庇ったのだけだ。

どうしても洩れてしまう嗚咽に、俺のすぐ前に居たりモさんが気づかない訳も無く。

「な……！？ てめ、ばッ……」

ばっ？

嗚呼。多分、イコール、馬鹿。しかし相当戸惑ったであろうリモさんは、そう鮮明に紡ぐ事をしないで。恐らく、少しの間言うべき言葉を脳内検索した後には。

こっ言った。

「っ……め、目から塩水流してんじゃねえ！」

えーと。何故涙と言わないのかは、些か疑問を感じるところだが。自ら作り出した闇の中で、すみません、と。途切れ途切れの超涙声で。しかも恥ずかしくて情けなくて、ちよっと笑えてきてしまつてさえいる状態で。俺は彼にそう言った。そう言う事しか出来なかった。

リモさん。此方の世界の言葉だと、どうかは解らないけど。日本語の『すみません』って言葉は、二通りの意味を持つてるんだよ。俺の気持ちをもっとちゃんと伝わると思っから、両方の意味を知ってほしい。」

嗚呼、けど。謝罪とは別の、もう片方の意味を知っていたなら。もし、知ったなら。

リモさんは、意味わかんねえ、と。そっぱを向いてしまっだろうが。

と、その時。

「……シーちゃん」

麗しき姫君が、戸惑いを映した声でぽつりとその名を紡ぎ。背後から、それまでの涼風とは向きも強さも異なる、激しい風が吹いて来て。

そして、それが不意に止み。

とん、と。何かが、石の上に降り立った音が聞こえたから。俺が顔を上げると、その頭に冷たくて大きなものがのる。

「どうしたセツナ。泣いているのか？」

嗚呼。これはシスの声。頭上に在るのはシスの手だ。

止めた方がいいよって、言ったのに。リモさんの影で黒く染まった白を見詰めながら、そう思っって。俺は再度、腕の中に顔を埋めて途切れ途切れに紡ぐ。

「……泣いて、ない、よ」

と。

「私は嘔吐きは嫌いだぞ」

すぐに降ってきた彼の声は、その内容とは裏腹に、酷く柔らかなものだった。

その声の所為で。しゃくり上げた後に、俺は。

「……………泣いて、る、よ」

「……………ああ、そうだな」

温かみを帯びた闇の中で。陽が沈んでいくのを感じていた。もうじき夜が来る。雨はやがて止むだろう。

いや。自分の意思で止ませなければいけないんだ。

移動はやっぱり、俺達陸路、シス空路。

シス王子は断固として森の中を歩く気はないらしく、町を出た瞬間に、では、と飛び立ち。

彼が颯爽と去っていった後に残された俺達は、夜だから、シエラちゃんの魔法で灯りを灯し。そして虫対策として……………身体にコアさ

んの魔法で、触れたら微弱な衝撃が起こるといふ、ちょっとしたバリアを張りながらの移動となった。ぶつかってきた虫さん達、ごめんなさい。

天気の良い日だったから。町から出て草原を歩いている間は、まーるくて色白なお月様が俺達を照らしてくれていたのだけれど。

森の中に入ってしまったと。

視界が黒一色という訳ではないが……やはり怖、いや、暗いのである。

其処ら中で騒いでいる虫達の声のざわざわを裂いて、何処かから獣の遠吠えが聞こえてくるし。何より、昼間は穏やかな表情をしていた木々が、闇の中ではみなして此方を睨みつけているように見えるのだ。靈感皆無で幽霊も妖怪も見えた事は一度として無い俺でも、これは怖い、いや、暗い。

「セツナ、あたしから離れないでね」

と。ちよつとした肝試し気分である俺に、自らの生み出した橙に照らされたシエラちゃんにはっこり。しかしその瞳には僅かだが憐憫の情が映っていた。

い、いや、そんな筈は。だって恐怖という名の感情は表情には出していない筈、平然を保っている筈。

……という事はその目は。

……あー、もう。あっちの方が。

俺の目からはもう塩水は流れていないけど。大変マキシマム残念な事に、俺の泣いている姿はシエラちゃん達にも見られてしまっていた。

止めよう止めなきゃ止めたい止めるんだ、とどんなに思っても、

なかなか涙が止まらなくて。すっかり陽が沈んでしまってから戻って来た俺達を迎えたシエラちゃんは、大層心配そうに俺とリモさんを交互に見たし。コアさんかというと、俺の泣き腫らした赤い目を、大層愉快そうに眺めていた。やはり彼は小悪魔なのか。

そんな、俺の中で小悪魔疑惑が浮上したコアさんは。先程から、俺達の後方でにやっぴと実に楽しそうに歌っている。流石エルフだ。夜の森もなんのその。

と。

その時、不意にシエラちゃんが、前方を歩いている光に声を放った。

「リモたん、大丈夫だよな？ 道」

え？ 大丈夫じゃないの？

そう思わず彼女の方を向くと。盛上っていた木の根に躓いて危うく転びかけ。

俺は人知れず胸を撫で下ろして、高鳴り掛けた心臓を鎮める。あ、危ない。

「合ってるよね？」

先の言葉に姫からの返答が無かったから、シエラちゃんは再度尋ねる。

すると姫は、彼女の方を振り向いて。

「……うるせえな、俺が道間違った事なんか……ッ!？」

あ。



ついちよつと前の俺と同じ状況に陥った姫は。後方を向いていた為体勢を整える事が出来ず。

一瞬のうちに、俺達の視界から消えて。

次の瞬間には、後方から聞こえていたにやっにやっが消え。代わりに特大のにははははは、が響く。

……夜道は足元に注意しましょう。

という訳で、今度は違う意味で。

「……リモさん、大丈」

「うるせえ馬鹿！ 黙って歩け！」

前方を向いたまま、姫君は鋭利な声を飛ばす。心なしか歩くペースもちよつと、いや、かなり上がった気がする。リモたんごめんと、隣でシエラちゃんが小さく彼に謝罪するのが聞こえた。

と。しばらく続いていたにやはははは、も止み。森に静けさが帰って来た頃。

視線の先。ふんわり、と。シエラちゃんの持つそれと似た光の球が浮かんでいるのが見えてきた。原因は明らかだが、あの様はちよつと不気味だ。

「なんか火の球っぽい」

「え？ あれは火じゃなくて、シスの聖光魔法だよ？」

わ、解っております。例え話です、はい。

まあ、それは心の中に留めておこう。彼女等が日本の怪談を聞いたら、魔法を筆頭とする常識軍団で全てが済まされる気がしないでもない。

そんな事を考えている間に。怒れるリモさんを先頭にハイペースで歩みを進めた俺達は、石の蓋まで到達していた。

途端に、俺達を誘うように揺れていた光は消え。

「早く降りてこい！　そしてさっさと蓋を閉める！」  
既に開いていた重たい重たい蓋。……森の中よりも更に深い、地下の闇の中からは。必死さ溢れる隊長殿の、悲痛な叫びが聞こえてきた。

只今、帰還致しました。

明るみの中に戻った隊長殿は、ハンナの森と繋がっている扉を開け放ったまま。心なしか何時もより白い顔で、身体に「奴等」「イコール虫が付いていたら、直ぐに闇の中に放り込めと仰った。

いや、俺等の身体の表面にコアさんが魔法張つといってくれたから、靴の裏以外は大丈夫だと思っよ。俺がそう言ったら、何故だか疲労困憊の彼は、右手で額を支えつつ。

「……万が一という事があるだろう……」  
「……万が一という事があるだろう……」  
「……万が一という事があるだろう……」

まあ、それでも隊長命令だから。鏡が無いから百パーセントかは解らないが、虫が衣服や頭に付着していない事を確認し。……リモさんは、膝やら何やらについた土を払って。

そして俺達は、階段地獄へとさしかかるのです。そう、まずは地上へと出る階段。それからちよつと早いガラスボス、超巨大螺旋階段だ。

疲労の所為だろう。階段を上る俺の脚は酷く重くて、三階まで上り切るのには相当辛かった。

こういう時現代っ子の俺は、エレベーターとかエスカレーター付いてればいいのと思ってしまうけれど。此方の人々の場合は、翼のある種族を羨むのだろうか。シスみたいな聖天使族の人とか……俺、は、羨みより寧ろ憎悪の方を向けられてしまう気がするな。

と。ふと、こんな疑問が浮かび上がる。そういえば、俺って飛べるんだらうか。その気になったら。

俺がシスみたいに。そーらーを自由に……って、駄目だ。歌ってみても全然想像がつかない。

……まあ、今度シスに聞いてみよう。

移動中にシスから聞いた話では、どうやらアスカ総本部には、東館と西館が存在するらしく。俺としては非常に有難い事だが、東館は男性、西館は女性が住むという決まりがあるらしい。ちなみに医务室は双方の館の彼方此方にあり、要所である隊長さん達の会議場や食堂は、東館と西館の丁度中間地点に位置するのだそうだ。

俺やコアさんの部屋は東館の三階で、リモさんの部屋は同じく東館の二階。そしてシエラちゃんは西館の二階。

だからリモさんとシエラちゃんとは、二階まで到達した時点で別れる事となり。

リモさんは何も言わずさっさと行ってしまったけど。シエラちゃんは、じゃあまたねー、と。大きく大きく手を振りつつ。開けた空間、リモさんとは違う方に消えた。

その後。

俺のよりも階段に近い位置に部屋があるコアさんとも別れ。俺はシスと共に自室を目指していた。二つ上の階に部屋があるシスがついて来てくれたのは、俺がまだ自分の部屋の場所を覚えきれていな

い為なのだが。

「……ん？」

不意に。隣に居た銀髪王子が、そう怪訝そうな顔をしたから。

「何？」

異変を察した俺は問うてみる。しかし、彼は俺の疑問に答えるどころか、更に眉を顰めて。

「……何故だ？」

「は？」

いや。それはこっちが訊きたいんですけど。

と、何故だかシスが答えてくれない間に。便利な事にトイレの直ぐ前にある、緑色の扉が見えてきたから。

「あ、もういいよ。ついて来てくれてありがとう」

俺は笑ってそう言ったのだが。彼は例の如く優美に微笑むどころか、眉間に出来たしわを消す事もせずに。

「……否、其処まで私も行く」

止まらず。引き返さず。とつとつ俺の部屋の前まで来てしまった。

いや、別にいいんだけど。部屋の中には疚しいものなど何一つないし、今後配置する予定も無いし。だから突然のお部屋訪問をされても困らない。けど。

気になるのは彼の様子で。……どうしたの。そう問うてもきくと答えてくれないのだから、黙っておく事にするが。

と。緑の前に立っていたシスが、背後に居た俺を振り返り。

「……入ってもいいか？」

「あ、いいよ？ どうぞどうぞ」

笑いながら返事したら。なら御邪魔しまーすといった言葉も無

く、彼は直ぐに戸に手を翳す。

当然、中央は発光。そして無言でスライドする空間の隔たり。開けた視界。

その先は。明るかった。

「……………あれ？」

と。俺は首を傾げていた。

この御時世、地球じゃ省エネが叫ばれてるから。見てない時はテレビを点けないし、外出する時は電気は勿論消す。俺にとってはそんなの、無意識のうちにやる事だ。

なのに、戸を開けてみると。灯りが点いている。

俺は、灯りを点けていった覚えなどない。

この部屋、人が入ってきたら自動で灯りが点く仕組みではなかった筈だし。もし今日からそうなったのだとしても、点灯するのが早すぎる。戸が微かに開いた瞬間から、光は漏れ出していたから。

「何で電気が、って……………シス？」

と。俺が頭上にクエスチョンマークが浮かべている間に、シスは人の部屋にずかずか……………いや、堂々と侵入していき。

寝室の扉を、開けて。

……………何故だか呆れの色を映した横顔は。同じく呆れの色を混じった声で、こう紡ぎ出す。

「他人の部屋で何をなさっているのです……………クレアージン隊長」

くれあーじん、隊長。

途端に浮かぶ。鮮明な赤。

俺は頭上のふにゃふにゃマークを消して、シスの傍らに駆け寄り。彼と並んで、白に塗れた寝室の中を見る。すると、其処には。

「あーらら、残念……此処、新入りさんの部屋になっちゃったんだ」俺達と同じ海色を纏った……長身の、赤が、居て。

俺のベッドの上。肘を付いて横になっていた状態から、のんびりと上体を起こし。羨望したくなる程に長い脚で、胡坐を掻いて座る。

「……三階の緑色の扉の部屋は、新入りの部屋となった……と、今朝の会議で申し上げたつもりだったので」敬語を使用されるのを嫌うシスが。敬語で会話する相手。

長めの燃えるような赤髪と、つり気味の目……赤い瞳を持つその美青年は、声を上げて軽快に笑い。

「……悪い、嘘。ちゃんと聞いてました、知ってましたよシルフィス隊長殿。……っはは、そんな怖い声出さないの」  
と。左膝に肘を付き、頬杖を付く。彼は視線を、シスに、ではなく俺に流し。楽しげに目を細める。  
その様を見て。ぞくつとする、自分がいた。

何だろう。手摺無し螺旋階段で彼を見た、あの時は感じなかったのに。

近くで見たからだろうか。

この人の目……奥の方に、ぞつとするくらい大きな「何か」が

在る気がする。

けど。その声音は、飄々としたもので。

「いや、貴殿のお隣の『噂の人物』に、どうしてももう一度御会いしたくなっちゃって。ちゃんとした御挨拶もしてなかったしね……で、どうも新入り君、改めましてハジメマシテ……って、俺の事覚えてる？」

問われたのだと気づいて。その目に射竦められていた俺は。はつと我に返った。

「え……あ、あの、螺旋階段で御会いしました、よね」

「あーそうそう。で、俺は二番隊の隊長サマ」

「は、はい、シスから聞きました」

「へえ、流石はシーちゃんだ。……あー俺ね、名前はクレアージン  
レィレィスィファーナキィヴィクスタリア。アイシーンのイ  
レィスィファーナ出身……一目瞭然だと思っけど、一応言っとく。  
秋族ね」

な。

いや、他の重要な情報も仰っていたけど。俺の耳は前半部分に釘付けでした。

貴方の御名前。とても長くありません？

「……えーと、くれあーじん、いれ、ふあー」

うわ、早くもあやふやだ。

と。彼は再び軽快な笑い声を上げて。

「クレアージンでいい。ま、『劫火』とか呼んでくる奴もいるけど

ね……君は是非クレアージンさん、またはクレアージン隊長殿と呼びたまえ、新入り君……いや、異世界出身、魔天使のセツナ君」  
俺の出身と、種族と、名前と。それを紡ぎ出した声は。若干、潜められたものだったから。俺は身体を強張らせた。

そう。この人の言葉には棘がある。それは小さいけれど………確実に、俺に血を流させる棘。確実に、俺を傷付ける棘。

何よりも怖いのは。その棘が、敢えて表面に突き出しているものであるという事。

……けど。

其処で恐れているはどうしようもない。立ち止まっている訳にはいかない。

俺は。その棘を潜り抜けたい。

「……クレアージン、さん」

だから俺は、彼の名を呼んだ。

と、クレアージンさんは微笑んで。

「おお、前者が気に入ったか少年」

そう言っつて、頬杖を止め。真っ直ぐ真っ直ぐ俺を見据え。

「……で？ 何か言いたい事があるんですよね、魔天使君」

はい。

そう声には出さずに。俺は、黙って頷く。

勢いを、つけたかったから。俺は小さく息を吸い込んで。

そして、俺は再び。彼に向かって言葉をぶつけるんだ。

「俺………本当に、本当に………本気、ですからね」



本当に、本当に、本気。と。

俺の声が届いたのだろうか。彼は、俺の言葉を繰り返したけど。何が、と尋ね、撥ね退ける事はせず。

目を閉じて。その赤から俺を開放して。

「……はいはい」

と。彼が、再び目を開けた時。俺は違和感を覚え……そして、すぐにその原因に気付く。

その赤の奥に存在した筈の「何か」が、姿を消してしまったんだ。と。

「少年。オ兄サンは優しいので……入隊祝いとして、一つ助言をして差し上げましょう」

そう言いつつ、クレアージンさんはベッドから立ち上がり。俺はその姿を見て茫然とする。

ちょ、長身だ。スタイル抜群……てか、脚長いよ。長過ぎ。

とか、思っているうちに。彼はその長い脚で、あっという間に俺の目の前までやってきて。

……何故、この世界の人は。他人の頭に触れるのが好きなんだろう。

左手はポケットに。そして、右手は俺の頭の上に。わしわし、といった感じに撫でてくる。込める力はシスよりも強めで、油断していた俺の頭は思わず落ちかけた。

「……えーと……」

隣ではシスがくすくすと笑っていて。何だよ、貴方も撫でてくる

じゃないですか。と。御隣さんに対するちょっとした反抗心が芽生えかけた時。

クレアージンさんは。シスの優美なそれとは百八十度違うタイプの、しかしハンサムスマイルで仰った。

「強くなんな」

強く。

「あんたは魔天使で……世間の目は当然冷たい。意地悪な奴なんて大勢居ますから。……此処にも、外にも、ね」

つまりこの人は。俺に、「アスカとして、強くあれ」と。だったら、俺が言うべき事はただ一つ。

「はい」

「よしよし、良い返事だ」

と。彼は、俺の黒から手を離して。じゃあ、もうおいとまします。そう仰り。

道を開けた俺達の真ん中を悠々と通って、部屋の中程まで進んでから。

不意に、立ち止まり。

「あー、そうそう。シルフィス隊長殿に申し上げたい事有り」

そう言って振り返り。今度は、シスに視線をぶつける。

「……一体何です？」

と。銀髪王子が怪訝そうな顔をする中で。クレアージンさんは、右手の人差し指を立てる。するとその指先に、濃い橙色の光が集まってきた。詠唱とかはなかったけど、魔法だ。

「これはあんたらの任務中に入って来た情報だけど。……アイシーン支部の、ね」

そして。彼はその指で。空を黒板代わりに、素早く文字を書き始める。

鮮明な橙色をし、宙を漂う文字。俺達の視界に浮かび上がったそれ。俺にも読めるそれは。

フィン＝ルシード。

ジール。

クラン＝リ＝フィル＝バルナ＝グ＝レイ。

三行の文。

……いや。名前。人名だ。

そう気付いた時。クレアージンさんは。表情を微塵も変える事無く。相変わらず飄々とした口調で、こう紡ぎ出す。

「以上三名。昨夜、任務中にある魔天使に殺ヤられたそうですよ」

俺の足元が。凍てついた。

圧倒的な冷気。寒いと震える間もなく。分厚い氷は俺の身体全体を覆い尽くし……気付けば、俺の内側まで。

……と、彼の赤が俺を映し。

「あー、あんたは全然気にしなくていいよん。他の連中とは無関係なんだから」

嗚呼、そうだ。

俺は無関係。他の魔天使とは、全然関係ない。会った事すら、ないし。

そうだよ。俺が苦しみを覚える必要なんかない。俺が痛みを覚える必要は……ない。

凍り付いた自分の心を。そう言い聞かせて。何度も何度も言い聞かせて、解かそうと。温かな血を取り戻そうと、必死になっている中で。クレアージンさんはシスに視線を戻し。

「で。死んだ三人と一緒に居たけど、奇跡的に一命を取り留めた力ルース・ヴェーラウテ・ギガさんの御話によると……その魔天使はこう名乗っていたそうです」

と。それまで漂っていた橙に掌を添わせ、消し。再びその指先で、新しく文字に命を吹き込んだ。

その字は。こう語る。

け、い、ら。

ケイラ。

「……この名は今んとこ隊長連中にしか伝わってない。つまり、新入り君は幸運って事ですね」

それって幸運なんだろうかと。良く解らないうちに、彼は掌でその名を消し。

「俺は別に、誰に言っちゃっても構わないと思いますけどね……」  
そして、シスを真っ直ぐに見据え。

嗚呼、きっとこれが本来の彼の声なのだろう。そう思える、冷静な低い声。目の前の、かつての部下に言葉を放る。

「……けど、あの子にだけは伝えんな。言っても動揺させるだけ……  
…可哀想なだけだからね」

わかりました。

沈黙を置いて、そう言ったシスの声は。少し、震えていた。

声を震わせたのは、恐らく怒りの感情。

俺がその後、ちらと見たシスは。いままで俺に見せた事の無い表情をしていたし。

その瞳は。血の色のような深紅に、染まっていたから。

続×9・3日目：闇色と疾走

宵の藍の中。『彼等』の嫌う白色をした、望月が煌々と照らす空を。四つの黒が疾走していた。

高速での飛行が可能である、闇に紛れる黒き翼は。今まさに鋭く鋭く風を裂き。

開かれた空の軌道は、彼等を迅速に、そして確実に。『目的地』へと、連れ行く。

あーあ。馬鹿だなア。

と。

三つ並んだ影の後方……時に奇声を発するその一団から、一人離れて飛行していた前髪の長い少年は。直走<sup>ひたはし</sup>る前方の者達を見ながら、ぼんやりと思う。

そう、彼は止めたのだ。

「君達三人で、敵の総大将相手に何が出来る？」

……まあ、仲間の『活躍』の知らせに愚かにも士気を募らせた弱者達は。彼の言葉になど聞く耳を持たなかったが。

昨夜、確かに同胞は三人ものアスカの息の根を止めたという。しかしそれは、その男が強過ぎるという理由から可能になった事。

彼は。この世に生を受けた瞬間から……生まれながらに持っている、強大な魔力と魔天使としての『質』の高さの為に。血も涙も無い殺人兵器として育てられた男。

そう。同胞として男の傍らに在り続けていた少年は知っている。その男の強さも。そして、ある感情を得るまでは、彼に情けなど毛頭無かったという事も。

男がその感情を得たのは十一年前で。彼が知った感情に与えられるべき名は、『愛情』。

『愛情』は、何時の日か『執着』へと変化していき。

今。その男がアス力狩りを開始したのは、愛する者を取り戻す為

長い前髪は寒風に流れ、視界は鮮明なものとなっていた。

ふと視線を落とすと、眼下に広がる森は黒く塗りつぶされている。それでも、まだ緑の面影はあるけれど。……上空から見渡すと、その様は不気味さの塊でしかない。

下界は流れ、流れていき。やがて、その森の終りに差し掛かった頃。少年は高度を上げ。囁きを上げる草原と宵を背景に、生き急ぐ者達を見下ろし。

そして一人、苦笑した。

いや、さア。

ケイラ……キミ、いくらなんでも動き出すのが突然過ぎるだろ？  
振り回されるこっちの身にもなれっての。

それに。

愛する者って、言うけどさア。

「……どー考えても、一方的な愛なんだけどねエ」

加速し過ぎた愛情は。その矛先に在る者を、不幸にしか、しない。

『劫火』こと、クレアージンファイクリーダー戦闘部隊二番隊隊長殿。

彼が飄々とした調子を取り戻した声で、じゃーね、と。そう告げて、俺の部屋を出ていってから暫くの間は。重苦しい沈黙が、俺とシスの在る空間を支配していた。

嗚呼。この部屋、視覚的には明るいけど。瞼を閉じて心の目を使ったなら、多分壊滅的に暗いだろうな。

緑色が再び空間を隔ててから、再びシスの方をちらと見たら。視線を伏せて押し黙る彼の表情は、少し緩和したようだったけど。

けど、その瞳は未だ血の色をしていて。

「……シス」

俺がなけなしの勇気を振り絞って、そう彼の名を呼べるようになるまでには。また少し時間を要した。

名を呼ぶ俺の声を受け取ったシスは、まだ赤を帯びたままの瞳で此方を一瞬見る。しかし、それからすぐに視線を伏せて。

「ああ……すまない、セツナ」

「え？ あ、あー、別にいいよ？ 全然、気にしないで」



重く沈みこんだ声で返された謝罪の言葉に。俺には笑ってそう応える事しか出来なかった。

だってそうだろう？ 俺は天下御免の小心者。そんな奴が、今の隊長殿に訊ける訳無いじゃんか。クレアージンさんが言ってた「あの子」って誰の事、なんて。

まあ、それでも言葉を返してくれたから一安心。そして安心したら、何だか急速に眠気が襲ってきた。

瞼が重くなり。何だ、俺やっぱり滅茶苦茶疲れてるじゃんか、ひよっとして泣いた所為かな。そんな事を考えている間に、俺は手で口を抑えつつ、大きな欠伸を一つ。

と。

その時シスは視線を持ち上げ、俺の方に向き直り。俺の顔を真っ直ぐ、その瞳に映し出す。俺を捉えたその円が、徐々に翡翠色へと変化を遂げていくのが解った。

……てか、さ。そんな黙ってじつと見詰められても。

「な、何？ あ、ひよっとして今の欠伸が不快だった？」

視線を逸らすのも悪いなと解っている以上。笑みを浮かべる以外にどうしようもないんですが。

するとシスは、何故だか目を細め。

「いや。……今日はもう、休みたいか？」

「え？」

「お前には色々説明しなければならぬ事がある。しかし今日は突然任務が入った、だから……相当疲労しているだろう、と思つてな」  
嗚呼、と。其処で気付いた。

シスが此処まで来たのは。きっと本来は、無知な俺の為にこの世

界の常識云々を説明する為だったんだろう。そういえば昨日、説明なら明日からゆっくりと、みたいな事を仰っていた気がするし。だけど、部屋にはクレアージンさんが居たから。何故あの人が、みたいな疑問が先行しちゃって。結果その説明が遅れた、と。

「……うん。今日はいいや」

察した俺は、頷いた。

それに。今は何よりも眠気。そう、疑問より食気より眠気。その気になれば今すぐにでも眠れる気がするから。

すると。翡翠色を取り戻したシスの瞳は。怒りによる熱でなく、優しさによる温かみを湛えて。

そのあとは。

イエス。お待ちかねの王子スマイルが炸裂する。

「ならば、御休み」

彼が部屋を出て間もなく、セツナは眠りに落ち。そして、異世界へと消えたようだった。

ぎりぎり収集範囲内に在った意識の消失を感じ、随分と早々と寝つけるものだな、と考えつつ。シルフィスⅡゼノⅡアルヴェルドはその銀色の髪を、柔らかな光の下輝かせながら移動する。

今後は、まずは八階へと赴き、任務の完了を分析部隊ラナスの者に報告。そしてそれから直ぐに、まだ手元に在る秋族達を届けに、彼自らが収容所へと出発するつもりであった。そう、丁度収容所の看守に尋ねたい事もあったから。

しかし。

アス力総本部を貫く螺旋階段。其処に差し掛かったところで。

虹族と聖天使族の混血であるが故に、生まれつき備わっていた能力。先程セツナの消失を伝えたその力が、今度は「彼」が食堂に在るといふ事を主にあるじ知らせた。

その情報は、上へ向かおうとしていたシスの足を止め。そして代わりに、彼を下へと。二階へと、向かわせる。

頭の中で木霊するのは、かつての上司であり、恩師でもある「赤髪」の先の言葉。

『あの子にだけは伝えんな』

そんな事は、解っている。

ならば。私は、「彼」のもとへ行つて何をしようというのか。

ふとそんな疑問が浮かぶ。しかし彼はその自生した問いについて考察する事はせず、身体に黙って意志を従わせ。

気付けば、食堂へと辿り着いていた。

食事時は過ぎていたから、人は数える程しかない。

青、深緑、それから茶色、と。それぞれ毛色の、種族の異なった人々。その中に。

入口から一番手前の列、右際から二つ目の席に。目的の人物が、シスに背を向ける格好で座っていた。

金色の長い髪は、先程別れた際の姿同様、紅い紐で項に近い位置で結えていたが。珍しい事にアスカの制服ではなく……ボタンで前を留めるタイプの薄手の白いYシャツ、そして蒼いズボンを纏っていた。

溜息を吐いて。シスは、その細い背に歩み寄り。

「着替えたのか」

そう声を放る。と。

ぼんやりとしていたのだろうか。両手を添えた黄色いカップ。机の上に底をついたその中、揺れる焦げ茶の水面を見詰めていた「彼は。はっと顔を上げて振り返り、その美しい宵色の瞳に上司の姿を映し出す。

金の尾が振子のように大きく揺れて、長机の縁を柔らかに打った。

「……何の用だ？」

と。『眠り姫』とも称される彼は。表情から驚きの色を消した後、眉を顰めてそう問うた。対してシスは視線を落とし、ふつと微笑んで見せ。そして彼の隣の席に腰を下ろし、机上で腕を組む。

「いや……特に用事はない。しかし、少しお前と話がしたくなった……構わないか？ リモ」

視線をプリジモ＝ノードレーに向け、彼の鋭利なそれと交わらせると。プリジモはすぐに刃を逸らし、未だ湯気の立つカップの中へと注ぎ込む。

「……構わねえ、けど。……けど、シーちゃんと話す事なんか別に」  
その言葉に、シスはくす、と声を漏らす。すぐさま返される何だよボケ、に、彼は再びいや、と答え。

「シーちゃんか。お前がその呼び名を使い始めてもつどれくらい経つ?」  
と。

「……二年と五八日。初めてそう呼んだのは丁度昼時で……そんな時の天気は曇りで、その日はその後雨が……」  
記憶を辿って更に情報を付加しようとする姫君。シスは視線を前方へと返し、三度目のいや、を発動させる。

「そこまで詳しく訊いてはいない」  
視界の端、隣人の白い肌が、微かに赤く染まったのが解った。  
隣人は自身の朱を誤魔化す為か、温かなカップを口へと運ぶ。そして、ちらと其方を見たシスは思うのだ。嗚呼、飲み物を両手で飲む癖、まだ治っていないのか。  
と。だむ、と。陶器のコップが割れない程度に、更には中身が零れない程度に。それなりの力を込めて、プリジモは黄色の底を机上に返し。

「……あー、そうかよ」

「ああ、そうだ」

「で、それが何だっただ？」

「別にどうという訳ではない。ただ……お前がわたしの事を『シー兄』と呼んでいた頃の事を思い出してな」

「何だそれ、意味わかんねえ。……腹立つからもう一回言う。意味わかんねえ」

繰り返された言葉は、最初のものより小さくなっていった。発した

彼は、それからカップの中身をもつ一口。

と。

「リモ」

不意に、シスが姫君の名を呼んだ。温かな液体を喉に流し込んでから、絶世の美少年は再びカップを机に置き。

「……………あ？」

銀髪の隊長の方へ、顔を向ける。と、シスは前方を向いたまま。

「今日話してみて、少しは納得できたか？」

「てめえの言葉には目的語が足りねえ。……………何をだよ」

すぐさま噛みついてくるプリジモ。向き直り、その美しい姿を視界の中心に据えて。

そして、告げる。

「セツナが、いい子だと」

声を受け取った宵色の瞳は、複雑な色を映した。重力を付加されたかのように、その視線は落ちる。

「魔天使でも……………お前の憎しみの対象とは、全く違う種の人物だという事を、な」

『憎しみの対象』。

その面影を思い出したのだろう。プリジモは唇を噛み、目を閉じ。

そして暫し黙して、恐らくはその影を払った後に。

「……………セツ……………の事、は、少し、解った。……………少しだけ、な。本当に、ちよっとだけ、だけだな」

「そうか。それは何よりだ」  
シスは頷く。それは実は、成程セツナの綽名は『セツ』に決定した訳か、という意味での頷きでもある。

そして。彼は、立ち上がった。

椅子の脚が床を擦る音に目を開けたプリジモに、自身の今後の行き先を順に告げる。と、姫君は何故だか視線を落とし、頷いた。

一番隊隊長が、では、と微笑み。光纏う少年に背を向け。数歩、離れた。

その時。

「シーちゃん」

今度はプリジモが、上司の名を呼んだ。振り返ると、椅子に座ったまま、彼は。その宵色の瞳で、シスの翡翠色を真っ直ぐ捉えて。一旦は、口をつぐんだが。すぐに、その思いを言葉にする。

「……アイツの、事」

アイツ。その代名詞がさす者の名は、『ケイラ』で。

「何か情報入ったら、俺にすぐ伝える。絶対……隠すな」

シスの脳内で反復するのは、クレアージンの言葉。

昨夜、任務中にある魔天使に殺ヤられたそうですよ。

あの子にだけは伝えんな。言っても動揺させるだけ……可哀想なだけだからね。

「……もしも、情報が入り」

だから。シスは。  
与えられた事実を再度捕まえ、彼に向けて放す事はせずに。

「……奴と、会う事が叶ったとしたら？」  
そう問う。

その時お前は、どうするつもりだ？

と。面前的麗しき少年は。

「終わらせる」

その整った唇から、すぐさま、そう紡ぎ出した。

見詰める宵は、潜ませている。

その闇の奥に、研ぎ澄まされた鋭利な刃を。

そしてその、更に奥の方に。

「アイツの旅は……俺が……」

確かに。深い蒼を。  
悲哀を。

「必ず」



他者の過去を見る術を得ている、シルフィス<sup>II</sup>ゼノ<sup>II</sup>アルヴェル  
ド<sup>ファイクリーダー</sup>戦闘部隊一番隊長でも。  
未来を見る事は、出来ない。

そう。例え、ほんの数時間先の未来でも。

続×10・参目目：ナイトメアに狂詩曲を

其処は屋上。地上から遙か遠く離れた、白き床の上。

ひんやりとした夜風に、明るい茶をした髪を撫でられ。人間としては奇形とされる黒い瞳に、藍にぼっかりと浮かぶ満月を映し出していた少年、ヴィリーは。

ふっと。

「……暇過ぎ」

嗚呼、不可抗力だ。溜息と共に声も漏れ出してしまった。当然、すぐ背後に居た同輩がその雨漏りを聞き逃す筈もなく。

「暇？ なら叫んでみる？」  
『分析部隊さん分析部隊さん大変だ！、  
ラナス

魔天使が来たぞー』」

うっわ、幼稚な奴。てかこの時点で声がでかい、下手すりゃ入口んとこに在る収集機に音声拾われちゃうだろ。

そう、ヴィリーが呆れを映した表情で振り返ると。

「なんつって。そんな事したら劫火さんに焼き肉にされちゃうでしょ」

浅黒い肌を持つ少年ルノは、にっと歯を剥き出しにして笑った。肌の黒さに加えてこの闇だ、歯の白さが余計に際立って見える。

肩を竦めてヴィリーはルノに向き直り。その大きな深緑の中に鏡のように映る、呆けた自分の顔を眺める。見張らなければならぬ方角から目を離す事になる……夜番を任された者としては失格の行為だが、別に構いはしなかった。

どうせ敵など来ない。そう、何故なら此処は。

ヴィリー等二人の属する二番隊の隊長であり、『劫火』とも名高いクレアージン。その『劫火』の元部下にして、一番隊隊長を務める天才、シルフィス・ゼノ・アルヴェルド。更には七番隊隊長にして戦闘部隊ファイクリーダの部隊長でもある、『神撃』のザスターバース。それら強大な戦力が集結している天下のアス力総本部である。

それを知りながら尚も真正面からぶつかってくる奴がいたら、それこそ馬鹿、お笑い種。此方が逆に拜んでみたいくらいだ。

と。そんな事を思考の端に置きながら。ヴィリーは、無邪気な笑みを浮かべる友に向かって言葉を放る。

「焼き肉とか気持ち悪い事言つなよ、想像しちまったじゃん。……」

てかさ、お前みたいな植物野郎の場合、肉じゃなくて野菜なの、ヤ・サ・イ」

「失礼な、僕はまだヒトです。ほら、手がある脚があるこんなに素敵な顔もある」

「素敵な顔？ さーて何処ですかね、何処いすこにそんなモノがあるのでございましょうかね」

と。その時。

「……ん？」

それまで陽気に笑っていたルノが、不意にその笑みを消して。ヴィリーの背後。宵の中を凝視した。

ルノは森林人ヒラグナと呼ばれる種族の者。母なる木より生まれ、十八になるとその身は木化するという……魔力の塊である虹族同様、他種族とは大きく性質の異なる種。

森林人は運動能力に長け、人間より遥かに五感が鋭い。その目は闇の中でも動くものを明確に捉え、逃さない。

だからこそ。彼のアスカ入隊来からの友人として、それをよく知っているヴィリーは。彼のその反応と、「信用しきっていた事」との狭間に置かれ、眉を顰めた。

「ん、つて……どうした？ 何かいたのか？」

ヴィリーのその問いに、ルノはすぐには答えず。口を開けたまま上空を見上げる。

そんな馬鹿な。

アスカに真っ向から勝負を挑もうなんて愚者は。

「……今一瞬、『黒い奴』が………」

いる筈が。

「……ヴィリー」

ない。

少なくとも、ヴィリーがアスカとして此処に居る六年間は。そんな話は聞いた事がなかった。

そんな事はなかった。夜間でも、敵が襲ってきたという報告は一度としてなかった。だから今日クレアージンに通常任務から外されて、この任につく際も。夜番なんて不要なんじゃないかとすら考えていた。

なのに。

「上だ！！」

振り返って、見上げると。其処には黒がいた。

ヴィリーの瞳が不吉なものと恐れられる、その理由である存在。十六年前の戦争において、多くの罪なき人々を惨殺した種族……漆黒の翼を持つ種族、魔天使。それが三人。そう、気付いた時には海色の制服を纏う二人を囲んでいた。

三人か……分が悪い。

と、すぐに驚きを払い。冷静さを保ち考えを巡らす中で、ヴィリーは軽く唇を舐め。

そして、その唇の端を上げ、微かに微笑み。その視界の中心に在る男の、興奮に見開かれた血走った目……真に闇を映すその瞳。その中の自身の姿を、しっかりと捉えたまま。

背中合わせに立つ仲間。自身より少し背が高く、信頼に足るその男に声を放る。

「ルノ……解ってるだろ？ 俺の言いたい事」

返ってくるのはくっくっ、と喉を鳴らした笑い声と。

「うん。僕もヴィリーと同じ事言いたいよ……一緒に言おうか」

「じゃ、ちよつと待て。……戒<sup>キッ</sup>」

と。短く詠唱し、ヴィリーは無の中から杖を取り出す。宵に似た藍色の杖だ。

それから。二人は息を合わせて。大きく大きく、息を吸い込み。そして同時に。夜天に、こう叫ぶのだ。

「<sup>ラナス</sup>分析部隊さん<sup>ラナス</sup>分析部隊さん、魔天使が来たぞー！ー！ー！！」

嗚呼、そうか。

お前は、俺が怖いのか。

『怖い』のは何故だ。俺にはわからない。だから、答えてくれ。

俺が、お前の父親を殺したからか。

俺が人を殺すからか。

ほら。こんな風に。

「……………ッ！」

あの時の光景が。舞い戻って来て、瞼の裏に貼りつく代わりに。すっかり陰に塗れた、天井の白が視界一杯に広がって。

荒くなった呼吸。そして。虹族にとっては擬似的な感覚でしかな

い、鼓動の高鳴りの中。彼は、自らが無事に現の世界へと帰ってくる事が出来たという事実にあ堵する。

寝台の上。仰向けに横たわっていたその少年は、ゆっくりゆっくり息を吐いて。それから目を閉じて、左の手の甲を額へと持っていて。自身の額が、随分と熱を帯びているのを感じた。

悪夢を見る事自体には慣れていた。

けれど。経験した全ての事象を完全に記憶するという……虹族と星族の混血であるが故得た、特殊能力の所為だろうか。帰ってくるのはあまりにも鮮明な感覚。その為、身体はどうしても慣れてくれないらしい。

……もう、七年だぞ。

目を開けた彼は。自分に対する苛立ち、それと同時に酷い倦怠感と目眩を覚えつつ。両手を使って何とか上体を起こし、乱れた金色の髪をとりあえず整え。

そして。セツナの世界で言うブーツにあたる茶色い靴を履き。水でも飲んで落ち着こうと、洗面所へ。ふらふらとした足取りではあるが、移動しよう、と、した。

しかし。

彼は。数歩も行かないうちに立ち止まる。

体調の限界が来たからではない。

原因は、悪寒だ。

背筋から広がり、瞬く間に彼の身体全体を抱く冷氣。だがそれは彼を凍てつかせない。寧ろ彼の内部を、更なる熱として侵食する。

一体これは何だ。この奇妙な感覚は何だ。

意味も解らず苛々を募らせ。彼は俯き、前髪の間で右手の指を差し入れた。

と。

不意に。視界の端。感じたのは、動くものの気配。

其方へと。

眠りにつく前に、覆ってしまうのを忘れて。月明かりの射し込んでいた、窓の方へと。

視線を遣って。

そして。

どくん、と。在る筈も無い心臓が。再び大きく跳ね上がる。

何故なら。目が合ってしまった。

窓の外。望月の照らす闇の中で。黒き翼で羽ばたき、空に立つ。

前髪の長い少年。

彼の在る空間。その閉ざされた部屋の中を覗く、自由という名目の下に在る彼は。長い黒の下、覗く瞳を。彼……プリジモ"ノードレーを映す瞳を、愉快げに細めて。

微笑んでいた。

その微笑の前に。高速で時間が巻き戻る。

アスカに入隊した日。上司となるから、と。シスの呼び名を変えようと、自ら決心したあの日。

クレアージンに救われ。全ての実感を取り戻した所為で、茫然自失となったまま……アスカ総本部にやって来たあの日。



あの男の『所有物』として過ごした日々。

その先に在るのは。

穏やかな日々の。もう、手の届かないところへ行ってしまった日々の、記憶。

父は厳しかった。けど。たくさん、たくさん物語を覚えてくれた。彼の声が。彼が、大好きだった。

母は優しくかった。けど。情に脆くて。すぐに涙を流す人だった。

そうだ。

あの日も「母さん」は泣いていた。

ああ。そうだ。

「……………み」

其処に居る、アレは。

「れ」

母親を。

「い、ぎ」

殺した。

魔天使だ。

「う……う……あ……………」

頭を支えていた右手が震え。流れて、側頭部へ。震動する左手も、同様に。そして頭を抱えるような格好となる。

すぐに、彼の震動が伝染して。彼がいる空間そのものも震動を開始し。

バチバチ、と。火花が散るような音が、空間中に散らばっていく。……力の膨張に傷付けられて、悲鳴を上げているのだ。

しかし、悲鳴を上げているのは彼の内部も同じ事。過去より飛来した傷が鮮明となり、共に時を経て更に深く抉られる。

その痛みに耐え切れなくなつて。彼は、ぎゅっと目を閉じた。

そう。目を閉じたら。

彼を出迎えてくれるのは本物の闇だ。そしてその闇は囁いている。

殺せ。

奴ヲ。殺シテシマエ。

「あああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああッ!!！」

美しい金色は、生じた風により彼の背を離れ。

暴走を始めた魔力。まさしく衝撃波と化したそれにより……彼の温もりを残していた寝台は吹き飛び、ずたずたに引き裂かれ。『憎しみの対象』の在る空間とを隔てていた窓硝子は、粉々に粉碎される。

「おーっとオ」

ミレイザは翼の生み出す風により退避し。地上へと墮ちていく光の破片を眺めながら、荒れ狂って不安定になった『力』の波長を感じ取り。ひゅう、と短く口笛を吹いた。

「凄いなア。やっぱりケイラだ、目を付けるものが」

違う。

と。彼がそう紡ぐ前に。

歯止めを失い、溢れて暴走する鋭利な魔力。その刃を携えて。

プリジモが部屋の壁を蹴り。月の光の下輝く大鎌を手に、ミレイザ目掛けて突進し。

渾身の力を込め。斜めから、身を振<sup>よ</sup>つての一閃。

ミレイザは咄嗟に自身の魔力を左手に集中し、硬質化させ。彼の荒れ狂う銀の刃を受け止めた。力は均衡し……プリジモは俯いていた状態から、ぱつとその美しい顔を。憎しみに歪んだ顔を上げ、仇の黒を睨みつける。

憎しみの炎を煌々と燃やし、酷く鋭利な視線を放つその宵色の瞳。間近で見た彼は、大抵の者がするように恐怖に震える事はせず。それどころか……再び、愉快げにいと微笑み。

再び高速で放たれる、プリジモの、三日月を振り上げる下からの

縦一閃。彼はそれをくるりと、宙返りするかのようには後退して下方に避ける。魔力による緑の波動の上昇を読んだ上での退避だ。傷一つ負う事はない。

……しかし姫君は、空を蹴ってすぐに向かってくる。その脚には緑色の光が纏われていた。

奇声と共に連続して繰り返される翡翠の斬撃。一撃が放たれる度に散る、火花の色も翡翠色。

受け止めながら。成程、と。ミレイザは納得した。

「風の精霊魔法かア。どーりで鋭い訳だ……そうだよ、こうして空中に立っていられるのもその魔法のお陰だよ、ねエ」

ああ、正しく言えば「立っている」「じゃあないか。

そう言っつて、笑った後。ミレイザは。

「ふーん……キミ、戦う術<sup>すべ</sup>を得られたんだ」

と。左手に集めた魔力、その量を唐突に、急激に増加させ。三日月は弾かれる。

「く……！」

プリジモは歯を食い縛って、相手に加えられた勢いのままに飛びずさり。空中を滑る踵<sup>かかと</sup>は摩擦を受けて翡翠色を散らせ、やがて空中で静止した。

魔力の消費が甚だしく、項垂れて大きく肩を上下させる姫君。ミレイザは彼が動けない、その僅かな間に、高く高く飛翔し。

月を背景に立ち止まった、前髪の長い魔天使は。上空から声を放る。

「こつちにおいでよ、遊んであげるからさ！ 折角こうしてまた逢えたんだ、もつと楽しもうよ……ねエ？」

そして。彼はプリジモをこう呼んだ。

ケイラの、才姫サマと。

「ッ……こ、の……魔天使がああああッ！」

怒りに任せて、上空へ。魔力により可視化された翡翠色の斬撃を放つ。瞬く間に上昇してきたその三日月、決して遅くはないそれを、ミレイザはすつと左に避け。

宵の闇を蹴り。言われるがままに突進してきたプリジモ、その鎌による直接攻撃も。その翼により生じさせた風を利用して後退し、易々とかわす。

と。プリジモは一度、静止し。

「『舞い踊れ』！」

詠唱。それにより彼の周囲から生じるのは、闇を裂き、ミレイザ向かって走り来る幾百もの風の刃。

対してミレイザが。左手を前方に突き出して紡ぐのは、『クイーテユナス封』という言葉。

妖天族の血により発動する魔法、フロティア暗黒魔法。呪文により宵に散った闇の要素は集い。巨大な、そして強固な円形の黒きバリアとして、彼の面前に現れ。打つかつていった刃は、弾かれては霧消していく。

衝撃と、その消滅による音の中。よく響く高い声で、ミレイザは金色の「姫君」に声を放った。

「あー、そうだ才姫サマ。主様あまじがキミに逢いたがっているよ」

「黙、れッ！」

全ての風を周囲から放った後。彼は仇に再度突っ込んでいき、敵の身を護る邪魔な楯に鎌を振るった。

ガキン、と堅固な音が響き。バリアには亀裂が走る。ありやりや、と小声で紡ぎ、ミレイザはその場より急下降。金の尾を上へと流しながらついてくるプリジモに。

「知ってるよねエ、ケイラが暴れてるの」  
と。その言葉を投げつけられて。それまでは憎しみと怒りしか映し出していなかったプリジモの瞳に……鮮明に動揺の色が現れる。それを見た魔天使は、にやりと微笑み。そして、察する。

何だ、知らないのか。護られてるんだねキミは。  
キミを連れ出した、あの銀髪に。

と。ミレイザは右手を、降ってくる星に向かって突き出し。

「『縛』」  
ハイオールド

掌に生じた黒色の球体。それは一瞬にして十六方に散り、伸びて十六に割れた闇はどれも……心を揺れ動かし、隙を見せたプリジモに向かつて直走り。  
ひたはし

避けなければ。そう覚えた時には、もう遅い。何処へ逃げても、無駄だった。

ミレイザが放った黒は、彼の細い身体に絡みつぎ。その速度を失わせ。

やがてその闇は深まり、拡大し。  
彼は、完全に拘束されてしまう。

姫君は黒に締め付けられ。う、と苦しげに呻き声を上げ。  
彼が束縛から逃れようと、必死に抵抗する様を見て。彼と同じ高さまで上昇、静止し、空に立ったミレイザは声を上げて笑う。  
そして。彼は抑えられた、静寂を映した声で紡ぎ出す。

「ちよっとお話をしようよ、才姫さま。……アスカの保護下にあるキミは、可哀想に、何も知らないみたいだからねエ」  
「……………う、えい……………」

「遊びついでに、ボクが情報をあげる」

「……黙、れっ……………く、あッ……………！」

ギリギリ、と。身体を締め上げる闇。痛み<sup>イタミ</sup>に力が抜けた所為で、プリジモの右手から鎌が離れ。遙か下へと堕ちていく。ミレイザは、落下していく銀に視線をちらと流し。しかし、変わらず言葉を紡ぎ続ける。

「ケイラがキミを捜してるんだ。理由はわかんないけど……………多分、キミがアスカにいるって知ったんだろうねエ、アイツ」と。プリジモの目が見開かれた。

痛み<sup>イタミ</sup>にではなく。ある予感に、だ。

先に彼が放った、「暴れている」という言葉。

目的物がアスカに在ると知ったあの悪魔は。

自分を捜し出そうとして、アスカを。

「いや、さア……………風潰<sup>カゼツ</sup>しに襲<sup>ウラガ</sup>ってるみたいなんだよ、アスカの隊員サン達を。その所為で昨日……………あア、もう一昨日になるのかなア？」

アスカが。

その所為で。

……………自分の、所為で。

「アイシーンで三人、死んだってさ」

真っ暗だった筈の目の前が。一瞬にして真っ白になる。世界中の色が、反転したようだった。

「……………し、ん……………だ」

纏われていた、魔力は墮ち。

ブリジモはただ、茫然と。仇の言葉を繰り返す。

怒りの炎も憎しみの炎も、冷たい風にかき消されて。肉体に加えられる痛みなど、もう何処かへ行ってしまうて。

そこからは。ただ、訳が分からなくなる。

重過ぎる事実が。どうして、というその問いが。

彼を押しつぶして。その存在を消滅させた。だから。何もかもが、解らなくなった。

その無の中に。響くのは、対峙していた筈の男の声。

「アハハハハハ……良いねエ、その反応。ぽっかーんとしてて可愛いよ、才姫サマ」

首を擡げ。夜風に長い前髪を靡かせ、それに隠されていた黒が露わとなり。その黒に捉えられた美しき少年は、しばしの間茫然としていた。

やがて。彼がはっとした時には。

魔力を浪費し過ぎた為の体調の悪化。そして、締め付けられている為に生じる痛み。内側を深々と抉られた事による、熱。

最早、彼の力ではどうする事も出来ない状況に陥ってしまった。た。

その、弱化した身体を。ミレイザはパチンと指を鳴らし……更に、更に締め上げる。

ブリジモは堪らずぎゅっと目を瞑り、口からは喘ぎ声が漏れ出す。



聞きながら漆黒の少年は、声を上げて高らかに笑い。

「いや、さア……ケイラにアスカ狩りを続けさせるのも悪くないと思つてたし……今日キミに逢えたのは偶然だったしさ。だから、今回はほんのちょーっと遊ぶだけのつもりだったけど……やっぱりキミ、ボクがこのまんまアイツの所へ連れて行ってあげるよ」と。

とうとう脱力したプリジモ。一旦言葉を切った彼は、すい、と一歩近づいて。

「いや、さア……そっちの方が、ずっと面白そうだからねエ」

洗脳の暗黒魔法。『<sup>リレイニングム</sup>覆』。それを施そうと。

頂垂れて、ただ金を寒風に流す姫君に向かつて。

右手を出した。

その時。

ミレイザの面前を。

高速で。地獄の火炎が。

橙の、劫火が過つた。

続×11・みつか目…紅色の宵払い

プロテア 暗黒魔法、バルザード 『撃』。その詠唱により上空より飛来する、黒色の鋭利な棘。

それを何の魔法も使わず、走り回るだけで避け。

「うりゃー！」

と。聞いている方は力が抜けそうな声を発しながら、ルノは高く高く跳躍し。鈍色に輝く片手剣で、空に立つ魔天使共に切り掛かる。

やっぱすげー運動神経だな、アイツ。と。

視界の端に、動的な戦闘スタイルを披露する仲間の姿を映しながら。それとはうって変わって静的な戦闘を得意とするクランテイレイター 精霊魔導士、その典型であるヴィリーは。

「『穿て』！」

敵の攻撃を防ぐ為の透明なバリアを自身の周囲に展開しつつ、更に詠唱。空間に亀裂が走り、その狭間から出でた黄色い閃光が、交戦していた魔天使の左翼を貫いた。痛みに唸り声を上げたその男の飛行速度は、これまでより遙かに遅くなる。

畜生、辛いな。と。

複数の魔法を同時に、そして幾度も発動させる事による、自身の身体への巨大な負荷を感じながらも。

ヴィリーは再度、同じ詠唱を繰り返して。鈍重な黒目掛け、宵を裂く稲妻を落とし……その黄は、今度こそ見事に標的を射抜いた。

光の中の男は、全身を貫く痛みに絶叫し。聖天使族、龍族を凌駕する速度で飛行する能力を持つ魔天使は……その力を失って地に堕ちた。その皮膚は焦げて黒ずみ、全身から灰色の煙が立ち昇る。

「……よっしゃ、一匹仕留めた」

と。相手が動けなくなるのを見届けた後、ガッツポーズを決めた  
ヴィリーは。

現在二人の魔天使の相手をしているが……接近戦を得意とするが  
故に攻撃範囲が狭く、飛行する敵を倒す事は難しい『相棒』。彼を  
援護する為バリアを解き、その近くへ駆け寄ろうとする、のだが。

何だ？ ……身体が。動かない。

思うように脚に力が入らず。ヴィリーは数歩進んだ後、堪らなく  
なって床の白に片膝をついてしまう。

雷の精霊魔法クラウンティアを打ち続けた所為だ、と。自分の限界が訪れた事に  
気付き、彼は舌打ちする。

つーか、分析部隊さんは何してんだよ。

俺等のさっきの声、届いてない筈がないのに。未だ警報が鳴らな  
いどころか、応援の一人も来ない。さっきから魔天使の魔力以外に  
感じられるのは、右方で馬鹿みたいに流れ出る馬鹿でかい魔力だけ  
だ。

のろすぎるだろ、いくらなんでも。

と。

前方で戦う友の姿を見ながら。募る苛立ちに、ヴィリーが心の底  
で悪態を吐いたその時。

ヴィリーの後方。アスカ総本部、内部への入口。  
その扉が、バン、と盛大な音を立てて開かれた。

嗚呼、ようやく応援が来たか。と。彼が振り返ると。其処に立っていたのは。いや、その長い脚で、つかつかとヴィリ―目掛けて歩み来るのは。

「……隊長さん？」

眉を顰めたヴィリーの囁きに似た言葉。それに、そうですね―隊長様ですよー、と。飄々とした調子で応えるのは。その髪と瞳に、燃えるような赤を持つ青年。

間違いなく、アスカのナンバーツーである男。

彼は擦れ違いざまに、ヴィリーの頭をわしわしと撫で。お疲れさん、そう労いの声<sup>うれ</sup>を放り。

そして。戦うルノの方へ、まっすぐに、悠々と進んでいく。

<sup>ヒラケナ</sup> 森林人と交戦中であつた魔天使のうち一人が、向かつてくる男の存在に気付き。高く高く飛翔した後、彼に対しても『<sup>バルザード</sup>撃』を仕掛ける。

夜風に揺れる赤髪目掛けて、高速で飛来する黒き棘。

しかし、放たれた棘は。赤は愚か。白にすら、突き刺さる事は無く。

一定の地点に到達した途端。全て反転し。魔法を放つた張本人である筈の男、そう、魔力の主<sup>あるじ</sup>に向かって襲い掛かる。

それも。主が放つた威力、そのままに、ではない。

赤髪の魔力。それが付加されて。威力も速度も。増大している。退避など、出来ない。

嗚呼。無詠唱魔法だ。

そう気付いた時。魔天使は既に幾百もの刃の餌食となり、闇の中に沈んでいた。

その背後で。ヴィリーはただただ息を呑む。

……あれだけ高度なアリシティア聖光魔法を、無詠唱で。アリシテイレイター聖光魔導士でも、よっぽどの奴じゃなきゃ出来ないぞ、あんなの。

最早化け物だろ。あの人。

と。畏怖を宿したヴィリーの視線の中。不意に立ち止まり。

「ルノ。危ねーから、どいてな」

そう声を放った『化け物』は。ルノがはい隊長、と応答し、その俊足を生かして、ヴィリーのところまで逃げ帰った、その直後に。

仲間を倒され、いきり立つ最後の一人。

奇声を発してルノを追い。そして、距離的にルノよりも近い位置に居た『劫火』……クレアージンに標的を変えた、その男相手に。

「『咲け』」

精霊魔導士にとっては。超がつく程に初歩的な、炎系の中では最も最初に覚えるべき詠唱。

それを。紡ぐ。

途端に辺りが、赤一色に包まれた。

この様だけを見た者ならば。誰一人として、「これ」が初歩的な魔法だとは思わないだろう。

現れたのは、命じられた物を焼き尽くす為に唸りを上げる火炎。

目標物に向かって突進する、その姿はまるで龍だ。周囲へと高熱が流れ。轟々と燃えるその龍の咆哮と……それに吞まれ無残にも焼か

れる魔天使の、断末魔の叫びが響き渡る。

「鬼だね、劫火さんは」

動けないヴィリーの腕を支え、彼が立ち上がるのを助けていたルノが。そう言って苦笑した。

「……今更かよ。ずっと前から解ってた事だろ、そんなん」

何とか立ち上がるのに成功した精霊魔導士は、溜息まじりに言葉を返しつつ。此処まで熱が来ないのは、きっと劫火さんの魔法障壁のお陰なんだろうな、と。そんな事を考える。

と。

その火炎を、消した後には。

「だーれが鬼だった？」

鬼イコール隊長殿が、背後の二人に向かって声を放り。そして笑顔で振り返り、今度は硬直した部下達に向かって歩み出す。

「うわ、地獄耳だ。と、思いつつ両者とも顔では曖昧に微笑み、何とか誤魔化そうとする。

その反応に。あつという間に彼等のすぐ目の前まで戻って来たクレアージンは。ふつと声を漏らして笑い。

「お前等は下がっていいよ。怪我あれば……下にフィサ待たせてあるから、あの子に言いな」

そう言っ。

ヴィリーとルノが、はいと同時に返事をし。彼に背を向け、入口目指して歩み出したのを見届けた後。

一人。先程ヴィリーが、強大な魔力を感じていた方向へ。向かって左手へと、歩んでいく。

屋上の手摺。腕を組んでその白に肘をつき、遙か下方へと視線をやり。

クレアージンの真の武器を使用する為に必要な魔法。遠方を鮮明に見る為の魔法……それを無詠唱で発動させ。その視界の中に捉えた、二人の人物の姿を眺める。

一人は。一番隊に所属しており、クレアージンにとっても馴染みの深い少年で。

そして、もう一人は。対峙するその絶世の美を纏った少年を、暗黒魔法で縛り、捕えている魔天使。クレアージンはその横顔を、その魔力を。……確かに、覚えていた。

二人の様子を黙して見ていた彼は。不意に溜息をつき。そして一人、こう呟く。

「あーあ……バラされちゃったかな」

何故ならば。金髪の少年は酷く茫然としていて。

鋭いクレアージンには。その宵色の瞳から、酷い動揺と。何より、自責の念を感じ取る事が出来たから。

まあいつか。恨まれんのはシーちゃんの方だろうしね。

と、クレアージンは。手摺にかけていた体重を戻し、すぐ立った後、軽く肩を回し。そして。

「戒<sup>キツ</sup>」

そう、短く詠唱。光の中から、魔導式の銃を取り出し。

それからは。タイミングを窺っていた。

仲間の少年が気を失った時が、好機。

魔法で拘束されているだけならば。……あの様子からして万が一、ではあるが、本来は聡明である彼が、その冷静さを取り戻せば。魔力を爆発させ、そこから逃れる事など容易たやすい筈。

そうして彼が自由となり、再び戦闘が激化すれば。宵の中動き回る二人を静止させる事。つまり魔天使だけを狙い撃つ事。それは、非常に困難な作業となる。

だから。金髪が動きを完全に止めた時が狙い目。

と。

「その時」は、すぐにやってきた。

精神的な問題にか、体調の問題にか。何れにせよ、抵抗出来ない状態に陥っていたらしく。捕らわれた少年は逃げ出せないままに、黒に身体を締め上げられ、脱力する。

クレアージンは唇の端を少し上に曲げて。銃口を目標となるポイントへと向け。

そして……発砲。

撃ち出したのは、自身の魔力を凝縮した橙色の炎の球。それは吸い込まれるように、金髪と魔天使の間へと、夜風を切って滑り込む。

どちらにも傷を付ける事無く。二人の間を過ぎた後に、空に霧散したそれ。

前方へと突き出していた右手を、だらりと落とした魔天使は。何故か自身の下方へと視線をやってから、狙撃者の方へとその視線を翻し。にっ、と微笑んだ後。指を鳴らして、金髪を縛り付けていた黒を解いた。



すっかり気を失っていた少年、プリジモは。当然、地面へと。真つ逆さまに落ちていく。

敵が彼を殺す筈がないと思っていたクレアージンは、魔天使の予想外の行為に一瞬目を見開きかけた、が。

「遠方視眼の魔法」。それを調節して、姫の行きつく先、下方を見て。嗚呼成程、そう納得する。

一番隊副隊長フウガ。

長身の彼が。深緑色の長い髪、高い位置で一本に結えたそれを風に揺らしながら、囁きを上げる草原の中立っており。降って来た姫君の身体を……風の精霊魔法を使って落下速度を緩め、その腕で受け止める。

その一連の動作を見届けたクレアージンは、面前に展開していた魔法を解き。

そして。

遙か下方に居た筈が。高く高く上昇、移動し、瞬く間に彼の目の前までやってきて。胡坐をかくようにして空に座る、前髪の長い魔天使。ミレイザと、視線を交わらせる。

赤と黒の交錯の中。ミレイザは目を細めて、クレアージンの記憶に鮮明に残っている微笑を見せ。

「やつほオ、赤髪。元気だった？」

それはもうお陰さまで。赤髪は皮肉を込めてそう返答する。

と。黒の少年は身を乗り出すようにして、若干高められた声を放った。

「ねエ、銀髪はいないの？ もう七年も経っちゃうしさア、そろそ

るあの時の決着がつけたいんだけど」

「あーらら、残念でした。かの銀髪サンは只今お留守ですよ」

クレアージンは目を伏せ、銃を顔の横でふって見せる。するとミレイザは、喉を鳴らして笑い。

「なーんだ、どーりで才姫サマを助けに来ない訳だ。けど……それなら、キミでもいいかな」

視線の奥。先程から顰めていた刃を、月明かりに晒して光らせる。

と。

「何だ、遊び足りねーの？ で、俺と戦<sup>ヤ</sup>りたい訳？ 随分と我儘だねえ……」

長身の赤髪は。微塵も普段と変わらない、飄々とした調子でそう言っ

「けど」

そして。張り詰めた宵の中、感じ取った光。それに照らされた赤髪は、目を開けて。溜息まじりに微笑んだ。

「……いやいや、無理でしょう。俺様の相手は……あんたじゃ荷が重すぎるよ」

その言葉。受け取ったミレイザは、顎を上げ、愉快げに。天高く声を上げて笑う。

「相変わらずムカつく奴。まあいいよ、ボクはキミ等と全面戦争するつもりなんて端<sup>はな</sup>っから無かったし。……哀れな同胞達の末路を見届けにきただけだからねエ」

「……成程ね」

「けど、偶々あの子の魔力見つけちゃったからさア……それならちよつと遊んであげようと思って。アハハ……やっぱり凄い美人になつてたねあの子。ケイラに言ったら喜ぶだろうなア」

と。

今度は。クレアージンは、赤に潜む銀を尖らせる。

「ま、あの子は超嫌がるだろうけどね……俺様はアンタのオトモダチを歓迎しますよ。向こうから出向いてくれた方が好都合だ……アンタもアイツも、一度に殺<sup>ヤ</sup>れるだろうからね」

「やーだなア、冗談だよ！ いやさア、才姫サマの可愛い可愛い力才見てたら、ついつい『捕まえてもつと苦しめちゃおー』とか思ってたけど……実際ボクもアイツとはしばらく会ってないんだ。詳しい居場所とかも知らないしねエ」

そうミレイザは大袈裟に肩を竦め、首を傾げて両の掌を月へと向ける。

敵に戦う気は無い、と。確信したクレアージンは、月明かりの下鈍く輝く魔導銃、それを下ろし。代わりに空いている左手を上げ、手の甲をミレイザに向けて軽くひらつかせた。

「まあ、ケイラに会う事があれば伝えといてよ。アンタのお目当ての口はアスカ総本部に居る……返してほしければ直接此処までおいで、クレアージンさんがまたお相手して差し上げますから……ってね」

「アハハハ……ボク、アイツに会っても多分言わないアそれ。だってさア、このままケイラが『アスカ狩り』続けてくれたら、敵の数が確実に減っていいだろ？」

あつそ。そう返し、クレアージンは目を細める。対してミレイザはにっと微笑んで、組んでいた脚を解いて膝を伸ばし。一度大きく伸びをした後に。

「ボクはもう行くよ、赤髪。じゃーあねエー」  
黒き翼で。クレアージンの赤まで届き、それを揺らす風を巻き起  
こし。高速で、下降。

そして身を翻し。一瞬のうちに遠く、遠く。  
魔天使ミレイザは、闇の彼方へと去っていく。

その影が見えなくなって。

あの三体の死体、片付けねーと。そう思い出し、小さく息を吐い  
て。ふと右を向いたクレアージンの、その赤に。

昼の間は鮮烈な色彩を誇る、ラナトーグの姿が映る。

まだ王族が存在した頃……セイラーム王都という肩書を与えられ  
ていたそれは。

闇の中。点々と、細々と灯りを灯らせ。ひっそりと、呼吸してい  
た。

## 続×12・ミツカ目…シーちゃんとシー兄

朝が迫っている。

宵は色褪せ。もうじき、光の満ちる時が来る。

白に暈<sup>ほが</sup>されていく藍の空。冷やかな風の中を飛行していた一人の聖天使は、徐々にその速度を落とす、緩やかに下降。

そして草原に足を付き、白く清らかな翼を散らせ。深緑を踏みしめ、その脚で歩む事で………面前に聳え立つ巨大な白へと。アス力総本部へと、帰還する。

巨大な透明の壁の前に立ち。彼が自身の名を告げると、壁は彼の面する地点より発光する。

光の波紋は瞬く間に広がっていき。やがて全体に輝きを伝えたそれは中央で割れ、無音のままに、両側へとスライドした。

彼が進み出し。静寂の中に何処か急<sup>せ</sup>いた靴音を立てながら、柔らかな光に照らされた玄関ホールへとその身を完全に放ると。無色の扉は再度空間を隔て、滑り込んで来ていた涼風を遮断する。

静まり返った白の中で。彼を、赤が待っていた。

分析部隊<sup>ラナス</sup>の者が。外出する者、内部へ入ろうとする者を確認する為、設置された受付。そこに寄り掛かる長身の赤。

彼が其処に在ると解っていた銀髪の少年は。歩む速度を先よりずっと落とし、彼に近づき。

「……既に收容所の者より報告を受けております。プリジモ＝ノードレーが、御迷惑をお掛けしました」

そう言って立ち止まり。そして深々と頭を下げた。やめなよ。と、すぐに制止の言葉が飛んでくる。

「あんたが頭を下げる意味も、理由も無い」

けれども。黙し、従って頭を上げる事はしないシス。

その姿を視線の中心に据えたクレアージンは、小さく息を吐いた後言葉を続ける。

「今回の事は突然だった……この俺様ですら驚かされましたよ。ケイラの件で煽られた馬鹿共が来るかもとは踏んでたが、あの暗黒魔法少年が来るとは予想外だった。従って、アンタが自責の念に囚われる必要はない」

「……ですが」

「第一、『メーワク』ってさ……あの子は偶々アンタの隊に籍置いてるだけだ。わかる？ あの子はアスカの一員であって、アンタのもんじゃないんだよ。いくら可愛いからって一人占めすんのは戴けないな……元二番隊副隊長君」

自分の事を示す名に、シスはようやく元の体勢に戻る。赤髪は、その姿を炎に映しながら。部下であった少年の瞳の中の海色が、先に見た時より一層深まっているのを感じた。

「……そうですね」

深くなつた海。

口元にだけ笑みを浮かべた少年が。不意に目を閉じたから、その景色は観えなくなる。

お疲れだな……随分と。新入り君の事もあって、かな。

そうクレアージンは思いつつ、自身より背の小さい銀髪に背を向けた。

「あの子はフウガ医師んとこに居る。おいで……姫君の元に辿り着くまでに、王子様に事の詳細を御説明しましょう」

と。彼の言葉に、シスは目を開け。しかしすぐに視線を伏せて、やれやれと肩を竦める。

「『王子』と呼ぶのは止めて戴けませんか、と……幾ら申し上げても貴方には通じないようですね。最早そう声に出すのも虚しくなってきた」

「だってあなた、王子じゃん」

放った後、クレアージンは軽快に笑って。そしてその長い脚で、『彼等』の待つ二階へと歩み出す。

シスは落としていた視線を持ち上げ。彼もまた、赤を追って進み出した。

静けさを湛えたフロアに響く二つの靴音。それは、呼応しているようにも聞こえる。

「……そうでしょ？ 今はどういふ地位であろうと、どんな場所で生きてよーと、あなたが天空王の御子息様なのは事実なんだから。過去を隠そうとすんの、もうやめたんじゃないやなかつたっけ？」

前方の壁に跳ね返って、彼へとぶつかってくる言葉に。

嗚呼、と。シルフィスⅡゼノⅡアルヴェルドは思い出す。

そうだ。

……此処で生きていくと、決めたからには。

悪い夢だと信じていたかった。

そう。自分の身に起こった事はただの夢で、幻で。何もかも、現世界の出来事ではなくて。

黒に囚われ、辺り一面真っ暗闇。自分が在るのは虚無の水底。みなそこその渦中から、いつかは目覚める事が出来ると思っていた。夜を抜ければ、全てを取り戻す事が出来ると思っていた。

けれど。

その希望は、救いの手を差し伸べられた事で潰えてしまった。光を取り戻した事で彼は、ずっと傍らに置いていた光を見失った。

以前のように色付いた絶望。其処に再度、深く深く沈められ。甦った恐怖と悲しみに、その華奢な身体は恐怖に震え、宵色の瞳からは、悲しみを湛えた大粒の真珠が絶え間なく零れ出して。

そんな中で、彼は。

瞼を閉じている間しか会えなくなってしまうた人。父親が。嘗てかつしてくれた、「夢見の塔」の話思い出す。

夢見の塔。

それはフィンレーン……虹族の都にして、永遠不落の「平和の園」であるその都市に存在し。

永遠を約束された種族、虹族が。其処で眠りにつき、自身の魂を世界と同化させる事で、その存在をこの世より滅する為の建造物。云わば、彼等の「死」を司る塔。



優しかった記憶の中から、その「逃げ場」を見出して。其処から外へ出る事が、自分にとっての「幸福」だと気付いた。

だから、その時。そう、よく晴れた日の昼時。

射し込む陽光は窓掛けによって遮られ。その所為で、影が満ちた白い部屋で。

夢見の塔。に。行きたい。

と。

寝台の上、蹲り只管に涙を流し続ける。そんな彼を、その隣に木椅子を置いて座り、ずっと見守ってくれていた銀髪の少年に。そう告げた。

すると、それまでただ黙していただけであった銀髪は。やはりしばしの沈黙を置いたが……その後、突如として。靴を履いたまま、彼の座る寝台の上に乗る。

そして。  
驚きに強張った、彼の細い身体を。その腕で、そっと優しく抱いて。

お前が、今。家族がいない世界になど、生きていても意味が無いと思うのならば。命を捨ててしまいたいと思うのならば。

ならば、私がお前の家族になる。

私がお前を支える。私が傍らに居て、支えてやる。

悲しみから逃れさせてやる。ちゃんと、笑わせてやるから。だから、そんな事を言うな。

死ぬな。

お前は生きる。いなくなってしまった者達の間まで。

嗚呼、これはシーちゃんの声だ。と。彼は思う。

現に戻り行く五感。温もりと言うには過度な熱によって身体中を支配されているのを感じ。耳を刺すのは静寂と、自身の荒くなった呼吸。

瞼を貫く光の中で、その唇は微かに開き。掠れた声で紡ぎ出す。

「……し……い……」

「……リモ？」

シーちゃんは。俺に、生きるなんて。今でもまだ言えんのかな。言ってくれるかな。今でも。

「……プリジモ＝ノードレー」

彼の名を呼ぶその声は、とても鮮明なものとなっていた。だからプリジモは、重い瞼をゆっくりゆっくり開いていく。と、熱を孕んで涙に潤む瞳、その所為で曇った視界。其処に一面に、一様に映るのは何かの白。

「目覚めたか」

聴覚を優しく擦る声に。その源へと、視線を徐に流おもむくしていくと。

其処には。彼の属する小隊である戦闘部隊ファイクリーダー一番隊、その指導者が、

寝台の横に備えられた木椅子に座っており。海色を宿した瞳で、柔らかな白の上、横たわる彼の上気した顔を捉えていた。

蒼と霞んだ藍が交わる。

と。部下からの視線を受けた事で、少し表情を緩ませた一番隊長シスは。ふっと安堵の溜息を吐き。

「此処に居てくれて、良かった」

その溜息と共に漏れ出す、言葉。

ぼんやりと、靄が掛かったような頭の中。けれども、絶対的な記憶力を有する彼の思考回路は。そんな状態でありながらも瞬時に、つい数時間前の負の映像をフラッシュバックさせ。そして彼に気付かせる。

今の言葉は。「全て」を知っている者の、言葉だと。

……そう解ってしまうと。堪らなくなる。

「……嘘、吐き、だ」

プリジモは視線を尖らせてそう罵り。投げつけられた掠れた声の塊に、僅かに目を見開いたシス。彼の海色から、その美しい顔を背けた。

自分がどんな顔をしているか、鏡が無くとも何となく解って。その表情を見られなくなかった彼は。旨く言う事を聞かない身体を無理矢理に動かし、仰向けの状態から寝返りを打って、シスに背を向け横を向いた。軽く握られ、甲を天に向ける右手。それがその視界の大半を占める。

それから少しの間、彼の荒れた呼吸が沈黙を埋めていたけれど。

「何故、私を嘘吐きと呼ぶ？」

やがて。平らかな声が聴覚を撫でる。  
優しい声に。目の奥にだけ、熱が増した気がした。それを押し隠すように、彼は途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

「……だって……あの時、シーちゃんは、言わなかった……知ってた筈、なのに……何も……言ってくれなかった……」

そう、あの時。つい数時間前の食堂で。プリジモにシスはただ一言。そうか、とだけ言い、立ち去った。

ああ、解った、承知した、任せろ、情報が入ったらすぐにお前に伝える。

そんな事、言っていない。

シスは、嘘など吐いていない。解っている。……解っていた。

「……だから、嘘吐きだ……」

自分に嘘を吐いた事の無い人を。誰よりも嘘を吐くのが嫌いな人を。あべこべに、『嘘吐き』と呼ぶのは。

酷く不条理なことだという事。ちゃんと、解ってる。

そうだった。解らないのは。どうして、そんな事口にしてしまうのだらうという事で。

そんな事言っても仕方ないと解っているのに。そんな事言ってはいけないと解っているのに。そんな事、そんな事、本当は、思っさえない。なのに。

なのに、どうして。

と。その戸惑いの波紋が広がって。悲哀を模した優美な旋律となつて、空間全体を包む。

「…………お前がそう呼びたいのならば、『嘔吐き』でも構わない。だがリモ…………少しの間だけ、その『嘔吐き』の話に耳を傾けてくれな  
いか」

シスがそう言った瞬間。

寝台を取り囲み、揺れる天幕の白。水の膜を通して、ぼやけてしまったそれを映していた視界。その世界が突然、更に曇って。

「先の魔天使襲来の件については、既に詳細を聞いている。敵との戦闘中に冷静さを欠き、あわや自爆状態にまで陥ってしまった事…………お前には、よく反省して貰わなければならないな。だが今はそれをとやかく言う前に…………兎に角、休んでほしい。魔力が酷く乱れているからな…………ゆっくり眠り、一刻も早く回復しろ。今私が言いたい事、否、言うべき事は、それで以上…………」

だ。

その、最後の一言が。出てこなかった。

「…………リモ」

驚きの感情に目を見開いたシスが。代わりに紡いだのは彼の名。微かに震える少年の…………小さいけれど、沈黙の中では浮き立つ「声」。それを噛み殺してただ震えている、少年の名。

「お前」

紫色に移ろった瞳で。其処に映る、カタカタと震動する金。見詰  
めながら、放るのは疑問。

「泣いている、のか」

彼は黙っていた。けれど、彼の嗚咽が答えとなる。

と。

シスは不意に立ち上がり。それに気付いたプリジモが……彼に涙を見られるのが嫌だったのか、うるさいどっか行け、と。涙声で紡いで頭まで被るうとした、その毛布を掴んで奪い取り、横たわる彼の足元に置いて。現れた彼の細い肩に、手を掛けた。

そして。

触るな。俺に触るな。そう喚き散らすプリジモ。その身体を起し、此方に向かって抱き締めた。彼の胸に、プリジモの額がとんと当たる。

放せ馬鹿、触るな馬鹿と。只管に紡がれる抵抗の言葉。

しかしその言葉は、やがて止み。

沈黙の中で。接した面から、荒れ果てた魔力の波長。そして、彼の震動が伝わってくる。

それは、不安を映した震えで。恐怖を映した震えで。悔しさを映した震えでもあって。

懸命に強がっていた彼は。今。必死に崩壊を抑えている気がした。

だから。

「大丈夫だ。私が居る。……ちゃんと、傍に居るから」

支えてやろうと。そうせずにはいられなかった。

落ち着かせてやろうと。昔してやったように、彼は薄らと微笑んで、穏やかな声で大丈夫だと繰り返し。自分より小さな少年の頭の後ろを、そつと撫でた。サラサラした金に、逆に手を撫でられているような感覚。

その中で。

「なあ……シー、ちゃん」

嗚咽の狭間。何時もよりもずっと弱々しいものと化した、彼の声が紡ぎ出す。

「……解って、るよ……アイツ等みんな、倒せるくらいにな……強くなれば……そうすれば、いいん、だって……ちゃんと、解ってる……けど……けどな……ふああ、もう、頭ん、中、滅茶苦茶、だ……解ってる、のに、な」

「ああ」

「……なのに……どうしたら、いいのか……よく、解んねんだ……」

そうか。と。頷いたシス。彼が纏う海色の裾を、プリジモの震える手がきゅっと掴む。

「……シーにい……」

シー兄。

そう呼ばれるのは久しぶりだ。随分と、懐かしい音。

「ああ。どうした？」

そんな事を考えつつ。シスが放った問い。

「俺、な……ここにいても、いいの、かな……」

返ってきた言葉には。彼が、昔からずっと感じてきた痛み。それが覗いていて。

その姿を垣間見たシスは、彼の安堵を誘おうと。その声を何時も調子に戻して。

何を訊いている。

当然だ。此処がお前の居場所だろう？

そう、言ってみるけれど。彼は小さく、首を横に降る。

「けど……俺の……せい、なんだ……ぜんぶ……ぜん、ぶ……」  
徐々に小さく、小さくなっていく声。プリジモの意識が、闇に閉ざされそうになっているのをシスは感じた。

「だ、か……ら……」

そして。やがてずり落ちる、額。

弱いけれど確かな力を込めて、服の裾を掴んでいた手は。海色を離れて、柔らかな白の上に。

けれども。その掌と共に堕ちた「虹の涙」が跡を残す事は、無い。

姫君が眠りに堕ちて。

シスは脱力した彼の身体を抱え、天幕を引いてその外へと出ると。  
と。

資料に木色の埋もれた机の前。患者との対話を行う為に設置された、対になった椅子。その、普段自身が座っている方に腕と脚を組んで座り。出てきたシスに背を向けていたフウガは、まだ夜中だと



いつものにその深緑色の髪を高い位置できつちりと結わえていた。

戦闘の音を早々と聞きつけて目覚めたのか、プリジモの魔力を感じたのか。どちらかは、「能力」を使わない限りシスには解らない。……ひよっとすると、双方の理由からであるかも知れないが。

「リモを、此方で預かって構わないか」

と。そうシスが声を放つてようやく、フウガは彼の方を向き。その腕に抱えられた金髪の姫君の姿を見た後、訝しげに眉を顰め。

「構わんが……何故じゃ？ 理由が解らん」

アスカに居る他の殆どのエルフは、その独特な「訛り」を隠すようにして話す。爺臭いと言われるのを恐れての事だ。彼程そのままのエルフ訛りで話すのは、二番隊の少女ルルーシャくらいのものである。

「この子をお前の傍に置いておくと、何が起こるか分からないからだ。まあ、これは冗談だが」

「冗談と暴露するのが些か早過ぎぬか？」

「……ああ、そうかも知れないな」

フウガの突っ込みにシスはふっと笑い。そして、構わないならば失礼する、と。そう言って歩み出す。

長身のエルフは。自身の投げ掛けた質問に、自らの上司からの返答を得られなかった事に溜息を吐きつつ。答えの追求の代わりに、こう放った。

「主も休めよ。主まで倒れては世話が無い」

と。少年を抱えたままで、何とか手を翳す必要のある扉を開けた銀髪の隊長は。

「……ああ」

背を向けたまま。短く応え。

そして、今尚肩を大きく上下させるプリジモを連れて。夜の間でも柔らかな光に満たされた、廊下へと。

任務の書類を書く必要があったから、自室に戻らなければならぬ。  
い。

けれど。負の記憶に潰されそうになっている彼の傍に、少しでも長く、居てやりたかった。

それは、上司として？

……否。家族として、だ。

そう。同じ『悲しみ』を知る、家族として。

レイルズリードの休憩譚・シス編（前書き）

今回はシスさんです。では、どん。

## レイルズリード的休憩譚・シス編

要は、個人情報晒し出せは良いんだな？

私はアス力戦闘部隊<sup>ファイクリーダー</sup>一番隊隊長、シルフィスⅡゼノⅡアルヴェルドだ。

皆からは「シス」と呼ばれているが、好きに呼んでくれて構わない。……だが、昔からどうも敬語で話されるのが苦手だな。さんや様を付けられるのは好かないんだ。エルのように、丁寧な話口調が癖だという者は仕方がないが……

まあいい。話を続行しよう。

歳は十九。誕生日は冬の第三月、リクスの九日だ。

種族は聖天使族と虹族……所謂、混血だな。髪の色と無詠唱で発動出来る「翼の魔法」は聖天使族、感情に映されて色が変化する瞳は虹族特有のものだ。双方とも肌の色が白い種とされているから、恐らく私の肌も傍から見れば白い方なのだろう。クレアージン隊長殿からは血色が悪いと頻繁に言われる。まあ、あの人は単に私をからかっているだけだろうがな。

身長はセツナの世界の測量法で言えば百八十、らしい。

それから。虹族の魔力を持つ混血であるが故に、私は奇怪な能力を有している。

瞬間情報収集能力、とでも言ったところか。それについての詳細は……色々面倒くさ、否、<sup>いや</sup>説明せずともいづれ皆理解出来るだろうからな、割愛させて戴く。

武器は棒だ。鉄の棒。「の」を取り去って「鉄棒」と言ったら、何故かセツナにやめろと言われた。だからやめておく。

棒術は国で……ああ、私はフェイスティア大陸西部に位置する天空大国アルヴェルドの生まれなのだが……其処で体得した。氷の精霊魔法は、前一番隊隊長殿から習ったものだ。あの方には随分と世話になった。クレアージン隊長殿以上に。

さて、話す事がなくなってきた。

……… そうだな、苦手な物についても……… こんな事を暴露してもいいのは微妙なところだが、とりあえず話しておく。

それが好き、という者には申し訳ないが。私は、ムから始まりシで終わる生き物が嫌いだ。

奴等には、我々人族にも数多くの種があるように、様々な種類があるな。色も形も鳴き声も歩行方法も能力も、腹立たしい程に多様……… だが私はその全てが嫌いだ。そう、全体的に余すところなく完全無欠に。

何処が嫌いかと問われると、全てとしか言いようがない。上手く表現出来ないが、兎に角、無理なんだ。というか、奴等について話しているだけで吐き気を催してくる。否、虹族は胃自体が無いから、胃の内容物を吐くという事はないんだがな。

実際、覚悟をして覚悟をして覚悟をして、三段階の覚悟という土台を作った上でなければ、奴等に遭遇した瞬間に私は理性を失うだろう。

やれやれ、昔はそんな事は無かったのだがな。幼少の頃は奴等とも御友達で居られたんだ。

そうだな、奴等の存在が許せなくなってきたきっかけは。確定的に、あの………

……… 何でもない。

最後に、私の家庭状況について説明しておく。

私の父は聖天使族で、現在も御存命だ。だが母の方は十三年前に亡くなっている。無論、彼女は虹族だ。

そして私には姉が居る。異母姉弟だがな。彼女は純血の聖天使族で……アミーリア、という名だ。

姉上は……とんでもなく、強い女性だ。精神的にも……戦闘的にも。

私に棒術を教えて下さったのは姉上なんだ。……私はきつと、あの人には一生勝てない。

……不味い、気分が萎えてきた。

では、これにて。

## 蒼穹と憂鬱

「きれい」  
と。

夜空を。濃紺の中瞬く星々を。仰ぎながら彼女は、そう呟いた。

彼女は笑顔だった。

そう。その微笑は温かだった。その微笑は優しかった。美しかった。柔らかかった。何処か、寂しげでもあった。

彼女は。俺が初めて彼女を見た時……「あの時」と、同じ表情かおをしていた。

あの時彼女が、俺のそれと同じ色を映す瞳で見詰めていたのは。光を鑲めめた宵の藍ではなく、光に支配された蒼だったけれど。

あの時とは違って、彼女は何もかもを知っている筈だったけれど。それでも。同じだった。

俺は彼女の事を見ていた。

何も知らなかった頃と、同じ顔をしている彼女を。してられる彼女を。ただ黙して……見ていたのだけれど。

あの日以来、いつの間にか。考え方とか見方とか、醜く歪んでしまっていたから。

思ったんだ。彼女は変わっていないのだろうか。彼女は澄み切ったままでいられているのだろうか。

心の中に生まれたその疑問は、どんどん、どんどん膨らんで。誤魔化しようのないくらいに、大きくなって。

俺は問うてしまったんだ。

残していかなければならないものを。残る事が許されたものを。君はまだ、愛でることが出来るのか。と。

最後の音を発した途端に、膨張した気持ちはしばみ。「後悔」へとその色を変えた。

彼女の隣に居る者として失格だ、と。俺は心の奥底で、自らの事を罵った。それから、彼女は悲しげな顔をすると思つた。それきり口を開いてくれないかも知れないと恐れた。

けれど。

月光と星光。宵に照らされたあの人は。少しの間だけ、きよとんとして。

すぐにまた、笑顔に変わる。その表情に悲哀の色は、微塵も存在しなかった。

そして、彼女は紡ぎ出すんだ。

歌う様に綺麗な声で、こう

えー、本日快晴本日快晴。格好良く言うなら五月晴れ。



うわーこんなに気持ち良い天気は久し振りだー最近妙に天気悪かったからなー、なんて。考えながら快い蒼の下、自転車で疾走すること四十分。はい、無事学校に到着。

風紀委員の駐輪指導の甲斐あつてか、太陽光に煌めく二輪の列は整然としている。それを乱さぬよう、俺も銀色の愛車を停めて。それから、授業道具は殆ど教室のロッカーか机の中だから、何それ剣道しに来てんのお前いいですか学校は勉強する為に在る施設なんですよ風岡君等々と言われる程に軽い学生鞆。その黒をひよいと肩に掛け。俺はいつものように玄関へと向かった。そう。いつものように、ね。

そうして薄暗がりの一部と化すと、いつものように。生徒諸君が放つ明朗な朝の挨拶が、冷やかさを抱いた影を打っている。その中を、軽く首を回しながら自分の靴箱へと歩を進め。俺はいつものように、上履きを取ろうとした、のだが。

此処で。いつも通りではない事、発生。

単刀直入に言うならば。俺の上履きに、一枚の紙が覆い被さっております。

それは画用紙で。俺が小学生だった頃、紙粘土と並んで夏休みの自由研究の必須アイテムだったそれで。付け加えるなら桃色で。更に付け加えるなら黒マジックで不可思議なミミズ達、辛うじて文字かも、と判別出来る記号が描か、じゃなく、書かれていて。

怪し過ぎる桃色画用紙。対峙し訝しげな視線を送っていた俺は、まあとりあえず処理した方が良くかと思ひ至り。ああ何か何処かからくっくつと喉で笑う声が聞こえる気がする、しかもその笑い声は複数人から放たれている気がする、そして多分どっちも気の所為じ

やないんだろう、けど。その雑音を意識から除外して、問題物を影の深みから取り出し。仕方ないから、文字の解読に移る。

えーと、何々？

ス、キ、デ、ス、ツ、キ、ア、テ、ク、ダ、サ、イ？

『スキデスツキアテクダサイ』。

「……突っ込みどこ在り過ぎだよ。俺どういうリアクションが求められてるのかも解んないよ、大沢」

「何！？ 何故バレた!？」

俺の声に反応してわざとらしく台詞を吐き。入り口側の靴箱の陰からひよいと、にやにやを貼りつけた顔を出したのは。やはり大沢勇代、と、同じくクラスメイトの尾畑おはたいつき一輝だった。

成程、やけに楽に翻訳出来るなと思ったんだ。そうだよ、あのハイカラなミミズさん達は尾畑君のだったもんね、と。俺は再度手中の桃色画用紙に目を落とし、肩を竦める。

「何コレ？ てか何で二人とも土足なの」

「何って一目瞭然じゃないですか。恋文だよ、ラブ・レター」

「あー、相変わらず発音いいね」

「どう？ ぐつと来た？ お付き合いオツケー？」

「あー、いいよいよ、全然。デート何処行く？ 琵琶湖？」

何故琵琶湖、と。朝からテンション高いサッカー部尾畑が笑う。覗いた彼の白い歯は今日も眩しくて、思わず俺は苦笑する。

なんだ。やっぱり、いつも通りじゃん。

いつも通りだという事は、何一つ変わらないという事。変わらない事は幸せな事だ。変化が無い事は平和な事。平和で幸せ。なら、最高じゃんか。

天才大沢とフットボール少年尾畑が暴拳に出た理由は。ずばり、昨日俺の様子が変わったから、だそうだ。

風岡が風邪を引く訳がない。素敵女子と恋に落ちる訳もない。けど確かに奴はぼーっとしてて、心此処ニアラズな状態だった。だから、ひよっとしたら温かくなった所為で寝ぼけてんのかなアイツじやあちよつと驚かして目エ覚まさせてやろうぜ、みたいな感じだったらしい。

全く、失礼極まりない話だ。俺だって風邪引く時は引くよ。馬鹿は風邪引かないってのは嘘なんだよ。恋……は、ま、まあ、合ってるかも知れないけどさ。

「だってお前昨日ぼーっとしてたじゃん。もう超ぼーっとしてたよお前。馬鹿みたいにはーっとしてた」  
「ひど。今日から尾畑のこと米騒動って呼ぶから」

尾畑、で、小母さん。いつき、で、一揆。そして小母さんは女性。女一揆で米騒動。

考案者は大沢様。流石は天才だ、発想が素晴らしい。けどね天才様、今朝のアレはそなたにしてはどうかと思うぞ。

と。席に着いた俺が、父さんが作ってくれた朝食もとい握飯をパクつきながら大沢を見ると。天井を仰ぎながらあちー、と小声で漏らした彼は、ふと俺の視線に気がついて。そして此方をその細い目で見て。

「あ、ちなみにラブレター大作戦思い付いたの尾畑だから」

……成程。

いや待て。そうだとしても、それについていくのはやっぱりどうかと思うぞ。

と。俺が丁度ビッグサイズな御握りを食し終わったその時。教室のスライド式の戸が開いて、山村先生が入ってきた。山村先生は青縁眼鏡と若白髪が特徴的な男性だ。担当教科は数学。気さくな人だけど、キレると額に青筋立てて怒鳴る。結構怖い。

まあ、そんな彼を恐れて、では別にないと思うけど。俺の席の周りに集っていた彼等はすんなりと各々の席へ戻っていった。他のクラスメイト達も同様、自分の席に座り出す。

そうしてホームルームが始まって。今日の日直の確認とか、最近自転車の盗難増えてるから鍵ちゃんとか掛けなさいとか、そういう連絡が行われて。

麗らかな日差しが注ぎ込む中、時間が過ぎていく。いつも通り。

此処は二階。開かれた窓、そこから空の蒼が零れて侵入してきそう。けど当然それは何々しそう、の範囲に収まっていて。代わりに五月の風が入り込んできては流れていく。

廊下の戸は開け放たれたままだから、風の通り道が出来ていて。その中の一握りの風は。遅刻してきて静寂の中、廊下をパタパタと駆け抜けんとする女子生徒に打つかつて。多分、分散した。

俺が居る教室と、大きな窓が在るから明るい廊下。空間の広がり  
の起点であるその狭間を何となく見詰めながら、俺がぼんやりと考  
えていた事は。尾畑ってちよつとグレイダに似ている。

まあ、本当にちよつとだけだけどね。そう、雰囲気。それと歯が  
白いとこ。それだけ。他は全然違う。肌の色違うし虹彩爬虫類チツ  
クじゃないし力自慢でもないし、何より尾畑は人間だし。

そうだ。尾畑は人間。

狐みたいな目してるけど、大沢も人間。山村先生も勿論人間。：  
ビルダー大工な父さんも、多分人間。

なのに。

俺だけ一人、人間じゃない。  
けど。

ホームルーム終了。チャイムが鳴って、ミスター山村は笑顔のま  
ま去り。この二年三組の教室だけじゃなく、学校全体がざわめきに  
震え出す。

えーと、一時間目は何だっけ。……あ、そうだ、体育だ。そう思  
い出した時。

「風岡行くぞー」

既にジャージを入れた袋を肩に掛けていた大沢。彼から声が飛ん  
できて。はいはい、と。俺もジャージ入り袋を、机の横に掛けた学  
生鞆から取り出す。鞆が空っぽだところやって荷物が纏められて便  
利。

俺は立ち上がり、そして大沢の元へと向かう。尾畑と桜井も彼の

傍に居て。サッカー部所属の二人は、本日の練習について話をしているようだった。

「もー刹那ちゃん遅い」

「ちゃん付け止めよう。てか話し方気持ち悪いよ」

「知ってる。敢えて」

なんて、大沢と他愛も無い言葉を交わしつつ。徐々に空いていく教室を、俺達も後にする。

誰一人として気付かない。気付いていない、等。  
だから俺は。変わらない事が最高だと思う。

## 四日目…姫は仰る

目覚めました。制服チエックしました。カーテン開けました。歯磨きしました。トイレにも行きました。はい。

要するに朝の準備万端です隊長。敬礼！

……してから。いや、実際にはしてないけど敬礼。したら馬鹿じゃん俺。まあそんな事はどうでもいいんだけど。そう。敬礼！と心の中で叫べる程に出発準備が整ってから。

この部屋時計無いし、一人で居てしかもほぼ何にもしてない時間で時間の流れが随分とゆっくり感じられるもんだから、正しいかどうか解らないけど。恐らく、三十分程度が経過した。

なのに。

肝心の隊長さんが、一向に姿を現しません。

彼を待つて散々部屋の中をうろついた末、俺は。部屋に備え付けてあった木椅子、さらりとした手触りのそれにとりあえず腰掛けて、面前に聳え立つ黄緑色の扉を凝視し続けてみた。けど、目が痛くなっただけで他は変化無し。即ち中央発光無し。彼は勿論、誰も来ず。

あれおかしいな。俺は一人首を傾げる。一昨日も昨日も来てくれたのに。両日とも、入ってくるタイミングはかなり微妙だったけど。

嗚呼、これは一体どうした事でしょう早く来て王子ー、と。俺が今切実に願っているのは、別に彼が恋しいからじゃない。そりゃね、シスのあの格好良さ美しさならば、きゃー素敵シス様ーと恋焦がれる女性が何百人居ようとおかしくないけど。残念ながら俺女性じゃないし、男性だし。

では理由は？ その問いに対する答えは単純明快。ずばり、「俺がこれからどうしたらいいのか何をすべきなのか何処へ行くべきなのか、全く全然微塵も解らないから」だ。

途方に暮れた俺は。視線を下に放って、特大の溜息を吐いた。

カーテンを開け放った窓からは、朝陽が射し込んできていて。その白光は頂垂れた俺の黒を刺して、じわじわと熱を持たせていく。

熱い。あーあ。

と。その時、不意に思い立つ。

自分から行動してみようか？ 何となくだけど、このままじっとしていたくないから。

そうだ。誰か与えられた事をそのまま呑みこんで、忠実に実行するだけじゃなくて。受け身ばかりの状態から脱出してさ。自分から赴いてみようか。隊長サンのところまで。

俺の記憶力は非常に残念なモノだけど。昨日行ったばかりだから、これくらいは覚えている。シルフィスⅡゼノⅡアルヴェルドの部屋は五階。灰色の扉が目印だ。

「……………行っちゃおうか」

そう、俺は独り呟いた。放ったのは、小さ過ぎて空間を揺らすにも満たない低音。それでさえも、俺を揺らすには十分で。

うん、決意した。アスカの海色を纏った俺は、黙する木椅子から立ち上がる。

よし。行っちゃおう。



灰色の扉は、意外とあっさり見つかった。

廊下でも手摺無し螺旋階段でも、見知らぬ人数名かと擦れ違ったけど。大丈夫、多分「本部内でもフード被ってる変な奴」としか思われてない、というかそう信じたい。

何と言っても俺は小心者だ。此方では超敵キャラの証明であるらしい黒を晒しながら、柔らかな光の中を堂々と歩くなんて。そんな勇敢な事まだ出来そうにないから。海色に隠されていようと、胸の真ん中らへんがばくばく言ってるくらいだから。……情けなさ過ぎて吐きそうだ。

ええいとにかく無事到着したんだ、胸を張れ俺。それから落ち着け俺、と。喧しく騒ぎ立てる心臓に、二、三度深呼吸して静まれと促す。

そして俺は。鼓動はまだ煩いけど。灰色を二度、ノックした。

返答無し。

シスさん、いらつしゃいませんか。そう、中程度の声で中に向かって呼びかけてみた。

返答無し。

あーそういえばシスって、人が何処に居るのか解る能力持ってるんだっけ。おーいシス俺は此処だよ今貴方の部屋の前にいるの、と、電話の怪談で御馴染のあの少女チックに念じてみるも。

返答無し。

はい。お留守ですね。

いや待てひよっとしたら寝てるのかも知れない、と咄嗟に考え出した俺は。中央発光式の扉に手を当てて、開けた空間へと脚を踏み

入れていた。出迎えてくれたのは銀髪翠眼の美少年では無く、物言わず佇むワークデスク。その上には、俺だったら読了するのに一か月は掛かりそうな分厚い本。それが数冊、整然と並んでいる。

一旦立ち止まっていた俺は。背後で音も無く扉が壁と化したのを。完全に部屋に呑まれたのを感じた後に。シス隊長の寝室へと向かう。

いや、またまたちょっと待て。寝てるなら入ったら迷惑じゃないか？

……そんな至極簡単な事に気付いたのは。きつちりと閉ざされていた寝室の扉を。何の遠慮も無く開いた、そのあと。

その中の。寝台の上で。眠る人物の姿を発見した、あと。うわ寝てるてかやっぱりだったねごめんなさい俺出直してきます大人しく部屋に帰ります。と。俺は慌てて扉を閉めようと。した。して、閉めた、のだけれど。

戸の白と向かい合いながら。生じた違和感に首を傾げる。

「…………あれ？」

言葉に変えたその感覚は、至って当然のモノ。だって違った。違った、よね？

それを確認する為に。再度……今度はそつと扉を開き。そつと中を覗き込んで見ると。

カーテンが閉められている所為で、全体的に仄暗い白。其処で静かに寝息をたてていた人物。その人が持っていたのは、月色に似た銀ではなく。艶めかしい、という言葉を使うすら相応しく思えるような。淡い金。

俺が知る中で。この世界において、金髪を持っている人は。

「リモさん？」

プリジモ＝ノードレー。男性だけど美し過ぎて通称「姫」、又は「眠り姫」。そう。その人だけ。

ゆっくり、ゆっくりと。恐る恐る近づいてみて、それは確信に変わった。長い金の尾を白地に散らし、美しく、可憐に、昏々と眠りになっていらっしやるのは、正しく一番隊の眠り姫様。

う、うわあ眩しい。うわあ睫毛が長い。うわあ顔が凄く綺麗だ、尋常じゃなく綺麗だ。そして赤い。

ん？ 顔が赤い？ ……何故？

原因と思しきモノ。その可能性にはつと気付いた俺は、勇気を出して手を伸ばしてみる。指しているのは、金に隠れた彼の額。

頭の中では、ごめんなさいの高速連打。俺の指は震えながらも、やがて目標物に触れて。

やはりと思う。滅茶苦茶熱い。

酷い熱だ。彼の温度とは裏腹に、俺の体温は急降下。脳細胞が白化していく。

昨日は元気だったのに。一体どうして。何があったんだ。というか、やばいんじゃないだろうかこれは。

と、とりあえず落ち着け、という自分の声が脳内で響いて。俺は—先ず姫のおわすベッドから離れ、寝室を出て。それから、シスのワークデスクの周囲を歩き回ってみる。

風岡刹那よ。考えろ、考えるんだ。この状況で俺に何が出来る？ 薬飲ませる？ 薬が無い。えーと、首にネギを巻く？ ネギが無い。えーと、えーと、魔法で治す？ 無理、不可能。えー、ああそ—うだ、シスを呼べば。けど俺は彼の居場所なんて知らない。解らな

いから此処に居る。やばい。迷宮入り、する。

ああ俺はなんて無力なんだ、そう天を仰ぎかけたその時。視界の端。映ったのは洗面所。

其処で漸く俺は閃いた。タオルを水で濡らして額に乗つけたら良いじゃん、と。タオルなら多分この部屋にもあるよ。てか無い訳ないよ、と。

俺は洗面所に突入し、その狭い空間からタオルの白を見つけ出そうとする。しかし、暗がりと化した白の中に救世主の姿は無い。という事は？

という事は。俺の部屋同様、寝室の箆笥ん中だ。

「失礼します」

小声で呟いた後、俺は再び寝室の中へ。抜き足差し足忍び足、でベッドの横を通過し。そして箆笥を開けると。シスの私服と思しき数点の衣料品の横に、白いタオルが二枚掛かっていた。そのうちの一枚を拝借し、洗面所へ。

蛇口を捻ると落ちてくる綺麗な水。それで手の中にあつた柔らかな白を濡らして、固く絞って。程良い大きさになるまで畳んだ後。俺はリモさんの元まで戻り。そして、出来上がった冷たい白を。慎重に彼の額の上に置く。

と。

あ、瞼が動いたひぎゃあああああ……

声にならない悲鳴を上げて後ずさり、しかけたけど。そんな事する理由はないのに気付いて、俺はその場に踏み止まる。そうこうしている間に、彼は徐に目を開いて。

「大、丈夫、ですか」

躊躇いながらも。ベッドの端に手をついて、彼の顔を覗き込んで。

そう言ってみた俺と。

彼は視線を交わらせる。すると、空っぽだった瞳に何かが生まれて。

彼は紡ぐ。

「魔天使」

こっちの世界で俺の事を示す名。最低最悪らしい種族の名を。

ちくりと刺された。多分ちよつとだけ血が出る。

少しだけ。本当に少しだけ痛くて。俺は一瞬視線を斜めに落とし。けど。すぐに元の位置まで持ち上げて、微笑んでみせる。

「そうです、俺魔天使です。けど、その、個体？ ……としてはセツナです、セツナなんです。だからセツナって呼んで下さい。名前で呼ぶのが嫌なら、せめてカザオカと呼んで下さい」

と。夜色の瞳を持つ少年は。虚ろな目をした少年は。ああと、小さく二度。頷いて。

「そうだ……てめえの顔……さつき見た」

さつき。先程。

多分、熱の所為で記憶が曖昧になっているのだろう。そう考えて、俺は黙っていた。黙って彼の目を見ていた。

「……馬鹿みてえに、騒いで……馬鹿みてえに泣いて……」

……嗚呼、と思う。

彼の宵には俺が映っている。でも。それは恐らく、今此処に立っている俺。じゃ、なくて。

「……変な事ばつかぬかしやがって……」

記憶の中の俺。

リモさんと会って。リモさんに鎌を突き付けられて。リモさんと話して。リモさんの前で泣いた俺。

リモさんの中の俺。其奴が映ってる。

熱の所為で涙を孕んで。その重みに揺れているスクリーンに。

「その所為で、俺………今、てめえと居ても、平気だ」

「え」

それは、どういう意味かと。俺が問う前に彼は。目を閉じてしま  
う。

眠ってしまったのかと。ふっと息を吐いた俺は。両手を白から離  
して、屈んでいた状態から姿勢を正す。

と。

「セツ」

セツナの、ナ。それが脱落してはいたけれど。しかし彼は、確か  
に俺の事呼んだ。

そういえばフラミスカでも、セツって呼ばれた。彼は俺をそう呼  
ぶ事を決意したのかもしれない、なんて。思いながら俺は、はいと  
返事をする。

「何ですか？」

「……俺」

「はい」

「……セツの事、信じるよ」

「……え？」

彼は目を閉じていて。彼の声は掠れていて。  
彼の言葉は優しかった。

「てめえの事……仲間として、見る……認めて、やる……」

そうしないと、俺。

リモさんは、意識を失う間際にそう紡いだ。

俺はただ嬉しくて。嬉しくて嬉しくて。

だから、その先に続く言葉。察する事は愚か。察しようとする事すらも、出来なかつたんだ。

## 続4日目…海色の宣告

信じてくれた。認めてくれた。リモさんが、俺の事を。

沸々と湧き上がってきた温かな感情。その温もりに思わず頬が弛んで。嗚呼やばいにやにやが止まらないどうしてもにやけてしまう。金色の髪をした御姫様が眠るベッドの横。変な顔して佇んでいる俺は今、多分、じゃなくて確実に相当の変人だ。こんなところに見られたら、てか姫が目を覚まして俺の顔見たら。気持ち悪いからやっぱ仲間だと思っのやめた、なんて言われてしまったりして。

それはまずい。現実を起こしたらかなりショックだ。けど、けどさ、それにしてもさ……とか。考えている時って、決まっってこうなる気がするんだ。

「セツナ」

「え!？」

そう。見られましたね。目撃者が姫君でなかっただけ、不幸中の幸い。

不意に後ろから名を呼ばれて。その人物の気配に全く気付いていなかった俺は、ビクリとして超俊敏に振り返る。勢いが付き過ぎた所為で軽く脳が揺れて、一瞬視界がぐらりと流れたけれど。すぐに鮮明になる……俺が此処までやって来た理由、ずばりそれである人物の姿。

癖の無い銀色の髪。切れ長の目を縁取る長い睫毛も、当然それと同じ月色。

今は湖畔を思わせる翡翠色をしているけれど、時に哀切を湛えた



海や轟々と燃える炎をも映し出す瞳。非常に端正な容貌をしたその御方は、その不思議な特徴を持つ瞳でじーっと俺の事を見詰め。そして俺の背後で眠るリモさんの美し過ぎる横顔を見詰め。それから視線を俺に戻し、す、と優しく目に細めて。

「お早う」

爽やかな声音で紡いだのは朝の挨拶。何故だかほっとした俺は、隊長殿の方へと完全に身体を向け。勿論挨拶をお返しする。

「う、ご機嫌よう」

「ミーウィのような挨拶だな」

返された旋律が含むミーウィという名。その音の並びを聴覚が受け取った後、俺の脳裏には美しき眼鏡人魚さんの姿が過る。嗚呼、そういえば彼女はお嬢様、否レディ口調だった筈。

そんな事を思い出して。そうだねと俺が笑うと、彼は微かに視線を落として。その瞳に映っていた湖畔は姿を変え、代わりに。その瞬間まではカーテンの白に覆われて見えなかった光景、蒼い空が現れる。それは恐らく心の色の。感情の、変化の印。

……けど。どうして？

「リモが眠っているからな。此処で話しては煩いだらう、寢室の外へ出るぞ」

他ならぬ俺に向けて放られた言葉。生じた疑問に反応が遅くなる。

「え、あ、あーそっか、確かにそうだよな」

と。はっとして慌てて頷き放った俺が、寢台の方を振り返って。其処に在った目映い光に思わず細めた目。そのまま再度一番隊隊長、シルフィス・ゼノ・アルヴェルドの方を見た、その時には。

既に彼は背を向けていた。  
俺にも。リモさんにも。

「すまないな、会議が長引いたんだ」

俺が寢室の戸を丁重に閉める、と。シスはそう言いながらワークデスク備え付けの木椅子に腰を降ろし、背凭れに身を任せる。

「や、別に大丈夫……てか何で謝るの？俺勝手に来ただけだし、待ち合わせなんかしてなかったし」

「しかし此処に居るのは私に用があつたからだろう？」

すぐさま言葉を返してくる隊長殿。まあ、そうだけど俺が肯定すると。彼は喉を反らせて天井を仰ぎ、目を閉じ。そしてふつと息を吐く。

「待たせてしまった事に変わりはない。……それ故の、すまない、だ」

「あー……うん、了解」

そうして彼は顔を正面に向ける。銀色の横髪が揺れ、彼の頬をそつと撫でる。……その揺れが止まっても、彼が俺の方に視線を向ける事はなく。

それきり訪れた沈黙は、何故だろう。酷く居心地の悪いモノで。今朝彼を待っていた、あの時と同じ感覚。何となくじっとしていたくなくなる。このまま黙っていたくなくなる。

「あー、そうだ」

だから俺は、思い出したように言葉を放って重い壁を崩した。途端に視線が飛んできたから。何時も通りを繕うのを。笑みを繕うの

を忘れずに。

「俺さ、リモさんに認めてもらえたよ。さっきさ、セツの事信じるよ、って言ってもらえたんだ」

「そうか。良かったな」

「う、うん」

短い短い言葉のキャッチボール。その後、嗚呼。また空白。腹の真ん中がむずむずする。

自らは決して音に成らないそのむずむずを押し上げて、声と一緒に吐き出した。

「けどさ、リモさん随分体調悪そうだったな！。昨日は元気だった筈なのにどうしちゃったんだろ？ 風邪ひいたとかかな？」

と。

「いや」

彼は。事情を全て知っている事を表す否定を放る。

「本日未明に、魔天使による本部襲来があつてな。リモはそれに応戦した結果、魔力を乱した」

先程、リモさんが意識を失う間に紡いだ言葉。

『そうしないと、俺』。さほど気にも留めていなかったその意味が。その先に続く言葉が。解ったような気がした。

嗚呼。

また魔天使。昨日も。今日も。

お前が痛みを覚える必要はない、お前には関係ない。クレアージ

ンさんからはそう言われたけど。それでも鈍い刃に胸を刺される。その痛みからの解放を求めて、謝罪の言葉を誰かに……眼の前に居るシスに、伝えたくなる。

「あ……えっと」

直接的なモノでなくとも。とにかく何か。言おうとして開いた口。彼の視線に制されて閉じる。

「前にも言った気がするが、リモは内在する魔力が強大で、尚且つ魔力操作があまり得意ではない。その為に魔法使用による肉体への負荷が大きく……魔法を継続的に使用し続ける事を余儀なくされるような激しい戦闘の後は魔力の波長が乱れ、体調を崩してしまう傾向があるんだ」

「……魔法使うと、疲れるんだね」

俺はそう言ってみて。シスからはああ、と短い肯定が返ってきた。会話成立。けれど俺の頭の中では、薄黒いもやもやが旋回中。彼の話がよく理解出来なかったのと、魔天使の件が脳内にこびり付いているのが原因。

俺の内側の靄は色褪せない。それどころか徐々に濃くなっていく。その暗がりとは裏腹に陽光が射し込み明るい室内で、再び俺達の間を横たわる空白。

それを断ったのは、今度はシスの方で。それもその断ち方は、それまでと何の脈絡も無いもので。

そう、彼は突然。ああそうだ、とか。そういう前置きも無しに。前方へ向けていた綺麗な御顔を不意に俺の方へ向け。

「セツナ、お前やはり一人部屋は嫌ではないか？」

「……………はい？」

『一体何を仰ったのか』。靄を晴らして打ち付けられたその疑問。

対する答えはすぐに明らかになり、今度は『いきなり何を仰るのか』  
に続く。隊長殿の意図が不鮮明で混乱錯乱。構わず王子様はお続け  
になる……というか、語り始める。

「私は嫌いだ。一人でいるのは淋しいからな。気分が落ち込んだ時  
等傍に誰もおらず沈黙だけに包まれていると益々萎えてくる……し  
かし隊長及び副隊長である者は一人部屋に住まねばならないという  
何だかよく解らない決まりがある以上はどうする事も出来ない、そ  
れがこの上なく残念だ」

「え、ああそうなんだ、てか、え？ 何、今語っちゃうって事は今  
日元気なかつた理由って淋しかったから？ 違うよね、何かもつと  
別の深刻な訳が」

「お前も私と同様、一人部屋では淋しいだろうか？」  
はい。ガンスルー。

「……そう、だね」

何なんだろうこの人は。大変失礼ながらそう思いつつ肩を竦める  
俺。一人っ子だし一人部屋には慣れてるから今のままでも全然構わ  
ないんだけど、そう言えば言ったで王子はまた何か奇怪な事を仰る  
だろうから、とりあえず同意しておいた。

すると。何時の間にやら翡翠色の瞳を取り戻していた彼は。

「そこでだ。頼みがある」

すくつと椅子から立ち上がり、机に両手をついて此方に身を乗り  
出して。突然のアクションにはっはい何ですか隊長と多少身じろい  
だ俺に向かって。こう発言する。

「今の部屋を出て、リモと部屋を共有してやってくれないか」

え。

なうノるーむヲゴーシテ。リモさんトるーむを……共有、は解  
ない。けど。

あまりの予想外の御言葉に。リアクション、明後日の方向までオ  
ーバーラン。

「なっ、なっ、ななななななななな何ですと!?!」

自分ではナ行一段目の音つまり「な」を何回連打したか解らな  
かつた。とりあえず噛まなかつた俺の舌グツジヨブ……じゃ、なくて

「なっ何で!?! 一体何故急にそんな話が持ち出されてきた訳です  
か!?!」

「嫌か?」

「ええ!?! いったいや、俺は嫌ではないよ全然! でもさりモさん  
はね、凄く嫌だと思っただよね俺なんかと生活空間共有するの!

だって俺小心者だし美しくないしその上魔天使だし変態とか呼ばれ  
てるしさ、よくよく考えてみれば誰だってそんな奴と同じ空気吸い  
たくなかないっていうか! てか答え、質問の答えは!?! 今俺  
質問したんだけどなそれに答えてくれないかな無視とかまじ勘弁な  
んだけど!」

「そうか。嫌でないのならばそうしてくれ。頼んだぞカザオカセツ  
ナ」

「……いやあの、話聞いてた?」

「新しい部屋は今日中に此方で用意する。今晚は前の部屋で寝てく  
れ」

虫は嫌いなのに無視は好きなのか王子様趣味悪いぞ、なんて寒い  
事を思わず心の奥底で叫んでしまう。てか早くも「前」の部屋です  
かりモさんの許可はもうとってあるんですかそもそもさつきも言っ  
たけど何でこんな、突・然・に!

……とか。言いたい事は山程あったけど。不意に彼の瞳が海色に

変わって。表情は先程と、リモさんの寢室を出ようと告げた時と同様のモノに移ろったから。その言わせて下さいという欲求は霧散する。

「あの子を支えてやってほしいんだ。他でもない、お前に」  
支える？ 何で、俺？

「……わか、った」  
疑問は浮かぶばかりだけど。とりあえず、承諾。  
それを聞いて細まった目。哀の色を映したその瞳は、言葉の対象である俺ではなく、寢室の扉の白を捉えていた。

「さて、今日はお前に任務を充ててはいない。……今日こそは色々教えてやろうと思ってるな」  
彼のその言葉を聴覚が受け取って。そういや、「今日俺がしなければならぬ事は何ですか」。それを聞きに来たんだ。俺が愚かにも一番重要だった筈の事を今更ながら思い出している間に。隊長殿は机上に両肘を付き、指を組んでその上に顎を乗せ。そのまま、素敵スマイルで僅かに首を傾げる。

「さあ、何から聞きたい？」  
散々人の話を無視しておきながら。……今更、何を言う。

## 続々肆日目：御話八食堂二テ

さて、困った。という訳で俺は独りごつ。

「……何から訊きたい、って言われてもさ」

今の段階で。俺は一体何を知っていて、一体何を知らなくて、一体何を知りたいのか。そういう事、頭の中で全然整理していなかったから。唐突に言われても戸惑っちゃうよごめん隊長、というのが本音。

後で後でと延ばされてはいたけど、何時かは説明タイムが来ると解っていたのだから。この時に備えて準備しとけば良かったなーなんて今更浮かぶ。でももう仕方ないぶつつけ本番、言葉の使い方合ってるかどうか解んないけど。

とりあえず俺は先のシスの如く、しかし彼のそれとは違って短い腕を組み。目を瞑り自らを暗闇の中に放って、脳味噌を回転させ始める。昨日までの事、疑問、何か無かったか。

えっと、ええと、えーと。

「えーとお……」

が。

「ああ、そういえばセツナ」

思索を始めた傍から、その霧を裂いて顔を覗かせてくる隊長。両目で彼を見る気には不思議となれなかったから、片方だけ開けてその御姿を拝見してみると。何から訊きたい？ と投げつけてきた時同様素敵スマイルを浮かべ首は傾げたまま。先程からあまり動いていない。

さっきまで随分と元気が無かったけど、今はかなり上機嫌であると窺える。シスを取り巻いていたもやもやした空気は、リモさんの事が解決した途端に吹っ飛んでしまったのか。それとも、未だそれ



に包まれながらもただ痩せ我慢しているだけなのか。

「んー？」

そんな事を考えつつ。結構な間を置いてから反応を返すと。

「お前、朝食をまだ取っていないのではないか？」

「朝食ー？ あー、そう言えばまだだよー？」

何故か伸びる語尾。と、突然隊長殿は御椅子からすくつと御起立なさり。俺は思わず瞑っていた右目も開く。

何だよそんなに俺の語尾が気になったなら行動で示さないで言葉で言ってくればいいのに心臓に悪いな、とどきまぎしていると。王子はその長い御足を駆使して優雅に、しかしあつという間に此方まで歩み寄って来て。

そのまま向かい合って。瞬きを二度して。御目を縁取る密生していてその上長い長い銀の睫毛を見せ付け、るつもりはないんだろうけど、見る機会を与えて下さった後。シルフィス「ゼノ」アルヴエルドは、俺の左肩にばん、と右手を置く。

「……何ですか？」

「セツナ、私に敬語を使う必要など」

「ないんだよね。うん解ってるよーく解ってる骨身に染みて解ってるから早く御用件を言ってる」

そして溜息を吐きたいのはこつちだよ。

どうしようもない程天然な隊長殿は。そうか分かったと頷いた後。

「ならば朝食を取りながら食堂で、のんびり、話さないか？」

声の圧力の中心、矢印、のんびり。

「……なんでのんびりを強調したの？」

当然の如く生じた違和感から尋ねてみた。すると彼は目を閉じ、

御目を縁取る密生していてその上以下略、フツと声を漏らして微笑み。涼やかな声音でこう仰る。

「それは、お前がのんびりしたいだろうなと思ったからだ」

「は？ え、いや、俺は別にのんびりしたいとは」

「何を言う、遠慮する事は無い。昨日まで殆ど休む事無く行動させてしまったからな、疲れているだろう？ 知りたい事を知ったら後は休むといい、ああ、余力が残っていたならば本部内を見学して回ると良いかも知れないな。ふ……案ずるな、今日はこの私がお前に付き合つてやる。本日の任務はフウガに任せてあるからな。これで私ものんびりする事が出来るという仕様だ、どうだ？」

そんな真剣な御顔で見詰められてどうだと言われても。それいいね！ 以外にどう返していいか分からないが、彼が休めるのは素晴らしい事だと思ったんだ。今の隊長さんには休息が必要だと、俺の野生の感が訴えている。

だから。部屋の件に引き続き再び流されるしかなかった俺が、それいいね、と。残念な事にエクスクラメーションマークは付属出来なかったが、言つて頷き。御望み通り賛同の意を示してみせると。

「良いか。ならば、そうしよう」

シスは目を細めて、何時ものように微笑んだ。

「たまにはこういう日も必要だろう？」

彼は俺の前で笑つてくれる。笑顔は、救いになる。

「そうだね」

も一度頷いて、俺も笑うと。彼は肩に置いてあつた手をす、と持ち上げて、例の如く俺の頭を撫でた。彼の手は冷たい、けれど反して俺の顔は赤くなる。

あーもうそれ止めてよいい加減、と俺が文句を言おうと口を開いた時には、彼はもう。上着の裾を裾引かせながら、灰色の前へ。背景は灰色。彼も白。その所為で、瞳の色が余計に映える。優しさを湛えた湖。その翡翠を細めたまま。訳も無く頭を掻く俺に、彼は言う。

「おいで」

柔らかな光が降り注ぐ下。広々とした廊下を進んで手摺無し螺旋階段を降りて行って、目的地である食堂の入口が見えてきた時。

海色フードで直射星光を遮っている俺。そんな変質者宜しくな奴と並んで歩いて下さっていた王子様が。月色を淡く輝かせながら、俺思い出したぜとばかりにああと切り出した。

「尋ねるのを忘れていたが、お前の用事というのは何だったんだ？」

「俺の用事？」

ピンと来なかったから問うてみる、と。すぐに言葉は返される。

「私の部屋を訪れて来た具体的な理由だ」

「あー……や、別に大した事じゃなかったよ、ただ俺のスケ……いや予定？ うん、今日何すればいいのか解んなかったから訊きに行こうと思っただけ。あつでもさっき聞いたからもう答えなくてもいいよ！」

あつ以下を慌てて俺が付け加えたのは、恐らくは答えってくれよう

として彼が口を開きかけたから。あーあ全く天然、というかシスつて変なんだと思うシスは俺の事変だ変だ言うけど彼の方が俺以上に変な人だと俺は思うー、と例の如く心の中限定で悪態を吐いた、その時。俺は危うく悲鳴を上げそうになった。

……これが天罰つてやつだろうか。悲鳴未遂の原因は、シスの方を見ていた所為で階段を一段踏み外しそうになったから。下手すればつんのめった勢いのままに残り十段くらいを駆け下りてフロア二に猛スピードで突入して、食堂の長机に突っ込んで粉碎する破目になる所だった。まあそんな事は起こり得ないだろうけど。万が一起こった際には、激怒した注文受けの顎鬚小父さんにフライパンかなんかで制裁されるんだろうけど。

幸い隣には気付かれなくて、彼から眉を顰められる事も阿呆と冷たく吐き捨てられる事もなかった。下手すれば精神的にも大怪我。危ない危ない、冷や汗冷や汗と。

不意に。そういや昨日、フラミスカから帰る途中にも似たような事あったよなーなんて浮かぶ。そう、シエラちゃんの隣で木の根に躓いて転びそうになって。その僅か一分程後に、俺と同様木の根に躓いたりモさんが不運にも転んで、コアさんが笑って。

その事件、いや、そう言い表すには些か大袈裟なような気がする。出来事。うん。それを思い出したのを弾みに。そこから記憶が遡る。フラミスカから帰る途中。フラミスカから。フラミスカで。

そうだ、フラミスカで。俺が思った事。

「あ」

思わず俺は一音放る。殆ど息を漏らしただけのような、すかすかの小さい声で。

きっかけなんて些細な事。思い出した。隊長に訊いてみよう！な疑問、とりあえず第一号。

けど、もう目の前は賑わいの空間。和やかな会話と食欲をそそる

匂いに満ち満ちた、俺達の目的地で。今尋ねたらシスの事だ、きつと静止してこの場、食堂に一步分入ったトコ、という人が立ってたら超・邪魔に感じられる場所で話し出すから。

ぐう。

……と、丁度腹の虫も鳴いた事だし。席着いて落ち着いてからゆつくり、ああ違った、のんびり、聞こうと考えていた、ら。

流石虫は無視な隊長殿。俺が自分のグーの音を聞き、無意識のうち片手でお腹を抑えたのを見て。その目は見開かれ、瞳の色は空色に移ろい。

「どうした！？ 腹でも痛いのか!？」

「いや違うつつ、てかさんな大きい声出さなくても！ ただお腹が鳴っただけだよ空腹で、条件反射だよ！」

慌てて説明。すると彼の瞳は途端に湖畔の情景を取り戻し。

「何だ、驚かせるな」

「な、何だとそう言いたいのはこっち……と言いたいのを、シスだからという理由で呑み下し。代わり、否。せめてもと思いい切り肩を竦めてやる。」

「あれ、シーちゃん?」

割と近くから。何とも気の抜けた声が上がった。

シスの名を紡いだそれは、俺にとっては初めて聞くモノで。その主を探そうと視線を走らせると。

扉というモノが無く常に開放されている入口、そこから一番手前の長机。新たにこの憩いの空間の一部と化した俺達から、向かって右手に座っていた二人の人物。俺には全く見覚えの無いその二人の

うち、褐色の肌をした少年が。コアやフウガさん、そう、「エルフ」のそれとよく似た深緑色をした瞳に、美人の姿を映し出していた。彼と向かい合って座り、俺達に横顔のみを晒していた少年もその声に反応して此方を向いて。その御顔を見た俺は……小首を傾げた。今鏡を見たら、恐らく相当に怪訝そうな顔が映る事だろう。

彼は。勿論アスカの海色の上着括弧長袖タイプを纏って、但し肘の前までの位置で腕捲りして。エルフのように特異ではない、こう言つてはコア達に失礼な気がするが「普通」の形状の耳を持つていて。左の耳朶にだけ二つ金色の光を放つもの、多分というか確実にイアリング。

そして。短めの茶色い髪と。つり気味の目をして。瞳の色は、両方とも黒。俺のそれと同じ色。

これは一体、どういう事だ。だって、彼は二種類持つているんだ。この瞳の色はこの種族のものだと。この髪の色はあの種族のものだと。この世界初心者俺が判断する指標となるモノを。

彼が持っているのは。人間の茶色と、魔天使とか墮天使とかの黒。

彼の種族が分からない。

そう困惑する俺の前で。机に頬杖を付いていたその人が、若干顎を上げてあーと声を放る。

「結構久し振りだな。前の合同任務以来？」

「えー、僕は廊下とかで結構会うよ？ ヴィリー君避けられてんじやない？ かわいそー」

もう一方の少年が悪戯っぽく笑い、机の上で腕を組んで。茶に海色を滑らせるように黒目少年の方に身を乗り出した。此方も俺には種族が判別出来ない。

「いや、決してそんな事はないぞ」

そして一番隊隊長に冗談は通じない。

何故真顔、と俺が隣で苦笑する中。どうやら名前イコールヴィリ  
ーらしい少年が、ふっと息を吐いたのが聞こえた。

「相変わらずだなお前っつーカルノ黙れっつーか……ま、いい。で  
？」

「あーそうそう。僕も丁度気になりはじめたところ」

え、何が？ と。彼等の方に視線を遣ると。その先で好奇心に溢  
れた深緑が俺を捉えていた。手前の黒にも俺の姿が映っていて。探  
る様な眼差しに、小心者は身体が強張る。

「身長的にリモちゃんじゃないよな」

「うん、身長的にじゃなくても違うけど。……目の色が黒ってトコ  
を見ると、ひよっとして噂に聞く魔天使の新人さんかな？」

……魔天使。浅黒い肌を持つ少年は、さらりとそう紡いだけれど。  
俺の視線は思わず彼の背後へと泳いでしまう。

ぱらぱらと、ではあるが。決して多い訳ではないが。其処には確  
かにアスカの隊員達が居る。彼等が「忌むべき種族」の名が放られ  
たのを耳に入れ、此方を見ていないか。此方を、他ならぬ俺の事を  
睨みつけていないか。気になって、怖かった。

けど。幸いな事に、誰の耳にも届かなかったみたいだったし。

「そっだ、名をセツナという。……セツナ、紹介しておく。彼等は  
二番隊の」

「はいはい、シーちゃん」

此処に居て、俺の存在に気付いている御二人さんは。俺が魔天使  
である事を、気にしていないでいてくれるようだった。

少なくとも、視線からはそう感じたんだ。

「自分の事は自分で言うよー」  
「うわ何そのめんどくさい主張。意味不明」  
「うるさいよヴィリー君。そんなんだから避けられるんだよ」  
「いや、だから私は避けてなどいないと」  
言っているだろうが、というシスの言葉を遮るようにして。天井に向けて緩々と伸ばされた右手をひらひらさせつつ、色黒少年は言う。

「僕はルノです、森林人ヒラゲナのルノです。セツナ君よろしくー」

「……ヴィリー＝リイゼだ」

ルノさんは。自らの事を森林人だと放ち。

「俺、人間だから。こんな目してっからややこしいと思うけど」

ヴィリーさんは、俺の中にあつた先の二択のうち。前者を、人間を、自分の種族だと告げた。

そして、俺の前で初めて笑う。彼が見せたのは、表情を緩めたら自然とこうなるよ、という感じの何気無い笑顔。

「今度一緒に任務行くかも知らないし、宜しく頼むな」

「よ、宜しく願います」

頭を下げると、視界は床の白で埋まる。そこから体勢を戻して、彼の髪の色を再度見て。そうか、彼は人間なのかと。ちゃんと、認識する。

でも。なら、どうして。どうして彼の瞳は、俺の瞳と同じ色をしているんだろう。

その疑問。声に出すのが何となく憚られて、発する事が出来なくて。けど気になって悶々としている間に、横の王子様からヴィリーの隣にでも座れと促されて。大きく分けて二つの意味でえーどうし



ようだったけど、結局俺は御達しに従い。お邪魔しますと小さく紡いだ後、丸椅子に腰を下ろさせて戴く。と、シスは長机の周りを回ってルノさんの隣、つまり俺の向かいに着席した。

兎にも角にもようやく落ち着いた訳だ。さあ今朝は何を食べようか。「プラン」か味は良いが結構なグロ料理「蛙スープ」か。フラミスカでシェラちゃんと町を徘徊しながら食べた「冷たくない柑橘系アイス」と合わせて、俺はこの世界の料理をまだ三つしか知らないあははー。

と。初対面、且つ多分若干年上の人の隣という状況で、少なからず緊張している俺が。丁度茶髪の男性から注文受付中な顎鬚小父さんの方を眺めていると。ルノさんがねえねえと声を掛けてきた。

俺が其方を向くと。彼は、にっこにっこしながら。

「セツナ君ってひょっとしてリモちゃんと部屋一緒？」

「え」

一音発して、静止。

突然何故そんな事を訊くのか。そしてこの場合どう答えたら良いのか。更にこの場においてはどうでも良い事かも知れないが、リモちゃん、て。ちゃんって付けて良いのか。

「え、と……そうなり、そうです」

悩んだ末そう答えてみたが、案の定怪訝そうな顔をされてしまう。すると流石は隊長殿、するりと助け船を出してくれた。

「昨日までは一人部屋だったんだがな。昨日の一件でリモの部屋が壊れたし、親睦を深める意味でもそうした方が良かったらうと考えて、今晚から二人部屋に移ってもらったんだ」

その船の中には俺の知らない事実も乗り込んでいた。

「え？ リモさんの部屋壊れちゃったの？」

あつさり頷いてくれちゃってるが、そんな話俺聞いてないですぜ兄貴。そう込めて視線を送ってみる。が、彼は頷くというアクション以後、何故か机上のある一点を見詰め黙りこんでしまう。

彼の名を呼んでみようかと、口を開きかけた時。ルノさんが先に声を放った。

「ふーん……でもやっぱりだ。いいなあ」

へ？ やっぱりだ、いいなあ？ 良い？

「へ、部屋が壊れて何がいいんですか？」

「やだなあそんな性格悪い事言ってるよ、君んとこの悪魔君じゃあるまいし。そーじゃなくて、リモちゃんと一緒にの部屋で生活出来る事だよー。僕なんかこの人と一緒だからねこの人と」

お前も十分性格悪いだろ、という俺の隣の「この人」からのツッコミはスルーし。ルノさんは大袈裟に溜息を吐いて見せてから続ける。

「ヴィリーみたく避けられてる訳じゃないと思うけど、最近会ってないやー。久々に拝みたいな」

「アイツ食事の時以外部屋からあんま出ないしな」

えー、それって引き籠り同然だ。なんて俺は笑う。

と。

「そうか」

不意に。じつと何か考えていらっしやるようだったシス隊長が。小さく、しかし確かな声で紡ぎ出した。

「そうか……そうだったのか。何故そのような簡単な事に今まで気付かなかったのか。私は馬鹿か」

「馬鹿ではないと思うよ、馬鹿と見紛う程の天然だけど」

る、ルノさん毒舌。だが隊長殿の御耳には、すぐ隣という至近距

離から放られる言葉さえも入らなくなってしまうたようで。恐らくは独り言であろうそれを小さく紡ぎ続ける。

「リモはどんな騒音の中でも眠り続けられる質。それに、よくよく考えてみると私はセツナに付き合っている間は部屋に戻る事が出来ない。両立する為には、あの子を連れ歩くのが一番の選択」

「何を言ってるんですか一体……」

声が涼やかで綺麗な分余計怖い。若干退いてしまいそうになりながら、恐る恐る俺が尋ねてみる、と。彼は突然立ち上がり、ルノさんを視線だけ向けて見下ろして。

「あの子に会いたいのだろうルノ。解った」

「え？」

「セツナ、二人と共に朝食をとっていてくれ。私は少し外し、リモを連れてくる。ああ、それからその序でに部屋の手続きもしてくる。」

「え!?!」

先のえ、は森林人さん。後者は勿論、俺。何を言ってるんですかが度を越して、思わず俺も立ち上がる。だっておかしいよ、明らかにおかしいだろ今の発言は。

「連れてくるって何処から、ってあーシスの部屋からか、じゃなくて何で!?! リモさん滅茶苦茶辛そうだったよ、病人ベツ……し、寝台から連れ出しちゃ駄目だよ!」

「べ?」

「いや其処は気にしないで!」

「そうか、ならば気にしない。しかしなセツナ、リモは病気ではない。魔力を乱しているだけだ」

「あ、あーそっか、でもそれって今はあんまり問題じゃないと思うんだ、問題なのはそんな辛い状態の子起こして連れ回していいのか

「つていう事でー」

「それは大丈夫だ」

「は？」

「眠っている状態のまま連れてくる」

本日二度目のような気がする、俺 vs シスの激しいやりとりには、彼が歩み出した事で終止符が打たれた。

この天然が、そういう問題でもないだろうが。其処に居る俺達心の中で総ツツコミな予感を漂わせつつ。銀髪を柵引かせ颯爽と食堂を出て行ったシス隊長。

一番隊長長には「常識」というものが、色んな意味で通用しない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4281h/>

---

レイルズリードの風（旧）

2011年4月24日05時12分発行